

VRMMOでアフロになった
ので嫁とデートしたい
と思います

久木タカムラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

年下の嫁に誘われてVRMMOを始めたちよつと背の高い旦那。

怪人扱いされたりUMA扱いされたり、嫁を探し回ったり元カノに迫られたり、やっぱり化物扱いされながら、愛する嫁とのゲーム内デートを目標として、今日も頑張ってます。

10/31 タイトルちよつと改題。

感想・評価よければお待ちしております。

目次

001.	嫁に勧められたので初めてのネ	85	011.	世間は狭く、地底湖は広く	74
	トゲに挑戦したいと思います	1			
002.	キャラクリエイト	5	012.	地底湖制圧と二層到達	94
003.	極振り少女	9	013.	メンテナンスと第二回イベント	105
004.	兎にも角にも初スキル	14			
005.	毒食らわば毒虫まで	21	014.	『一天四海悪逆無道』	113
006.	幽刻の狩人	28	015.	イベント二日目・刀錨乱舞	130
007.	ユニークシリーズと鍛冶屋	44			
008.	極振り少女再び	52	016.	んんんんんっ!?	143
009.	第一回イベント	66	017.	炎帝、爆ぜる	155
010.	嫁探しの怪人とイベント結果		018.	灼竜シウコアトル	168
			019.	朱に交わりて赤くなり、火に交	

0 2 9.	夫婦の形	310
0 2 8.	赤と青の衝撃	298
0 2 7.	スイーツと杖	287
0 2 6.	依頼	277
		260
0 2 5.	最終日・殲滅劇とメダルスキル	247
0 2 4.	女帝の片鱗	225
0 2 3.	お味はイカが？	215
0 2 2.	廃墟の謎と、ミケ	202
	者、襲う者	193
0 2 1.	イベント五日目・嘆く者、企む	181
0 2 0.	収穫と勧誘	
	わりて竜となる	

0 4 0.	一日目：昼 怪人の進路	470
0 3 9.	第四回イベント・開戦の血煙	446
0 3 8.	鉄機	429
	は狂戦士（バーサーカー）	
0 3 7.	立てば八尺、座れば鬼人、戦う姿	419
0 3 6.	未知を求めて	408
0 3 5.	師匠	386
0 3 4.	アバドン	373
0 3 3.	新たなクエスト	352
0 3 2.	それぞれの強者	338
0 3 1.	ミザリー	325
0 3 0.	羊毛と第三回イベント	

577	0 4 6.	二日目：深夜	怪物達の宴
557	0 4 5.	二日目：夕	怪人、死す
538	0 4 4.	二日目：昼	炎帝、頑張る
	いるところ	——	524
	0 4 3.	二日目：昼	かいじゅうたちの
	夜行	——	505
	0 4 2.	一日目：深夜	丑三つ時の百鬼
494	0 4 1.	一日目：夜	狙われる理由
482			

0 4 7.
三日目：夜
——
終結

001. 嫁に勧められたので初めてのネットゲに挑戦したいと思います

「ふんふんふん♪」

お気に入りの巨大な熊クッションに埋もれる嫁は、何時にも増して上機嫌だった。

たかがゲームで遊ぶだけなのに大袈裟な……とも思うが、鼻歌交じりでハードのセツティングを進める嫁の笑顔を見ると、まあ良いか、と全て頭の片隅に放り投げてしまいたくなる。

「長続きしなくても文句言わないよな？ 俺のゲーム歴はひのきのぼうとおなべのふたの魔王退治で止まってんだから」

「大丈夫大丈夫、絶対旦那様も夢中になるから」

「そんなもんかね」

『New World Online』——どうやらファンタジーな内容らしいゲームのパッケージを、天井の照明に透かすように眺める。

嫁の思惑としては単純に一緒に遊びたいのと、VRMMO初心者を手取り足取りサポートする事でベテランプレイヤーらしくありたい欲が半々なだろう。どれほどの

時間をプレイに費やしたかは知らないが、要するに『〇〇はわしが育てた』をやりたい訳だ。大人しい性格で対人恐怖症気味なこの嫁が、一体誰に自慢するつもりなのかはさておき。

「はいこれ、旦那様の頭に合うようにサイズ調整したけど、キツかったら直すから言っ
ね？」

「へーへー」

ヘッドギア型のハードを受け取り、お返しとばかりに嫁の頭をわしゃわしゃと撫で回す。

一回りも離れた年の差婚、式は挙げていないが役所に婚姻届を提出して早半年。

子供じみた——実際まだ未成年でふわふわしたファンシーグッズが好きな少女である——愛妻はイソギンチャクのような髪型にされて、ぷくりと頬を膨らませる。それもまた可愛らしい。

「そう言えば、俺が遊んでる間お前はどするんだ？ ソフトもハードも一つしかないんだろ？」

「うん。だからネットで新しいの注文しちゃった」

「注文しちゃったって……」

一人一台必要なのは分かる。しかし安い買い物ではないし流石に衝動買いは見過ご

せない。

あまり娘を甘やかさないように、と嫁の両親からも厳命されている。

いくら気心の知れた家族ぐるみの付き合いだったとは言え——娘の成人よりも先に嫁入りを快く祝ってもらった手前、義父母の顔を立てるためにも出来る限り甘やかさないよう気を付けてはいるつもりなのだが、周囲の目にはそう映っていないらしい。

「あんな、買うなら前もって一言くらい相談してくれよ」

「だってだって、どうしても旦那様と一緒に遊びたかったんだもん！ それに……」

「それに？」

「ゲームの中なら、デートしてても職務質問とかされないと思うし……」

「……………確かに」

確かにそれは重要だ。

一緒に星を見ようとちよつと外出したただけなのに、いかがわしい関係を疑われて巡回中の警官に呼び止められた事が今まで何度あったか。

その度に、嫁の両親に確認の連絡が行ったり、戸籍を照会されたり——パトカーに道を塞がれる回数が二桁を超えた頃には、警官ともすっかり顔馴染になつてしまった。

「デートはしたいよなあ……」

「うん、したい。すつごくしたい。一緒にショッピングしたり、ちよつとお高そうなレス

トランでご飯食べたたり、良いふいんきになって手とか繋ぎたい」

「雰囲気な」

順序は逆になってしまったが、夫として、幼妻にも普通の恋愛をさせてやりたい。

結局の所、猫科動物のような嫁が世界で一番可愛いのは事実なのだ。

「……そんじやあまあ、ちよつと潜ってみるか。勇者にはなれそうもないが」

「頑張つてね、旦那様」

嫁が使っているシャンプーの香りがするハードを装着し、何年振りかのゲームを開始する。

嫁との真つ当なデートを実現させるために。

002. キャラクリエイト

すぐに視界が暗転し、少しの浮遊感の後に暗闇に現れるゲームタイトル。

「おぉー」

十字キーとボタンのコントローラーを手垢で汚し、薄型ではないテレビの前で勇者の生き死にに一喜一憂していた世代にとって、不覚にもこの演出だけで少し感動しそうになった。

ゲームタイトルが背景に溶けて消えると、今度は周囲がぼんやりと明るくなり、水色の四角柱が無数に飛び回る電子的な世界が広がる。

表示された案内を読むと、どうやらキャラクリエイトをしなければならぬようだ。

部屋着だった服装は如何にも『冒険初心者』とでも呼ぶべきデザインに変わっていたが、体型や髪型に関しては現実そのまま、プレイヤーの意識をダイブさせる仮想現実という特性上、極端な体型の変更は不可能らしい。

「まずは名前か。個人を特定されそうなのは論外として……」

どうせゲームなんだからこれで良いか、とパネルに指を走らせて手早く入力し、決定を押す。

名前の次は初期装備の選択。

少年ならば一度は振るう事を夢見たであろう武具の数々が羅列される中、

「……………ん？」

見慣れた武器が目に残る。

「弓、か……………」

高校時代は弓道部だったため、洋弓と和弓の違いこそあるが、紹介された装備の中では一番手に馴染みそうではある。

どのみち、新しいハードが届けば嫁と二人でのプレイになるのだろうし、攻撃はもう全部任せて後方からのサポートに徹した方が、自称プロプレイヤーらしい嫁の気分も良くなるだろう。あまり動き回らなくて済みそうなのも好ましい。

「髪型も変えて……………お次は何だ？ ステータスポイント？ ああもう知らん知らん！」
本番が始まる前から既に面倒臭くなってきた。

事前に嫁のレクチャーがあったため〔STR〕や〔VIT〕が何を指してのは分かるが、あの武器を選んだならこの数値を上げなければならぬ——なんて知識が初心者にあるはずもなく。

与えられていた100ポイントを、各ステータスを見もせず適当に連打して振り分け、ぐだぐだになりながらもついに電腦世界での肉体が完成した。

正直これだけで疲れた。

「年かなあ……」

昔は資料作成なども徹夜でこなしたものが、今も変わらないのは目付きの悪さくらいだ。

VRMMOならば長時間のプレイでも疲労するのは脳だけのはずだが、ちよつと無理をしただけで全身筋肉痛に苛む事になりそうな予感さえしてしまう。

おそらくは『New World Online』を始める人間の中でただ一人。

ドキドキよりも、ワクワクよりも、もうログアウトしたいという思いを抱きながら。

後に数多くのプレイヤーから『爆殺^{エクストラロードスナイパー}仕事人』、『緑の巨人^{グリーンジャイアント}』、『マンイーター』、『いや

あのアフロマジでドコいんの?』など、様々な通り名で恐れられる事となる男が。

身体を光に包まれ、始まりの地である城下町へと降り立った。

誰もが見上げるアフロの弓使い、プレイヤー名『ヨメカワイイ』として。

003. 極振り少女

満を持して『New World Online』へと身を投じたプレイヤー『ヨメカワイイ』は、老若男女が往来する通りから端へと移動し、石壁に背中を預けてとりあえず一息ついた。

多種多様な装備を身に纏ったプレイヤー達とNPC達とが入り乱れ、商店らしき建物はアイテムを購入する客で賑わい、休日のテーマパークに負けず劣らずの盛況を見せている。

「人気って言うだけあって流石に人が多いな。ネットゲ恐るべし……」

嫁も最初にこの雑踏の洗礼を味わったのだろうか。

酔いそうな人混みを、人見知りな彼女が半泣きになりながら進む光景を想像し——それはそれで直に見てみたかったなあと小さな嗜虐心。そしてその嫁からプレゼントがあつた事も思い出す。

「シリアルコードは……ここで打ち込めば良いのか？」

目の前に表示される青い半透明のパネル。

そこには自分のステータスが表示されている。



ヨメカワイイ

L v l

H P 30 / 30

M P 20 / 20

〔STR 5 へ + 1 2 へ〕

〔VIT 15〕

〔AGI 25〕

〔DEX 30〕

〔INT 25〕

装備

頭 〔空欄〕

体 〔空欄〕

右手 〔初心者弓〕

左手 〔初心者弓〕

足 【空欄】

靴 【空欄】

装飾品 【空欄】 【空欄】 【空欄】

スキル

なし



良く言えばバランスの取れた、悪く言えば何を目指しているのか分からないステータスだった。

それはそうだろう、連打で適当に決めたのだから。

特に【STR 5】が目立って低い数値だが、武器である程度は補正されているようなので、早急にかしななければならない障害には思えない。右手と左手が同じ名前ですら埋まっているのは両手で扱う武器であるためか。

結論として問題なしと判断し、改めてシリアルコードを入力する。

これは運営側が新規利用者を獲得するためにプレイヤーに配布したもので、もらった方は自分で使用するか友人を誘ってプレゼントするかを選べるらしい。

中身は、使用にレベル制限のある初心者用HPポーションとMPポーションの詰め合わせ、街まで一瞬で帰還出来る水晶、モンスターとのエンカウント率を低下させる香水だった。

どれだけ有用かは使ってみない事には分からないが、回復薬や緊急避難用のアイテムがあるのとないのとは、心強さがかなり違うのは確かだ。

裏を返せば、これをくれた嫁はこんなアイテムが必要ないレベルに至っているという事だが。

アイテムをインベントリに移し終え、さてこれからどうしようと考えた矢先に、

「……………何だありゃ？」

黒髪の少女がいた。

外見は、嫁と同じか少し年下か。

ヨメカワイイと同じ初心者用装備で、大きな盾を持っている。

奇妙に思ったのは、その歩みの遅さ。

せかせかと足早に行き交う周囲のプレイヤーやNPCに比べ、少女の歩調はまるでパントマイムのパフォーマンスさながらに緩慢だ。

「……………」

何故声を掛けようと思ったのか、ヨメカワイイ自身にも分からない。

こちらとて、今さつき始めたばかりで右も左も分からない初心者なのに。

それでも強いて言うなら、職業柄故にか——周りから浮いている子どもを見かけると、ついつい気になってしまうのだから仕方がない。

流れていく人の波を横断し、牛の歩みの少女の背後へ。

「あーつと……お嬢ちゃん、ちよつと良いかな?」

「はい? ……………ひよえあ!」

大盾少女が振り返り、ヨメカワイイの顔を見上げるなり頓狂な悲鳴を発した。

ついでにアホ毛がぴんと立つ。

「何!? 何ですか!?! ワタシタベテモオイシクナイデスヨ!?!」

「いや食べないって」

これが、運営にラスボス認定される少女メイプルとヨメカワイイとの出会いだった。

004. 兎にも角にも初スキル

モンスターが出る西の森へと続く道すがら。

「さつきはすみませんでした！ 私も今日始めたばかりでまだ何も分かんなくて……」

「いや、うん、気にしないで。怖がられるのは慣れてるから」

メイプルと名乗る少女が謝罪するのに対し、ヨメカワイイは気にするなど右手を振った。

飢えたヒグマと揶揄される鋭い眼光も含め、リアルでのコンプレックスである二メートル超えの瘦身長軀もきつちりキャラに反映されてしまっているため、現在二人の身長差は五十センチ以上。

見慣れてもらっているはずの職場でも、曲がり角などで高確率でギョツとされるのだ——自分と初対面の相手が物理的な上から目線に驚かないはずもない。例えばアフロだとしても。

嫁にさえ怖がられなければそれで良いと前向きに考える事にする。

「にしても、AGIが低いと本当に歩くの遅くなるんだなあ」

「うう……すみましえん」

謝つてばかりのメイプル。

メイプルの足の遅さはステータスポイントを全て防御に振つてしまった結果だった。痛いのは嫌だからそうして大盾も選んだと言うが、これに関しては同じくVRMMO初心者でありポイント振り分けが適当だったヨメカワイイに何か言う権利はない。むしろ、メイプルの方がまだ理に適つた振り分けをしている。

そんなちぐはぐな二人が、何故行動を共にしているのかと言えば——奇しくも同じ日にゲームを始めた者同士、おまけに双方揃つて誘つてくれた相手が不在の状況。

一期一会。袖振り合うも多生の縁。

ならば——と、どちらから提案した訳でもなく同じ方向へ。

二人で行けば怖くないとばかりに、初めてのモンスター退治に向き現在に至る。

「……そろそろモンスターが出て来てもおかしくないかな」

背後に見えていた町並みも木々で隠れ、聞こえるのは街の喧騒ではなく獣の鳴き声。

「そうですね！ さあさあモンスターさん何処からでもかかつてきなさ——うひい!」

メイプルの威勢を削ぐ形で、草むらからモンスターが飛び出した。

現れたのは白兎。

現実ならば兎恐怖症でもない限り怖がる要素は皆無だが、それは相手がちちらに対しての敵意と戦意に溢れ、加えて額に鋭く尖った角が生えていなければの話だ。

可愛かろうが何だろうがモンスターはモンスター。

白兎は自慢の角を突き出しながらかなりのスピードで襲って来る——その進路の先には、大盾を構える暇すらなかったメイプルがいて、素早さが最遅の彼女は当然ながら避け切れない。

「痛っ!」

「メイプル!」

「……く、ない?」

慌ててHPポーションを取り出すヨメカワイイだったが、メイプル本人はむしろ戸惑いの表情で角がクリーンヒットしたはずの腹部を撫でる。

その後も、メイプルを標的に定めたらしい白兎が突進を繰り返すものの、大盾も使わずに柔肌で受け続ける少女は痛痒すら感じていないようだ。

「凄いいい! 全然痛くない! 流石【VIT 128】! ほらほらもつと気合を入れて!」

「防御力極振りだところまで堅くなるもんなんだなあ……」

念のため、白兎が突進する毎にメイプルへHPポーションを使いながら、ヨメカワイイは少女と小動物の戯れをぼんやりと眺める。

白兎は攻撃を弾かれる度に地面へ打ち付けられてHPが減少し、気付かないメイプル

はどうか白兔を撫でられないかと逆に追い回す——戦闘と呼ぶにはあまりに不思議な光景だった。

そのままどれほど時間が経ったのか、ふと唐突にメイプルの動きが止まる。

「あれ？　今、頭の中に声が……」

聞きようによつてはかなり痛々しい発言だが——白兔をひとまず横に置いて自身のステータスを確認するメイプル。

「【絶対防御】……わっ、V I T二倍!?　これって凄いスキルなんでしょうかカワイイさん!？」

「いや俺に聞かれても。それと、カワイじゃなくてヨメカワイいな」

別にどう呼ばれても構いはしないのだが。

実は、謎の音声はヨメカワイイにも聞こえていた。

『スキル【施しの報酬】を取得しました』

メイプルと同じようにステータス画面からスキルを確認してみると、そこには次のような説明が記載されていた。



【施しの報酬】

他のプレイヤーに対し回復系スキルまたはアイテムを使用する度に、自分のHPとMPの最大値が一割増加し、HPとMPが一割回復する。このスキルによつて増加した最大値は、二十四時間経過で全てリセットされる。

取得条件

パーティーメンバーではない戦闘中の他プレイヤーに、回復系スキルまたはアイテムを百五十回使用する。途中で戦闘が終了した場合、カウントはリセットされる。



「……要するに、誰かを回復させると自分のHPとMPも回復するスキルって事か。確かに、ずっとメイプルにポジション使ってたからなあ。と言うかパーティーも組んでなかったのか俺達」

ヨメカワイイもメイプルもスキルを簡単に取得出来たと考えているが、それは大きな間違いだ。

まずメイプルの【絶対防御】は防御に極振りし、ダメージを受けず、攻撃も与えないまま一時間耐え忍ばなければならない。

一部のトッププレイヤーならそんな余裕も生まれるかも知れないが、まずは何よりレベル上げを優先する新参プレイヤーが、倒せるモンスター相手に一時間も突っ立っているはずがない。

さらに、ヨメカワイイの【施しの報酬】もまた異質。

対人戦——PK制度も採用された『New World Online』において、プレイヤーメンバーでもない見ず知らずの相手に、しかも一度の戦闘中に百五十回も回復させるメリツトなど皆無。

つまり。

偶然にもヨメカワイイとメイプルが出会い、偶然にも一緒にモンスター退治に向かい、偶然にもパーティーの組み方を知らず、偶然にもメイプルが白兎と一時間も戯れ、偶然にもヨメカワイイが取得条件を満たせるだけのHPポジションを持っていたからこそその必然だったのだ。

そんな事は露知らず、

「スキルつて兎さんと遊ぶだけで取れるのもあるんですねー」

「ところでメイプル、その兎なんだが……」

「ふえ？」

ヨメカワイイが気まずそうに指差す先で、小動物ながらも不屈の闘志で何度も立ち上

がり続けた白兎にも、とうとう限界が訪れようとしていた。頭上に表示されたHPバーはわずかに赤い部分が残るのみで、二人が見守る前でついにはそれすらも――

「あ、死んだ」

「兎さあああああんっ!?!」

力尽き、細かなポリゴンとなって消え失せる白兎。

跡形もなく、角や毛皮などのドロップアイテムもなく。

残ったのは初めてのスキルと、力を得るために小動物を犠牲にしたという罪悪感。

「……何かを得るって何かを失うって事なんだよな……」

「兎さあああああんっ!?!」

こうして、後に『化物』そして『怪人』と並び称されるルーキー二名の初戦闘は、何とも空しい形で終わりを迎えたのだった。

005. 毒食らわば毒虫まで

白兔を手厚く供養した後。

経験値を得て——意図的ではなかったにせよ——レベルアップしたというメイプルのステータスチェックやスキルポイントをVITに振るのも終えて、ヨメカワイイとメイプルは結局パーティーを組めないまま、引き続き二人でソロ狩りという奇妙な経験値稼ぎに精を出していた。

ちなみに最初の白兔の経験値はメイプル一人で戦ったとシステムに判断されたのか、当然ながらヨメカワイイには一切入らなかった。

場所が場所なだけに出て来るモンスターは大百足や蜘蛛など虫の姿がほとんどで、たまたま獣型のモンスターが出て来ても猪や狼ばかりで白兔ほどの可愛げはない。

ゲームだと割り切ってしまうえば、倒すのに抵抗がなくなるまでそう時間はかからなかった。

その慢心と油断が不味かったのだろうか——メイプルは言わずもがな、ヨメカワイイも白兔戦でHPポーションを全て使い切った状態で、この一帯で最も強いモンスターが生息する深部まで足を踏み入れてしまっていた。

「……………戦略的撤退―」

「異議なし」

鬱蒼と茂る森の中を逃げ惑うヨメカワイイとメイプル。

上空から羽音を立てて迫るのは、中型犬ほどもありそうな巨大な蜂型モンスター。群れではなく二匹だけなのが不幸中の幸いだが、鉄パイプ並みの太さの針を見たらそんな安心も吹き飛んでしまう。

防御特化のメイプルなら仮に刺されたとしてもくすぐったいで済むかも知れないが、適当振りで武器補正もないヨメカワイイの〔VIT 15〕では最悪の場合一撃死だ。

加えて厄介な事に、巨大蜂達はメイプルに毒針が無効と判断するや否や、攻撃手段を毒液噴射に切り替え、物理ではなく毒による確実なダメージを狙い始めた。

「あわわわ、私が遅いせいでカワイイさんが紫色のプロッコリーに……………」

「絶妙な表現をどうもありがとう」

圧倒的AGI差でメイプルは巨大蜂に翻弄され、見捨てて逃げるほど薄情ではないヨメカワイイももう一匹に毒液を浴びせられ続ける。

反撃の矢も当たるには当たるが、初心者用装備では装甲に阻まれて傷も微々たるもの。巨大蜂が倒れる前にこちらのHPが毒で尽きる方が早い。

「にしてもこりや焼け石に水、いや泣きっ面に蜂か？」

変則的な一対一の戦闘が二組のこの状況。

飛ぶ相手への攻撃手段が乏しいメイプルよりも、ヨメカワイイが確実に先に死ぬ——
そうなれば二対一になり、メイプルの死へのカウントダウンは加速する。

せめて、せめて回復アイテムが一個でも残っていれば、メイプルを背負い逃げるなり
隠れるなり出来るのだが、インベントリにあるのはMPポーションのみで——

「……………あ、そっか」

そこで、ポーションさえあれば良かったのだと気付く。

自分以外のプレイヤーに回復アイテムを使えば自分のHPとMPが回復する。しかも
最大値増加のオマケ付きで——それがヨメカワイイが得た【施しの報酬】の効果。

「メイプル、まだ耐えられるか?」

「三十回くらいなら大丈夫ですー!」

「そいつあすげえな」

あれだけ毒液を被って、HPがまだ半分を切っていない事に驚くべきか呆れるべき
か。

メイプルにMPポーションを使い、スキルの恩恵で自分を治癒する——不毛な虫捕り
に終わりが見えたのは、メイプルのHPがようやく半分を下回った頃だった。

『スキル【毒耐性小】を取得しました』

その音声と同時に、毒によるHPの減少速度が目に見えて低下した。

ポーションを使う余裕しかなかった所へ、願ってもない毒への耐性スキルの取得。攻勢に転じるチャンスが突如訪れ、ヨメカワイイは毒に塗れながら一心不乱に矢を放つ。

ピリピリと皮膚を焼く痛みを堪え、狙うは装甲の少ない急所と思しき巨大蜂の頭部——狙いから外れた矢の一本が偶然にも羽を射抜き、巨大蜂が地面に墜ちた事でいよいよ狩る者と狩られる者の立場が逆転した。

「ふ、のっ……いい加減倒れる!!」

距離を詰め、壊れたスプリングクラーのように毒を撒き散らす巨大蜂を足で押さえ付け、真上からヘッドショットを何本も撃ち込む。

『スキル【毒耐性小】が【毒耐性中】に進化しました。レベルが7に上がりました』
巨大蜂が光となって砕け散るのを見届け、ヨメカワイイは弓弦から指を離す。

メイプルの方も、もう一匹の巨大蜂の口の中に短剣を捻じ込んで倒すのが見えたり、かなり、いや、とても疲れた。

けれども、強敵を打ち負かしたという久しく忘れていた達成感も確かにあり、大の字で仰向けに倒れて長く長く息を吐く。

「カワイさん、HP回復の指輪だつて！ それに【大物喰らい】ジャイアントキリッつてスキルも!! これで戦闘になればVITが全部で四倍!! やったあ！」

「そりやあ良かった。おじさんはもうへロへロだよ……」

「あれ？ カワイさんの横にも何か落ちてますよ？」

「んー？」

手探りで引き寄せたそれは、小瓶に入った乳白色でクリーム状の液体だった。



『フォレストローヤルゼリー』【レア】

フォレストクインビーから極稀に入る。非常に高価で栄養満点だが火気厳禁。



この際モンスターからどんな戦利品がドロップしても嬉しく感じるが、説明文の最後の四文字がべらぼうに物騒だ。火に近付けたらどうなるのか想像がついてしまい余計に不安を煽る。

小瓶をインベントリに収納し、身を起こす。

どうにか巨大蜂は倒したが、何時また別のモンスターと遭遇するとも限らない。そし

て、本日のヨメカワイイにはそれらを相手にする気力も体力も残っていない。

そもそも、当初はここまで激しい戦闘をするつもりなどなかったのだ。

「……今日はもう、町に戻ってログアウトするかあ……」

「あ、じゃあ私も。何だか疲れちゃいましたもんねー」

そう言うメイプルは、まだまだ体力が有り余っているように見える。

これが若さか。

今日はこれ以上モンスターと出会わない事を祈りつつ、フレンド登録をして他愛もない話に花を咲かせながら、ヨメカワイイとメイプルは現実世界への帰路に就いた。



ハードの電源を落とすと、そこはもう見慣れたLDKの自宅。

日付は既に今日から明日へと移り、カーテンの隙間から高く昇った月光が差し込む。

ソファに預けていた身体、その膝の上で、嫁がくうくうと寝息を立てている——自分がゲームで少女と遊んでいる間、寂しがり屋な新妻はさぞかし退屈だった事だろう。

白玉のような頬を突くと、仮想現実では決して有り得ない温かみが伝わってくる。

「こら、風邪引いちやうから起きなさい。風呂は入ったか？ 歯は磨いたか？ ああも

うメイクも落としてないし。ほらちやんとパジャマに着替えて」
「にやああ……」

ゲームはまあ、あまり得意ではないけれど。

とりあえず、隣に立つても嫁が恥ずかしい思いをしないで済む程度にはなろうと決めた。

006. 幽刻の狩人

『スキル【弓の心得Ⅲ】が【弓の心得Ⅳ】に進化しました』

「はいはい、そりやどうも」

スキル進化のアナウンスにぞんざいに返し、アフロを揺らしながらヨメカワイイは弓を引く。

狙う先には、満天の星空を我が物顔で飛び回るタイラントバットの群れ。

悪魔の如きシルエットが何匹も、翼を翻して眼下に広がる森へと急降下する。入れ替わるように上昇する個体が餌として啜えているのは、森に生息する気の毒な小型モンスターだ。時には数匹で協力し、自分達の体長の倍はある獲物まで仕留め、上空まで持ち上げている。

正に『暴君』の名を冠したモンスターに相応しい狩猟の光景が、ヨメカワイイの陣取る場所からまじまじと観察出来た。

「……【チャージショット】」

放たれた矢が光の尾を引きながら夜空を駆け抜け、群れから少し離れて飛んでいた一匹の胴体を綺麗に貫通する——それなりの距離があるため断末魔の叫びは聞こえな

かったが、光の粒となって消えるタイラントバットを確認し、ヨメカワイイは足元の墜数に小枝で×印を一つ書き足した。

「これでちょうど三十四目。にしても町からちよつと遠いし壁登りは疲れるし、初心者がやるには面倒過ぎやしないかこのクエスト……」

ぶつくさと愚痴を垂れるが、それに同意してくれる者はいない。

タイラントバットが縄張りとするこの森には、古代遺跡の名残を思わせる巨大な石の柱が何本も天に向かって突き出している——そのどれもが木々よりも高く、自力でよじ登らなければならぬ苦勞こそあったが、ヨメカワイイにとって絶好の狙撃ポイントとなっていた。

「嫁は今頃何をしてんのやら……」【チャージシヨット】！

三十一匹目を八つ当たり気味に撃墜しつつ、愛妻の顔を思い浮かべるヨメカワイイ。

何故一人でコウモリ狩りを続けているのか——それは数日前まで遡る。



「一緒にプレイ出来ないってどーゆー事よ?」

新品ハードともう一つの『New World Online』のパッケージが自宅に

届き、さあゲームの中でデートだと意気込んだ矢先。

嫁からのまさかの発言に、飲みかけの缶ビールを危うく落としそうになった。

風呂上がりで色気三割増しの嫁は、パジャマ姿で牛乳をくびくび飲むと申し訳なさそうに、

「実は私ね、ギルドを作……じゃあなかった、ギルドに所属しててね？ それで、他のメンバーに旦那様と一緒にプレイするってまだ言い出せてなくて……」

「だったらさっさと言っちゃいなさいよ。何なら俺もそのギルドに入ろうか？」

「それだけはダメえっ!!」

滅多にない剣幕で嫁が声を荒げた。

確かに、夫婦で同じゲームをして、さらにギルドメンバーに説明するのは、年頃の嫁にとつては保護者同伴のようで気恥ずかしい事なのかも知れないけれど、そこまで露骨に拒否されてしまうと流石にちよつと傷付く——娘に別々に洗濯するよう言われた父親の気分である。

「……………うん、ごめんな？ 知り合いに会わせたくない旦那で……」

「へ？ ……あつ!?! ち、違う、違うの、旦那様はちつとも悪くないの！ 私の心の準備がまだ出来てないだけだから！」

「今度から洗濯物は別々に洗う事にするよ。明日、帰りに布団も買ってくるから、ベッド

はお前が一人で使って良いぞ?」

「ちーがーのー! 一緒に嫌とかじゃないのー!」

まあ、冗談な訳だが。

これ以上からかうと本気で泣き出してしまいそうだったため、ソファに腰掛け、嫁を抱き寄せて定位置である両足の間でセッティング。

目尻に涙を浮かべ、唇を尖らせながら肩越しにこちらを見る嫁。

「……旦那様のイジワル」

「何を今さら」

分かり切っている事を非難されても困る。

とは言え、これからどうしたものか——そもそも嫁に誘われて始めたゲームなのだ。肝心の嫁がいなければ自分が『New World Online』をプレイする意味は薄くなる。自宅の同じ部屋で、同じゲームを別々に遊ぶ奇妙な光景が出来るだけだ。

嫁の頭に顎を載せ、考える。

「要するに、俺がお前を探し出せば良いんだよな?」

「うう、探さないでよう。あんなの旦那様に見られたら私死んじゃうう……!」

「そうかいそうかい。じゃあ、何が何でも恥ずかしがるお前を拜んでやるとしようか」

「やっぱり旦那様はイジワルだあ……」



そんなやりとりがあつて。

デートの前に、この世界で嫁を探し出すという目標が追加された。

行動範囲を広げるためにも経験値稼ぎとPプレイヤースキルSを磨く目的でソロプレイに勤しみ、その過程で偶然出会ったNPCからクエストを受諾したヨメカワイイだったが――

「……減つてるよなあ、やっぱり」

タイラントバットはクエスト用に発生する限定モンスターであるらしく、一定の範囲を巡回する動きを繰り返し、それ以上外に移動しようとはせず新たにリポップもしない。

クエスト自体は特に目立った条件もない単純な討伐依頼で、倒した数に応じて通貨や素材などの追加報酬も得られる内容となつている。

なので、狩れるだけ狩るつもりで矢を射続けているのだが、不思議な事に、タイラントバットの生き残り討伐した数を足しても、発見時の数に届かないのだ。

「時間経過で消滅してるのか、俺以外にも誰かが狩ってるのか……」

可能性としては後者。

現に今も狙った覚えのない個体が——おそらく遠距離からの攻撃を受けて——森へ墜落するのが見えた。利益を独占するつもりはないし、割り込みだの横入りだのと見苦しく目くじらを立て喚くつもりもないが、追加報酬が討伐数に左右される以上は恨みっこなしの早い者勝ちだろう。

「【チャージショット】」

挑戦状を叩き付けるように、ヨメカワイイはペースを上げていく。

「【チャージショット】」

頭部を、胴体を、翼を射抜かれて、空の暴君だったはずの獣達は、二人の狩人によって瞬く間に仲間の数を減らし——最後の一匹をヨメカワイイが仕留めた事で、その圧政は完全に崩壊した。

クエスト達成のアナウンスが流れるも、ヨメカワイイの視線は正面に注がれたままだ。

正確には、タイラントバットの縄張りだった領域を挟んで真向かいに立つ石柱——何時の間にか存在し、自分と同じように弓を携えた人影に。

「……………」

地盤の沈下かそういう建築なのか、若干斜めに傾いた石柱を滑り降りる人影。その動

ヨメカワイイ

Lv14

HP 1113 / 1113

MP 420 / 1088

【STR 5 へ+18 へ】

【VIT 15】

【AGI 25】

【DEX 30】

【INT 25】

装備

きはまるでヨメカワイイにわざと見せ付け、誘うようなものだった。
クエストクリア後はログアウトするつもりだったが、何の意図があるのか興味が湧く。

すぐにでも後を追いたい衝動を抑え、まずはステータスの確認を行う。



頭 【空欄】

体 【空欄】

右手 【丈夫な弓】

左手 【丈夫な弓】

足 【空欄】

靴 【空欄】

装飾品 【空欄】 【空欄】 【空欄】

スキル

【チャージショット】 【ファイアボール】

【弓の心得Ⅳ】 【火魔法Ⅰ】 【反響】 【施しの報酬】 【毒耐性中】



得たステータスポイントはHPとMPに振り分け、加えて森に向かう道中でプレイヤーを十人ほどこつそり回復させたため、HPには余裕がある。

不安要素があるとすれば——何となく戯れに取得した【ファイアボール】を含めても、攻撃用のスキルが2種類しかない点か。

石柱を降り、人影が消えたと思しき方角へ向かって森林を移動すると、木々ばかりだった光景が一気に開け、石畳が円状に敷き詰められた広い場所に出た。

朽ちてひび割れ、雑草に侵蝕されてこそいるが——障害物として人間サイズの立方体の石の塊が無数に配置されたその場合は、紛れもない『決闘場』であった。

『エクストラクエスト【幽刻の狩人】が発生しました』
クエストの通知を表示する青いモニター。

であるならば、人骨やモンスターの骨が散乱する決闘場の中央に立ち、こちらを待ち構えている人影の正体こそが、クエスト名にもなっている幽刻の狩人とやらなのだろう。

膝まである漆黒のレザーコートを身に纏い、顔面や手足などは包帯で覆い隠しているため素肌の露出は一切ない。手にした弓に装飾の類はなく、実用一点張りで使い込まれた代物に見える。

その弓におもむろに矢を番え、幽刻の狩人はヨメカワイイに狙いを定めた。

「ウヴヴヴオオオオオオオオオオッ!!」

「……やっぱ」

淀みない動作とは裏腹に、理性など感じさせない咆哮。

慌てて一番近い石塊の陰に飛び込むと、一瞬前までヨメカワイイが立っていた場所を

風切り音と共に矢が駆け抜ける。

「……つたく、コウモリ狩りの次は人狩りか？」
マンハント

石塊の陰から陰へと転がるように移動を繰り返し、ヨメカワイイは悪態を吐く。

幽刻の狩人の射撃は正確無比で、少しでも顔を出そうものならそこに矢が飛んで来る。その辺に転がっていた何かの頭蓋骨を放り投げてみると、それさえも空中で射抜かれて木端微塵と化した。

しかし、どれだけ威力があろうと弓は弓。一発撃てば必ず次の一撃まで時間を要する。

逆転のチャンスはそこにある。

「だからって、こっちの攻撃が効く訳じゃないんだよなあ……」

武器の性能の差か——HPバーの減り具合から見ても、ヨメカワイイが隙を突いて放つ矢は幽刻の狩人にとって蚊に刺された程度でしかないらしい。避けようとする素振りすら見せない。

それでも、HPは減らせると判明したただけ幸運と思わなければ。

「ヴォアアオオオアオオッ!!」

「っつ!?!」

幽刻の狩人の攻撃が石塊を貫通し、ヨメカワイイのHPを削ぎ落とす。

それまで固定砲台のように中央を占拠していたレーザーコートの姿はない——石塊の向こう側から馬鹿げた威力の貫通攻撃で風穴を開け、その延長線上にいるヨメカワイイを狙い始めたのだ。

「おいおい、石だぞ石。豆腐じゃねえんだぞあんにやろう……」

こちらは壁を射抜けないが、向こうは壁だろうと何だろうと問答無用。

勝利を掴むには、身を隠して狙撃を行う幽刻の狩人の居場所を突き止め、回り込み、攻撃直後の空白を利用して反撃する——もしかしたら、本来はパーティー向けのクエストなのかも知れないと後悔するが、こうなった以上は一人でどうにかしなければならぬ。

【反響】

まずは相手の位置を探るため、タイラントバットを倒した際に取得したスキルを使用する。



【反響】

MPを消費して超音波を発し、周囲の地形や状況を把握出来る。

範囲は発動した地点を中心に半径五十メートル。

取得条件

タイラントバットを六十匹倒す。



言うなれば潜水艦のソナーだ。

決闘場を丸ごと包み込むように超音波がドーム状に広がり、石畳の凹凸から、舞い散る木の葉に細かな骨の欠片、そして石塊の後ろに潜む幽刻の狩人を捕捉。

すぐにその場から飛び退き、数瞬遅れて、砲撃を超えた射撃が貫き抜ける。

放つまでに溜めが必要な「チャージショット」は使えない——仮に使えたとしても、向こうから飛んで来る『お返しの商品』を考えれば、とてもじゃないが割に合わない。

インベントリの中身も念のために持って来たポーション数個と、

「はいっただけか……」

小瓶に入った乳白色のクリーム——フォレストローヤルゼリーを見る。

掲示板で調べた所、NPCの店でかなりの高値で買い取ってくれるらしいが、どうにも売る気にはなれずお守り代わりにずっと持ち歩いていたので。

非常に高価で栄養満点だが火気厳禁。

何度目かの射撃が左脇腹を抉る中、フォレストローヤルゼリーの説明文を思い出し、悪い考えが脳裏に浮かぶ——自分でも笑ってしまうほど頭の悪い考えが。

「さてさて、丁と出るか半と出るか——【反響】！」

射撃の後に必ず移動を行う幽刻の狩人の位置を、超音波で再び把握。

貫通して出来た穴の奥へ、蓋を開けた小瓶を捻じ込み、自分は石塊の陰から走り出す。スキルを使わない通常攻撃では与えるダメージは微々たるものだが、幽刻の狩人の気を引くには十分過ぎる。

「【反響】！」

「ヴォロロロロロロツ!!」

「【反響】！」

「ヴァヴォオルヴァ!!」

石塊から石塊へ。

お互いに射撃と移動、捕捉と潜伏を数え切れないほど繰り返し——ついに、ヨメカワイイが望むポイントへ幽刻の狩人が身を隠した。

幽刻の狩人の技量は精密そのもの。

砲撃してみた矢の威力にばかり目が奪われてしまうだろうが、重要なのはそこではない

——石塊に開けられた穴が、全て同じ高さで統一されている事にヨメカワイイは気付いたのだ。

そして幽刻の狩人は「反響」など使わずとも、ヨメカワイイの居場所を感知出来る。そこに大きな弱点がある。

「……………やつと、そこに立ってくれたな」

ヨメカワイイは静かに言った。

もう逃げも隠れもしない。

正面、十メートルほど先。

石塊の向こう側からヒシヒシと伝わる殺気と狂気。

「【ファイアボール】!!」

それに応えるように、ヨメカワイイは叫んだ。

たかだか【INT 25】では、石塊を破壊する事は不可能だろう。

だがしかし、その石塊に既に穴が開けられていて、さらにそのトンネル内部に火気厳禁の物質が詰め込まれていたとしたら？

「ふうっ!!」

答えは、耳をつんざく轟音と爆風が教えてくれた。

吹き飛ばされダメージを負いながらも、ヨメカワイイはどうか起き上がる。

即席の砲身代わりに使った石塊は、内側からの圧力に負けて半分ほどの高さになっていた。

穴に詰め込んだフォレストローヤルゼリーを「ファイアボール」で爆発させる。逃げ場を失った炎と爆圧は噴火さながらに穴の外へ——その前に立つよう誘導した幽刻の狩人を攻撃したのだ。

「俺が何処にいるか分かるってんなら、お前が何処に立つかある程度は予想できるわな」あの爆発の直撃を受け、それでも立ち上がる幽刻の狩人。

けれど、その身体は右胸から腹部にかけて大きく抉り取られ、あれだけあったHPバーの残量も一割以下にまで減ってしまっている。

「ヴォ……ヴォロ、ヴァ……」

「恨み言なら聞かねえよ——【チャージショット】」

弓を構える力すらない強敵の肩間に、最後の一矢を撃ち込む。

仰け反り、顔に巻かれた包帯が解ける——その奥に隠されていたのは肉も眼球も失った骸骨。

「……………あ、りが…………と、う…………」

「……………」

「これ、で妻の、とこ、ろ、へ…………」

恨み言ではなく感謝の言葉を残して、幽刻の狩人は光となって消えさった。

「……嫁さんとお幸せに」

例えゲームの演出の一つに過ぎないのだとしても。

そう願わずにはいられないヨメカワイイだった。

『レベルが20に上がりました。スキル【魔弓の極技】を取得しました』

007. ユニークシリーズと鍛冶屋

「いらっしゃーい」

ヨメカワイイが頭をぶつけないように少し屈みながら入店すると、青い髪をゴーグルで押さえた女性とカウンター越しに目が合った。

他に店員の姿もなく、カウンターのすぐ奥に作業場がある所を見ると、このにこやかな女性が鍛冶屋の店主であり職人なのだろう——アイテムの調合、武器防具の作成をメインとする生産職のプレイヤーも多いと閲覧した掲示板には書いてあった。

「あら、随分と大きなお客ね。どんな御用かしら？」

「姿見を使っても良いだろうか？ NPCの店も何件か回ったんだが全身が入る鏡が置いてなくて」

「まあ、それだけ背が高いとそうよねえ。どうぞどうぞー」

鍛冶仕事に戻りながら、女性店主は店の片隅を指す。

自信作であろう剣や鎧の間に挟まれて設置された、天井まで届きそうな大きな姿見。これだけのサイズならヨメカワイイでも問題なく全身を映す事ができる。

「……さて、新装備のお披露目はいかがか」

槌が振るわれる音を背に、インベントリを開く。

正攻法とは呼べない戦闘の末に、幽刻の狩人の最期を見届け——本日一番の成果を懐に忍ばせてヨメカワイイは町に戻ってきていた。

クエストクリア通知と同時に出現した魔法陣と大きな宝箱。

魔法陣は町へ戻るための転送装置と予想がついていたため後回しにして、ヨメカワイイの関心は宝箱の方にばかり向いていた。

宝箱にワクワクするのは当然の事、ましてやそれがボス戦後なら尚更に——中身がポーシヨンや金貨だけで盛大に肩透かしを食らう場合も多々あるが。

「嫁なら目をキラツキラ輝かせてはしゃぐんだらうねえ、きつと」

幸いな事に中身は金貨や回復アイテムではなく、激戦の報酬に相応しい装備一式だった。

動物園の土産コーナーで、大量のぬいぐるみに囲まれてテンシヨンがおかしな事になった愛妻を思い出しつつ、ヨメカワイイは装備を身に着けていく。

着替え終えて鏡を見ると、映っていたのはつい三十分前まで死闘を繰り広げた強敵の姿。

「ふむ、なるほどこうなるか」

今のヨメカワイイの姿は、アフロを除けば幽刻の狩人そのままだ。

闇に溶け込む漆黒のロングレザーコートとレザーパンツに加え、顔面と手足、上半身に隙間なく巻き付いた赤黒い染みのある包帯。そして艶消しが施された飾り気のない黒弓。

どう見ても人型のモンスターか、でなければホラー映画の殺人鬼である。



【ユニークシリーズ】

単独で、かつボスを初回戦闘で撃破し、ダンジョンを攻略した者に贈られる攻略者だけのための唯一無二の装備。

一ダンジョンにつき一つきり。取得した者はこの装備を譲渡できない。

『罪悪滔天』

【STR-50】【破壊不可】

スキル【狩人の執念】

『人面獣心ノ皮衣』

【AGI+25】【DEX+25】【破壊不可】

スキル【獣性解放】

『不死病ノ束縛帯』

【HP+500】【破壊不可】

スキル【鋭敏化】



あの決闘場をダンジョンと呼ぶには屋外過ぎた気もするが、それはさておき。

「……【STR—50】って、攻撃力減ってあの強さだったのか……」

ヨメカワイイは知る由もない。

幽刻の狩人に二名以上のパーティーで挑む場合、一定以上のダメージを与えると攻撃パターンが変化し、STR減少補正の弓を捨てて、獣同然の圧倒的暴力による接近戦に切り替わる事を。

運営としてはそれを含めて幽谷の狩人の討伐難易度を設定したのだが——エクストラクエストの発生条件こそ『タイラントバットを幽刻の狩人より多く倒す』であるものの、まさか防衛に乏しい弓使いがその足で単独討伐に向かうなど、予想はできても勝ててしまうとは思わずもなく。

「俺のステータスでこの装備だと【STR 0】になるのが問題だよなあ」

物理武器にあるまじき【STR—50】——しかし唯一無二の武器なら使いたいのが
男心。

であれば今後のステータスポイントを全てSTRに振ってマイナス補正分を埋める
か、逆にSTRに依存しないスキルや攻撃方法を見つけ出す必要がある。

折良くここは鍛冶屋。

初心者が鏡の前で唸り続けるより、武器の専門家に聞いた方が有益だろう——とヨメ
カワイイはカウンターに向かうと、熱した鉄と格闘する女性店主に声を掛けた。

「忙しい所済まないが、ちよつと聞いても良いか？」

「はいはい……あらあ……」

新たな装いとなつた——もつと言えば凶悪度が増した——ヨメカワイイを一目見て、
女性店主の表情が一瞬強張る。しかしそこは数多くの素材とプレイヤーを相手取る職
人の根性なのか、すぐに柔らかな笑顔に戻すと、

「えつと、その頭は……鏡を借りに来たお客さん、よね？ モンスターじゃなくて」

「……やつぱりモンスターに見えるか？」

「ダンジョンで出くわしたら驚かれるかも知れないわね。それで、聞きたい事って？」

「この武器だとSTRが心許なくてな。STRの数値に関係なく相手にダメージを与え
られる方法って何か思い付くだろうか。出来れば魔法以外で」

「そうねえ……」

女性店主はしばし考え込んだ後、インベントリから手の平ほどの球体を取り出した。

「これとかどう？ 私が発作した爆弾なんだけど、消費アイテムだからSTRに関係なくダメージが期待できるわよ？ ちなみに威力は作る職人の腕や使った素材、それと相手のステータス次第ね」

「爆弾か……」

ソフトボール大の危険物を眺める。

考えてみれば、幽刻の狩人との戦闘もとどめこそ矢だったが、ダメージのほぼ大半がアイテムで与えたものだ。ダンジョンボスにも有効なら、その辺のモンスターにも十分通用するだろう。

何より、キャンプの火起こし役にも似た魅力がある。

「じゃあこれをくれ。とりあえず五十個」

「はい、お買い上げありがとうございます。おまけで五個サービスしておくけど、次は装備も注文してくれると嬉しいわねー」

「気が向いたらな」

鏡を借りた事やアドバイスに礼を言い、商品を受け取って鍛冶屋を後にするヨメカワ

イイ。

その背中に、今後長い付き合いになるだろう女性店主の声が届く。

「そう言えば、まだ名前を聞いてなかったわね。私はイズ。見ての通り生産職よ」
「よろしく、イズ。俺はヨメカワイイ。ご覧の通りの怪しい者だよ」



【狩人の執念】

最大HPと残りHPの差に比例して矢の飛距離と速度が上昇する。

【鋭敏化】

感覚が鋭くなり、索敵能力が向上する。

被ダメージ五割増。

【獣性解放】

二つのスキル【跳躍X】と【気配遮断X】を内包する。



「……どこかで試してみないといかんこりゃ」

装備に付与されたスキルを改めて確認して。

すれ違う他プレイヤー達の奇異の視線を浴びながら、ヨメカワイイは雑踏の奥へ姿を消した。

008. 極振り少女再び

「【魔弓の極技】」

スキル名を口にして、さらに追加で別のスキルを発動する。

「【チャージショット】」

放った矢は的として定めたテントウムシ型モンスターから、右へ三メートル逸れて飛んで行く。

実験が目的のため、あえて当たらないよう狙いをずらしたが、矢は獲物に襲い掛かる蛇のように軌道を変えて爆発テントウに命中した。

新武器『罪悪滔天』のマイナス補正によりヨメカワイイは【STR 0】——普通にスキルを使って撃つただけでは火力不足で倒せず、現に今も攻撃を受けた爆発テントウはけろりとした表情だ。

しかし、例えダメージは0でも命中したのは事実。

実験が上手く行った事を確認し、ヨメカワイイは頷いた。

「【魔弓の極技】……一日一回限定だがおっそろしいなこりゃ」



【魔弓の極技】

発動後、次に使用した弓系スキルが必ず命中するようになる。

使用可能回数は一日一回。



弓を装備した幽刻の狩人を弓で倒す事が取得条件だったこのスキル。

説明からして、弓使いなら喉から手が出るほどに追い求める効果なのは分かっていたが、実際に使ってみるとその利便性に慄く。もし即死させるスキルがある場合、どんな強力なプレイヤーでも一日一人は確実に仕留められるという事なのだから。

「まあ取得しちまったもんは使わせてもらおうとして、次行ってみようか」
鍛冶屋のイズと知り合った翌日。

狩り場としては人気のない森の奥で、ヨメカワイイはスキル検証と素材採取を行っていた。

別に通りすがりの誰かに見られたとしても困る訳ではないが、手の内を明かさないう方

が良いのはどんなゲームでも同じだ。ついでに言えば、嫁に披露して驚かせたいという悪戯心もある。

などと考えていると、敵の出現を教える羽音が。

「おお、来た来た………多くないか？」

思わず目を疑う。

気がない狩り場——つまりはモンスターが手つかずで生き残っているという事だが、飛来する爆発テントウは明らかに異常な大群だった。言うなれば、意思のある手榴弾が大挙して押し寄せて来るようなものだ。

その名が表す通りの爆発は一匹でもダメージが大きく、それが十匹、二十匹分の威力ともなればどうなるかなど火を見るより明らか。

流石に相手をしてもらえず、逃げようとしたその矢先。

「パラライズシャウト」

「ぬおっ!」

キンツ、という金属音と少女の声が聞こえたかと思えば、全身を強烈な痺れが襲い、受け身すら取れないまま爆発テントウと共に地べたに倒れ伏す。顔面から突っ込んだためかなり痛い。

初のPK被害か、それとも麻痺を使う新手のモンスターか。

周囲の爆発テントウを誘爆させて道連れにしてやろうかと考え、インベントリの爆弾をどうにか取り出そうとするも、その覚悟は無駄に終わる。

「——えっ、あれっ!?! この頭、カワイさん!? 何でこんな所に!?!」

「……お前さんかい」

現れたのは他でもない、黒の重鎧を身に纏ったアホ毛の少女——メイプルであった。



「ほんつとーに! ごめんなさい!」

しばらくして痺れが取れたヨメカワイイに、メイプルが深々と頭を下げた。

「爆発系の魔法探しに来て、掲示板でもここは人がいないって書いてあったから……」

「いやまあ、俺も似たようなもんだから気にすんな。こそこそして俺にだって非はある。それにおかげで【麻痺耐性小】も取れたしな」

手頃な倒木に腰を下ろした黒ずくめ二人の周囲には、まだ麻痺から抜け出せない爆発テントウが這う事も飛ぶ事も出来ずに散乱している。

ヨメカワイイの目的は爆弾の素材になるドロップアイテムだが、メイプルはここから

どうやって爆発系魔法を取得するつもりなのか。

「食べます!」

「……………ん?」

「食べるんです!」

「……………んん?」

「モンスターを食べるとスキルを取得出来るんです!」

聞き間違いではなかったらしい。聞き間違いであってほしかった。

そんな『知らなかったんですか?』と言いたげな表情をされても困る。

百聞は一見にしかずとばかりに、メイプルは転がっていた一匹を拾い上げると、その小さな口で何の躊躇いもなく噛り付いた。

ハチノコやイナゴの佃煮ならまだしも、特大のテントウムシをまるでパンでも食べるように。

もう好き嫌いの範疇を超えている気がするが、それでも、少女が食べているのだから大人として食べてみない訳にはいかない。

意を決し、ヨメカワイイも頭に食らい付く。

「ふっ、ふっ!?!」

口の中で三尺玉が弾けたような感覚。

HPを確認すると半分近くまで減っていた——被ダメージが五割増しになる【鋭敏化】の影響もあるのだろうが、たった一口でこの有様では、スキルを取得する前に町に強制送還される。

一方メイプルはと言えば、口のダメージなど毛ほども感じてはいないらしく、もう何十匹目かも分からない勢いで手当たり次第に劇物のテントウムシを頬張っていく。

「……そんなに食って何ともないのか？」

「はい！ パチパチするお菓子みたいで面白い食感です——あつ！」

「どした？」

「スキル二つも取れちゃいました！」

「マジかあ……」

モンスターを食べるとスキルを得られる——それが間違っていないのは分かった。

しかし同時に、メイプルの方法が異常である事も理解した。

百人いれば百通りの遊び方が生まれるのは当然なのだから、何が正しくて何が正しくないかなど初心者のヨメカワイイに倅そうに語る権利はないのだが。

黒の大盾に取得したばかりのスキルを嬉しそうに付与するメイプル。

「少し見ない間に、随分と格好良くなったんだな」

「ふっふふー、格好良いだけじゃないですよ？ 格好良くて……強いんです！」

腰の短刀を抜き放ち、天に突き上げてポーズを決めるメイプル。

その言葉に嘘や見栄はないのだろう。

自分と同じくユニークシリーズで全身コーディネートしているのだ——ダンジョンボスを単独で討伐し、そのボスが所有していたスキルを継承しているのなら弱いはずもない。

「カワイさんだつてとつても格好良いですよ！ 変身ヒーローに出て来る怪人の幹部みたいでー！」

「遠慮忌憚のないお褒めの言葉をどうもありがとうございます」

どう転んでもヒーローになれないのは確定のようだ。別になりたいとも思わないが。

メイプルがスキルを得た事で用済みとなった生き残りの爆発テントウを譲り受け、本来の目的の一つであるドロップアイテムを確保していく。麻痺しているおかげで、寄せ集めて爆弾でとどめを刺すだけの単純作業になってしまった。

「そう言えば、もう少して初めてのイベントですね」

「ああ、通知で来てたあれか」

内容はポイント制のバトルロイヤルで、色々と細かい判定基準の記載があつたが、要はなるべくダメージを受けずに他のプレイヤーを倒せば良いのだ。

ユニークシリーズ所持者とは言え、揃つて「STR 0」であるヨメカワイイとメイ

プルに果たしてそれが出来るかどうかは別として。

上位者には限定の記念品が贈られると聞いて嫁が大興奮だったのは覚えている。

「カワイさんも出るんですよね？ あ、でもそうなっちゃうと、カワイさんとも戦う事があるかも知れないんだよね。うーん、どうしよう……」

「十人かそこらしか参加しない訳じゃなし、探し回ったりしなけりや戦場でぼったり出くわす方が珍しいだろ。ま、もし会っちゃったらお互い恨みっこなしだな」

「んー……でも、カワイさんといると楽しいしゲームで初めてのお友達だし……戦いたくないあ」

「……………」

この娘は……。

「そーゆーおじさん殺しの台詞は、もうちよつと大人になってから言うこつたな」

「高校生は立派な大人ですうー！」

「そう言ってる内はまだ子供だよ。つてか高校生だったのか？ てつきり中学生かと」

「むー！」

大盾と短刀を振り回して憤慨するメイプルをあしらいつつ、ヨメカワイイは考える。

まだ見ぬ対戦相手、未知のスキル——懸念材料は山積みだが、嫁も参加するとあれば、探し出し守るためにも参加を渋る理由はない。

イベントまで残り一週間。

ユニークシリーズを得た事で、大まかな戦闘スタイルのイメージは出来た。後はこれがあればと願うスキルが存在するかどうかの運次第。

ラスボスと怪人の名を知らしめる事となるイベントが迫っていた。



【NWO】やばいの見つけた

1名前：名無しの大剣使い

またやばいの見つけた

2名前：名無しの槍使い

メイプルちゃんみたいな子なら大歓迎

3名前：名無しの魔法使い

個人的にはボクっ娘希望

4名前：名無しの大盾使い

そのメイプルちゃんは今日知り合いに子供扱いされてからかわれたらしい優しい人だけど今日はいじわるでしたってメッセージ来た

5名前：名無しの弓使い

何それ微笑まけしからん

6名前：名無しの槍使い

つかその知り合いが妬ましい

メイプルちゃんからメッセージもらえるお前も妬ましい

7名前：名無しの大剣使い

禿同

じゃなくて、メイプルちゃんとは別方向にやばいのだった

8名前：名無しの魔法使い

電波系？

9名前：名無しの大剣使い

どつちかってーとゴツくないクリチャー系？

見た事ない真っ黒の装備で身長二メートル超え、顔が包帯グルグル巻きで何故かアフ

口

10名前：名無しの槍使い

こっわ！

11名前：名無しの弓使い

新実装されたモンスターとか……

12名前：名無しの大剣使い

見つけたの町のだ真ん中だったからモンスター説はなし

で、しかも普通に店に入って買い物してるっぽかった

13名前：名無しの魔法使い

店員さんがどんな神対応するか見てみたかったかも

14名前：名無しの大剣使い

背が高いから人混みの中に入っても見失いませんでしたよはい

15名前：名無しの大盾使い

ユニークシリーズ持つてるプレイヤーか

後を追いつけるとクエストが発生するタイプのNPCか

16名前：名無しの槍使い

んで、それでどうなったん？

17名前：名無しの大剣使い

飛んでった

18名前：名無しの弓使い

は？

19名前：名無しの槍使い

は？

20名前：名無しの魔法使い

は？

21名前：名無しの大盾使い

は？

22名前：名無しの大剣使い

立ち止まったかと思っただらそのまま一足で、ぼーん、と家とか三軒くらい飛び越えて

行方不明に

その場にいた俺も他の皆もぼかーんですよ

23名前：名無しの魔法使い

それでか、別スレでフライングヒューマノイド実装とか騒いでたの

24名前：名無しの弓使い

UMAじゃん！ もうほとんどUMAじゃん！

25名前：名無しの大盾使い

まあ、何かのスキルなのは確定だろうけど

26名前：名無しの槍使い

第一回イベントを前にしてとんでもないダークホース登場ですな

27名前：名無しの魔法使い

とにかく、参加する人は頑張っていてきまつしよーい

28名前：名無しの弓使い

つしよーい

29名前：名無しの槍使い

つしよーい

30名前：名無しの大剣使い

つしよーい

31名前：名無しの大盾使い

つしよーい

それとメイプルちゃんの応援もな

32名前：名無しの魔法使い

それな



そんなネットの盛り上がりなど露知らず。

「つくしよん!!」

「旦那様、風邪？ だめだよーもうすぐイベントだし身体に気を付けなきゃ」

「……そこは普通『明日も仕事なんだから』じゃないのか？」

「お仕事よりも旦那様の身体の方が大事だもん」

「俺は自分の身体よりお前の方が大事なんだが？」

「……えへへ」

年の差夫婦はイチヤイチャしていた。

009. 第一回イベント

一週間後。

イベント参加者が集結し、熱気と興奮に満ちた町の広場。

開始時間まで残り五分——その不気味極まりない装備と背丈、ついでにアフロのおかげで周囲の目を否応なしに惹くヨメカワイイも、戦闘前のステータスチェックを行っていた。



ヨメカワイイ

Lv25

HP 730 / 730 (+530)

MP 720 / 720 (+10)

【STR 5 (+50)】

【VIT 15】

【AGI 25〈+25〉】

【DEX 30〈+25〉】

【INT 25】

装備

頭 【不死病の束縛帯：鋭敏化】

体 【人面獣心の皮衣：獣性解放】

右手 【罪悪滔天：狩人の執念】

左手 【罪悪滔天：狩人の執念】

足 【人面獣心の皮衣：獣性解放】

靴 【不死病の束縛帯：鋭敏化】

装飾品 【空欄】 【空欄】 【空欄】

スキル

【チャージショット】 【マルチショット】 【アローレイン】 【ファイアボール】

【リフレッシュ】 【ヒール】

【弓の心得V】 【火魔法I】 【光魔法II】 【反響】 【施しの報酬】 【毒耐性中】 【麻痺耐性小】

【HP強化小】 【MP強化小】 【装填】 【ライフコンバート生命転換】 【魔弓の極技】



この一週間、時間の許す限り集めたスキルと経験値。

残念ながらメイプルのような幸運は持ち合わせていなかったため、スキルシヨップで購入したり掲示板で入手方法が判明しているものがほとんどだが、組み合わせ次第で十分に戦えるだろう。

装備補正によりHPだけは群を抜いている。逆に言えば、それ以外のステータスは同レベル帯の一般プレイヤーと大差ない。外見と比べて控え目ですらある。

装飾品に関しては、このイベントの結果次第だが——何にせよ、対人戦でどれだけ通用するかはやってみなければ分からない。

「ただいまより！ 第一回イベント！ バトルロイヤルを開始致します!!」

祭の開幕を告げるアナウンスに、会場のボルテージが一気に爆発する。

異口同音に割れんばかりの歓声を上げ、自慢の武器を振りかざすプレイヤー達。その中に重厚な黒い鎧のメイプルも見受けられたが、彼女の場合は少し照れが残っているように頬が赤い。

「それでは、もう一度ルールの説明を致します！ 制限時間は三時間。ステージは新たに作られたイベント専用マップとなります！ 倒したプレイヤー数と倒された数、与ダ

ダメージと被ダメージの四つの項目からポイントを算出し、順位が決定されます！ さらに上位十名には運営より記念品が贈呈されますので、皆様頑張ってください！」

うおおおおおつ、と再びの歓声。

運営のアナウンスが終了すると同時に、広場上空に大小いくつも投影された巨大なスクリーンでカウントダウンが始まり、参加者全員が光に包まれて専用マップへと転送された。

ヨメカワイイが飛ばされた先のフィールドは、子供ならずつぼり隠れてしまうほど背の高い草が生い茂る湿原。濃霧が立ち込めていて他のプレイヤーの姿は視認出来ない。

まあ、見えようが見えなからうが、最初にやる事は決まっているのだが。

「……【跳躍】」

足元の泥を盛大に巻き上げ、宙を舞う。

この【跳躍X】はロングレザークート『人面獣心の皮衣』に付属する【獣性解放】に内包されたスキルの一つだが、跳ぶ角度を誤ると落下時のダメージで死亡する可能性すらある危ういものだ。

実際、試しに町中で使ってみた所、家を何軒か跳び越えてしまい——軽い気持ちで発動させると壁に激突するか洞窟の天井に頭が埋まる羽目に陥るのは目に見えていた。

しかしながら、便利なスキルである事に変わりはなく。

たった一度の踏み込みのみでヨメカワイイは湿原と森林との境界へ到達、狙撃ポイントとしてはおあつらえ向きな大木の頂上に着地する。

正面に湿原、背後に森林。

森林側からヨメカワイイを攻撃しようとすれば枝葉が邪魔になり、湿原側からはそもそも大木の輪郭さえ見えないほど霧が濃い。

【生命転換】
ライフコンバート

意識を集中した右手の中に、紫色の水晶が生成される。



【生命転換】
ライフコンバート

HPを50単位で消費してMPを回復する。余剰分は魔力水晶としてアイテム化される。

取得条件

スキルシヨップで購入



本来であれば前衛に守られた魔法使いなどが、ポーション切れになった際に代用として使用するMP回復のためのスキル。

しかしヨメカワイイの場合は回復ではなく、むしろHPを減らす点に着目していた。HPが予定の数値まで減少した事を確認し、いよいよ攻撃態勢に入る。

「装填」 「反響」

続けざまに、今後の戦闘で一番重要と言えるスキルを使用。



【装填】

スキルや魔法、アイテムを矢に装填し撃ち出せる弓専用スキル。他スキルと併用可。
取得条件

弓を装備した状態で、武器やスキルを使用せずアイテムのみでモンスターを一定数倒す。



ヨメカワイイが番えた矢には【装填】の効果で【反響】のスキルが宿っている。

イベント前にいくつか実験を重ねた結果、この二つのスキルと、さらに感覚強化の【鋭敏化】を組み合わせる事で索敵能力が大幅に向上する事が判明したのだ。

【アローレイン】

当てる事が目的ではないため、やや上向きに放つ。

矢は上空で拡散し、その名の通り雨となつて湿原内に降り注ぎ——着弾地点を中心として広がる超音波により、ヨメカワイイは濃霧の中の状況を事細かに把握出来た。

単独で動く者もいれば、数人で徒党を組んでいる反応もある。

剣が激突し、魔法が飛び交う戦闘を高みの見物するのも面白いが、

「嫁が見てるかも知れないし、少しは動きますか……」

包帯の下で悪い笑みが浮かぶ。

【装填】『七星爆弾』……【魔弓の極技】

一日一回限定の必中スキル。

けれども、その説明文には『一回』と記されてはいても『一発』とは記されてはいない。単純に次に使う弓系のスキルが必中になると言うのなら。

「景気付けの花火だ、遠慮なく受け取りな！ 【アローレイン】！」

数にして五十二人——【反響】で位置を掴んだプレイヤー全員に狙いを定め、二度目の矢の雨を撃ち放つ。ただし、今回【装填】したのは無害な超音波ではなく、とある鍛冶屋に爆発テントウの素材で作成してもらった高性能爆弾である。

「うわあああああっ!?!」

「何だ!?! 一体何処から!?!」

蛇行する軌道で無数の矢が獲物に襲い掛かり、濃霧を吹き飛ばして生まれる爆炎と悲鳴。

敵を光の粒子に変えた凶悪な絨毯爆撃に満足げに頷き、ヨメカワイイはMPとインベントリ内の爆弾の残量を確認して。

「あと五、六回は補給なしでもいけそうだな」

相対する者に絶望しか与えない言葉を漏らしたのだった。

010. 嫁探しの怪人とイベント結果

【NWO】第二回イベント観戦席5

302名前：名無しの観戦者

暫定成績ランキングの名前もほとんど固まり始めたな

303名前：名無しの観戦者

まあペインが一位なのは順当だとして、ドレッドにミイ、クロム。他にも聞いた事ある名前ばかり

304名前：名無しの観戦者

個人的には大番狂わせも期待してるんだけどなー

305名前：名無しの観戦者

暫定三位のメイプルって大盾が無傷で敵を食いまくって毒と麻痺撒き散らしてるw

306名前：名無しの観戦者

あれはもう戦闘じゃなくて蹂躪だから……

307名前：名無しの観戦者

蹂躪って言えば、十位以内には名前ないけど、たまにスクリーンに映るおかしなアフ

口が
いる

308名前：名無しの観戦者

あ、今ちようど映ったわ

……ちよつと待つて、アフロ空飛んでね？

309名前：名無しの観戦者

飛んてますね……

しかもそこから撃つてる矢が爆発してるし

310名前：名無しの観戦者

人間爆撃機かよ

地上からじや攻撃届かないつしよ

311名前：名無しの観戦者

当たると爆発する矢つてのがまず意味不明

312名前：名無しの観戦者

火矢とか魔法系ならともかく、撃つ直前まで普通の矢にしか見えないのも厄介

313名前：名無しの観戦者

だから逃げずに盾で防ごうとしてドカン

そして逃げてても上からドカン

314名前：名無しの観戦者

もつと分かんのが、矢が刺さってもやられないで逆に回復してるプレイヤーもいるって事

315名前：名無しの観戦者

大人数で混戦してる所にわざと乱入してる感じ

やられかけてた奴らが回復されて息吹き返してるからもうゾンビゲー

316名前：名無しの観戦者

弾速もくそ速い

撃つたと思った時にはもう当たってるって何……

317名前：名無しの観戦者

真面目な話、魔法職でもないのに攻撃と回復の両立って出来るの？

チート？

318名前：名無しの観戦者

運営が何も言っていないんだからチートではない、はず

319名前：名無しの観戦者

動きが人間辞めてるペイン

堅さが人間踏み外してるメイプル

もう人間とは思えない空飛ぶ爆弾魔

320名前：名無しの観戦者

NWOはまさかの人外魔境だった！



などと、自分の話題で盛り上がっているとは知りもせず。

ヨメカワイイはついうっかり発動してしまった【跳躍】による長い滞空から、ようやく地上へと戻る事が出来て胸を撫で下ろしていた。

空中では方向を変えられず、慣性のままに進んだ先がまさかの大乱闘会場——しようがないので上空から爆弾矢をばら撒いて全員蹴散らしたまでは良かったが、嫁もイベントに参加している事を思い出し、慌てて女性プレイヤーに片っ端から【ヒール】を【装填】した矢を撃ち込む。

それでも、十数人は回復が間に合わずリタイアしてしまった。

場合によってはイベント後に嫁に土下座する事になるだろう。

「まいったねえ、こりゃ」

爆発で穴だらけの地面、光の粒と化して消える死屍累々、遠巻きにこちらを窺うプレ

イヤー達。

元々、今回のイベントでは上位を狙う気など毛頭なかった——スキルとアイテムを組み合わせる戦法の利点や改善点の発見、ついでに一般的な対人戦がどのようなものなのか一度経験するためのお試し感覚であり、得られる名誉にも限定品にも正直さほど興味はない。

イベント終了まで残り十五分かそこら。

上位三名の中にメイプルが入っている事をアナウンスで聞いた時は驚いたが、ゲームで初めての友人が頑張っているのはちよつと誇らしい気持ちになる。

大量に持ち込んでいたイズ印の七星爆弾も数個を残すのみで、そろそろメイプルの戦いぶりでも見に行こうかなあ、などと考えるヨメカワイイ。

その油断がいけなかったのか。

「爆炎」!!」

因果応報とばかりに、横からの爆風に飲み込まれた。

どうやら威力よりもノックバック効果が優先された魔法らしく、「施しの報酬」で全快した上に最大値も大幅上昇しているヨメカワイイのHPを削り切るまでには至らない。

数メートルほど吹き飛び、受け身を取って立ち上がる。

アフロやレザークートをぶすぶすと燻らせながら、火魔法を放った人物を見ると、

「……私のギルドの者が随分と世話になったようだな。この礼は高くつくぞ、怪人」

「ミイ様！」

「ミイ様が来てくれた！」

赤い髪と赤いマントが印象的な、魔法使いと思しき女性だった。

歓声を上げた数名のプレイヤーがこのミイとやらのギルドのメンバーなのだろうか

——なるほど道理で同じようなデザインの衣装がちらほらと目に入る訳だ。

それにしても、怪人とは。

文句の一つも言ってるかと思つたが、見上げるような背丈で黒一色で顔面包帯で、おまけにアフロで今はあちこち焦げている風貌は確かに怪人そのもので反論の余地はなかった。

「【炎槍】!!」

ヨメカワイイ目掛けて一直線に飛んで来る、槍を形取った炎の塊。

「ちっ」

七星爆弾をそのまま投擲し、誘爆させる。

通常のスキルや魔法と異なり、ヨメカワイイの攻撃はダメージを与えるためにまず【装填】の過程を必要とする。他のプレイヤーと比較して一連の攻撃動作の完了までに踏まなければならない段階が一つ増えてしまうので、どうしても正面からの撃ち合いだ

と迎撃が遅れがちになるのだ。

「【爆炎】!! 【炎帝】!!」

再びのノックバック魔法で体勢を崩されてからの、一メートルサイズの火球の追撃。いくらHPには自信があるとは言っても、【鋭敏化】のデメリットと合わせて痛いものは痛いし熱いものは熱い。

そして何よりも、相手が女性プレイヤーである以上、正体が嫁である可能性を捨て切れないためヨメカワイイから攻撃は出来ない。

「どうした、防戦一方ではないか!! 【炎槍】!!」

「ぐっ……!」

両腕を交差させて炎の槍を防ぎ、相手がMPポーションを使ったタイミングで矢を番える。

「【装填】【ヒール】——【アローレイン】!」

真上に撃ち放った矢が、一帯のプレイヤーを分け隔てなく癒す雨となって降り注ぐ。

回復した人数分だけヨメカワイイのHPとMPも増強し続け、その最大値は5000という前人未到の域に到達しようとしていた。

ひたすら炎と戯れる時間が続く。

「……まだ倒れないのか」

何本目かのMPポーションを空にして、ミイが恐れ半分呆れ半分に分言う。

ミイを応援していたギルドメンバー達も、どれだけ吹き飛ばされても起き上がるヨメカワイイの異様さに気圧されて言葉を失ってしまったているようだった。

「……そろそろ止めないか？ 俺に構うより別の奴を相手にした方がポイント稼げるだろ？」

「ふん、命乞いのつもりか!？」

この戦いが不毛だとミイも気付いているはず。

MPポーションを浪費してヨメカワイイを倒したとしても、加算されるポイントは与ダメージを含めても二、三人分だろう。

高威力の魔法をあれだけ撃てるなら、他の一般プレイヤーを大勢相手にした方が圧倒的に効率が良いに決まっている。

「私は『炎帝ノ国』のミイ！ ギルドと私の名に懸けて、立ち塞がる敵は焼き尽——」

「終了！ 結果、一位から三位の順位変動はありませんでした！ それでは表彰式に移ります！」

「……………」

「……………」

「言わんこつちやない。」



「あ、おかえりー」

メイプルが盛大に嘯んだ表彰式も終わり、アイテム補充や護衛の依頼も兼ねたイズとの世間話もそこそこにログアウトすると、愛妻と何か焦げているような臭いに出迎えられた。

エプロンとフライ返し装備で満面の笑みの嫁に、猛烈に嫌な予感がする。

「料理、したのか？ 台所に立つたってお義母さんからも言われてたろ」

「だいじよぶだいじよぶ子供じゃないんだから。これでも炎の扱いは得意なんだよ？」

その自信は一体何を根拠にしているのか。

もうちよつとで出来るから、とコンロの前でガツチャンガツチャン異音を奏でる嫁。

「そう言えば、旦那様はイベントどうだったの？」

「ん？ あー……倒したり吹き飛ばされたり？ 初心者ならあんなもんだろ」

「ふーん？ あ、そうだ聞いてよ旦那様！」

「フライ返しを振り回さない」

今日の夕飯は嫁特製の炒飯（自称）だった。

イカスミでも使ったのかと思えるくらいに真つ黒焦げである事さえ除けば、誰の助けも借りずに炒飯を作れるようになり、火災報知機が鳴らなかつただけでも大進歩だ。

せめてもの救いであるインスタントの中華スープを一口啜り、スプーンが刺さらない暗黒炒飯をどう攻略しようか考えつつ、嫁にさっきの話の続きを尋ねる。

「で？ そっちはイベントで何かあったのか？」

「そうそうそれそれ！」

興奮冷めやらぬ様子で、今度はスプーンを振り回す嫁。

「私の方はね、黒い装備を着た変なのに仲間が大勢やられちゃって大変だったんだから！ 何なのあれ、どうして私の最強魔法を食らっても平然としてられるのよもうう……」

こちらは今から最凶魔法を食らわなければならぬのだが。

それはともかく、上級プレイヤーの嫁の攻撃を受けても平気でいられそうな黒い装備の変なのと言えば、謎の大盾と状態異常魔法で猛威を振るったメイプルくらいしか思い

つかない——同じ黒い装備でも、上位十名にも入れなかった自分でない事は確かだろう。

運営が編集したダイジェスト映像をイズの店で見せてもらったが、何をどうすればV
IT極振りでああも一方的な殲滅が出来るようになるのやら。

フレンド登録している事は黙っておこう。

「まあ、次のイベントの時にでもリベンジすれば良いだろ」

「うん、もつと強い魔法とスキル覚えなきゃ。さ、炒飯食べよ？ 今日のは自信作なので
す」

「……………おう」

魔法よりもスキルよりも。

まずは料理を覚えるべきでは、とは言えなかった。



第一回イベント最終順位

第四位：ミイ

第十一位（ランキング外）：ヨメカワイイ

011. 世間は狭く、地底湖は広く

当然と言えば当然ながら、掲示板で『怪人』の通称が広まりつつあるヨメカワイイにも、現実で嫁を養うために職務に従事する必要がある。

家庭を持つと世界が変わって見えるらしいが、勤続十二年目を迎えた身としてはそれほど変化があるようには思えない。強いて挙げるなら、帰りにスーパーで買う食材の量が一人分から二人分が増えたくらいだ。

終礼のチャイムが鳴り、授業から解放されて騒がしくなる教え子達に言う。

「今日出した課題は必ずやるように。もし期日までに持つて来なかつたら……まあ良いか。期末を問答無用で赤点にするだけだし」

「「今さらつと怖い事言わなかつた!?!」」

「嫌なら忘れずにやるこつたな」

ブーイングを聞き流し、教卓の上を片付ける。

部活に急いだり、買い食いの相談をしたり——それぞれが放課後を満喫する中、二人の女生徒が机を挟んで楽しんでそうに談笑しているのが見えた。

「じゃあ理沙、今夜八時にね!」

「分かってるって！ うー、夜が待ち遠しくて仕方がないよ！」

「……だったらそれまで勉強して時間を潰せ、阿呆」

「あたっ!？」

こちらに背を向けるポニーテールの少女の頭を、丸めたテキストでぽこりと叩く。

もう一人、短髪で小柄な生徒——本条楓があはは……と苦笑を浮かべるのに対し、

白峯理沙が頭を擦りながら振り返り、口を尖らせて非難する。

「せんせえ、体罰反対！」

「違う。担任からの愛の暴力だ」

「暴力って自分で言っちゃってるじゃないですか！」

もつとも、白峯も本気で体罰を訴えている訳ではない。

担任になった当初こそ、背丈やら眼力やらで露骨に距離を取られたものだが、今では

軽い冗談を言い合える程度には生徒の信頼を得る事に成功していた。

しかしまあ、それはそれ、これはこれ。

「文句があるならまた親御さん呼び出してやろうか？」

「それだけは止めてえ！」

白峯が悲鳴を上げて縋り付く。

このポニーテール娘、勉強は出来るのにやる気に波があるようで、先々週の実力テス

トで結果が芳しくなかったために母親と緊急三者面談をする羽目になってしまったのだ。その後自宅でもどんな家族会議が開かれたのかは知らないが、反応から察するに相当絞られたらしい。

「おねげえしますだお代官様！ ようやつとゲームを解禁してもらったんです！ どうか、どうかおつ母さんに連絡するのだけはご勘弁下せえましー！」

「ええい離さぬか無礼者め。本条、この者をひっ捕らえよ」

「ははっ！ さあこつちに來るのじゃー！」

「お情けを、どうかお情けをー！」

残っていた他の生徒達が、三文芝居を見て笑いながら帰っていく。

本条と白峯も笑って手を振り、運動部の掛け声が届く教室には三人だけとなった。

「白峯、お前が頭が良いのは知ってるんだ。遊ぶなどは言わんがもう少し勉強にも力を入れろ」

「はあい」

「本条も、今の成績から落とさないうよう努力を怠るなよ？ 白峰の二の舞になってみる、

お前にも三者面談が待ってるからな？」

「が、頑張りますお代官様！」

「楓、お代官様はもう良いってば」

教え子の未来の一端を支える者として。

遊びは遊び、勉強は勉強で頑張ってもらいたいものだ。



「さて、今日はどうすつか……」

もうすっかり見慣れたファンタジーの町並みを、一番高い建物の屋根から見下ろして。

連続ログイン日数を更新中のヨメカワイイは相棒の黒弓を矯めつ眇めつしつ、真っ白な予定を何で埋めようか考えていた。

相も変わらず、嫁とは家庭内別居ならぬVR内別プレイ中。

装備も充実して本格的に嫁探しを開始しようにも、大きなギルドに所属している事以外はまるで情報がなく——かと言って女性プレイヤーに手当たり次第に声を掛けたりなどしたら、軟派野郎か本物の不審者の仲間入りだ。

悩んでいても時間の無駄なので、本日は釣りでもして暇を潰そうと決めた。

「よ……つと、【跳躍】」

とーん、と大通りすら跳び越えて、屋根伝いに釣り道具を売っている店へ向かう。

途中、道を行き交う何人かが驚いた様子でヨメカワイイを指差すが、第一回イベント終了後から向けられる好奇と畏怖の視線が格段に多くなつたので、もう気にしない事にした。

自分でこれなのだから、メイプルも含めランキング入りしたプレイヤーは動物園のパンダ並みの扱いをされているんだろな、と他人事のように思う。

最近ようやく使い慣れた【跳躍】のおかげもあつて、道具屋にはすぐ到着し——ヨメカワイイが手を伸ばす前に、シツクなデザイン扉の内側から押し開かれた。

「あつ」

「おやま」

店内から出て来たのは誰であろう、巷で話題沸騰中のメイプルだった。

メイプルは目の前にヌボオツと立つ人影がヨメカワイイだと理解すると、目をキラキラ輝かせて満面の笑みを浮かべる。

「カワイさん！ こんにちは！」

「はいこんにちは。二週間振りくらいか？ 遅くなつたけどイベント三位おめでとう」

「えっへへえ、ありがとうございます！」

照れ臭そうなメイプル。

これで戦闘になると毒の竜を召喚して暴れ回るのだから恐ろしい。

「……えっとメイプル、この人？ は知り合い？」

「うん、初めてログインした時からの友達なんだあ」

陰になっていて見えなかったが、メイプルの後ろにはもう一人、見知らぬ少女が。

懐かしさすら感じる初心者装備。腰に差した短剣以外に武器を所持していない。

メイプルから以前聞いていた、諸事情があつて『New World Online』に

ログイン出来なかつた友人とやらが彼女なのだろう。

「は、初めまして、サリーって言います」

「ヨメカワイイだ。よろしく」

「うわ、すごい名前。だからメイプルがカワイイさんつて呼んでるんですね……」

店の前で立ち話も邪魔になるため、さっさと釣り竿を買つて静かな場所に移動する。

奇しくもメイプルとサリーの目的も釣りであり、地底湖に生息する魚から得られる白

鱗を求めて何日も前から通い詰めているのだそうだ。

ならばと暇潰しも兼ねて協力を申し出たのだが、快諾したメイプルはともかく、サ

リーの表情がほんの少し強張つたのが気になった。

黒の重装備と怪人装備に両脇を固められ、真ん中を歩くサリーが居心地悪そうに言

う。

「……二人と見た目の差があり過ぎて辛いんですけど」

「気にし過ぎだよー。サリーだってもうすぐユニークシリーズが手に入るかも知れないんだし」

「ユニークシリーズ？」

「ちよつ、メイプルその話は……!」

サリーが慌てて親友の口を押さえ、キョロキョロと周囲を警戒する。

町を出てから既に十五分は経つ——聞き耳を立てていそうな者がいない事を確認し、ほつと息を吐いてメイプルの両頬をパン生地のようにこねくり回すサリー。

「もうつ、どうしてそう簡単に言っちゃうかなこの口は! カワイさんもいるのに!」

「らつてー、カワイひゃん手伝ってくれるんひやし、言っておかないと悪いかにやあつて……」

「……ああ、だからさつきサリーは良い顔しなかったのか」

ユニークシリーズは一つのダンジョンに一つだけ。

加えて、サリーはヨメカワイイと今日知り合ったばかりの間柄——未発見のダンジョンがあると教えたら、早い者勝ちのレアアイテムを奪われるかも知れないと考えるのは仕方がない。

メイプルは赤くなった頬のまま、

「大丈夫だよサリー、カワイさんは横取りとかする人じゃないから」

「まあ、メイプルがそこまで言うなら……人じゃなさそうなのも確かだし……」
「それ意味違つてないか？」

誤解が解けたのは何よりだが、モンスター扱いされる偏見は残ったままらしい。

しかし、地底湖のダンジョンとは――

「水中戦だよな、明らかに」

「そうなんですよー。だから釣りはメイプルに任せちゃつて、私は今【水泳】と【潜水】スキルのレベル上げをしてる所なんです」

「でもでも、潜る時にサリィが魚を狩ってくれるから、素材はいっぱい集まつてるんですよー」

「仲良しなんだねえ」

地底湖の入口が見えてきた。

なるほど、確かにダンジョンに続いていても不思議ではない程度には怪しい。今の今まで発見に至らなかつたのは単に探索が甘かつたか、あるいは何らかの条件を満たしていなかったからか。

「どつちにしろ、ユニークシリーズを狙うなら単独でボスに挑まないとな」

「パーティーを組めたとしてもメイプルの【AGI 0】じゃ泳げなくて、ボス部屋まで辿り着く前に溺れ死んじやつてただろうけどね」

「私が戦ったのが毒竜ヒドラで良かったよ……」

青に輝く神秘めいた地底湖に出迎えられ、メイプルとヨメカワイイはインベントリから釣り竿を取り出して湖面に針を投げ込む。

その横でサリーが準備体操を始め、最後に大きく深呼吸。

「じゃあメイプル、ちよつと行つてくる!」

「うん、頑張つてねサリー!」

「カワイイさんも、私がいらないからつてメイプルに変な事しちゃダメだからね!」

「……この中で一番変な事しそうなのはメイプルだと思うが?」

サリーは綺麗なフォームで水面に飛び込むと、そのまま広い湖底へと姿を消した。

現実ならば一、二分程度しか呼吸は止められないが、果たして「潜水」のスキルを持つているとどれだけの時間に潜つていられるのやら。

「さあカワイイさん、私達もどんどん釣りましょう!」

「ウナギとかアナゴとかタコとか釣れないかなー」

「釣れても鱗取れないです!」

012. 地底湖制圧と二層到達

結果から言えば、ダンジョンの先には未踏のボス部屋が存在した。

そこに到るに欠かせない「水泳X」と「潜水X」を取得したサリーは、四十分という制限時間の中で入り組んだ水中トンネルを進み、なおかつボスを討伐しなければならなかった。

一度戻り、呼吸と準備を万全に整え——そうして潜り始めて、既に三十分が経過している。

フレンド欄に死亡通知が届いてないので現在も戦闘の最中なのだろうが、仮に酸素のない完全な水中で戦っているのであれば、残り時間はあと十分もない。

そして、倒せても水が引いて呼吸が出来るという保証もない。

「なのにな、のんびり釣りをしてる俺って何なんだろうな」

メイプルは時間が合わずログアウト済み。

地底湖は時折魚が水面を叩く音以外何も聞こえず、静寂そのもの——紺碧の奥底で少女が懸命に戦っているとはとても思えないほどに平和な光景が続く。

可能であるならボス部屋の前まで迎えに行つてあげたい所だが、この世界には酸素ボ

ンベの類は存在せず、あったとしても今から調達しに行つて間に合うはずもない。そもそも、ボス部屋へ続く迷路のルートはサリーしか知らないのだ。

「……………」

浮きが沈み、釣り竿が激しく暴れ回る。

白い魚の手応えとはまた異なる重々しい振動。

腰を浮かせ、両足で踏ん張り、力任せに釣り竿を振り上げると――

「――げほっ、げほっ！」

後ろ襟に針が引つ掛かったサリーが見事に釣り上げられた。

「よう、おかえり。何時から魚に転職したんだ？」

「そんな訳ないでしょ。早く針外して……」

水揚げされたサリーは、疲弊こそしていたがダメージは受けていないようだった。

始めて一月かそこらで未知のダンジョン、挙句ボスは無傷で攻略するとは――彼女のPSは自分やメイプルなど足元にも及ばないほど鍛え抜かれているのかも知れない。

初心者装備のままのサリーに尋ねる。

「せっかくのユニークシリーズだろ？ 装備しないのか？」

「明日、メイプルと一緒にの時にお披露目しようかなあつて思つて」

「……………そうか」

用済みとなった釣り竿を片付ける。

熟練のゲーマーだとしても、強敵討伐後の達成感に酔った状態となれば話は別だ。

爆弾を【装填】した矢を、完全に気を抜いているサリーに向けた。

「えっ……?」

驚愕と困惑が大半だったその瞳が、状況を理解するにつれて険しいものに変わっていく。

腰の短剣を引き抜き、逆手に構えるサリー。

「サリー……」

「……何ですか?」

「——屈め!!」

驚異的な反射速度でサリーはその場に伏せる。

ヨメカワイイが放った矢が一瞬前までサリーの頭があった場所を通過し、その背後—

—人間など一飲みに来れる巨大な口の中に吸い込まれた。

直後、爆発。

真つ赤な口腔内へ大ダメージを受け、透明な身体で景色に溶け込むトカゲ型モンスターは四肢と尻尾を暴れさせてのたうち回り、やがてピクリとも動かなくなつて光の粒に変わる。

モンスターのデータを確認してサリーが呟く。

「ホロウ、サラマンダー？　こんなモンスター今まで出なかったのに……」

「お前さんがボスに挑み始めたくらいからそっちこっちで数匹単位で湧き出した。どうやら誰かが一度でもボス部屋の扉を開けると出現する仕組みみたいだな。口の中じやないと攻撃ぶち込んでもダメージを受けないらしい。爆弾で一発だからHPはそんなに高くないな」

たまたま「反響」で地底湖周辺を索敵しなければ、ヨメカワイイも餌食になっていた。脈動する心臓と大きく開けた口以外は不可視の魔獣は、何も知らずに釣りに来た者達にとつては最悪の捕食者となる。

「これ、ボス部屋から戻ってきて油断した所を狙うトラップですよ。もしかして、カワイさんがログアウトしないで待っていてくれたのって……」

「まあ、何か面白そうな素材が取れないか調べるついでだけだな。ああそうだ、明日もメイプルと会うならこれ渡しといてくれるか？」

インベントリから白鱗を取り出し、隣に積み上げる。

ホロウサラマンダーを狩っては釣りに戻る——その繰り返しで貯まった副産物だ。

その量を見てサリーは目を丸くする。

「そりゃメイプルも喜ぶだろうけど……良いんですか？」

「俺が持つても換金するくらいしか使い道ないしな」

新たな爆弾の原料になるなら少量でも確保したい所だが、掲示板で調べた限り現状では装備品やアクセサリーの素材にしかならないとあり、装備一式の作成のために大量に必要なメイプルの方が有効活用出来るだろう。

座りっぱなしで痛む——ような気がする腰を叩き、強張った筋肉を解放する。

「メイプルが信頼してる理由が分かった気がします」

「あのお嬢ちゃん他人を簡単に信用し過ぎな気もするがね。さてと、ブツも手に入ってたようだし町に戻るか。ちょいと面倒な帰り道になっちゃったが」

「……そうですね」

外へ続く洞窟に潜む無数の気配——「反響」を使わずとも感じるホロウサラマンダーの群れ。

ヨメカワイイが爆弾の残量を確認し、隣に立つサリーも短剣を構え直す。

ログアウトすれば簡単に町に帰還出来るが、ここまであからさまに喧嘩を売られたら何が何でも突破したくなるのは、世代は違えどゲーマーとしての性なのだ。

「メイプルがいれば毒竜ヒドラで一網打尽なんだろうな」

「洞窟が劇毒で沈んでメイプル以外出られなくなっちゃいますけどね」

「違うない」

不敵な笑みを浮かべ、どちらともなく二人は歩き出す。

天井で、地面で、岩壁で。

ドクン、ドクンと激しく鳴動する心臓を、一つ残らず狩り尽くすために。



三日後。

マップ北端に新実装されたダンジョン——最奥の大扉の前にヨメカワイイはいた。

この向こうで隠棲するボスを倒せば、数週間前の大規模アップデートでスキルやアイテムと共に最大の目玉として追加された第二層に進む事が出来る。

新しい物好きの嫁の性格から考えても、まず間違いなく実装直後に二層を目指したはず。一層で出会う可能性が低くなった以上、自分も新天地に向かわなければならぬ。

「……問題は、俺一人でやれるボスかどうかって事なんだけどな」

掲示板では続々と二層到達の報告が上がっている。

別マップへの門番的なボスのためか苦戦したというプレイヤーは少数だが、その反面、確実性を重視してパーティーを組んで挑んだという意見が大多数だ。

理想を言えば、ヨメカワイイもパーティーを組むべきである——しかし、この世界の

知り合いはメイプルとサリーだけで、マイペースに楽しむ二人をこちらの都合に巻き込むのも気が引ける。

「ま、なるようになるか」

手も足も出なければ、その時はその時である。



ヨメカワイイ

Lv31

HP 930 / 930 ^+530 <

MP 920 / 920 ^+10 <

[STR 5 ^-50 <]

[VIT 15]

[AGI 25 ^+25 <]

[DEX 30 ^+25 <]

[INT 25 ^+10 <]

装備

頭 【不死病の束縛帯：鋭敏化】

体 【人面獣心の皮衣：獣性解放】

右手 【罪悪滔天：狩人の執念】

左手 【罪悪滔天：狩人の執念】

足 【人面獣心の皮衣：獣性解放】

靴 【不死病の束縛帯：鋭敏化】

装飾品 【奇術師の指輪】 【空欄】 【空欄】

スキル

【スプレッドショット】 【フレッシュトスコール】 【ファイアボール】 【ウォーターボール】

【ウインドカッター】 【リフレッシュ】 【ヒール】

【弓の心得Ⅵ】 【火魔法Ⅰ】 【風魔法Ⅰ】 【水魔法Ⅰ】 【光魔法Ⅱ】 【反響】 【施しの報酬】

【毒耐性中】 【麻痺耐性小】 【HP強化小】 【MP強化小】 【装填】 【生命転換^{ライフコンバート}】 【魔弓の極技】

【釣り】



レベルも上がり、攻撃スキルも【スプレッドショット】と【フレッシュトスコール】に

進化して魔法の種類も増やした。シヨップでINT増加の装飾品も購入済み。

当然、万全を期してインベントリのほとんどを爆弾とMP回復アイテムが占めている——道中のモンスターは一撃で倒せる個体ばかりで、あまり消費しなかったのが幸いだった。

「オーブン・セサミっ」と

天井が高く奥行きのある部屋で、一本の大樹がヨメカワイイを出迎える。

背後で大扉が閉まると同時——大樹が音を立ててその形を変え、枝分かれした角に青々しい葉を生い茂らせ、紅玉のような林檎を実らせる巨大な鹿の王が姿を現した。

虎落笛にも似た嘶きが大気を震わせ、展開される緑色の魔法陣。

「【装填】「ファイアボール」——「スプレッドショット」——」

散弾の如く拡散する火矢が、襲い来る巨大な蔓の奔流を焼き尽くす。

不測の事態に備えて【生命転換】ライフコンバートによるHP消費は半分に抑えていたが、矢の速度も射程距離も鹿の王を相手にするには十分だったようだ。

「【装填】『七星爆弾』」

爆弾を【装填】し攻勢に移る。

蔓の隙間を縫って飛ぶ爆弾矢は、しかし鹿に当たる直前に緑の障壁に阻まれ爆発した。その際に角部分が爆発の余波を受けてダメージを負った事を、ヨメカワイイは見逃

さなかった。

「装填」【ウオーターボール】——「フレッシュトスコール！」

水の凶弾を内包した矢の豪雨が角の葉と林檎を撃ち落とす、障壁を失った本体を穿ち貫く。

HPが減少して行動パターンが変化する鹿の王。

風刃が飛び交い、蔓が暴れ狂い、極めつけとばかりに大地が隆起する——【鋭敏化】で紙一重で回避し、時には【ウインドカッター】を【装填】した矢で相殺しつつヨメカワイイは機会を窺う。

そして、その好機は存外早く訪れた。

HPが残り一割となったところで鹿の王の足元に魔法陣が広がり、HPが回復し始めたのだ。

「装填」『七星爆弾』——【魔弓の極技】

一日一回の限定スキルを惜しみなく発動させ、【跳躍X】で一気に距離を詰める。
「フレッシュトスコール！」

広範囲攻撃スキルを一つの的に収束させるとどうなるのか、という好奇心。

結果、数十を超える矢の全てが一点に降り注ぐ事になる。

爆発が爆発を呼び、激痛と灼熱に身悶えする鹿の王——しかしそれだけでは終わらせ

ない。

「【装填】『七星爆弾』——【スプレッドショット】！」

頭上と正面から、防ぐ手立てを失った相手への過剰爆撃。

容赦のない猛襲がHPバーを完全に削り切り、鹿の王は一際高く嘶くとその雄姿を散らした。

「……何だ、思ったほどでもなかったな」

ダンジョンの主の最期を見届け、第二層へ続く魔法陣の出現を確認して。

拍子抜けな感想を零すヨメカワイイだった。

013. メンテナンスと第二回イベント

「うーん……」

ダブルベッドの上で、パジャマの嫁が右に左に行き来する。

ベッド横に座るヨメカワイイの背にぶつかると反転してゴロゴロゴロ、反対側の壁にぶつかってまた反転してゴロゴロゴロ。

神妙な面持ちでスマホの画面と睨めっこして、逆に見辛いんじゃないかと思えるほど端から端へ往復し続ける様子は——職人が麵棒でうどんの生地を伸ばす光景と重なってしまい、思わず笑いが込み上げてくる。

第二回イベントに備えて実施されたメンテナンス、その内容が嫁を唸らせている原因だった。

一部スキルの修正およびモンスターのAI強化、さらには防御貫通スキルの実装と痛覚軽減。

「うーん……」

モンスターが利口になるのも、あからさまなメイプル対策の貫通スキル追加も別に構わない。

嫁が頭を悩ませているのは、テコ入れとも受け取れるスキルの修正についてだ。

どのような修正を受けたのかは対象のスキルを所持するプレイヤーしか分らない。しかし嫁の奇行を見た限りでは、どうやら弱体化の煽りを食らってしまった者の一人であるらしい。

裏を返せば、弱体化を受けるだけの強力なスキルを持っているという事だが。

「うぬーん……」

ベッドから離れる。

「ふにやつ!？」

ストッパーがなくなり、勢い余ってベッドから転げ落ちる嫁。

そうなるとは思わなかった——と言えば嘘になる。

「諦めろって。弱体化されたのはお前のスキルだけじゃないんだから」

「んううっ!」

床に敷かれた絨毯の上で両足をバタバタさせ、不平不満をこれでもかと主張する——その怒りはメンテナンスを行った運営へのものなのか、それとも受け止めようとしなかった夫へなのか。

ちなみにヨメカワイイのスキルは大半が弱体化を免れていた。

パッシブスキルの【狩人の執念】はともかく、【装填】か【施しの報酬】のどちらか、

あるいは両方に回数制限でも設けられるものと覚悟していたが杞憂だったようだ。

アイテム頼りの戦術と軽視されたにせよ何にせよ、これまで通りで問題ないと判断されたのならこちらに文句はない——代わりに「反響」の範囲が半分に縮小されてしまったが。

泳ぎの練習が止まり、何かを期待するような嫁の瞳と、こちらに伸ばされる両腕。

「……愛するお嫁さんが傷心してるんですけどー?」

「その割にはものつすごく元気そうだけどな」

優しく抱き上げてベッドに放ると、今日はもう不貞寝するつもりなのか、愛するお嫁さんは枕に顔を埋めて動かなくなる。

こうなってしまうと今宵はログインして探し回る必要もなくなるので、嫁に薄手の毛布を被せてその隣で横になり——もそもそと右腕に抱き着いてきた嫁の体温を感じながら眠りに就いた。



瞬く間に二週間が過ぎた。

第一層の町並みの特色がファンタジーでは定番の牧歌的な村々とするなら、第二層は

古代文明を彷彿とさせる石造建築が軒を連ねる都市だ。

町を出れば砂漠や荒地、森林が広がり、一層では見られないモンスターが跋扈している。

実装からおよそ一月半——第二回イベント直前ともなると、相応の実力を持ったプレイヤー達の大半が二層の町を拠点として行動しているため、一層に負けず劣らずの賑わいであつた。

特に今日は、町に集まる誰もが興奮と期待の色を隠そうともしない。

「お待たせ致しました！ 第二回イベントの説明を始めます！」

広場が参加者の歓声で満たされる。

「今回のイベントは探索型となります！ 皆さんに探し出してもらうのは、転移先のフィールドに散らばった三百枚の銀のメダルです！ これを十枚集める事で金のメダルに、そして金のメダルはイベント終了後にスキルや装備品に交換出来ます！」

それを聞いてヨメカワイイがまず思い浮かべたのは、銀の天使を五枚、あるいは金の天使一枚で景品と交換出来るチョコ菓子だった。ヨメカワイイはキャラメル派で嫁はイチゴ派である。

二種類のメダルの画像が切り替わり、武器や防具、装飾品の一覧が流れていく——現状の武器で満足しているヨメカワイイにとっては、スロットに空きのある装飾品探しが

中心となる。

「第一回イベントで十位以内に入賞された方には金のメダルを既に一枚贈呈しています！ 倒して奪い取るもよし、我関せずと探索に励むもよしです！」

説明は続く。

現実では同じソファに座る嫁も、この広場の何処かでこれを聞いているのだろうか。

「死亡しても落とすのはメダルだけ！ 装備品は落とさないのご安心を！ メダルを落とすのはプレイヤーに倒された時のみなので、モンスターを恐れずどうぞ探索に励んで下さい！ 死亡後はそれぞれの転移時初期地点にリスポーンします！」

つまり、前回三位だったメイプルも金のメダルを一枚持つていて、それを狙う他プレイヤーから襲われやすくなったという事だが、誰かに倒される光景が全くと言って良いほど想像出来ないのがあの少女の恐ろしいところである。

メイプルと、そしてゲーム熟練者のサリーのパーティーを狙うなど、それこそ毒竜ヒドラの開いた口に頭を突っ込む自殺行為に等しい。

女性プレイヤーには攻撃出来ない——攻撃したくない自縛の有無に関わらず、二人と顔見知りで出会い頭に即戦闘とならないのが幸いだ。

「今回のイベント期間はゲーム内時間で一週間、時間加速を適応させているためゲーム外での時間経過はたったの二時間です！ フィールド内にはモンスターが入れない安

全地帯を数多く用意してありますのでそれを活用して下さい！」

一週間ともなれば、確かに休息は必要か。

初日はほとんどのプレイヤーがフィールドをほじくり返すのに夢中になるだろうが、残り日数が少なくなるほど対人戦が頻発するのは想像に難くない。当てもなく、草の根分けて小さなメダルを探し回るより、自分以外のプレイヤーを見つけて奪取した方が効率的にも楽なのだから。

最後に、一度ログアウトするとイベントに再参加出来ないという注意事項を確認して、いよいよ壮大な宝探しの幕が上がる。

ノルマはひとまず十枚。

「それでは第二回イベント、スタアートツ!!」

第一回イベントと同様に、ヨメカワイイを含めた広場の参加者達が光に包まれた。

一瞬の浮遊感の後に訪れる、地面を踏み締める感触。

「……つと」

ヨメカワイイが立っているのは、新緑のカーペットが広がるなだらかな丘陵地帯だった。

およそ戦闘とは無縁と思える平和そのものの光景——西には噴煙が昇る山岳、南には森林、東は風いだ海と白い砂浜、そして北は低い石垣が散見する草原だ。

顔を上に向けると、空中をのんびり泳ぐ巨大なイトマキエイのようなモンスターが見えた。

「フアンタジーだねえ……」

さて。

メダルを探せと簡単に言うが、この広い世界でまずはどうすれば良いのやら——某勇者よろしく適当な民家に押し入ってタンスを漁り、壺を叩き割れば出てくるのか。立派な犯罪行為である。

丘の上でそよ風を浴びていると、下から何かに向かって来るのが見えた。

それは、艶やかな羽毛で飾った大型の鳥類の群れで——飛ぶのではなく健脚で大地を蹴り、牙が生え揃ったクチバシを開いて人語にも似た鳴き声でこちらを威嚇する。

「あらやだ、熱烈大歓迎?」

爆弾ではなく「フアイアボール」を矢に「装填」する。

これから七日間もこのフィールドに閉じ込められるのだ。念には念を入れてイズお手製の爆弾もポーションも十分な数がインベントリで眠っているが、消耗品の類は節約するに越した事はない。

「晩飯は焼き鳥の盛り合わせだな。ビールがありや申し分なしだ」

好物を思い浮かべ、顔面を覆う包帯の隙間から仄暗い光を目に宿すヨメカワイイ。

数分後——丘陵を支配していたコカトリスは絶滅の憂き目を見る事となる。

014. 『一天四海悪逆無道』

丘陵地帯にて本日の夕飯となるコカトリスの肉——ネギと一緒に竹串に刺さって調理済み——の大量ドロップに満足したヨメカワイイは、東に見える砂浜に向かっていた……いや、跳んでいた。

今のところ現れるのはモンスターばかりで、他のプレイヤーの姿はない。

イベントが始まってまだ一時間も経っていない——こんな見晴らしの良い丘陵ではなく、各々が怪しいと思つた場所を片っ端から調べて回っているのだろう。

「はい到着つと」

空き缶も花火の燃えカスもない砂浜に、制動のための長い直線を両足で引いて、ヨメカワイイはレザーコートの裾に付着した砂粒をぱんぱんと叩き落とす。

本場に【跳躍X】には世話になりつ放しだ。

弱体化されたのが他でもないこのスキルだったとしたら、運営に文句の一つでも言っていたかも知れないほどにはお気に入りとなつている。

宝探しと言えば埋蔵金か沈没船、沈没船と言えば海——で来てはみたものの、よくよく考えれば沈没船が眠る海底まで行くための手段がない。

サリーならば「水泳X」と「潜水X」で水中探索など訳もないだろうが、今からそのレベルまでスキルを上げるとなると、イベント最終日までふやけるまで海水に浸からなければ不可能だ。

「ボートなんて都合の良いものも……ないよなあ」

少し遠くに栈橋らしき影はある。しかし舟が繋いであるようには見えない。

仕方なく、波打ち際に沿って歩を進める——途中、朽ちた流木や紫色のヤシの実などの漂着物に紛れて、大部分が砂に埋もれたメッセージボトルを発見した。

中身は銀のメダルが一枚と、今いる海岸線を示しているらしい古びた地図。

「……どうやら魚の餌にならずに済みそうだな」

地図の上方、北に向かった先の地点に、赤で大きく書き殴られたX印。

そのまま、誰のものとも不明な道案内に従ってしばらく進むと、砂浜を分断するかのように高くそびえる断崖絶壁に行き着いた。

海鳥の巣がいくつもへばり付いた岩壁の下、打ち寄せる波に隠れて分かりにくいのが、人間一人が爪先立ちでようやく乗れるかどうかの極狭の足場がある。

「ここを行ってか。もう道じゃねえだろ……」

地図なしでは間違いなく引き返すか迂回するだろう正規ルートを、濡れた岩肌のわずかな凹凸に手指を掛けて、波飛沫を頭から浴びながら一步一步慎重に足先を乗せてい

く。

もう素直に泳いだ方が楽な気がしてきた。

「これで、待ってるのが『大マヌケ』の落書きだったら、二度と、やらねえからこのゲーム！」

悪路とすら呼べない道を愚痴混じりに攻略し、やがて大滝へ到達した。

轟々と音を立てて、岩壁を浸食しながら落下し続ける大量の水の障壁。流石に、この瀑布を横に突っ切るのは不可能だ——まさかここから上へ登れと言うのか。

思わずフィールドをデザインした運営を呪うが、直後に滝の裏に道が続いている事に気付く。

「……滝に隠された洞窟、ね。定番っちゃ定番だが」

たつぷり海水を吸収して重くなったアフロを絞り、明らかに人の手によつて掘られた隠し洞窟に黒ずくめの長身瘦躯を滑り込ませる。

内部もやはりジツトリとした湿気で満ちているが、波を直接浴びるよりは何倍もマシだ。

奥に進むほど滝の音は小さくなり、代わりに天井からの水滴が奏でるリズムが洞窟に木霊する。

ダンジョンに続くものと思っていた無明の洞窟はそれほどの距離はなく、十分も歩い

たところで終点に到着した——暗闇に慣れた目が陽光に眩むもすぐに治まり、回復した視界に飛び込む光景にヨメカワイイは息を飲んだ。

「こりや、メダル探すのも一苦勞だな」

船の墓場。

広い砂地に、ボロボロの木造帆船が所狭しと打ち捨てられている。

周囲を崖がぐるりと取り囲んでいるのに、一体どうやって流れ着いたのか——あるいは何者かが運び込んだのか、手の込んだ装飾の客船、赤く錆びた砲身が並ぶ軍船、骸骨旗を掲げた海賊船まで分け隔てなく、目に入った獲物を手当たり次第に蒐集したという感じだ。

どの船底にも巨大な穴が開いているのが気になる。

「二日で片付けば良いが……無理だろうなあ」

サクサクと砂を踏み締め、ひとまず一番近くの横倒しになった商船の亡骸に向かう。

マストが半ばからへし折れたこの商船の船底にも、他の船と同様に人間の背丈よりも大きな穴が開いていて、ヨメカワイイはそこから船内部へ潜入しようとした。

しかし商船まで七、八メートルのところまで、不意にその足が止まる。

「まあ、こんだけ船だの海だのアップールしてんだから、そりゃいるわな」

包帯の奥の目が睨む先。

商船の大穴から姿を現したのは、雑巾のように劣化した海賊衣装に身を包むモンスタ―達。

肉や内臓は海の生物に食い尽くされたのか、骨だけの身におびただしい数のフジツボが寄生した醜悪な風貌で、カトラスや斧、フリントロックピストルを手に重い足取りで何体もわらわらと。

加えて最悪な事に、フジツボ海賊が巣にしていたのは目の前の商船だけではなかった。

周りを見れば、ほとんど全ての船の大穴からスケルトンが湧き出ていて、確実にヨメカワイイを標的とした動きで包囲網を狭めてくる。

「……さしてきて、スケルトンに弓はあまり効かないんだったか?」

あの外見では本当にスケルトンなのか寄生型モンスタ―なのかも判別は難しいが、何にせよ、

「茶毘に付しちまえば同じだな」

手前の一体に「ファイヤボール」を「装填」した火矢を撃ち込む。

乾き切った海賊衣装とフジツボを焼き尽くし、偽の肉の支えを失った骨格が砂の上にカラカラと崩れ落ちる——それが開戦の合図となった。

「装填」【ウインドカッター】——【スプレッドショット】

風の刃を纏う無数の矢が放射状に広がり、海賊スケルトン——正式名パラサイト・バーナクルの集団を微塵に切り裂いて光の粒子に変えていく。

当然ながら、敵性モンスターである以上パラサイト・バーナクル達もただ黙って狩られるために徒党を組んでいる訳ではない。

振るわれるカトラス、飛来する斧、火を吹くフリントロックピストル。

それまでの緩慢な歩みが嘘のように砂地を駆け、同族を巻き込む事も躊躇わない斬撃と銃撃。

「あー！ たたく鬱陶しい!!」【装填】『七星爆弾』——【フレッシュトスコール】!!」
爆弾矢の驟雨が空中で連鎖的に炸裂し、爆炎と衝撃波が凶器を砂ごと吹き飛ばす——
しぶとくも生き残った弾丸がヨメカワイイの身体に吸い込まれるが、HPバーを二割ほど削るに留まった。

メイプルならば圧倒的なVITで痛痒すら感じないだろう。しかし生憎とこちらは防御に関して是一般プレイヤーの域を出ない。さらに言うなら、被ダメージ五割増のデメリットでHPの消費量は他よりも格段に多いはずだ。

「【跳躍】！」

船先の女神像が特徴的な海賊船の甲板まで飛び退き、敵を見下ろせる高所に陣取る。そこからは物量と物量のぶつかり合いだ。

さながらゾンビ映画のように、ヨメカワイイが立つ海賊船へ押し寄せるモンスター達。

ヨメカワイイの範囲攻撃が紙一重で勝るのか、火炎と爆破、風刃と水弾により無限とも思われた。パラサイト・バーナクル達の数々が徐々に減っていく。

戦闘開始時と比べて三分の一程度まで亡者の数が減らされた時——背後にある船室の扉を砲弾で撃ち破ってその敵は現れた。

振り返り、問う。

「……………お前がここのボスって事で良いんだよね？」

ならず者達を束ねる証である黒い三角帽子を被った髭面の巨体。右手には鎖が絡み付いた鋼鉄の舵輪を握り、撃ったばかりで硝煙を吐く大砲を左脇に抱えている。

船長は一対一がご所望なのか、手下達も顔を上に向けたままじっと動かない——どうやら決闘の行く末を見届けるつもりらしい。

「……………」

鉄製舵輪の鎖を掴み、頭上で振り回す船長。

先ほど受けた銃弾など、豆鉄砲も同然——あんなモーニングスターの一撃をまともに食らったらどうなるか考えるまでもないし考えたくもない。メイプルじゃなくとも痛いのは嫌なのだ。

勝負は一瞬。

ピンと張り詰めた空気の中、

「――【装填】『七星爆弾』！」

最初に動いたのはヨメカワイイだった。

矢を番えながら甲板を蹴り、およそ十五メートルの距離を一気に詰めようとする。

それに応えるかのように、船長はあらん限りの力をもつて鉄製舵輪を投げ放つ――唸りを上げて迫り来る重撃を身を振って回避し、照準を合わせて必殺の一矢を放つヨメカワイイ。

狙ったのは、今まさにこちらへ向けて砲弾を吐き出そうとしていた左の大砲の、その砲口。

イズお手製爆弾の元々の威力が高かった事もあり、内部の火薬にまで誘爆して砲身は跡形もなく破裂し、船長の上半身が綺麗に吹き飛んだ。

残った下半身が膝から崩れ落ち、ゼロになったHPゲージと共に碎け散るのを確認して。

「……ふいー」

ヨメカワイイは長く息を吐き、肩の力を抜く。

甲板の何処かに宝箱でも出現していないかと、視線を巡らせたのも束の間。

「つ!? おつと……!?」

ズシン、と。

海賊船全体が大きく一度揺れた。

揺れは瞬く間に振動と化して激しさを増し、とても立つてはいられなくなる——同時に、周囲の景色が下に沈み始めている事に気付いた。

いや、違う。

ヨメカワイイの乗る海賊船の方が上昇しているのだ。

「おいおい、カリブの海賊の次は何のアトラクションだ!?!」

慌てて船の縁から下を覗き込むと、甲殻類のものと思しき特大サイズの——人間と比較するのも馬鹿馬鹿しくなるほどに巨大な脚と鋏が砂中から生え、頭目を失ったパラサイト・バーナクル達を羽虫でも払うように蹴散らしているのが見えた。

船長はボスではなかった。

この甲殻の持ち主こそが、このエリアの本当のボス。

「道理で簡単に倒せた訳だよコンチクショウ!」

海賊船から飛び降り、巨大甲殻類の全貌を視界に収める。

左右非対称の一对の鋏と二対の脚を不気味に蠢かせ、青と緑のマーブル模様の甲殻をギチギチと不快に軋り鳴らす——感情の窺えない黒い目でヨメカワイイを見つめ返す

のは、海賊船そのものを堅固な鎧として着込むヤドカリだった。思わず目頭を揉む。

「……なるほど？ つまりここはクローゼットで、俺は服を食いに入り込んだ虫って事か」

驚きを通り越して呆れてしまう。

船底に穴を開けられて大量に放置された船の残骸は、この怪物の『衣服』だったのだ。振り下ろされる解体重機のような右の巨鋏。大量の砂塵が巻き上げられ、エリア一帯が白一色に塗り潰される。

「〔反響〕!!」

弱体化メンテナンスで探知範囲が半分にされたとは言え、それでも視界が塞がれたこの状況では何よりも頼りになるスキルである事に違いはない。

その超音波レーダーがこちらに突っ込む巨体を感じ。

数瞬遅れて、細かい刃がびっしり生えた鋏が砂煙を破って左右から襲い来る。

「〔ファイアボール〕!」

右の鋏に火球をぶつけるも、甲殻に多少の焦げ目を付けただけで勢いは全く衰えない。かろうじて身体を両断される事は免れたが、右を回避した間隙を狙って左の鋏が追撃

し、刃先に肩を挟られHPをこっそり持っていかれた。

「装甲はメイプル並みか!?」「ヒール!」

バックステップで距離を取り、回復魔法を使用する。

この孤立無援の状態では「施しの報酬」も意味を成さず、今のヨメカワイイはちよつとHP量と爆破に自信があるだけの一人のプレイヤーに過ぎない。

しかし、どれだけ巨大だろうとヤドカりはヤドカリ。

傷一つ付けられない甲殻でも関節部までは覆い隠せないし、何より弱点があるからこそ海賊船を鎧代わりになっているのだ——敗北前提イベントでもない限り、完全無欠のボスなど存在しない。

「その自慢の宿ひん剥いてやる!!」「装填」「七星爆弾!!」

ヤドカリ本体ではなく海賊船に爆撃を浴びせ掛ける。

甲殻と違つて常識的な強度なのか、ダメージエフェクトと共に飛び散る大小の木片。

お気に入りの服を台無しにされたヤドカりは鍔を掲げてヨメカワイイを威嚇し、憤怒に呼応して船体の両舷から砲身が突き出した。

その数、左右合わせて四十以上。

ヤドカリは歩脚を動かして超信地旋回すると、片側二十門の砲口をヨメカワイイに向ける。

「戦車かよ……」

一斉射撃の爆音が響き渡った。

放物線を描いて飛来する砲弾が船の残骸を砕き、砂地にクレーターを作り出す。

弾切れにはならない仕様になっているのか、次弾発射まで一定の間隔こそあるものの、嵐の如き砲撃が止む気配は一向にない。

圧倒的な火力にお株を奪われ、まるで自分自身を戦っているような錯覚に笑うヨメカワイイ。

「上等だ。どつちが猿真似なのかはつきりさせようか？」

そこから先は、陸地での大海戦の様相を呈した。

「【スプレッドショット】！」

互いの息の根を止めるため砲弾と爆弾矢が飛び交い、その余波で、荒れ果てていたはずの地形がさらなる地獄絵図へと変えられていく。

砂海に完全に埋没していた他の船体まで爆風によつて掘り起こされ、吹き飛ばされた生き残りのパラサイト・バーナクル達が岩壁にぶち当たって粉々になる。

「【フレシエツトスコール】！」

降り注ぐ爆撃の流星雨。

対して回転速度を格段に上げ、鋏を振り回しながら四方八方に砲撃を見舞うヤドカ

り。

他のプレイヤーにとって何より幸運だったのは、動く爆心地と化した一人と一匹がこの砂地から出られなかった事だ——隔離壁のように取り囲む断崖がなければ、戦闘は激化の一途を辿りながら誰彼構わず巻き込んでフィールドを蹂躪しただろう。

【装填】『七星爆弾』——【魔弓の極技】

商船の舳先に立ったヨメカワイイが弓を構える。

真正面に見えるのは、旋回砲撃を続ける限り、何時かは必ずこちらに振り向かなければならないヤドカリの頭部。

「……【スプレッドショット】！」

完全必中の極限技で一点に集中された拡散矢の全てが、ヤドカリの口内に吸い込まれた。

一瞬の沈黙の後、くぐもった爆発音。

弱点の一つであった口から体内をズタズタに破壊された巨大甲殻類は全身を痙攣させ、三割近く残っていたHPゲージを全て失って、鎧の海賊船ごとさらさらと崩れ去った。

それこそ、砂のように。

「やれやれ……初日からこれだ。爆弾も使っちゃまったし最終日まで無事でいられるのか

ね俺は」

ヤドカリがいた場所に出現した宝箱と転移魔法陣。

宝箱の中身は奮闘の甲斐もあつてメダルが二枚と――

「何だこりや。船の、錨……？」

鈍色に輝くその錨を手に取り、性能を確認する。



『一天四海悪逆無道』

【STR+?】【破壊耐性】

スキル【命を振るう者】



驚いた事に、身の丈ほどのそれは『弓』にカテゴライズされる武器だった。

中心からはシャンクと呼ばれる錨柄が伸びているが、三日月を描く形状と、その両端の爪の間に張られたワイヤーで、自分は弓であると主張している。柄の先で大笑いする

かのように口を開けた髑髏がアクセントと言えばアクセントか。装備してみると、髑髏の口から伸びた鎖が右手に巻き付いた。



【命を振るう者】

このスキルを持つ武器のSTR補正值は、装備したプレイヤーの残りHPと同じ値になる。

上限は【STR+300】



スキルを確認し終わると同時に。

あちこちで砂が大きく盛り上がり、見飽きたばかりの鉄が次々に生えてくる。

死闘を繰り広げたヤドカリと比較すると、どの個体も一回り小さい——それでも巨体である事には変わりはなく、それが十体、二十体ともなれば、すぐにでも転移魔法陣に飛び込まなければ彼らの糧になるのは目に見えていた。

だが、ヨメカワイイは魔法陣に背を向けた。
その理由は。

「……試し斬りには丁度良いな。いや、試し撃ちか?」

新装備『一天四海悪逆無道』の柄を右肩に載せ、弓弦代わりのワイヤーを引く。
ロケットランチャーさながらの構え方。

となれば、飛ばすのも普通の矢ではなく――

「Rock, n, Roller!!」

声高らかにワイヤーを弾く。

弓の前方、伸ばした左手のすぐ先の空間が歪み、大砲と同等の威力で砲弾が撃ち出される。

極小ワームホールから放たれた砲撃は、破壊不可能とさえ思えたヤドカリの甲殻をいとも容易く粉微塵にし、致命的なダメージを与えて光の粒へ強制昇華させた。

HPを減少させる事で矢の速度と飛距離が増す黒弓『罪惡滔天』と対を成す、自身の命の残量を破壊力に変える錨弓。

「はっ、こいつは爽快だな」

錨柄を両手で握り、ヤドカりに肉薄する。

通常の弓と一線を画すもう一つの特徴は近接戦闘、打撃武器として使える点にある――

―接近戦の脆さとアイテム大量消費の問題を一度に解決する、今のヨメカワイイにはうってつけの特異武装。

客船を纏ったヤドカリの鉄に、鋼鉄の爪が深く深く突き刺さる。

「いいいいいやああああああつ!!!」

気合一閃。

獲物に刺さったままの『一天四海悪逆無道』を、ハンマー投げの要領で振り回し、その円運動に引つ張られたヤドカリが他の個体に衝突、次々に同士討ちとなる。

柄頭の髑髏の口からじやらじやらと鉄鎖が伸び、攻撃範囲が格段に広がった暴虐の竜巻によって薙ぎ払われる甲殻類達。

だがそれだけでは終わらない。

「【フレッシュトスコール】！」

ヤドカリの群れが最期に見る事となったのは、上空から数多降り注ぐ砲弾だった。

船体も甲殻も関係なく破壊し尽くし、鎖を鳴らしてヨメカワイイは錨弓を肩に担ぐ。

こうしてただ一人、長身瘦躯の黒い人影だけを残して、白い砂地は船の亡骸が眠る墓場としての静寂をようやく取り戻したのだった。

015. イベント二日目・刀錨乱舞

「やーだー！ 旦那様と一週間も離れ離れなんてやーだー！」

「やーだー言われても、俺が決めた訳じゃないしいいいいい」

これでもかと嫁が駄々をこねる。

第二回イベントの内容が運営管理の掲示板で告示されてからずっとこの調子だ。

虎柄の猫のぬいぐるみにヘッドロックを極めながら、職場から持ち帰った答案用紙の採点をするヨメカワイイに取り付いて前へ後ろへガツクンガツクン揺さ振る——手元が狂うので止めなさいと言いたいが、このアグレッシブな愛情表現を拒むともっと不貞腐れるのでされるがまだ。

85点の『8』を書き損なった白峰理沙の答案を採点済みの箱に入れて、身体ごと嫁に向き直る。

「一週間たったってゲーム内の体感時間の話で、現実リアルじゃ二時間しか経過しないんだろ？

そんなの遊んでればあつと言う間でしようが」

「ふー……」

イベントには参加したい。しかし一週間も会えないのは嫌。

そんな余所様にとって知った事ではない葛藤に苦悩する嫁——修学旅行の引率業務で家を空ける必要があつた時も『一緒に行くう!』の一点張りで、準備済みのヨメカワイイの荷物を人質にして押し入れに籠城を決め込んだくらいなのだ。出発当日の朝には荷物を返してはくれたが。

「たかがゲームでこの調子じゃ、もし俺が入院とかしたらどうすんだよ……」

「ずっと一緒にいる」

「面会時間が終わったら?」

「忍び込む!」

むふー、と息巻く愛しい奥さん。

人見知りなのに、変に行動力があるから恐ろしい——ダンボールに入って病院に潜入する光景が妙にリアルに想像出来てしまうのだが、警察の厄介にならない事を切に願う。

一昨日もコンビニ帰りに相合傘で歩いていたら、赴任したばかりで事情を知らない新米警察官に職務質問されたばかりなのだから。あれは帰り道にそういうホテルが建っているのが悪いと思う。

「あ……でも入院するのは旦那様より私が先かも」

「………身体の調子でも悪いのか?」

「そうじゃなくて、その、あによ……あ、赤ちゃん、産んじやう時とか、ね……？」
「……………」

きやー言っちゃった言っちゃった、と紅潮した顔を両手で隠して照れる嫁。

二十歳にもならない新妻に『そろそろ家族を増やしませんか？』と言外に誘われた時、夫として社会人として一教師として、どう応えるのが正しい選択なのだろうか。

思わず仕事道具が広がったままのローテーブルを見やるが、本条楓の答案用紙にヨメカワイイが今求める解答が記されているはずもなかった。



「んが……？」

新緑の間から差し込む陽光で目が覚めた。

身を起こそうとするが、腹部に何重にも巻かれたそれを許さない。

「……………ああ、そうか……………」

何故そんな事になっているのか思い出す。

寝床代わりにした太い木の枝から転がり落ちないように、錨弓の鎖で身体を固定してから仮眠を取ったのだ——時刻を確認すると十五時間も惰眠を貪っていたらしい。仮

眠どころではなかった。

鎖を解いて枝から降り、硬いベッドで凝り固まった身体を伸ばす。

砂地の魔法陣から転移した先は、季節に関係なく多種多様な色彩が咲き乱れる花畑。その中心にぽつんと一本だけ立つ大樹の周囲がプレイヤーにとつての安全地帯であるらしく、花々を飛び回る昆虫型モンスター達も近寄ろうとはしない。

「さーて、今日はどうすつかなっつと」

錨弓を肩に担ぎ、今後の行動を考える。

半日以上寝たおかげで昨日の激闘の疲労はない。とは言え、二日続けて大型モンスターと戯れる羽目に陥るのは避けたいところ。

現在、銀のメダルの所持数はメッセージボトルとヤドカリ討伐で得た計三枚のみ。残り五日半で七枚も見つけ出すとなると、あまり悠長に構えていられないのも事実——本格的に対人戦も視野に入れなければならないだろう。

「ここを探索するか、それとも別の場所に移動するか……」

初日の丘陵地帯も広大だったが、この花畑はさらに規模が大きい。赤から黄、白に紫、青と橙のコントラストが波のように、あるいは視覚に訴える暴力のように続く途方もない巨大絵画。

探索するにしても見えるのは一面の花ばかりで怪しい建物の類はなく、逆に言えば、

調べるべきオブジェクトが千紫万紅では収まらない範囲で敷き詰められている。

例えば花卉の中にあるメダルを一輪一輪、目を皿にしてくまなく調べるとなれば、両手の指では足りない日数が必要——過ぎたるは及ばざるが如し、押し潰されそうな美しさに辟易する。

それこそ、メダルの表裏に進退を委ねようか悩む程度には。

しかし探索よりも何よりも先に、どうやら寝起きの軽い運動をしなければならぬようだ。

花を極力踏まないように気を遣った足取りで、何者かがこちらにやって来るのが見えた。

「……メイプルよりは幸運と考えるべきか、何にせよ悪い予感とは当たるものだな」

「この状況で『会いたくない相手』と認識されている事を誇った方が良いのか?」

長い黒髪、桜色の和服に紫の袴。

腰に一振りの刀を帯びた、凜とした佇まいの女剣士。

「名乗りはいるか、前回六位のカスミさん?」

「いや、必要ない。第一回イベントの映像は私も目を通してある。得物は違って黒い装備に顔や手足の包帯、見上げるほどの背丈と鳥の巣のような頭髪——前回十一位の……ヨメカワイイ」

多少の照れを残しつつも、カスミは律儀に名前を略さず呼んでくれた。

ヨメカワイイが弾こうとした右手のメダルに視線を注ぎ、彼女は静かに刀の鯉口を切る。

「……問答無用か」

「その手に握る物を見てしまつては、このまま黙つて通り過ぎる訳にもいくまい。それに私が背を向けたところで、そちらが見逃してくれる保証などないだろう？」

「女を後ろから撃つ趣味なんてないんだがなあ」

メダルを親指で高く弾く。

くるくる回転しながらメダルは緩やかな弧を描いてヨメカワイイのアフロを越え――背後にある大樹の根に当たり、キンツ、と音を立てると同時に。

「【超加速】！」

「【反響】！」

鋼と鋼が激突した。

目にも止まらぬ速度で距離を詰め、横薙ぎに振るわれるカスミの白刃を、縦に構えた錨弓の柄で受け止めるヨメカワイイ。

防がれるとは思つていなかったのか、カスミの顔に驚愕の色が浮かぶ。

「まさか、初手で見切るとは……」

「少し焦ったけどな。音速より遅いならどうか捕捉は出来るさ」

「なるほど、流石に一筋縄ではないかな。だが！」

カスミの姿が再び見えなくなり、高速移動する彼女を追って花卉がそこかしこで飛び散る。

どうやら【超加速】は一瞬の速度向上ではなく、持続的なAGI強化の効果があるらしい。しかし任意発動のアクティブスキルならば制限時間があるはず。

おそらくは一分くらいだろうと当たりをつけ鎧弓を構え直す——花卉の散る音が、何時の間にか止んでいた。

「【七ノ太刀・破砕】！」

花畑から大樹に飛び移っていたカスミが枝葉を破ってヨメカワイイの頭上に現れ、氣迫を纏った大上段の振り下ろしを放つ。

それを読んでいたヨメカワイイも鎧弓の柄で刃を滑らせて受け流すが、【超加速】が切れる前に勝負を着けるつもりなのか、カスミの猛攻はさらに鋭さを増していく。

さて、どうしたものか。

嫁ではないという確証を得られないまま、ヨメカワイイは鎧弓を振るう。



「【四ノ太刀・旋風】！ 【六ノ太刀・焰】！」

上下四閃の連撃に、炎を宿した刃の一閃。

スキル【刀術】に内包された剣技を矢継ぎ早に発動させながら、カスミは内心焦っていた。

金のメダルを狙われながらもイベント初日を特に問題なく生き抜き、ペインやメイプルといった自分よりも上位ランクのプレイヤーに遭遇する事もなく二日目を迎えたまでは良かった。

だが、小休止のつもりで立ち寄った大樹——その下でぼったり出くわした十一位の怪人にこうも苦戦を強いられるとは。

「これも防がれるか。ならば【二ノ太刀・陽炎】！」

相手の眼前まで瞬時に移動して切り伏せる——並大抵の相手ならこれだけで一撃とはいかずとも相当のダメージを受けるはずなのに、長身瘦躯の怪人は傷を負うどころか、巨大な鎧を巧みに操りその長柄で、あるいは柄頭から伸びた鎖で全ての斬撃をいとも容易く防いでしまう。

掲示板ではもっぱら『カワイ』の通称で呼ばれる弓、いや爆撃使い。

第一回イベントのダイジェスト映像を見て、てつきり接近戦は不得手だと思っていた

のに。

距離を取るための牽制さえもカスミにとつては致命傷になりかねない重量感があり、銀のメダル一枚のために勝負を挑んでしまった事を後悔するには十分な強敵だった。

「つと、危ない危ない。気を抜くとバツサリいかれそうだな」

「……どの口が言うのやら」

突けば槍、薙げば大鎌、下ろせば戦斧、振るえば鉄鞭。

最初に見た時はイロモノ武器としか思えなかつた鉄の塊が、近接戦闘には自信があつたカスミを完封に近い形で追い詰めている——【超加速】の補正効果も切れてしまい、速度で翻弄する戦法も不可能となつてしまつていた。

何より、自分はここまで手の内を明らかにしているのに、相手は一合目の【反響】以外スキルを使つた様子がない。その事実がカスミの焦躁を加速させる。

何が『メイプルよりは幸運だった』だ。

相手はまだ、弓を弓としてすら使っていないと言うのに。

「っ！ 【十ノ太刀・金剛】！」

風を切つて縦横無尽に暴れ狂う鎖鞭を弾き、愛刀を正眼に構えたまま調息——どうにか気持ち落ち着かせるものの、肝心の起死回生の一手は思い浮かばない。

互いに無傷、しかし技量の差は絶望的。

逆に諦めもついて金のメダルなどくれてやっても良いとすら思えるが、六位の意地としてせめて一太刀だけでも届かせたい。

あくまで防御に徹する怪人に言う。

「次の攻撃で最後だ。この技が貴方に通用しなかったその時は……私の負けで構わない。煮るなり焼くなり好きにしてくれ」

「良いのか？ こっちは所詮付け焼刃だ。攻め続ければそっちが勝つかも知れないぜ？」

「貴方が気にする必要はない。實力を見誤った挙句、嘗めてかかってしまった私なりのけじめでもあるからな——いざ、参る!!」

黒髪を純白に染め上げ、瞳は黒から緋色へ。

桜色の煙霞のエフェクトを全身に漂わせながらカスミは放つ。

今の自分が有する最強の技を、全身全霊の剣を。

「【終ワリノ太刀・朧月】！」

その名の通り、刀身が朧の如く曖昧になるほどの神速の斬撃、それが合わせて十二回。目で見てから反応する事など不可能な連撃のそのほとんど全てを、ヨメカワイイは錨弓の長柄と鎖でもって見事に防いでみせた——そう、ほとんど全てを、だ。

「ぐっ!？」

十一度目の刃が、ヨメカワイイの手から鎧弓を弾き飛ばす。

必殺はあと一撃だけ残っている。

もらった、とカスミが勝利を確信し、逆袈裟に振り抜いた最後の一刀は——しかし上体を後ろに大きく反らして紙一重で躲し、冷静に黒弓に持ち替えた怪人を斬り裂く事はなかった。

自分の桜色のオーラが消えるのを視界の端に捉えながら、こちらに狙いを定める怪人を見る。

「……………完敗だな」

包帯の隙間から覗く、仄暗い光を湛えた眼。

不安定な体勢から放たれた一矢が、カスミの額を正確に撃ち貫いた。



「……………面倒を掛けてしまったな。申し訳ない」

「いやいや面倒だなんて。こっちも良い経験になったよ」

納刀してペコリと頭を下げるカスミ。その身体にダメージはない。

それはそうだろう——ヨメカワイイが最後に一度だけ撃った矢に【装填】されていた

のは爆弾や攻撃魔法ではなく「ヒール」なのだから。

アンデットであれば苦痛に感じるかも知れないが、どう見てもカスミは人間である。「私の全身全霊を出し切つてそれでも手も足も出なかつた。本当ならこの金のメダルも勝者である貴方が持つべき物なのだが……」

「本気で奪うつもりならとつくにそうしてる。俺にとつてはメダルよりお前さんと戦えた事の方が有益だつた。だからそれは受け取れない」

「……そうか」

接近戦において、自分の腕がどこまで通用するのかわかる必要があつた。

そういう意味ではカスミとの邂逅は渡りに船。そして結果は申し分ないものだつた。六位相手にあれだけ持ち堪えられるなら、少なくともその辺の雑魚モンスターには苦戦しないだろう。

今後の課題としては近接攻撃スキルの取得と、黒弓『罪悪滔天』と鎗弓『一天四海悪逆無道』を状況に応じて素早く持ち替えられるようにする事か。

戦闘で滅茶苦茶になつた花畑も、時間経過と共に元の姿を取り戻している。

「じゃあ、俺はそろそろ別のエリアに向かうとするよ」

「ああ、私ももつと精進する。機会があればまた手合わせをお願い出来るだろうか？」
「構わんさ。その時は俺も胸を借りる事になるだろうけどな」

「……………武運を」

「そつちもな」

怪人と武人は握手を交わし、互いに別々の方角へ進み始める。

もう背中を狙われる心配をする必要はなかった。

「ひとまずは、東か……………」

進む先にはもうもうと煙を吐き続ける活火山。

そこでは予期せぬ再会が待ち受けているのだった。

016. んんんんんっ!?

運営ルーム。

「三日目突入か。プレイヤー達の様子は？」

「特に目立った問題はないな。……【銀翼】がメイプルとサリーにやられた事以外は」

「あれはもう不幸な事故だろ……」

通夜のような沈黙。

自信を持って投入した悪意の権化のようなボスモンスターが倒されたのだ。ある意味、我が子をこてんぱんに叩きのめされたに等しいのだから、痛切に感じるのも仕方がない。

さらにその【銀翼】が守っていた卵もメイプルとサリーが獲得してしまったため、運営チームの心労が増しているのだった。

「つつても、過ぎた事を何時までも嘆いてる暇は俺らにはないんだよなあ」

「確かに。さあ仕事だ仕事」

その一言で運営チームはそれぞれが担当するモニターに向き直る。

「今のところ、銀のメダル探しに専念してる組と、それを狙ったPK組が半々ですね。金

のメダルを奪おうとして返り討ちに遭ってるのが何割か」

「流石に上位プレイヤーは格が違うな」

「ペインに至ってはモンスターより撃退したプレイヤーの数が多しな」

「上位つて言えばミイは？」

「えーと、まだ火山ダンジョンで足止め食ってるっぽいですね。あそこのモンスターとは相性的に最悪ですし、抜け出すにはまだ掛かるんじゃないですか？」

「それにあの火山にはあいつも配置してるしな。上手くいけば死に戻りさせられるかも」

「ふふふ、決して楽には探させないという俺らの心意気を知るのだ………げっ!？」

「………どうしたあ？」

悪い笑みを浮かべていた一人が、直後に踏み潰された蛙のような声を上げた。

それを聞いた残りの面々もとんでもなくイヤナヨカンを抱きながら、彼が目撃してしまったのか尋ねる——尋ねなければならぬ。

場合によってはメイプル並みの問題が一つ増えてしまうのだから。

「火山にカワイがいる!!」

「「うっそだろおおおっ!」「」」



「ミイ様、もうこれまで」

「こうなつてしまつては、一度死んで初期地点にリスポーンするしか……」

「ウチらは覚悟出来てるツス！」

「……………」

溶岩の流動する音が響く洞窟内。

同行していたメンバー三人にそう提案され、ギルド『炎帝ノ国』の長であり、前回イベントではメイプルに続いて第四位となったミイは、進退窮まったこの状況でいよいよ決断を迫られていた。

つまりは、死んで別地点で蘇るか、それとも諦めずに現状突破の方法を考えるか。

(……………どーしよおおっ!!)

表情にこそ出さなかったが、ミイは心の内で大パニックだった。

第一回イベントの上位十名のうち、ミイ自身も含めて四名が所属する『炎帝ノ国』——以前から入団希望者が多かったが、それらをなし崩し的に許可していたら、気が付いた時にはミイ本人にも把握出来ないほどのとんでもない大所帯に。

そのためミイがログインすると常に誰かが秘書気取りで傍に控えるようになり、ゲー

ムを始めた当初のように、素の自分のまま自由にプレイする事すら難しくなってしまうていた。

(私はただ普通に遊びたいだけなのに……)

運良く強力な炎魔法とスキルをゲットして、野良で組んだパーティーでちよつと活躍して。

周りが持ち上げたりするものだからつい女帝のようなキャラを演じたら、そのイメージが勝手に一人歩きして後に引けなくなつて。

今回の探索型イベントでも久し振りに、本当に久し振りに羽を伸ばしてソロ活動を満喫しようと思っていたのに、やはりと言うべきか、同行を申し出たメンバーが大多数。

ミイからすれば、キャラを演じ続けなければならぬため苦行には変わりないけれども、それに追い打ちを掛けるように、探索で訪れたこの火山エリアが牙を剥いたのだ。

(旦那様あ、助けてよおう)

これが夫と二人きりの冒険だったなら簡単に弱音を吐けるのに。

自分をリーダーと崇める彼女達がこの場にいる以上、『炎帝ノ国』の長としての偶像を壊すのも騙していたようで何だか申し訳なく感じてしまい、それがミイをさらに追い詰める。

ああ、愛する旦那様。貴方は今何処にいるのでしょうか。

「ミイ様、何かこつちに来るッス！」

悲劇のヒロインめいた心境になってしまったが。

軽い現実逃避に浸る暇もなく——同行者を選ばれた三人娘の一人、体育会系の話し方が特徴的なベリーショートトの娘が叫び、他の二人の表情も緊張の色で引き締まる。

「皆……私の後ろへ」

「ですがミイ様……」

「大事な仲間を守るのも私の務めだ」

三人娘を背後に庇い、愛用の杖を握る。

ミイ達四人がいるのは、洞窟内で偶然見つけた小部屋だ。

と言っても宝箱やメダルがありそうな隠し部屋ではなく、モンスターをやり過ぎために岩壁に設けられたちよつと広いだけの、七、八人も入れば満員になってしまう程度の窪みでしかない。

もしモンスターや敵対するプレイヤーに気付かれたら、逃げ場のないこの状況では――

「……来ました」

長髪で読書が趣味らしい令嬢風の娘が言う。

扉もない窪みの出入り口の縁に、誰かの指が掛かる。

包帯に覆われたその指の持ち主が、同じく包帯でぐるぐる巻きの顔でゆつくりとミイ達^{ミイ}が隠れる窪みの中を覗きこんで。

「……………うわ」

何故か、すごく嫌そうな声を上げられてしまった。

狭い通路の天井に届きそうな背丈、身に纏う黒い衣、タワシを思わせるアフロ——忘れたくても忘れられない、第一回イベントで辛酸を舐めさせられた因縁の相手。

知る者は『カワイ』と呼んで恐れる爆殺師が、よりにもよってこの苦境で現れてしまった。

手に手に武器を構えて警戒を露にするミイ達など意にも介さず、予想外の登場を果たした怪人は小部屋を覗き込んだまま首を傾げる。

「〔反響〕にずつと動かないプレイヤーの反応があるから気になって来てみれば、何だよ、炎帝のお嬢さんじゃないか。こんなトコで身を寄せ合ってどうしたんだ？」

その言葉から敵意は感じられなかった。

そもそも彼ほどの力あれば、わざわざ中を確認しなくても爆弾一つ投げ込めば済むはずなのに。

三人娘に武器を下ろすよう手振りで指示し、覚悟を決めて会話を試みる。

「…………我々だって好きでここに居る訳じゃない。恥ずかしながら、このエリアのモンス

ター相手に手こずってしまつてな。逃げ回っていたらこの様だ」

「で、でもミイ様が弱いつて事じゃないツスよ!? それは誤解しちやダメツスからね!」
「相性の問題」

三人の中で一番物静かな不思議系の娘が出入り口から顔を出して、洞窟内部で数え切れないほど動き回っているとあるモンスターを怪人に指し示した。

岩壁に貼り付いてずるりのたりと這う、溶岩色とも言うべき体色のスライム。

「あれ」

「……ああ、ここに来る途中に何匹も見たぞ。狭いし戦うと面倒臭そうだったから【気配遮断】で気付かれないように無視したけどな」

「ニトロスライム。主に火山地帯に生息していて、強い衝撃や火属性ダメージを受ける
と大爆発を引き起こす危険なモンスターです」

「あれがあちこちに湧いているせいでウチらは動けないんツス!」

「ふーん? 爆発系のモンスターだったのか。……倒して素材を採取するべきだったかな」

危険性が分かっているのかいないのか、三人娘の説明に怪人はボソリと物騒な事を言う。
う。

火属性の攻撃に反応して爆発するとなれば、ミイが得意とする【爆炎】も【炎帝】も

スライムを誘爆させるだけのライター代わりにしかならない。

一匹二匹ならそれでも問題はなかったのだろうが、この通路で確認出来るだけでも大小合わせて二十四匹は下らない。しかも、個体によって爆発するタイミングがランダムのため、不発だと思つて近付いた途端にいきなりドカンの可能性も高いのだ。

輪を掛けて問題なのが、

「もう知つてると思つっすけど、この洞窟、ダメージ受ける溶岩床のトラップも多いツスよね?」

「そう言われりやそうだな。俺もさつき踏んだ。まあ火山のダンジョンだし珍しくないだろ」

「そうなんすけど……あのスライム、溶岩トラップに自分から乗つて爆発しちゃうんす。さしずめ生きた地雷原つて感じツス!」

「我々が何故立ち往生しているのか、これで分かったな?」

「あー……なるほど? 何かしてもしなくても爆発するつか。そいつあ厄介だ」

ミイ達が、そして自分がどれだけ危うい場所にいるのかようやく理解したようで、怪人は包帯の上からポリポリと顔を搔く。

「けど、だつたら火属性以外の魔法で倒せば良いだけの話だろ」

「うぐっ!?!」

「それは……」

(言われたあ、言われちゃったあ……！)

指摘されたら一番痛い事を言われてしまった。

怪訝な顔をする——包帯で見えないが——怪人の視線に、ミイも三人娘もさつと目を逸らす。

身内の恥を晒すようで非常に言い難いが、こうなってしまうえば頼みの綱は彼以外になく、説明を許可する意味でミイは三人娘に頷いた。

「実は私達、ミイ様に憧れて『炎帝ノ国』に入りまして、キャラも一度作り直したんです……」

「だからそのツスね、スキルもミイ様と同じ火属性とかメインで取っちゃってるんす」

「似たり寄ったり」

「………つまり、四人もいるのに全員属性が偏っててどうしようもないと」

痛々しい沈黙が小部屋に満ちる。

怪人は何も言わない。何も言えずどうにか言葉を探している、が正しいのだろう。

たつぷり十数秒も使って彼が搾り出すように言ったのは、

「火遊びする時は水の入ったバケツを用意するもんだろ普通……」

四人の少女が項垂れるには十分な正論だった。



「ウォーターボール」

怪人の手から撃ち放たれた水弾がニトロスライムを穿つ。

外見や生息地からの予想通り水魔法には耐性がないのか、爆発する気配もなく光の粒に昇華して消えていく——弱点を突かれて簡単に倒されるのを見ていると、あれだけ苦労して逃げ回っていた自分達は何なのだろうとミイは頭を抱えたくなくなった。

「すごいッス！ 噂には聞いてたっスけどカワイさん激強ッス！」

「一番弱い魔法使うだけで強いとか言われてもなあ」

怪人はボソボソと何事か呟くと、おもむろに弓を引く。

「【スプレッドショット】」

通路にひしめくニトロスライム目掛けて飛ぶ拡散矢。爆発ではなく【ウォーターボール】同様に水属性のダメージをスライム達に与え、消滅させていく。

「これくらいはしないと強いとは言えんだろ」

「私達があればだけ苦戦したモンスターを……」

「いや何スか今の!?!」

「手品？」

三人娘が唾然となるのも無理はない。

爆破に火炎に水弾——何度も見たが、本当にどんなスキルを使えばこうなるのだろうか。

多少気ままずくはなったが、偶然にも彼が現れ、苦肉の策として提案した洞窟を出るまでの共闘を快諾してくれたのは、ミイ達にとってこの上ない僥倖だった。

ミイが持つ金のメダルを狙って協力している振りかも知れない——その可能性もある。

けれど、攻撃手段の大半を失って沈没を待つばかりだったミイ達にとっては、通りかかったのが海賊船だろうと幽霊船だろうと乗り換えなければならなかったのも事実。

それに彼は一度対戦した男だ。

炎に耐性を持つモンスターが相手でないのならミイも負けはしない……多分。

「ところで炎帝のお嬢さん、今ふと思ったんだが……」

「何だ？」

「そんなにギルメンが多いなら、メッセージを送るなりして火属性以外の武器とかアイテムとかを持って迎えに来てもらえば良かったんじゃないか？」

「……………」

その手があった。

(ミザリーかマルクスに来てもらえば良かったんだよおっ！ うあああん私の馬鹿!!)
物理攻撃メインのシンはともかく、魔法や罠スキルを駆使するあの二人なら少なくともミイが相手にするよりは楽にニトロスライムを倒せただろう。

別に助けを呼ぶのは恥ではない。誰にでも相性の向き不向きがあるのだから。

だがそんな初歩的な打開策に至らなかつたのは恥ずかしい。

「……主なメンバーには他の部隊を率いて探索を行ってもらっている。私の未熟さが招いた結果で彼らに負担を強いる訳にはいかない。自分の不始末は自分で片付けなければな」

よーし完璧な言い訳、と内心ガッツポーズ。

三人娘は尊敬の眼差しをミイに向け、怪人も感心したようで、

「そいつあ偉いねえ。服とか脱ぎ散らかす俺の嫁に聞かせてやりたいよ」

——ん？

「カワイさん、ご結婚されてるんですか？」

「してるよー。と言うか、このゲームも嫁に勧められて始めたんだし」

——んんんんんんっ!?

017. 炎帝、爆ぜる

(……よーしよし。うん、まずは落ち着こう。大丈夫、私はクールな女。炎使いだけど) ようやくダンジョン攻略への光明が見えたと思つた矢先。

一難去つてまた一難——と言うには過酷過ぎる試練がミイに訪れていた。

必死に『炎帝ノ国』のミイとしての仮面を取り繕つてはいるが、表面張力で水が零れ落ちるのを堪えるグラスのように、わずかな刺激で表情が崩れてしまいそうだ。

その最たる理由が——

「でも意外ツス！ カワイさんつて奥さんがいるようには見えないのに！」

「すみません、この子つてば思つた事全部言っちゃうタイプで……」

「馬鹿正直」

「いや、気にすんな。嫁がいるようには見えないつてのは俺が一番思つてるから」

三人娘——同じ中学の同級生グループ——と和気藹々と会話しながら、旦那様(仮定)は通路に湧いて出るモンスター達を片手間に処理していく。

怨敵同然のニトロスライム、炎のトサカが生えたトカゲ、尻尾が導火線になっているサソリ。

その他にも灼熱の環境に適應したモンスターの群れを、水遊びのように「ウォーターボール」で消し飛ばし、ギャルゲーの選択肢並みに分岐した洞窟をずんずん進む。その歩みに迷いはない。

「……おい、このルートで間違いはないんだらうな？」

「【反響】でマツピングしてるからご心配なく。あ、そこ踏むなよ、炎吹き出すぞ」

「了解ッスー！」

先頭にヨメカワイイ、令嬢娘、体育娘、不思議娘の三人を挟んでミイが最後尾を務める隊列。

実力者二人が前後から力で劣るメンバーをサポートする理に適った編成であり——彼との距離が開いた事で思考する余裕が生まれたのもミイにとっては嬉しい誤算だった。

(本当に、旦那様なのかなあ……?)

ダンジョンのギミックを的確に感知しながら先行する大きな背中。

正直なところ、まだまだ疑念は残っている。

確かにその背丈やちよつとした所作の端々には非常に見覚えがあるのだけれど、だからと言ってその理由だけで夫と等号で結び付けるのは早計だ。

自分の正体を教えるにしても教えないにしても、まずは旦那様だと確信出来るだけの

判断材料が揃ってから考える事にしようと思つて、ミイはじつくりと怪人の後ろ姿を注視する。そのビームでも出そうな眼力に擬音を足すとしたら『ズゴゴゴゴ……!』か。

「……後ろのマスターさんがすつこい俺を睨んでるんだが、何か心当たりあるか?」

「さあ、どうしてでしょうか……」

「さつきまで普通だった」

「きつとミイ様も一番前を歩きたくなつたんすよ!」

熱い視線を送っていたら怪人と位置を交代する事になった。何故?

最後尾でも索敵に支障はないと思つた。且那樣容疑のある怪人に言われてしまい、仕方なく隊列の先頭で背後の会話に聞き耳を立てていると、

「そう言えば、カワイさんの奥さんもログインしてるんですよね? どんな方なんですか?」

(……っ!)

令嬢娘の質問に、ミイの耳が何倍にも広がった——ような気がした。

且那樣かどうか早速判明するかも知れない。

ミイは一言一句聞き逃すまいと、はやる気持ちを抑えて全神経を集中させ、

「そうだなあ、俺の嫁は………ピーマンとグリーンピースが苦手で食べられない」

(ふぬっふ!)

鼻から「爆炎」を噴き出しそうになった。

「野菜炒めやサラダにピーマンが入っていると露骨に口がへの字になるし、うっかり青椒肉絲チンジャオロースなんぞ作った日には雨に濡れた捨て犬みたいな目で俺を見る」

（ストップストップ！ 何言ってるの!?!）

「グリーンピースも、焼売の上に乗ってるのとか冷凍のピラフに入ってたりますと、俺がほじくって一つ残らず取り除いてからじゃないと頑として食べない。何が何でも食べない」

（あばー!）

幼児園児のような弱点の暴露。

穴がないなら掘り返してでも入りたい逃避衝動に駆られるが、そもそもこの場所はどう何処まで続くとも知れない洞穴の中である。羞恥に悶え、いよいよ限界となったら地べたを転げ回るためのスペースだけは必要以上に存在した。

（だつてだつて、嫌いなのは嫌いなんだもん!）

落ち着け、落ち着け、あくまでクールにと自分に言い聞かせる。

気を紛らわせるために楽しい記憶を思い出すのだ。

そう例えば、向こうの岩壁でプルプルしてるニトロスライムのあの丸い形——それから連想して三日前に旦那様が作ってくれたハンバーグがとっても美味しかった事とか。

「ここだけの話、俺も嫁の好き嫌いをなくせないか考えて飯に色々と細工しててな。つい三日前もハンバーグを作った時に、ミキサでドロドロにしたピーマンとグリーンピースを混ぜ込んでみた」

「うそお!？」

しまった、あまりの衝撃的事実に声が。

怪人も三人娘も足を止め、通路に突然叫びを響かせたミイを見る。

「あ、あの、ミイ様? どうかされましたか?」

「あ……………う、そ……………うむ、そうだな! 好き嫌いは、駄目なものな! それより、あつちにもまたニトロスライムがいるぞ!」

「ああ本当だ、【ウォーターボール】」

何の罪もない——敵性モンスターなのだが——粘体生物が犠牲になる。

今思えばあの日の旦那様の顔は実験動物を観察するマッドサイエンティスト、いや、ヒマワリの種を頬張るハムスターを見る飼主のそれだった。

迂闊だった、気が付くべきだった。まさかまさか旦那様が、そんな神をも恐れぬ残酷な仕打ちを企てていたなんて。

夫婦の愛は冷め切ってしまったのかと愕然とするミイだが、攻撃の手が緩む事はない。

「援護、する……!」

火炎棍棒を振り上げるバーバリアンだが、恥辱に焦がされて周りが見えていないミイからすれば行く手を阻む単なる障害物。

(うわああああああんっ!!)

爆発する乙女心に敵はない。

紅のオーラを流す「フレアアクセル」の加速状態のまま、両足の裏を蛮人の顔面に叩き込む。

「炎帝式ドロップキック!」

「一撃ツス!」

断末魔の呻きを残して消えていく毛むくじやら。

運動してほんの少しだけ冷静さを取り戻したミイは、奇行に目を丸くするパーティーメンバーをゆっくりと振り返り、

「……この程度のモンスターなら、魔法を使うまでもない」

「え、じゃあどうして私達閉じ込められてたんですか!」

令嬢娘のツツコミに何も言えなかった。

「まあ、そっちでもモンスターを対処してくれるなら俺としても楽だが……」

怪人にそうフォローされ、すごすごと隊列の先頭に戻るミイ。

一党はバーバリアンが現れた道とは反対の道を進む。

また恥ずかしい秘密がバラされるのかと戦々恐々だが、しかし、待つてほしい。

よくよく考えてみれば、旦那様らしき怪人はあくまで、そうあくまで自分の愛する奥さんの話をしているだけであつて、それが必ずしもミイの事を指しているとは限らないではないか。

怪人が語るその奥さんは、きつとミイに似てとても美人でお淑やかで可愛らしくて背もスラツと高くて胸もばいんばいんで、家事も万能で旦那様を超愛して超愛されてるけど、でもミイではなく別人に違いないそうに違いない——

「実は、嫁はちよつとばかり人見知りか激しくて、俺や義理の父母——彼女の両親以外の人間とは必要最低限しか話さないし近寄ろうともしないんだ」

「へえー」

「ちよつとシンパシー」

「なのに変な度胸と行動力だけはあつてな。この前宅配便が届いた時なんか、俺が手を離せなくて代わりに受け取るよう頼んだら、まな板の盾とスリツパの剣で武装して配達員に変な顔されてた」

（私いい！ それ絶対私いい！ 旦那様の馬鹿あー！）

このアフロ怪人が旦那様確定なのは非常に喜ばしくあるものの、その喜びに比例して

下手くそな落下型パズルゲームよろしく恥が積み重なっていく。ゲームオーバーまであと少し。

脳内ミイもずっとエビ反りしながらの七転八倒で大忙しだ。

「じゃあじゃあ、カワイさんと奥さんの出会ってどんなだったツスか!」

「私も、後学のために是非!」

「興味津々」

「結構グイグイ来るね君達。……あまり面白いものでもないぞ?」

(聞いちやうの? それ聞いちやうの? そして言っちゃうの!?)

止められるなら止めたいが、三人娘の熱意を押し留めるに足るほどの理由が思い付かない。

あうあうあわあわと肩越しに見守る事しかミイには出来なかった。

「俺と嫁は親戚同士の、年の離れた幼馴染みたいなもんで」

「ふんふん」

「就職して一人暮らししてた俺のマンションにいきなり押し掛けて来て」

「おー、積極的ツス」

「その日に婚姻届に判子押しして二人で役所に提出して、終わり」

「……ええ?」

沈黙する三人娘。

別に旦那様が気恥ずかしがってはぐらかしているとか、そういう訳ではなく、どうやってミイと夫婦になったのかについて誇張も脚色もしていない。

（私が聞いているって知らなくても、嘘は吐きたくなかったのかな……）

どうせならもう少し、ほんのちよつとだけ甘酸っぱいロマンス要素を山盛り盛った作り話でも妻としては良かったのだけれど、この夫も夫で変なところで誠実さを発揮してくれるのだ。それがまた嬉しくもある。

「終わりって、いきなし家に来た親戚と結婚したんすか!？」

「嫁とはおむつを着けてた頃から世話を任された長い付き合いだし、嫁が結婚可能な年になったら夫婦になるって約束もしてたしな。結婚記念日が嫁の誕生日ってのも覚えやすく助かるよ」

「ちよつと待ってください……奥さんって今おいくつなんですか?」

「お前さん達は中学生だよな。なら二つ三つ上かね」

「……お仕事は?」

「俺のか? 高校教師」

再び言葉を失った三人娘は、頭を突き合わせて小声ながらも興奮した様子で内緒話を始めた。

「すごいッス。軽い気持ちで聞いたらアダルトイイな世界に踏み込んでしまったッス」
「禁断の恋愛……」

「私達にはとても真似出来ません」

あの、聞こえているのですが。

合法だし禁断でもないし、ちゃんと十六歳の誕生日迎えてから突撃したし。

ミイがなのか旦那様がなのかはともかく——先ほどまでの恥ずかしエピソードを軽く押し流して名譽挽回するくらいには若い彼女達の好奇心を満たせたらしい。どうせならそのまま黒歴史の方は忘れ去ってくれと非常に助かる。

自分を慕うメンバーを闇討ちして記憶を抹消するなどミイもしたくはない。

「と、とにかく、カワイさんが奥さんをめっちゃラブしてるのは分かったッス」

「そりゃラブしてるさ。だから他の男に渡したくなくて俺の嫁になってもらって独占してんだ」

「カウンター！　カウンター食らったッス！」

(あ……うあ……ひああああ)

あー、これはいけない、これはマズイ。

流石は殲滅系爆弾魔。言葉一発の爆撃範囲が広い。

日常の会話の流れで『大好き』とか『愛してる』とか、睦言めいたものを茶化して口

にした事は数え切れないほどだが、こうも真摯な口調で断言する夫を見せられると、めっちゃラブされている奥様であるところのミイはもう口端が緩んでどうして良いか分からなくなる。

と言うか中学生相手に何を口走っているのだこのダーリンは。

「ミイ様……本当に、大丈夫ですか？ 急に走り出したり、今度は顔を隠して蹲ったり……」

「……問題ない、大丈夫だ。これはその……顔から火が出るトラップを踏んでしまっただけだ！」

「何スかそのトラップ!?!」

「斬新」

「馬鹿な事言っていないで……ほれ、着いちまったぞ」

(誰のせいだと思ってるのよもう……)

楽しい楽しい——約一名には公開処刑の——時間は終わりを迎えたようだ。

血管のように枝分かれする洞窟を踏破し、ミイの精神的ダメージを除けば奇跡的に無傷の五人は広い空間に辿り着いた。

面積はサッカーコートおよそ二面分か。

上を見上げると、どうやら外に繋がっているのか、はるか遠くに小さな光が見える。

だが岩壁をよじ登って行ける高さでも、ヨメカワイイの「跳躍X」で届く高さでもない。ならば下はどうかと、中央で大きく口を開ける縦穴を覗き込む。

直径は、ざつと四十メートル強。広場の面積のほぼ半分を占めるその大穴は、そこそ地獄まで続いているのではと思えるほど深く底が全く見えない。

「他に出口らしきものも、転移魔法陣も見当たらないな」

「じゃあ行き止まりって事ですか？」

令嬢娘のその問いに、

「いや、ここらまで大規模な部屋だ。きっと何かしらの仕掛けかイベントが——」

あるはずだ、とミイが続けようとしたその時だ。

ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ——と。

絶対に良くない事が起こると確信させられる、地鳴りにも似た咆哮が聞こえたのは。

018. 灼竜シウコアトル

突然始まった揺れは収まる素振りを見せず、それどころか、だんだんとこちらへ近付いていると五人の誰もが感じ取れるほどに強く、大きくなつていく。

その地鳴りの激しさが誇示しているのは、即ちこれから現れる敵の強大な力。地獄の底より這い出てくるのは果たして鬼かうわばみか。

どちらにせよ生半可な戦いでは済まないとヨメカワイイは——恐らくミイも予感していた。

「穴が……」

「光つてるツス」

「三人は私とカワイの後ろへ。油断するな」

ミイが三人娘を背後に隠し、杖を構える。

「一体何が上がつて来るんでしょうか……」

「アイドルグループじゃない事は確かだな」

さして面白くもない冗談を吐き捨て、縦穴をせり上がる煌々とした光を睨む。

それはキャンドルの炎光のような柔らかなものではなく、溶鉱炉の内部を思わせる灼

熱と粘りを多分に含んだ、近寄る事を躊躇う暴力的な光源だった。

火山ダンジョン、地鳴り、そして縦穴から溢れ出しそうになっている光となれば、もうこの後の展開は予想できてしまう。予想したくなくとも想像してしまおう。

つまりは――

「溶岩^{マグマ}ツスー!?!」

やはりと言うか、真つ先に叫んだのは体育娘だった。

ついに縦穴の許容量を超えて、ドロドロに溶けて形を失った大量の岩石がヨメカワイイ達のいる大部屋にまで到達したのだ。

想像に反して間欠泉のように勢い任せで一気に噴き出すのではなく、むしろ、緩慢とすら言える人間の駆け足程度の遅々とした速度ではあったが、しかし確実にこちらに迫るその光景は大自然に対する恐怖を喚起させるにはこれ以上ない演出となっていた。

踵を返して逃げようにも、大部屋の出入り口は地鳴りと同時に塞がって使えない。

このままではマグマは全体に広がって五人を足元から焼き尽くすだろう。

「ちっ、こうなったら――【跳躍】!」

ヨメカワイイは即座に武器を錨弓に切り替えると跳び上がり、そのまま岩壁に投擲した。

マグマに侵食されつつある地面よりもかなり上の位置に深々と突き刺さった錨弓――

―その柄頭の鬮體から伸びた鎖を引つ張つて、ちよつとやさつとでは抜けない事を確かめると、ヨメカワイイは少女四人に叫ぶ。

「おい、早く俺に掴まれ！」

「掴まれて……そこから先はどうするんだ!？」

「知らん! 上に行つてから考える! いいから急げ!」

マグマは着実にこちらへ押し寄せている。

ミイと三人娘が左腕や腰にしがみ付くと同時に鎖を巻き上げ、スパイ映画さながらに窮地からの離脱を試みるヨメカワイイ。

「カワイさんつてジョシチューガクセーに抱き締められて喜ぶ人なんスか!」

「ロリコン?」

「ああそうだな! こんな状況じゃなけりや喜んでたかもな!!」

投げやりになんか答えながら、鎖に引つ張られて上を目指す。

何故かミイが杖の先で頬をぐりぐり突いてくるのだが、今は不機嫌な眼差しの彼女にその理由を尋ねている場合ではない――岩壁の錨弓に着いてしまえば、他に退路はなくなりそれまでなのだ。

眼下に広がるのは溶岩の海。

五人がさつきまで立っていた場所は立派な火口と化していた。

「それで、これから一体……」

「さーてどうしましょうね、と」

錨弓の長柄を足場に、ヨメカワイイの右腕に巻き付いた鎖を握り締め、五人は下から突き上げる強烈な気流に耐え続ける。

不安定な体勢に加え、身体に纏わり付く熱気だけでHPが削られていくこの状態では、何時まで持ち堪えられるか分からない。

「【炎上耐性】のスキルでもあれば、少しの間でも下に降りる事もできただろうが……」

「泳ぎ回ったところで、俺達が最初に来た時の横穴しか見つかからないだろうし、そこももう溶岩に沈んじまつてる。五人全員でとなると、もつと他の逃げ道を探さないと」

「そんな都合のいいものがあるんですか？」

「ずーつと上までよじ登る根性があるならな」

残された脱出口ははるか遠く。

あそこまで岩壁を登ろうにも、今もなお溢れ続ける溶岩に追いつかれてしまうだろう。

もつと何か確実な、せめてミイと三人娘だけでも脱出させる事ができる方法はないかと考えても名案は浮かんでくれず、刻一刻と時間だけが過ぎていき――

「……おいでなすった」

マグマの上昇が止まったかと思えば中心部分が高く盛り上がり、とある形に凝縮されていく。

それはぐらぐらと煮え滾る灼熱の身体を持つ単眼双角の大蛇だった——胴回りは長い年月を経た大木より何倍も太く、獲物の品定めのもりなのか、縦に割れた瞳孔が五人を見据える。

灼竜シウコアトル——大きく裂けた口が開き、展開されるのは深紅の魔法陣。

「ウインドカッター」！ 「ウォーターボール」！

「爆炎」！

射出された乗用車サイズの火山弾を、ヨメカワイイとミイの三つの魔法が迎え撃つ。かろうじて相殺できたものの、その余波は凄まじく、灼竜の戦闘能力の高さを如実に物語っていた。

おそらくだがこのボスは、最初の溶岩流のギミックを生き延びたプレイヤーに対する運営からの嬉しくないプレゼントなのだろう。

二段構えの確死のイベント。

これまで出会ったどのモンスターとも一線を画す、ひしひしと伝わる圧倒的な存在感。

「こんなの、どうやって倒せって言うんすか……」

「分からも。分からも——」

「どうにかして倒さなきゃ、俺達は溶岩で溺れ死ぬかあの怪物に焼き殺されるしかないぞ」

「どつちも嫌ツスー！」

「来るぞっ!!」

鎌首をもたげた灼熱の蛇竜が咆哮し、血走った単眼に魔法陣が浮かぶ。

対するヨメカワイイは錨弓から自ら飛び降りると、じやらりじやらりと鎖を伸ばしながら垂直の岩壁を走り出した——いや、鎖を命綱にしてどうにか速度を殺しつつ、壁に沿って落下していると言い換えた方が正しいか。

残された少女四人を邪眼で狙う灼竜の頭部に、

「【ウインドカッター】！ もう一丁！」

自由な左手で、下手投げに風刃の連撃を放つ。

ダメージを与えた事を示す深紅のエフェクトが火の粉のように散るが、灼竜の長大なHPバーの減少値は微々たるもの。それでも怪物の注意をこちらに引き付ける事はできた。

「【炎帝】!!」

視線を逸らした灼竜に、ミイお得意の炎魔法が炸裂する。

溶岩から生まれた蛇身に火魔法がどれだけ効くのかは不明だったが、鬱陶しそうに首を二、三度振るうだけで「炎帝」を打ち消した灼竜の様子から察するに、まあ攻撃しいよりは……程度の効果しか望めないようだ。

「くっ、やはり私とは相性最悪か！」

再びミイ達の方へ敵意を向ける蛇頭が、今度は無数の爆発に包まれる。

「おら、こつちだウナギの大將」

時計の振り子状態からの【跳躍】で岩壁を蹴り、錨弓を支点に綺麗な半円の軌道を描いて灼竜の頭上へ移動、さらに大量の爆弾を投下する——そんなよそこのモンスター共ならば欠片も残さず消し飛ばせる破壊力にも関わらず、火山の主は体力を一割削られただけで怯む様子を見せない。

お返しとばかりに単眼の魔法陣が再展開され、ビーム状に超圧縮されたマグマが空中で身動きの取れないヨメカワイイを撃ち貫かんとする。

「引っ張って」

「おりゃあッスー！」

「おおおっ!? つと、ついでだ【ウォーターボール】！」

不思議娘の号令で鎖が引かれた事でヨメカワイイの位置がずれ、極太のレーザーはコートの裾を焦がして射線上の岩壁を穿った。崩れた大小の岩塊が音を立てて溶岩湖

に落ちていく。

本当に、設定を間違えたとか思えない威力だ。

「悪い、助かった」

「こんくらいお安い御用ツス！」

九死に一生を得て四人のところに帰還したヨメカワイイ。

灼竜もAIが高性能で賢いのか、無闇に攻撃を連発して視界を狭める真似はせず、こちらの出方を窺うように蛇体をくねらせて威嚇を繰り返す。四人を守りながら戦わなければならぬ身としては助かる用心深さだった。

だが、怪物も活きの良い獲物を前にして何もしいままでいるはずがない。

「角の先に魔法陣が出ました！」

「ああ見えてる！」

「【爆炎】！ 【炎槍】！」

前に突き出た双角の先端に魔法陣。

攻撃動作キャンセルを狙ってミイが魔法を浴びせるも止まらない。

単眼から放たれるのがレーザーならは双角はマシンガンだ。連射される拳大の火山弾が、蛇行の軌道で弾痕を刻みながら下方より迫る。

その弾雨が目指す終着点に、咄嗟に少女達を抱き寄せて庇うヨメカワイイの背中が

あった。

「イデデデデデッ!?」

「カワイさん!!」

『スキル【炎上耐性小】を取得しました』

乱射による広範囲攻撃のためか一発のダメージはそこまで高くはないが、それでも【鋭敏化】のデメリットも加わってHPが全力疾走で減っていく——HPポーシヨンと【ヒール】のわんこそばで命の残量の増減を繰り返しながらどうにか乗り切った時には、周囲の岩壁は数えるのも面倒なほど穴だらけになってしまっていた。

「お、おい、大丈夫なのか!?!」

ミイがやけに狼狽えながらこちらの様子を聞いてくる。

しかし灼竜は、彼女に返事をする暇さえも与えてはくれない——溶岩を激しく波立たせる咆哮と同時に、魔法陣が五人を押し潰すように降ってきたのだ。

躲そうにも下は灼熱の海。

他に飛び移れる足場も見当たらず、かと言って苦肉の策で五人仲良く鎖のバンジージャンプなど洒落込もうものなら、それこそ次の攻撃で狙い撃ちにされてしまう。

さてどうしよう。

どうすればこの状況を打破できる？

その最適解を真つ先に導き出したのは、ヨメカワイイではなかった。

「……………これを使え」

ミイから唐突に手渡された魔力増強ポーション。インテリジェンス

行動の意味が分からず彼女の顔を見ると、大きな覚悟を決めた表情をしていた。それは三人娘も同じであり、少女達が何を考えているのか直感で理解したヨメカワイイは、けれど止めようと声を発する前に身体を押され、錨弓から突き落とされる。

そして、仰向けに落下する最中に。

怪物の魔法陣が発動し、自分を逃がした少女達が赤く燃える濁流に飲まれるのを見た。



「【火炎牢】……………いや、その上位スキルか」

ミイは冷静に、自分達を囲む溶融物質で構築された牢獄を観察する。

彼女の使う【火炎牢】も対象の動きを封じた上で継続的なダメージを与えるスキルだが、灼竜が発動した【焦熱牢】とでも呼ぶべきこの流体の鳥かごは、それよりも数段上のスリップダメージと優れた拘束力を併せ持っているようだ。

一応、魔法で攻撃して解除できるか試してはみたものの、案の定、ミイの炎は縦横に走る格子にあつさり吸収されてそれまでだった。

こうも手も足も出ないと、逆に気持ちが悪く落ちて着いて意識がはつきりしていくから不思議だ。

みるみる減少する自身のHPバーを一瞥して、ミイは三人娘に頭を垂れる。

「すまなかつたな。お前達までこんな目に遭わせてしまつて」

心の底からの謝罪だった。

自分の力が足りなかつたばかりにモンスターに追い立てられて閉じ込められ、今だつてこうして愛玩動物よろしくケージの中——もう戦いの行く末を見守る事しかできない。

それでも三人娘はミイへの敬意を崩そうとはしなかつた。

「ミイ様が謝る必要はありません！ 私達だつて、もつと色んなスキルを覚えていれば……」

「そうツスよ！ それにまだウチらは負けた訳じゃないツス！」

「一発逆転ホームラン」

彼女達が言うようにパーティー全員がまだ存命であり、希望も残されている。

「——【フレシエツトスコール】」

火山内部に雨が降る。

殺人的な速度の水弾が降り注ぎ、穴を穿たれたマグマの身体からダメージエフェクトと水蒸気を撒き散らしながら、灼竜は初めて苦痛を感じ取れるだけの叫びを上げた。

攻撃も体力も完全無欠に思える怪物が一つだけミスをしたとするならば——それは【焦熱牢】でミイ達を捕らえてしまった事だろう。

「【スプレッドショット】」

追撃の風刃が蛇身に幾筋もの傷を負わせる。

火炎スキルのエキスパートであるミイだからこそ分かる。

この【焦熱牢】も【火炎牢】と同様に発動地点の座標を正確に設定する必要がある。だからこそミイも【火炎牢】を使用する場合にはメンバーとの連携で対象プレイヤーやモンスターの足止めが必須となるのだが——この手のスキルは基本的に、幽閉した対象をその位置に固定させるのだ。

滅多にない事ではあるが、それが仮に空中だったとしても。

つまり。

それまでミイ達の足場として命を繋いでくれた錨弓が突然消えたとしても、減少し続けるHPと引き換えに、【焦熱牢】が彼女達の落下を防いでくれる形となる。

その事実が一体何を意味するのか。

「【魔弓の極技】——【フレッシュトスコール】」

灼竜の単眼に撃ち込まれる夥しい爆弾矢。

文字通り、矢継ぎ早の猛攻が巨体を襲う。

「……お前は、首輪を外してしまつたんだ」

悶え狂う火山の神に、囚われの身であるはずのミイは憐憫の情を送った。

内と外を完璧に隔絶した灼熱の鳥かご——その上で、守るように立ち黒弓を構える者。

「ぶっ殺す^{ツブ}」

——ほら、この世で一番信頼^あする夫^{ひと}が怒つてる。

019. 朱に交わりて赤くなり、火に交わりて竜となる

たかがゲーム、されどゲーム。

一番の最善手だったとは言え、自分の教え子と変わらない年齢の少女達に助けられたとあっては何が何でもこの怪物を倒さなければならぬ。

己に対する冷たい怒りに身を任せ、ヨメカワイイは弓を引く。

「スプレッドショット」

爆撃、爆撃、また爆撃からの水弾と風刃の嵐。

イベントがあと何日残っているかなどもう知った事ではない——ポーション類も爆弾も今ここで使い切るつもりで、持てる全力最大の攻撃を叩き込み続ける。

無論、灼竜もただ茫然と的になっている訳ではない。

つんぎくような咆哮を発し、火山弾を吐き出す。直後に双角からも火山弾の追射。

「ぐっ、う……！」

レザーコートを翻してガードするが、ダメージと炎上効果でHPが削られる。

メイプルのように無傷とはいかない。

『スキル【炎上耐性小】が【炎上耐性中】に進化しました』

ヨメカワイイにとつて幸いだったのは、「焦熱牢」に囚われたままであるミイ達が攻撃の対象と見なされなかった事だろう。

放つておいてもいずればHPが尽きるかこの鳥よりも、怒涛の反撃を繰り出す厄介者を最優先に始末しようとする——実にA Iらしい合理主義な思考ルーチンと判断が、この状況において彼女達のステータスも気に掛けねばならないヨメカワイイに有利に働く形となっていた。

少なくとも、自分が生きている間はミイ達が狙われる心配はないのだから。

「だっ……カワイイ！ そろそろHPが！」

「っ！ あいよ」

……『だっ』て何だと思いながら、牢獄内のミイの合図で彼女と三人娘に「ヒール」を施す。

他者の傷を癒した事により「施しの報酬」が発動し、ヨメカワイイのHPとMPも小回復と同時に最大値が一割増加する。

ミイ達がいる限りヨメカワイイは無制限に回復し、ヨメカワイイがいる限りミイ達も死なないし死なせない。

灼竜が一党の全滅に執念を燃やすと言うのなら、こちらは徹底的にその思惑に抗うのみ。

「……もう少しだけ時間が掛かりそうだが、それまで頑張れるか?」

「当たり前だ」

「平気ツス! 女子ソフトボール部ツスから!」

「文芸部ですけど!」

「お昼寝同好会」

一人の教師として最後のものは部活に認定すべきではない気がするが、とにかくミイも三人娘もまだまだまだ気力は十二分のようなのだ。

そんな少女達の気概の強さを頼もしく感じながら、邪眼のレーザー照射で崩れ落ちる岩の大塊を飛び移りつつインベントリ内のアイテムを矢にぶち込む。

【装填】『毒薬』

毒や麻痺を使えるのはメイプルだけではない。

あの難攻不落のアホ毛要塞が使用する【毒竜】と比べたら毒性の強さは雲泥の差だが、それでも回復ポーションを【装填】して撃てるなら、毒薬だって【装填】可能なのは自明の理。

灼竜にどれだけ撃ち込めば効果があるのか定かではない。そもそも有効かも分からない。しかし、どうせ何もかも消費するつもりなのだ——当たってダメージになるのなら、毒

薬だろうが空のペットボトルだろうが尽きるまで撃ち放つ。

怪物のHP、残り七割。

「フレッシュトスコール！」

毒々しい紫の液体を滴らせた矢を灼竜に浴びせ掛ける。

大半は高熱を誇る体表部分で蒸発してしまいが、微細な状態異常攻撃でも積み重なれば何時かは巨体をも蝕む脅威となるはず。そう信じているからこそ、ヨメカワイイも振り構わず攻勢の手を緩めようとはしない。

羽虫の如く鬱陶しい黒衣の怪人を脅威と認定したのか、灼竜の攻撃パターンにも変化が起こる。

「カワイさん、下！ 下から来ます！」

「うおっ!？」

新たな蛇影が溶岩湖を突き破って姿を現し、鞭のようにしなるその極太の尻尾がヨメカワイイを岩壁に叩き付けた。

さらに壁を角で抉りながら、がぱりと大きく口を開けた灼竜の頭部が右側から迫る。

「おおおおおあああああっ!!」

ヨメカワイイも黙って食われるつもりはない。

ダメージで軋む身体を強引に動かして黒弓から錨弓に切り替え、飲み込まんとする蛇

頭の鼻先に突き刺して体格差の勢いに押されていく。

凄まじい突進の圧力に、おろし金よりも粗い岩肌でガリガリと身体とHPを削られる中、

「ハ、のおっ!!」

刺さったままの錨弓の弓弦ワイヤを引く、引く、引く。

流石の灼竜も零距离の砲撃でHPを約六割にまで減らされてたじろぎ、顔面にしぶとく貼り付く害虫を払おうと首を振り回す。

弾き飛ばされた先の壁に錨弓の爪を引っ掛け、ヨメカワイイは息を整える。

【ヒール】……【ヒール】……【ヒール】

何回目かの【ヒール】でHPゲージの色が赤から平常時の色へ戻ったのを確認し、三度放たれた単眼のレーザーを、今度は避けるでも防ぐでもなく真正面から受け止めた。

岩盤をも貫く熱光線の中に姿を消したヨメカワイイに、思わず悲鳴を上げる三人娘。

しかしミイだけは、じつと黙ってレーザーが穿った壁の穴を見つめている。

「……【スプレッドショット】」

煙の立ち込める壁穴より吐き出される球形砲弾の一斉掃射。

反射的に尾で防いだ灼竜だが——もしこの巨大なボスに戦意以外の感情があったとしたら、何故大魔法を食らったのに生きているのか不思議に、あるいは不気味に思うだ

ろう。

『スキル【炎上耐性中】が【炎上耐性大】に進化しました』

そのアナウンスは、火山の主たる灼竜シウコアトルにも聞こえない。

強力な毒や麻痺、炎上などの状態異常への耐性取得と進化の確率は、受けた攻撃の回数、またはその危険度によって変化する。

自身の体表や使う魔法全てに炎上効果が付与された灼竜の攻撃は、裏を返せばその全てが耐性を得るチャンスでもあり——メイプルの鉄壁の防御力でもなければ不可能な芸当を、ヨメカワイイは常軌を逸したHPと回復で耐える事で強引に成し遂げようとしているのだ。

事実、【炎上耐性大】を獲得したヨメカワイイは、真つ赤に溶けた穴の縁に触れてもダメージを一切受けなかった。

「カワイさん、【ヒール】！」

体育娘に呼ばれ、錨弓と鎖を使って飛ぶように移動して再び【焦熱牢】の鳥かごへ。

檻の中の四人を回復させて己のHPとMPの最大値も底上げし、改めて灼竜に向き直る。

灼熱の奥底より生まれ出た単眼双角の大蛇は、自分の熱獄を受けて生き延びた者が存在する事に激怒しているようだった。

プライドをいたく傷付けられた蛇身が、地表で冷やされた溶岩さながらに黒く硬質化していく。

「……動きが止まったか。どう思う？」

「どう思うも何もお約束の第二形態だろ。とにかく今は回復だ。俺のHPポジションも分けるから今はできるだけでHPを全快に近い状態にしておいてくれ。何が起こるか分からん」

「了解ッスー」

戦闘音が消え、溶岩が地底を流れる音だけが響く。

灼竜のHPゲージはまだ半分以上も残っているので死んだなどとは思わない。何より、ミイ達を封じる【焦熱牢】もまだ消えていない。

だがともあれ、相手が行動を起こさないのなら絶好の攻撃チャンスなのは確かだ。

黒弓に【ウォーターボール】を【装填】し、今や禍々しい蛇神像と化した灼竜を狙う。
【スプレッドショット】

拡散式水弾はさしたる妨害もなく標的に当たるとヨメカワイイは考えていた——蛇神像の全身に亀裂が入り、隙間から漏れ出た超高熱の膜が水弾を全て蒸発させるのを目の当たりにするまでは。

「全員、防御姿勢!!」

その叫びは間に合ったのか。それとも遅きに失したのか。

黒染めの巨像の外殻が内部からの圧力で吹き飛び、人間の背丈を優に超えるサイズの破片の嵐が全方位に襲い掛かる——【焦熱牢】にも押し寄せるそれらを錨弓を振り回して打ち砕き、あるいは叩き落とし、変貌を遂げた蛇竜と相対する。

赤橙に輝いていた体色は白に変わり、荘厳な眩さに息を呑む。

「見てください、周りの壁が……!」

令嬢娘が指し示した岩壁——かなりの強度と鋭さを持っているはずのそれが、灼竜のレーザーが当たった訳でもないのにシユウシユウと嫌な音を立てて形を失い始めた。

急激に上昇した灼竜の体熱によって溶解している。

そう理解するのに時間は必要なかった。

「武器も、溶けちゃった……!」

「HPの減りも早くなってるっス!」

「……どうやら、それは向こうも同じらしいがな」

垂れ流れる溶岩の滝の中央、羽化とも思える再誕を果たし、大気を歪めるほどの純白のオーラを立ち昇らせながら減少していく灼竜のHPゲージ。

フィールドすら容易に作り変えてしまうあまりにも強大な熱は、灼竜自身の命をも削ってしまう諸刃の剣、正真正銘の奥の手なのだ。パーティーの誰もが本能で悟る。

「正念場、か」

水弾も風刃も、爆弾も砲弾も、巨体に届く前に掻き消されるか誘爆して意味がない——あの白い気炎のエフェクトはありとあらゆる遠距離攻撃を無効にするらしい。

全てが溶岩に覆われた戦場で、確固たる足場などもう【焦熱牢】の上しか残されてはいないのに接近しなければ攻撃も不能とは、追い詰めているのか追い詰められているのか。

敵が自滅するまで回復で耐え凌ぐ選択肢はない。

単純に体力の差なのかミイと三人娘のHP減少は灼竜のそれより格段に速く、どう見積もってもその時が来る前に彼女達に渡したポーションもMPも尽きてしまう。

ならば——どうする。

「上等だ。最後くらいは殴り合いといこうか!!」

短期決戦。

ヨメカワイイは【跳躍】で灼竜の頭部に飛び移り、武器固有の【破壊耐性】により獄熱の中でも形を保つ鎖を操って幾重にも蛇身に巻き付け、錨弓を楔として突き刺し、あらゆる限りの力を両腕に込めて締め上げていく。

灼竜も鉄鎖に束縛されながらも身をくねらせ、溶岩壁に自らの肉体をぶつける事で死力を尽くす羽虫を骨も残さず溶滅せんとする。

「ぐ……おおっ!!」

『スキル【炎上耐性大】が【炎上無効】に進化しました』

ヨメカワイイを苛んでいた忌々しい炎上ダメージが停止する。

しかし熱による継続的なスリップダメージは無効にできても、純粋な攻撃までは防げない。

自傷も厭わず暴れ回る灼竜の長大な身体は、それそのものが太陽さながらの圧倒的な質量を持つ武器であり災害の具現だ。

何度も何度も灼竜と壁に挟まれながら、ミイから託された魔力増強ポーションを飲み干し、鎖と包帯の巻かれた両腕を怪物にねじ込む。

「ウォーターボール」！ 「ウインドカッター」！

遠距離が駄目なら零距离はどうか。

死に物狂いで試した結果は、確かな手応えと飛び散る赤色のダメージエフェクト、苦痛に満ちた叫びが教えてくれた。

もう回復は考えない。

相手が怪物ならば、こちらは獣で構わない。

「おおらあっ!!」

傷口に突っ込んだ爆弾を炸裂させる。

拳で殴り、魔法で切り刻み、果てには口元の包帯を乱雑に取り去って嘔り付き、口内を焼く熱を無視してその歯で強引に咀嚼し嚙下する——『実はモンスターって食べられるんですよ』と何故かメイプルのドヤ顔が頭に浮かんだが、ゴムが溶け込んだ麻婆豆腐に似た食感と舌が破裂しかねない刺激ですぐ消え去ってしまった。

満腹の概念が設けられていないゲーム世界で、魔法と爆弾をスパイス代わりに、流動する蛇体を延々と飲み続けていく。

そして。

数時間とも、ほんの数分とも思える時が経ち。

「——っはああああああああ……」

長く長く息を吐く。

羽虫が叩き潰されるのが先か。巨竜が食い殺されるのが先か。

おそらくは運営が思い描いていたであろう戦闘光景から遠くかけ離れた食物連鎖の末、一際高く断末魔の咆哮を上げ、轟音を立てて溶岩湖に横たわったのは灼竜の方だった。

熱源でもあつた灼竜が息絶えた事で火山内部も一気に冷却され、死闘を繰り広げたフィールドは最初に訪れた時の岩窟風景を取り戻していた。

『スキル【灼竜喰らい】^{コアトルイーター}を取得しました。これにより【炎上無効】が【灼竜】^{シウコアトル}に進化し

ました』

『レベルが36に上がりました』

「あー……しんど」

精も根も尽き果て、冷え固まった地面に大の字に倒れたヨメカワイイは、自分の力として宿った灼竜の残滓が天に昇っていくのを見届けて――

「きやあああああつ!?!」

「あわわわわわわつ、カワイさんどいてどいてーッス!!」

「ぐっつふうっ!?!」

灼竜が霧散して【焦熱牢】の効果も消失したのだろう――悲鳴を響かせながら上から落ちてきた少女四人に押し潰された。

020. 収穫と勧誘

腹や胸に顔面と、予想外のダメージを受けてもかろうじてHPは残ったのは幸いだっ
た。

プレイして初めての死亡の原因が『女の子達の尻の下敷きになったから』では、この
イベントで手合わせさせた女剣士のカスミや、何より戦って糧となったモンスター達に面
目が立たない。

「ぐも……」

「す、スマン！ 今すぐ退くから——ひゃん!？」

顔を圧迫する尻がビクリと跳ね退き、視界が戻って呼吸も楽になる。

上体を起こすと、炎上ダメージも回復したらしい三人娘と紅顔のミイの姿があり、誰
一人として欠ける事なく死線を潜り抜けた達成感に満たされた。

終始を通して賑やかな体育娘が目を輝かせながら、握ったヨメカワイイの手をぶんぶ
ん振る。

「カワイさん、あの、ウチ……何かこう、凄かったツス！ 凄かったツス!!」

読書感想文なら再提出決定だなあ……と、戦闘による極度の緊張から解放されて心地

良い疲労に襲われる頭で、ヨメカワイイは場違いな事をぼんやり考える。

可能ならばもうしばらくは勝利の余韻に浸りたい。しかし、大きな目標を成し遂げた後こそ気を緩めてはならないのは数多存在する故事成句や諺が証明している——『帰るまでが遠足』の理屈は小学生に限った話ではない。

「さて、これからどうする？」

紅潮した顔を誤魔化すように、ミイが今後の行動の意見を求めてくるのもそのためだ。

溶岩も消え失せ、自然の脅威が鳴りを潜めた大空間。

だが入るのに使った横穴の通路が落盤で塞がった状態なのは変わらず、やはり一行はこの火山のダンジョンに閉じ込められたまま。何時また面倒な仕掛けが作動しないとも限らない以上、悠長に寝転がっている暇があるなら直ちに行動を起こすのが正しい。

「横穴が通れなくなっただのもギミックの一環なら、ここいらを探せば出口もあるよな」
「ボスの住処だったんだ、その可能性は大だろう」

「では私達三人で探してきます。こんな時くらいお役に立たなきや！」

「そうッス！ 家宅搜索開始ッス！」

「レッツゴー」

「あ、こら！ もう少し慎重に……」

ミイが止める前に、三人娘は散開して思い思いの場所を探索し始める。

あちらの窪みを覗き込み、こちらの火山岩をひっくり返し——ちよろちよると忙しく動き回る三人を見てみると、いよいよ遠足か修学旅行の引率じみてきて苦笑が零れちゃう。

奔放なメンバー達にミイは嘆息すると、ヨメカワイイに向き直り頭を下げた。

「……色々と助かった。礼を言う」

「こちらこそ。あの魔力増強ポーションインテリジェンスがなかったら火力が足りなくてやられてたかな」

「それを抜きにしてもだ。私一人ではあのボスに挑んでも仲間を守り切れなかった。思上がった鼻っ柱をへし折ってくれる良い経験になったよ」

演劇めいた尊大な言い回しと、ついでに突然叫んだり走り出したりの奇行も目立つお嬢さんかと思えば、仲間の身を案じ自省もするギルドマスターに相応しい人格だったようだ。そうでなければゲーム内で一、二を争う巨大ギルドを率いるなど不可能か。

最近の子は殊勝なんだなあ、と年寄り臭く考えていると、

「で……だな、実は折り入ってお前に、いや、貴方に提案があるのだが……」

顔を上げた火炎使いはヨメカワイイから視線を逸らし、人差し指を突き合わせてごによごによと口ごもりながらそんな事を言った。その真紅の瞳が灯火のように揺らめ

く。

「もし……もしで構わないんだが、その、我が『炎帝ノ——』

「あつたツスー!!」

流石は女子ソフトボール部、遠くからでもはつきり聞こえる体育娘の嬉しそうな声——おかげで言葉を発しようとして盛大に出鼻を挫かれたミイが、給餌を待つ雛鳥よろしく小さな口唇を開いた状態で固まってしまっていた。

誰も悪くはない。強いて言えばタイミングが悪い。

令嬢娘と不思議娘もそれぞれ収穫があつたらしく報告の声が上がる。

「ん、んっ！……話の続きは、この息苦しい場所から脱出した後にしようか。外に出れば時間はいくらでもあるんだからな」

咳払いで誤魔化し、提案とやらを後回しにするミイだったが、正直その発言は死亡フラグとしか思えずべらぼうに縁起が悪いので止めてもらいたいところだ。確実にミイか自分かあるいは両方がダンジョン脱出を目前に命を落とすパターンである。

ともあれ、まずは三人娘が何を見つけたのか確認しなければ。

「私は素材ですね。灼竜のドロップ品だと思います。それとメダルが五枚」

「メダル五枚……それだけの強敵だったという事か」

鋭く尖った双角の一部に、赤く輝く竜鱗と表皮、極めつけに灼竜の遺志を感じる眼球。

いずれも通常では手に入らない希少な素材だと一目で分かるものばかり——これらのアイテムをどう分配するかは後で話し合うとして、次の報告に移る。

「魔法陣。きつと脱出用」

むふー、と得意げな不思議娘。

どれだけレアアイテムがあっても、出口がなければ結局初期地点に逆戻りだ。そういう意味では彼女の発見が一番大きな成果に違いない。

残るは体育娘だが——

「ふっふっふっ、ウチのは一味違うっすよ?」

意気揚々と体育娘が案内した先にあったのは、ビニールプールほどの穴に溜まった溶岩。

灼竜が消失した後も熱を失わない紅蓮の中に、半ばまで沈む形で安置された物体がある。丸みを帯びたとても見覚えのあるシルエットのそれは、

「……卵?」

「卵だな」

「卵ツス! 英語で言うとなタウAMAGメイGOグオツス!!」

自分が担任だったならば、容赦なく英語の補習と小テストの地獄に叩き落とすであろう体育娘の英語力はこの際無視するとして——彼女の言う通り、茶色と緑のストライプ

柄の固い殻に守られた立派な卵であった。

とりあえずヨメカワイイが膝まで溶岩に浸かり、バスケットボールサイズの卵を回収する。

「うわ、カワイさん熱くないんスカ？」

「ちつとも。さつき取得したスキルのおかげだろうな」



【灼竜喰らいコアトルイーター
シウコアトル】

炎上、氷結を無効化する。

取得条件

灼竜をHPドレインで倒す事。

【灼竜シウコアトル】

灼竜の力を意のままに扱う事ができる。

MPを消費して溶岩魔法を行使できる。

取得条件

炎上無効を取得した上で灼竜をHPドレインによって倒す事。

◆ ◆ ◆
熱を続ける竜の力のおかげで、あれほど厄介に思えた溶岩も今は普通の泥と変わらな
い。

メイプルの代名詞として畏怖される凶悪極まりない【毒竜^{ヒドラ}】と同種の、さしずめ竜属
性スキルと言ったところだが——とにかく今は卵を調べるのが先決か。

別個体の灼竜でも孵化しようものなら、再び戦闘になりかねない。

アイテムとして収納可能だったため、インベントリ内で情報を確認する。



『モンスターの卵』

温めると孵化する。



「……温めると孵化するんだそうだ」

「温めると言うか、溶岩で煮込まれてたツスけどね」

「ならその卵はカワイが持つておくべきだな。もし敵性モンスターが孵ったとしても
シワコアトル
【灼竜】のスキルを持ったお前なら楽に対処できるだろう」

「不発弾でも押し付けられた気分だな……」

せめて友好的なモンスターが誕生する事を願う。

卵の検分も終わり、もうこの空間には何もないと判断して。

五人は魔法陣の光に包まれて、火山ダンジョンの最奥から別のエリアへ移動——転移
先は東西に一直線に伸びる道幅の広い林道だった。両脇に雑然と立ち並ぶ木々によつて、星の河が瞬く夜空が带状に切り抜かれている。

「うひゃー、もうすっかりとっぷり夜ツスね」

「久々に空を見た気がします……」

「空気が美味しい」

ダンジョンの閉塞感から解放され、自然の癒しを堪能する三人娘。

「さて……じゃあ俺もお役御免だな。少しの間だったが楽しかったよ」

「ええー！ 最終日まで一緒にいてくれるんじゃないんすか!?!」

「元々俺はソロでやるつもりだったしな」

そう言つてパーティー設定を解除しようとするヨメカワイイ。

ミイ達と結んだ休戦協定は、あくまで脱出するまでに限られる。それが達成された今となつては律儀に守り続ける義理もないが、かと言つて、イベントの最中だとしても、油断している彼女達を好き好んで討ち取るつもりもない。

幸いにも、ダンジョンで発見したメダルは五枚。一人一枚で都合は良い。素材も山分けにすれば角も立たないだろう。

「……待て。まだ貴方には話がある」

あつさり解散する流れかと思えば、神妙な面持ちのミイに呼び止められた。

まさか、持っているメダルを全て置いていけ——などと要求するつもりもないだろうが、彼女の話がダンジョン内では体育娘に遮られて途中だった事を思い出す。

さて、言い掛けていた『提案』とは一体何なのか。

「命を救われた身で虫のいい話なのは重々承知だが、その上でお願いしたい——」
そこで一度区切り、ミイは小さく深呼吸して、

「——ぜひとも我が『炎帝ノ国』に入団してくれないだろうか！」

021. イベント五日目・嘆く者、企む者、襲う者

運営ルームでの一幕。

「ぬがああああつ!!」【灼竜】もやられた!! てか喰われた!!」

突然のその叫びに、モニターを注視してイベント管理に勤しんでいた他のメンバーもがつくりと肩を落とし、やっぱりか……とでも言いたげに大きくため息を吐いた。

乱心気味の叫びを上げる男が受け持つモニターには、メイプルとサリーに討伐された【銀翼】と並んで理不尽の塊な設定を施した単眼双角の竜が、長身アフロの怪人に殴られ穿たれ、切り刻まれ食い千切られる光景が映っていた。

我を忘れて暴れ狂う巨体と壁に押し潰され、空気すら焦がす鞭のような尾に打たれ、溶け流れるマグマを頭から被り、それでも拘束する鎖に掴まって馬鹿げたスケールの口デオを披露する怪人。

「おいおいマジか、馬乗りになってタコ殴りって……」

「メイプルみたいなイカれたVITじゃあないんだよな? いくら【炎上無効】があるからって物理ダメージまで無効にはできないだろ!? どうやって耐え切ってたんだ!」
「その理由はきつとこれだな」

一人が疲労混じりの声で端末を操作し、別視点からの映像をモニターに流す。空中に投影された四角い窓には【焦熱牢】に囚われたミイ達の姿があった。

「良かった、こっちはちゃんと捕まってくれてる!」

「ちゃんと捕まってくれてるって喜ぶのもどうかと思いますけどね」

「メイプル達やカワイを見た後じゃそう言いたくもなるって……」

「話を戻すが、どうやらミイ達を回復させる事でHPの最大値を上げまくってるみたいなんだわ」

「あー、それであの耐久力か……」

仮にヨメカワイイが単独で挑んだのなら、HPが足りずに敗北していただろう。

しかしミイ達と出会ってパーティーを組んだ事で回復要員——この場合は回復させる対象——を得てしまい、ボスすらも凌駕する異常なHPで耐久のゴリ押しが可能になってしまったのだ。

メイプルとどちらがマシか、などと口にする者はこの場にはいない。

それは『エ○リアンとプ○デター、喧嘩売るならどっち?』と問うのと同義で、常人からすればどちらも怪物に変わりはなく比較しようがないのだから。

「だからあれほど【施しの報酬】にも弱体化パッチ入れるって言ったのに……!」

「第一回イベントの時はペインやメイプルとかにばかり目が行ってたからなあ」

「今から仕様変更しても【灼竜】のスキルは取られちまった後だし」

「そもそも第三回イベントとかギルドホームの実装とか他の仕事山積みだろが！ この上もう一度スキルのテコ入れなんてやらされたら死ぬわ！」

「昨日の今日で弱体化パッチ再びとかクレームの嵐でしようしねえ」

チートでも使用していると言うのなら問答無用でアカウント抹消なのだが、当のヨメカワイイは彼らが心血を注いで作り上げたゲームを極めて健全に堪能してくれているだけ。その点は関しては開発者冥利に尽きるので文句のつけようがない。

頭を悩ませる運営チームを尻目に、怪人と灼竜の戦いは終わりを迎え――

「……………おい、ちよつと待て。誰だ火山ダンジョンに【幻獣の卵】置いた奴！」

その後にはヨメカワイイが拾った卵を見て全員が目を剥いた。

「狐と亀はもうメイプルとサリーのところだし、鳥と狼は【海皇】の場所から動いてない」

「じゃあどうして俺らの知らない卵があるんだ!? つか中身は!?!」

「あの火山は皆二徹目でヒヤッハーしてた時に調整したエリアだから、もしかすると

……………」

「ボツにしたはずの卵のデータを間違えてぶち込んだじゃった?」

「……………おそらく」

東の間の沈黙。

運営ルームに一筋の寒風が吹き、一人が血相を変えながら口を開く。

「やべえ、やべえぞ！ とにかく今回のイベント終わったら即緊急メンテナンスだ!!」

「まあ落ち着け。タイムモンスターの実装自体は年間予定に組み込まれてるんだから、あの卵から何が孵化するか確認してからでも遅くないだろう？」

「今はとにかく第二回イベントを無事に終える事だけ考えろ！」

それが鶴の一声となり、ヨメカワイイの今後の動向について静観が決まる——ただの現実逃避と言ってしまうえばその通りである。

下した判断が吉と出るか凶と出るかは、きつと神のみぞ知る事なのだろう。

リーダー格の一人がパンパンと手を叩いて仲間を飛ばす。

「さあ諸君、仕事に戻ってくれ！ ユーザーの皆様楽しくプレイしていただいて、あわよくばじゃんじゃん課金してもらって我々の給料に還元させるのだ！」

「「「おー!!」」」

「あ、メイプルとサリーとカスミが地底ダンジョンをクリアしました」

「「「う、あああああああつ!!」」」

モンスターの跋扈するフィールドに負けず劣らず、運営側も人外魔境の様相を呈し始めていた。



少しだけ時が経ち。

当然ながら、運営チームの悲喜交々など知りもせず。

悪い意味で注目の的のヨメカワイイはメダル五枚を手中で弄びながら探索に戻っていた。そこにミイや三人娘の姿はなく、単独である。

結局、『炎帝ノ国』に入ってくれないか、というミイの唐突なスカウトは、思うところもあつて丁重にお断りする事にした。

どうせ所属するのなら嫁と同じギルドが望ましく、それにはまず、愛しい嫁を探し出さなければ話にならない。二人で『炎帝ノ国』に移るかどうかはその後だ。

その旨を伝えると、ミイは気分を害した風もなく、むしろ何処か嬉しそうに、『……ならば仕方ないな。一日も早く出会えるよう願っている』

そう言つてあっさり引き下がった。

彼女からすれば、貴重なスキルを持った戦力が一人増える程度の勧誘だったのでろう——組織を束ねる長として増強を図ろうとするのは当然か。

そこから他のギルドメンバーと合流するというミイ達と別れる事になり、火山ダンジョンで得たメダルと素材を山分けしようとした。

しかし――

「まさか全部くれるとは……」

驚いた事にメダルも素材も、そして卵もヨメカワイイの総取りとなってしまうた。

流石に報酬の独り占めはヨメカワイイの気が済まず、人数分あるのだからせめてメダルだけでも均等にすべきと提案――けれど三人娘に『命の恩人だから』の一点張りで押し切られてこの様だ。

純粹な好意で裏表がないのは三人娘の雰囲気から伝わってくるのだが、これでは謝礼が目当てで助けたような形になって釈然としない。

卵とイベント終了後に消えてしまう恐れのあるメダルはともかく、灼竜の素材は保管して何時か彼女達のために使おうと決め、ヨメカワイイは歩みを進める。

ちなみにこれは余談ではあるが、照れ臭そうにフレンド登録を申し出たミイの後ろで、

『ミイ様が自分からフレ登録とか初めてツスね』

『……これは推測なのだけど、きつとミイ様は……』

『ミイ様が何?』

『きつとミイ様はカワイイさんに恋をしてしまったのよ!』

『な、なんだって!?!』

『なんだってー』

『ミイ様のあの反応、間違いないわ』

『いやでも助けられたって言ってもゲームの中ツスよ?』

『ネットゲで知り合った男女がリアルで結婚した話もあるくらいだし、不思議じゃないわ』
『奥さんいるって言ってた』

『妻がいる殿方への叶わぬ想いは日に日に募っていくばかり。彼の心が自分に向いてくれないならいつそ奪い取ってしまいたい……ああ、なんて危険な恋なの!』

『……前から聞こうと思ってたツスけど、いつもどんな本読んでるんすか?』

『颯爽と現れ、己の身を犠牲に乙女を助ける白馬の王子様……』

『ダメツスね、完全に自分の世界ツス』

『白馬の王子様じゃなくてアフロのおじ様』

『とにかく、私達はミイ様の恋を応援するのよ! ミイ様の幸せは私達の幸せ!』

『お、おーツス?』

『おー』

——と白熱する三人娘の密談は、幸か不幸かヨメカワイイにもミイにも聞こえていなかった。

ややこしい事になりそうな未来はすぐそこである。

火山から転移した林道を時折現れる雑魚モンスターを倒しながら北へ直進すると、次第に木々の向こう側から潮の香りと波の音が届くようになる。このまま道沿いに進むとどんな光景が広がるか考えるまでもなかった。

「また海か。今度はもうちよつと楽なボスだと助かるんだがなあ」

思い返せば、ヨメカワイイの冒険は強敵との戦闘の連続だった。

巨大帆船に巢食うヤドカリ、美しい剣技を使うカスミ、倒せたのが奇跡に近い灼竜。カスミはたまたま出会ったプレイヤーなので数に入れなくても、もう銀のメダルよりボスを探していると言った方が適切なのではなからうか。

犬も歩けば棒に当たり、ヨメカワイイが歩けばボスに当たる——全くもって笑えない。

「……そう言えばステータスポイントも振らないとな」



ヨメカワイイ

L v 3 6

HP 1130 / 1130 (+ 530)

MP 1020 / 1020 $\langle +10 \rangle$ 【STR 5 $\langle -50 \rangle$ 】

【VIT 15】

【AGI 25 $\langle +25 \rangle$ 】【DEX 30 $\langle +25 \rangle$ 】【INT 25 $\langle +10 \rangle$ 】

装備

頭 【不死病の束縛帯：鋭敏化】

体 【人面獣心の皮衣：獣性解放】

右手 【罪悪滔天：狩人の執念】

左手 【罪悪滔天：狩人の執念】

足 【人面獣心の皮衣：獣性解放】

靴 【不死病の束縛帯：鋭敏化】

装飾品 【奇術師の指輪】 【絆の架け橋】 【空欄】

スキル

【スプレッドショット】 【フレッシュトスコール】 【ファイアボール】 【ウォーターボール】

【ウィンドカッター】 【リフレッシュ】 【ヒール】

【弓の心得Ⅵ】 【火魔法Ⅰ】 【風魔法Ⅰ】 【水魔法Ⅰ】 【光魔法Ⅱ】 【反響】 【施しの報酬】
 【毒耐性中】 【麻痺耐性小】 【HP強化小】 【MP強化小】 【装填】 【生命転換】 【魔弓の極技】
 【釣り】 【灼竜】 【灼竜喰らい】



HPとMPに振り分け、しばらく見ていなかった自分のパラメーターを睨む。

「シウコートル灼竜」も手に入れたし【火魔法】は破棄するか？ その前にガス欠にならないようMP用の装飾品も……うーむ……」

ここで悩んでいてもしょうがないので、ステータス関連は保留する。

イベントも今日で五日目。所持するメダルは八枚。

折り返し地点も過ぎて、メダルが目標の枚数に達していないプレイヤー達は躍起になって探索と対人戦に励んでいる事だろう。

実際、あちこちの木陰から、隙を窺う視線がちらほらと。

「……【反響】」

九人。

ボソリと呟き、球状に広がる超音波が待ち伏せする人数を正確に教えてくれる。

十分に引き付け、範囲に入ったところで前後から挟んで一斉攻撃、ヨメカワイイが弓を射る暇を与えずに倒そうという魂胆なのだろうが、それが読めている以上馬鹿正直に進む理由はない。

メダルをインベントリに戻し、代わりに使い慣れたアイテムを取り出す。

【跳躍】

未舗装の林道に足跡と蜘蛛の巣状の亀裂を刻み、木々を優に超える高さで数十メートルの距離を一気に跳び越える。

慌てたのは特大の獲物を今か今かと待ち構えていた襲撃者達だ。

「くそつ、バレてた!!」

「追え! 着地したところを狙うんだ!!」

「おい馬鹿止まれ! 足元に何か——」

「うわあああああつ!!」

悲鳴を掻き消す連続の爆発音。

欲に目が眩み『七星爆弾』で吹き飛ばされる哀れな者達。

それを意にも介さず、陽光で煌めく蒼海が広がる崖沿いの道を【跳躍】でショートカットしつつ進み続けると、ついに緑が途切れて巨大な廃墟が姿を現した。

荒れ果てた石レンガの建造物は儀式めいた何かを感じるもので、崖の突端まで伸びた

道の先には祭壇のような場所まであった。

ここまであからさまに『何かあります』と訴える場所だ、他のプレイヤーも足を踏み入れている可能性が非常に高い。

元は外灯の役割を果たしていたらしい石柱の一本に音もなく着地し、慎重に周囲を見回す。

すると、装備の整った男性プレイヤーが三人、こちらに背を向けたまま物陰に身を潜めて何かを狙っているのが見えた。その視線を追うと、少し離れたところに初心者装備のプレイヤーが。

「……やれやれ、初心者くらい見逃してやれよ」

つい先日まで自分もその初心者だった事を柵に上げ、呆れたようにひとりごちる。

今回のイベントではPKされてもアイテムはメダル以外落とさない。とすれば、スキップと言うか小躍りしているあの初心者の少女が狙われる理由は一つだけ。

場に居合わせてしまったからには、見て見ぬ振りも流儀に反する。

「袖振り合うも多生の縁、厄運不運も運の内とー！」

石柱から身を躍らせ、少女を取り囲んだ三名の不届き者に漆黒の影を落とす。

「【ヒートチョッパー】」

血染みの包帯が巻かれたヨメカワイイの両手が一瞬で赤熱化。

スキル【灼竜^{シウコアトル}】によって使用可能となった近接攻撃の真つ赤な手刀が、二人の心臓を背後から防具ごと容易く貫き、仲間が倒れて驚愕する残りの一人の喉元に刺し込まれる。

断末魔の叫びすら上げられずに光の粒と散った三人の末路を見届けて——首を狙って迫る二本のダガーを灼熱を帯びたままの両手で握り止めた。

「ありや?」

「うえつ?」

緊迫した状況の中、互いの顔を見て間拔けな声を出す。

青を湛えた双剣の持ち主は誰であろう、マフラーだけはそのままに、何故か初期状態の出で立ちに戻したサリーだった。

022. 廃墟の謎と、ミケ

多少、面食らいはしたものの。

戦闘の意思はないと直感して、どちらからともなく武器を収め、ヨメカワイイとサリーは改めて予想外の再会を苦笑と共に受け入れた。もつとも、ヨメカワイイの素顔は包帯に覆い隠されていて泣こうが笑おうが外見に一切変化はないのだが。

「メイプル、もう隠れなくてOKだよー」

「はい」

サリーが呼ぶと、半壊したレンガ壁の裏からメイプルが顔を出してこちらに駆け寄る。アホ毛を揺らす少女は相変わらずVIT極振り一途なのか、走る動作にも関わらず日の暮れそうな牛歩だ。

ようやくサリーに合流すると、メイプルは花を咲かせる笑顔でヨメカワイイに向けた。

「カワイさん、こんにちはい！」

「はいこんにちはい。元気があって大変よろしい」

「むふふう……」

挨拶を褒められ、まるで入学したての小学生のように素直に喜ぶメイプル——それを見ていると毒を持つ大型草食獣でも手懐けている気分になる。あながち間違いでもないのが何ともはや。

小学生と言えば、気になる事がもう一つ。

「んで、何だったんだ？ さっきの『サリーちゃんのお遊戯会』みたいな演技は」

「う、っ……!? み、見てたんですか？」

「そのまま、見てたからあのタイミングだったんだし」

「可愛かったよねー！ 普段と違うサリーの意外な一面って感じで！」

「ああもう、あれはさっきと忘れて！ カワイさんもね！」

装備を元に戻したサリーは早口でそう言うと、赤く染まる顔を誤魔化すように、ヨメカワイイに倒されたプレイヤー達が遺していった戦利品を拾う。

てつきりメダルだけかと思っただが、サリーの手には古ぼけた一冊の本。死亡時に落とされたのならあのプレイヤー達の元々の所持品ではなく、このイベントで得た特殊なアイテムなのだろう。

「私達もこれが目当てだったんです」

「それでさっきの『元気いっぱいサリーちゃん』であいつらを罠に嵌めようとしたと」「忘れてっば!!」

サリー、再び赤面。

このネタでしばらく遊べそうだが、これ以上からかうと話が進まないのでも口を噤む。つい思わずあのシーンを録画してしまった事も口を閉じたから話せない。それは仕方がない。

サリーの手にある三枚のメダルを眺めて、メイプルが言う。

「ねえ、メダルはどうしよう。倒したのはカワイイさんだけど……」

「お前さんから二人の分で構わんよ。俺が獲物を横取りしたようなもんだし」

ヨメカワイイが手を下さなくても、あのままサリーが簡単に振り返り討ちにしてははずだ。

「カワイイさんがそう言うなら遠慮なく。それじゃあこの本を読んでみよっか!」

適当なレンガに少女二人が並んで腰を下ろし、その横でヨメカワイイが立ったまま覗き込む。

どうやらよほどの歳月を重ねた古書らしく、開いた本はどのページも文字が認識できなくらい朽ちていたが、たった一ページだけかろうじて文章が成立する文字列が見て取れた。

内容は【古ノ心臓】とやらに関する記述であり、

「……要するに、光ってて水が湧く場所で何かするとダンジョンに行けるって事か」

「古ノ心臓」が何なのかは分からないままだけど、多分そうだと思う」

「水が湧く場所……噴水とか？ マーライオン？」

マーライオンはどうかと思うが、光る小便小僧を連想してしまった手前何も言えない。

三人は同じ方向に目をやる。

廢墟の中央に陣取るように、メイプルの言った通りの大きな噴水があった。

古書の記述に加えて、ああも意味ありげに設置されているのだから——ミスリードを誘う単なるオブジェクトの場合もあるが——調べて何かを発見する可能性は高い。

大噴水の前に立つ三人。

頂点に菱形の赤い水晶を冠する大噴水は枯れ果てて久しく、サリーが受け皿部分に飛び乗っても水音どころか砂を踏み擦る音しかない。

「【大海】！」

サリーの足元から流水が広がり、受け皿を満たす。その光景を目にしてうっかり『漏ら……』と口走りかけたが、彼女の名誉と己の邪心を否定するために、包帯面に拳をぶち込み黙らせる。

幸いにも咄きは聞こえなかったようで、思春期の少女達は淡い青色に輝き始めた大噴水の様子を見守り続けるも、

「あ、あれ……?」

「消えちゃった」

ほどなくして光は失われ、水も受け皿に染み込み消えてしまう。

周囲に並ぶ小さな噴水でも試してみたが、同様の結果を繰り返すばかりでギミックが作動したり何かが現れたりする事もない。

それからしばらくは試行錯誤を重ねたり古書を読み返したりしたものの進展はなく、下手な考え休みに似たり、ならば本当に休んでしまおうと、メイプルとサリーはその場でくつろぎ始める。

安全地帯ではないが、見通しが良いので誰かが接近すればすぐに分かる。

ヨメカワイイも一息つこうとレンガ壁に背を預けた、その時だ。

「おっと……」

「うひゃあ!」

「何なにナニ!」

トレードマーク、あるいは畏怖の象徴とされるアフロが、ぼよんぼよんと暴れ出した。勝手に変形して激しく自己主張する頭髮——突然の怪奇現象に驚くメイプルとサリーだが、当のヨメカワイイは落ち着いた様子でアフロの中に右手を突っ込んだ。

寝起きでむずがる『相棒』を手探りで見つけ、戦々恐々とする少女達の前に引っぱり

出す。

「こいつがいるのをすっかり忘れてた」

人間の顔ほどの二頭身で白い貫頭衣姿、短くて指のない丸っこい手足。

茶色のおかつぱ頭で両目が隠れた、緑の肌を持つ見目愛くるしい人型のモンスター。

火山ダンジョンで見つかった謎の卵を孵化させるために丸一日費やしてしまったが

——明らかに卵生ではないゴブリンが殻を割って鳴いた時は流石に目を疑った。

地面に降ろされたゴブリンの幼体は、飼い主であるヨメカワイイを認識して、犬歯が

覗く小さな口を開いて嬉しそうに、

「ニャー」

と鳴いた。

「……かつ、可愛いー!」

「呼んだか?」

「いやカワイさんの事じゃないでしょ」

即席コンビのボケとツツコミはさておき、庇護欲を誘う容姿に射抜かれたメイプルが叫ぶ。

幼体はその絶叫に驚いて後ろにひっくり返ると慌てて起き上がり、自分のご主人様の黒く大きなレザーコートの中に逃げ込んだ。しかし頭は完全防御の構えでも、尻が全く

隠れていない。

それがメイプルの興奮に拍車を掛ける。

「うわあ、うわあ……！ すっごい可愛い！ 抱っこしても平気ですか!? 名前は!?!」

「とりあえずニヤーつて鳴くから『ミケ』にしてみた」

「ミケちゃん？ ほらー、怖くないよー?」

ふるふる震える尻を指でくすぐって気を引こうとするメイプルに対し、いやんいやんと短い足をバタつかせて抵抗するミケだが、愛くるしさが増すばかりで完全に逆効果だ。

いよいよ鼻息が荒くなる親友の奇行に呆れながら、サリーが助け舟を出す。

「メイプル、余計に怖がらせてどうすんの。それに、その子にばかり夢中になったらシロップがヤキモチ妬いちゃうかもよ?」

「あ、そっか。いけないいけない……」

「シロップ?」

まさかコーヒーやかき氷に使う本物のシロップの事ではあるまい。

ちなみに、ヨメカワイイは何も加えないブラック派でビール味を好み、嫁は苦みがなくなるまで砂糖とミルクを入れる派でイチゴ味を買い忘れると不貞腐れる。

「はい、私のペットなんです！ シロップ、出ておいでー!」

誇らしげな掛け声に呼応して、メイプルの足元に実体化する深緑の甲羅のリクガメ。「じゃあ私も。臙！」

サリーの右肩にも白い毛並みの狐が現れ、小さな炎を吐く。

二人がシロップと臙をタイムでできた経緯を聞くと、氷の山脈の頂にある社の魔法陣から転移したダンジョンでボスを倒し、素材と一緒に卵も見つけたらしい——場所こそ違うが、ヨメカワイイがミケの卵を手に入れた時と酷似した状況に疑問が浮かぶ。

「……今回のイベントはモンスターを仲間にするのが隠し要素なのか？」

「どうなんでしょう？ 私とメイプルが戦った大きな鳥もとんでもない強さでしたし、倒さないとタイムできないなら、誰でもって訳じゃないんじゃない？」

「だよなあ」

ヨメカワイイとサリーが真面目に話す横で。

タイムモンスター同士仲良くなったのか、それとも単に追われて逃げていただけなのか、ミケがシロップ、臙と一緒にお互いの主人の足の間を走り回りながらじゃれ合う。その様子を輝かせて鑑賞するメイプルは今にも鼻血を出しそうな恍惚の表情だ。

「うふ、うふふふ、もう私ずつとこのままでも良いかも……」

「それはちよつと、困るかなあ」

束の間の休息を挟んで。

古書も含めてまだまだ謎の多い廃墟をこのまま去るのは惜しく、サリーと話し合い五日目を全て使つて順番に探索する事となつた——そうやって強引にでも動かさなければ、メイプルがその場に根を張つて本気で残り二日をペットを眺め続けて終えそうな氣配だつたのも理由の一つである。

サリーにとつても、相方が不動の岩も同然になつてしまつては困るのだから当然か。

「じゃあまずはメイプルね。いつてらっしやーい」

「……ねえ、もつかいジャンケン！ 三回勝負にしない!？」

「そう言つてやり直してもう五回目だろうが……」

「ひーん」

公正な手段によつて一番目選ばれたメイプル。

シロップを伴つてとぼとぼと、哀愁さえ漂わせながら離れていく黒い鎧の背中——数歩進んでは立ち止まつて未練がましくこちらを振り返り、また数歩進んでは振り返る。

あの調子では順番が一巡する前にイベントが終わりかねない。

「さつさと行くー!」

「うえーん! サリーとカワイさんのいじわるー!」

尻を叩かれ、愛亀を頭に乗せたアホ毛娘は今度こそ探索に向かう。

後ろ髪を引かれているせいでスローモーシヨンのような歩みはさらに鈍く重くなり、

姿が完全に見えなくなるまでたっぷり十分は要した。

「大丈夫かね」

あの大盾少女が誰かにやられてしまう心配とかではなく——そんな超次元の怪物が潜んでいたら三人はとづくに全滅の憂き目に遭っている——あれだけ上の空な状態で探索に身が入るのかという意味を込めて隣の娘に問う。

「まあ……多分？　でも頼まれた事はちゃんとやってくれるから……」

そう言いつつ、サリーも自信なさげに首を傾げるだけだ。

せめてメイプルが戻ってきた時に喜んでくれるよう、臍の揺れる白尾にもふもふされて夢心地なミケの動画でも撮影しておこうかと録画モードをオンにした直後に。

「たっっだいまー！　何もなかったよー!!」

「はっつやっ!?!」

一体、何処をどう調べたのだろうか。

023. お味はイカが？

最初にメイプルが五分と経たずに戻り、サリーにこつびどく叱られた以外は、特に大きな問題や変化も起こらず探索役の順番は巡り続けた。

一人が廃墟内を回っている間に、残った二人が本を読み返して謎解きを進め、他にもペット達が戯れる様子を——主にメイプルのために——動画に収める。本については最後のページに意味深な絵が描いてあったが、残念ながら力及ばず解明には至らない。

そうして太陽に代わり月が夜天で輝き、日付も変わるうかという頃。

何度目かの巡回に出掛けた堅牢鉄壁アホ毛娘からメッセージが届く。

『風水がビジャーツと悲観出る！ 歯やクキ手！』

……何のこつちゃ。

新居の間取りに問題があったのか、はたまたトイレのウォシュレットが壊れたか。そしてそれを直そうとしたら歯が折れて手首が捻挫して悲しいのか。医者行けよ。

サリーと顔を見合わせ、慌てて打ち込んだらしい謎のメッセージの解読を試みる——『風水』が噴水を指しているとするなら、あの大噴水まで行けば状況は把握できるだろう。残りはまだ諦めて本人に聞くしかない判断。

ミケと朧を連れ立ってメイプルの元に駆けつけると、

「あ、来るの遅いよー!」

「遅いって、メイプルが送ったメッセージが無茶苦茶だったからでしょうが!」

「そんでメイプル……どうして大噴水が光ってたんだ?」

メイプルが二人を呼び寄せた理由は尋ねるまでもなかった。

何を試してもうんともすんとも反応がなかった大噴水と三つの小噴水が、水も注いでいないのに一齐に光り輝いている。これはあれか、噂に聞くツンデレとやらか。

第一発見者のメイプルも首を傾げるばかり。

「分かんない。私か来た時にはもう光ってたんです」

「もしかして……」

サリーが青いパネルを空中に表示させ、納得がいったのか軽く頷く。

「やつぱり、六日目の午前零時だ。きつとこの時間だけ噴水が輝く仕組みなんだと思う」

「道理で昼間に色々やつても無駄だった訳だ」

「じゃあ、今受け皿に水を入れれば……」

「うん、可能性は高いんじゃないかな。やってみるね!」

そう言つて、日中と同じように受け皿に飛び乗ると、

「【大海】!」

今度は漏らしたとは思わないし口にもしない。

満たされた大噴水はその輝きを一層増し、サリーの推測と行動が間違いでないと神々しい姿で証明する。しかし、発光は強くはなったが【大海】の水はまた全て吸収されてしまう。

条件をクリアするためにはまだ足りない要素があるに違いない。

その要素が何なのか、最初に思い至ったのはメイプルだ。

「ねえ、きつと小さい方にも水を入れなきゃ駄目なんじゃない?」

「そっか! あ、でも噴水は全部で四つ……今一回使ったから【大海】は残り二回。使い切ったら再使用まで一日待たないとだし、どうしよう……」

……とにかく全ての受け皿を満たせばいいのであれば。

「二人とも、ちよつと噴水から離れてろ」

「カワイさん?」

「こういう時くらい役に立たないとな。【装填】【ウォーターボール】」

水属性のスキルならヨメカワイイも覚えている。

一発一発の水量はたかが知れていて【大海】のそれとは比ぶべくもないが、五倍、十倍と数さえ用意できるなら話は別——本来は大人数のパーティーでなければ不可能な芸当を、苦楽を共にして何度も助けられた心強いスキルによって強引に実現させる。

「フレッシュトスコール」

水弾の雨が噴水目掛けて降り注ぐ。

「ぎゅっところんなもんだ」

「おー、お見事」

十分な水量を得た事で小噴水の輝きが直視できないほどに強くなり、三方から伸びた光を受けて大噴水の頂点にある赤い結晶がふわりと宙に浮かび上がったかと思えば――光を集めるだけ集めて破裂するように砕け散り、赤い星屑となって消えてしまった。

「……………」

「……………」

「……………えーと、これだけ?」

拍子抜けしたメイプルがぼつりと言った直後。

静寂を貫いていた廃墟中に何か崩壊する音が轟き、大噴水とメインストリートで結ばれていた崖の突端にある祭壇が消えて、その跡地に白く光る魔法陣が現れた。

音が止むのを待ち、ボスモンスターがいきなり現れたりしないか確認し、用心に用心を重ねつつ魔法陣に近寄る三人。

崖下に広がる海原がぱつくりと左右に割れ、全てを飲み込まんと底なしの闇を見せつけている。

「うわー……すつごい不気味」

「私も飛び降りてみる勇氣はないなあ……」

「なら道は一つだな」

まるで死地へ誘うように背後で待ち構える魔法陣。

「ここまで来て回れ右をする選択などあるはずもなく、光の輪の中に足を踏み入れた三人と三匹は暗い海底へと転移した。」



「真っ暗だね」

「上から見たあの穴の中なのは間違いないみたいだけど……」

「——【反響】」

無限に続く闇などものともしない超音波が、直線に伸びる半円の通路を暴き出す。

「トラップやモンスターの気配はなし。このまま真っ直ぐだな」

「索敵に便利なスキルよね、それ。何処で手に入れたんです？」

「教えてもいいが、弓装備じゃないと無理だと思うぞ」

サリーがインベントリから出したカンテラを受け取り、ヨメカワイイが先頭になって

進む。

その気にさえなれば、【灼竜】シウコートルの魔法の一つを使って副次効果でカンテラ以上に発光する事も可能だが——光量に応じて熱も放出する上、テーマパークのパレード並みに派手になるのであまり他人の目があるとこころでは使いたくない。

「これ、時間切れで水没しちゃったりとかしないよね……?」

海水で作られた壁を短刀の先で突きながら、メイプルが縁起でもない事を言う。

「どうだろな。もしこの先にボスがいるなら、少しくらいは時間も余裕があるとは思うが……」

「宝箱だけ置いてあつて制限時間内に取つて脱出、とかだったら逆にのんびりしてられないよね」

絶対に水没などしないと断言できない以上、さつさとこの海中トンネルから移動してしまおうと三人が徐々に早歩きになる。

水が迫つてきそうな気がするので後ろは振り返らない。

ちよつとしたウォーキング、あるいは指名手配犯がやむを得ず交番前を通る時のような足運びでせかせかせか進み続けると、珊瑚の装飾が施された大扉が一行を出迎え、辺りが一気に明るくなった。

本に記されていた文章の一端を思い出す。

「勇敢ナル者ヨ、魔ヲ払イテ、青ク静カナ海へ……だっけ？」

「ボス戦は決定ですね」

「じゃあ早く行こうよ！」

意気揚々と大扉を開けようとするメイプルだったが、

「待ってメイプル。どんなボスか分からないし、念のため朧とシロップを【休眠】させなきゃ」

「おっと、それもそうだ！　ありがとサリー！　シロップ、ちよつと待っててね！」

「朧も休んでてね」

シロップと朧の身体が光に代わり、少女達が嵌めた指輪に吸い込まれていく。

急に友達が消えたミケは慌てて周りを見渡して、自分だけになったと理解するとヨメカワイイの背中を急いでよじ登り、定位置であるアフロの中に潜り込んでしまった。

「カワイさんはミケを戻さないんですか？」

「……戻し方を知らないんだよ」

「えっと、レベルが上がると【休眠】と【覚醒】ってスキルを覚えるはずなんですけど……」
残念ながらミケはそんなスキルは覚えていない。孵化させたばかりでレベルはまだ1なのだ。

仕方なくミケをアフロに隠したまま、大扉を押し開く。

ボス部屋の内部はさながら大規模なアクアリウムといった感じだ。ヨメカワイイが灼竜と戦った火口に比べたら半分ほどの面積だが、ドーム状の天井は高く、魚達が優雅に泳ぎ回る周囲の海中もボスのテリトリーなのだと思えば非常に厄介か。

「来たよ、上!!」

サリーが叫ぶのと同時に、吸盤のある触手が何本も天井を突き破って現れる。

紺碧の中に浮かぶその巨大なシルエットは、

「イカあ!?!」

「もしかしてカナデが言ってた奴!?!」

「カナデって誰だ!?!」

「ルービツクキューブの杖持つてるオセロが強い子!」

「なるほど分からん!」

三方に飛び退き、襲い来る触手をそれぞれ迎え撃つ。

メイプルの大盾が触手を飲み込み、サリーの二振りのダガーによって両断され、ヨメカワイイの爆弾矢が肉片に変える。だが、いくら攻撃してもイカにダメージが通った様子はなく、触手自体も時間経過で何度でも再生してしまう。

「これって本体を直接じゃないとHP減らないのかな!?!」

「【ウインドカッター】!」

サリーと合わせて風魔法を放つも、この場所は海底だ。大量の海水による水圧で風刃は防がれてどうしても憎たらしいイカまで届かない。みそボンに攻撃しようとしているようなものだ。

と、
さあどうしましよと前後左右上下から迫る触手を躲しながら攻略法を模索している

「う——うわわあああっ!!」

「っ!? メイプル!!」

「だあーいじよーおぶー!!」

二人が攻撃を中断したために残るメイプルにターゲットが集中し、五、六本の触手でぼんぼんとジャグリングされ始める。そんなところのプレイヤーなら撫でられただけで即死の攻撃を受けて無傷どころか楽しんですらいるのだから、改めてアホ毛娘のVITの高さに驚くやら呆れるやら。

ともあれ、メイプルが注意を引いてくれている間にダメージを与える方法を考えなければ。

「私が行きますー!」

「はい行つてらっしやい!」

スキルに「潜水X」と「水泳X」を持つサリーが水に飛び込み、巨大イカに連撃を浴

びせる。

イカのHP自体はそこまで高く設定されてはいないらしく、エフェクトで輝く双刃の猛攻により早くも一割近く削られた——しかし、攻撃を与えた事でターゲットが変更され、メイプルを地面に叩き落とした触手群が水中から戻ったサリーに殺到する。

「カバームーブ」！ 「カバー」！

すかさず親友の前に瞬間移動し、攻撃をその身に一手に引き受けるメイプル。

大盾も使わずにノーダメージなのは見慣れたのもうツツコまない。けど何だ「AG I 0」なのに瞬間移動するって。

ヨメカワイイも棒立ちで置き物と化しているつもりはない。

「火山弾」！

唯一自在に泳げるサリーを援護するために、伸ばした右手に紅蓮の魔法陣を展開し、ドーム内で暴れる触手に高熱を帯びた二メートル級の岩塊を撃ち込む。

当然、攻撃対象がヨメカワイイに切り替わる。

ミケがアフロから振り落とされないうように細心の注意を払いながら触手を避け続ける
と、

「ヒドラ毒竜」！

今度は真横から紫の三つ首竜がイカゲソに食らい付く。

各自が役割に専念している限り、巨大イカをある程度思い通りに行動させてハメ殺しができる。

しかし、これはお世辞にも最善手とは言えない。何しろこちらのパーティーのダメー
ジソースが完全にサリー頼りなのだ。

そのサリーが触手から逃れてメイプルの背後に回る。

「気を付けて！ パターン変わったよ！」

「うん、分かった！」

HPが七割まで減ったイカの周囲に魔法陣がいくつも出現し、魚が次々に召喚される。

魚類なのだから水中は言うに及ばず、ヨメカワイイ達がいるドーム内に入り込んで空
中まで泳ぐ生態不明の魚——今度は何だ、魚群リーチか？

「ああもう面倒臭い！ メイプル！ サリー！ 当たったら後で謝る！」

パーティーメンバーなので巻き込まれても問題はないと思うが、一応念のため、二
人に断りを入れてから片膝をついて両腕を地面に押し当てる。

「【インフェルノオーラ】！」

岩石すら触れずに溶かし流す灼竜の熱気が全身から発せられ、それを浴びた空中の魚
群が一瞬で全身を沸騰させながらぼとぼと地に落ちていく。流石に冷たい海水に守

られた魚や巨大イカには効果が薄い、それでもほとんど大半は無力化できたのでよしよし。

「うっわ、えぐ……」

「蒸し焼きになっちゃった」

「言ってる場合じゃないぞ。おかわり追加だ」

魔法陣からはまだまだ魚が溢れ出てくる。

「よおーし、今度は私が！ 【毒竜】！」

再び迫る魚群をメイプル十八番の毒魔法が飲み込み溶かし——そのままプールに飛び込む夏場の子供よろしく、頭から水の中に突っ込んだ。

「あ」

「い」

「う」

三者三様の声上がる目の前で。

ボスにすら致命傷を与える猛毒の竜の身体が崩れ、水にほんのりと紫色が加わる。海水と毒液の比率から考えて毒性は多少は薄まっているだろうが、サリーを泳がせるにはリスクが高過ぎる。

ローテーションが狂った三人を嘲笑うように魚が増える。

新たな魚群は体当たりする個体と謎の液体を吐く個体とに分かれ、水に入れなくなつてドームの内周を並走するサリーとヨメカワイイを追い回す。メイプルは相変わらずお手玉状態だ。

「どうしようどうしようどうしよう!?!」

「メイプル、もう撃てる【毒竜】^{ヒドラ}全部海に溶かせ！ 効くか知らんが水攻めならぬ毒攻めだ！」

「は、はい！ サリー、【悪食】も使うけどいいよね!?!」

「こうなつたら仕方ないよ！ 思いつ切りやつちやつて！」

「よしてきたあ!! 綺麗な海をー、毒の海にー!!」

メイプルは弄ばれながら短刀を海中に向け、

「【毒竜】^{ヒドラ}！ からのお——」

短刀を一旦鞘に納め、万物を喰らう大盾で触手を薙ぎ払い、無限再生するボスの肉を齧り取る。

やはりHPは削れない。

「でもって、もつかい【毒竜】^{ヒドラ}！」

今度は斜め上の水中に向かつて放つ。

海に撃てとメイプルに言ったのはヨメカワイイで、それを後押ししたのはサリーだ。

なので毒が海中を侵蝕しようとしてまいと指示に従ったメイプルを責めるつもりはないが、しかし、その結果がこれではあまりに惨い仕打ちではなかるうか。

「うおおおおおっ!?!」

「メイプルの馬鹿あ! 毒! こっちに毒降ってるからあ!!」

「あわわわつ、ご、ごめーん!!」

水面——水壁にぶつかった衝撃で飛び散った【毒竜^{ヒドラ}】の猛毒の液が、運悪く魚群からの逃走劇でマラソン中だった二人を頭上から襲う。

ヨメカワイイは【毒耐性中】の恩恵で、サリーは持ち前の超反応で避けて無事だった。代わりに二人を追っていた魚群が毒の雨に打たれる災難を被って消滅する。

「し、死ぬかと思った……!」

「そのセリフはまだちよつと早いな! 【装填】【火山弾】——【スプレッドショット】!」
終わった気であるサリーに対し、噴石の拡散矢を背後に撃ちながらヨメカワイイは叫ぶ。

蹴散らしても、焼き尽くしても、切り刻んでも。

触手と魚群は次から次へと再生と補充を繰り返して途切れる素振りを見せない。

地面に点在する毒液と謎の液体を跳び越え、思い出したようにすぐ横の水壁から突き出す触手を仰げ反って潜り抜け、小賢しくも正面に回り込んできた魚群を三枚下ろしと

焼き魚に調理する。

そうして毒流しと耐久マラソンを続け早二時間——部屋の異変に真っ先に気付いたのは、地面に仰向けに寝転んで触手攻撃をマツサージ代わりにしていたメイプルだった。

「……やっぱり気のせいじゃない。大変だよ！ この部屋狭くなってきてる!!」
「だよね!? 一周する間隔が短くなってる気がしてたもん!」

一党の活動可能な範囲が真綿で首を絞めるようにどんどん縮小し、逆にイカスミを吐いて巨体をくらましたボスの領域が広がっていく。空気のあるエリアが狭まり続けられ、ばいずれは全てが海水に支配され、メイプルとヨメカワイイは元より、サリーも最大で四十分しか生きられない。

黒色が薄れて本体を視認できたのを転機に、三人は攻勢に移る決断をした。

「メイプル、カワイイさん、準備はいい?」

「こっちは何時でも」

「私も大丈夫だけど……ホントに上手くいくのかなこれ!?!」

まずは邪魔な魚群を一度全滅させてから。

サリーは仁王立ち、ヨメカワイイは黒弓を錨弓に換装し、肝心要のメイプルは大盾を保持ったまま錨弓の長柄部分に鎖で縛り付けられている。運営がこの光景を見ていて編

集で今の三人それぞれに効果音を加えたとしたら『ドン! ドン! チーン……』だろう。

方法としては至極シンプル。

巨大イカを釣り上げて、こちらのテリトリーまで接近したところを一斉攻撃するのだ——馬鹿な作戦だと笑うなら笑え。同じ景色の中を延々と走り回っていれば馬鹿にもなる。

「大物を狙うには、使うエサも奮発しないと」

「そういう事。それじゃあ作戦開始だよ!」【跳躍】!」

「舌噛むなよメイプル!」

「あびやびやびやびやびやびや!」

高く跳び上がったサリーを目印に、ヨメカワイイが鎖を余分に伸ばした錨弓（メイプル付き）を豪快に振り回して投擲。

「よ……つと!」【背負い投げ】!」

錨弓（目を回すメイプル）を受け取ったサリーはさらに水面付近までぶん投げると、

【衝撃拳】!」

彼女の拳から空気の圧縮砲弾が放たれ、それにより爆発的な推進力を得た錨弓（『へええ』と情けない声のメイプル）が水面を突き破ってイカに迫る。

グロッキー寸前でもド根性で大盾を手放さなかったメイプルが渾身の力を振り絞り、HPバーをこつそりと奪い取った。

勝負はここから。

錨弓（いよいよ吐きそうなメイプル）がイカの本体にがつちりと食い込んだのを確認し、鉄鎖を巻き取りながらヨメカワイイとサリーの二人掛かりで引つ張る。

ただの綱引きならば巨体を誇るイカに敵うはずもない。しかし、海に溶けた毒の継続ダメージと今のメイプルの一撃で残りの体力が危険域に達した海底の主は最後のパターン変化を敢行、二人に引つ張られるがまま、むしろ自ら安全圏を捨てて猛スピードで海中から飛び出した。

その身に魚群と同じ青いエフェクトを纏わせながら。

「最後は特攻か。触手は頼んだ！」

「お任せあれ！」

研ぎ澄ませた集中力で恐怖を踏み越えたサリーが、直撃を紙一重で躲しイカの真下に滑り込む。

「パワーアタック！」　「トリプルスラッシュ！」　「サイクロンカッター！」

幾筋も進む連撃と風刃で邪魔な触手全てが根元から綺麗に両断され、ついでとばかりに本体にも無数の切り傷を加える。

文字通り手も足も出なくなり、胴体部分での押し潰し以外の術を失ったイカ。

こうなつてしまえば、ボスであろうとまな板の上の魚介類——凄腕職人手ずからの下ごしらえが完了したなら、刺激的な調味料もろとくと万物を焼き尽くす加熱調理グマが待っている。

「いけるなメイプル!? 腹いっぱい食らわせてやれ!!」

「ふあい! 頑張りましゅ!!」

巨大海鮮食材にびったり密着した——と言うより離れられない——メイプルが短刀を突き刺して紫毒の魔法陣を描き、落下予想地点から動かないヨメカワイイの足元にも灼熱の魔法陣が輝く。

「【毒竜】ア!!」

「【灼竜】!!」

「アフロが燃えた!?!」

漆黒の刃先より溢れる腐毒の三頭竜が内側から食い荒らし。

燃え盛るアフロから顕現する単眼双角の灼竜が焦熱の大顎で焼き千切る。

毒と熱の相乗効果で原形が失われるまで肉を融解させられ、紺碧の海に君臨していた軟体動物の命はついに完全に滅び尽きた。



水壁の侵食も止まり、毒も浄化されて海底に平穏が戻る。

サリーが海を泳ぎ回って討伐報酬を探す。けれど見つかったのは触手一本だけ——あのサイズであれだけ苦労したのにメダルもなしでは大ハズレも甚だしいが、三人は一縷の望みを賭けて青色の転移魔法陣に乗った。

転移先はまたしても海中だった。

「ふばほもべばほばばほばほっ!」

「落ち着いてメイプル、息できるから!」

サリーの言う通り、呼吸は問題なく行える。本当に魚にでもなった気分だ。

「不思議なもんだな、水の感触も浮力もあるのにこうやって話ができるってのは」

「そう言えばカワイさん! さつき頭が燃えてましたけどミケちゃんは平気なんですか

!」

「ニャー?」

メイプルの問いに答えるように、アフロの中からミケが顔を出す。

ゴブリン種特有の緑の柔肌には火傷や焦げた跡はなく——何処で手に入れたのか水中ゴグルとシユノーケル、足ヒレまで装着した、完全にマリンスポーツを満喫するつもりで格好だ。

ふよふよぐるんぐると緩やかな流れに弄ばれるミケ。それを逃さず録画するメイプル。

楽しそうな一人と一匹を放置して、ヨメカワイイとサリーは【青ク静カナ海】で珊瑚に守られた青い宝箱を発見。中にはメダルが三枚と巻物が三本入っていた。

「メダルは一人一枚で分けるとして、この巻物は……」

「えっと、スキル名は【古代ノ海】か。取得条件は水系スキルを覚えている事であの変な水を吐く魚達を召喚するだって。うわ、やっぱり【AGI 10%減】だったんだ。浴びなくてよかった」

「AGIが減らなくても魚の吐瀉物なんざ浴びたくないがな」

どうあれ取得しておいて損ではないので、サリーとヨメカワイイは巻物を開いて【古代ノ海】の光のエフェクトが自身の身体に吸い込まれていくのを眺める。

メイプルもダメ元で巻物を使ってみるが、水系スキルを覚えていないので何の反応もない。

「むー、私だけ仲間外れ。【毒竜^{ヒドラ}】だって液体なのにー！」

「いやいや、あれは水属性には分類できないでしょ……」

「使えたとしても、ほとんど大半のモンスターやプレイヤーはお前さんより速いままだぞ、多分」

「うぬー！」

敵がある程度素早くても、広範囲に毒や麻痺を撒き散らせるメイプルなら対処は容易だ。

それすら躲せるサリー並みの回避能力を持つ相手だとしたら、そもそもルーチンで自動追尾する魚達如きに不覚を取とは思えず、どの道メイプルが得意とする受け身の戦法では「古代ノ海」が助力になる機会は乏しいだろう。

ヨメカワイイは適当な扇珊瑚をベッド代わりにして寝転ぶ。ミケはまだまだ泳ぎ足りないらしくアフロに戻ろうとはしないが、モンスターのいないこの場所なら目を離しても平気だ。

「……俺はしばらく寝る。パーティーは抜けてあるから、二人で移動するならそうしてくれ」

大噴水の仕掛けを作動させた時点で午前零時。巨大イカとの長丁場を耐え抜いた今、深夜より日の出直前と言った方が適切な時刻。

脳が休息を求めている以上、無理に徹夜するのも馬鹿馬鹿しい。

「だつてさメイプル。私達はどうしよつか？」

「うーん……？　じゃあさ——」

手招きする睡魔にうつらうつらと誑かされていると、身体に軽い衝撃——目だけ動か

して何事か確認すれば、左右に伸ばしたヨメカワイイの両腕をメイプルとサリーが枕代わりにしていた。

ゲームの中だとしても、最近の若者は異性と一緒に寝るのにこうも抵抗がないのか。

「えへへ、皆で川の字だねー」

「これじゃ川ってより木の字だけどね」

「……………」

自分でも知らぬ間に疲れが溜まっていたらしい。何か言う気も起きない。

もう夢の中に片足を突っ込んでいるのだと思う事にして、両手に毒花と剣花のこの状況、絶対に嫁には知られませんようにと願いながら眠りに就いた。

024. 女帝の片鱗

体感で五、六時間。

自分でも驚くほどすつきりとした目覚め。しかし隣に嫁はいない。

遊び疲れたミケが顔面に貼り付いて唾液を垂らし、想像以上に寝相が悪いメイプルが少し離れた珊瑚の枝に逆さ吊りで熟睡していた以外は問題らしい問題もなく、魔法陣を使用して三人と一匹は崖の上に帰還する事ができた。

背後には廃墟、眼下には海原。

大噴水の輝きは失われ、海面の大穴も埋まって元の風景を取り戻している。

「六日目の午前中かぁ。結構寝ちやったね」

「そだね、おかげで体調はばっちりだけど。カワイさんはこれからどうするつもりですか？」

「さあてなあ、特にあっちに行こうそっちに行きたいって予定はないが……」

現状、メイプル達は二人で十八枚、ヨメカワイイは九枚。

総数三百枚の銀のメダルが全て発見されてしまっているとは思わないが、それでもフィールドに隠されている枚数より他のプレイヤーが持っている枚数の方が多いと考

えるべきだ。

メダル十枚で景品一つと交換だから、金のメダル所持者を除いて最大三十人。

三枚でも五枚でもなく、きつちり十枚集めないと単なるイベント記念品に過ぎず——残り一日と十数時間しかないとなれば、メダルが目標数に足りていないプレイヤー達がいよいよ目の色を変え殺気立ち始める頃だろう。

しかし、悪い展開ばかりではない。裏を返せば、序盤で強奪や紛失を恐れて身を潜めていた輩が表に出てくるという事でもある。

自分の考えを伝えると、サリーは頷いて、

「やっぱり、今からだと未発見のダンジョンを探すよりプレイヤーを狙った方が……」

「メダルが手に入る可能性は高いだろうな」

これはあくまでヨメカワイイ個人の意見だ。

惰眠を貪る直前にメイプルとサリーのパーティーからは抜けているので、PKメインに移行するかどうかは二人で話し合って決定してもらうしかない。メイプル達にはメイプル達なりの楽しみ方があるのだから、偶然合流しただけの自分が偏った考えに誘導するのは間違いに思う。

「メイプルは平気？ 対人戦大好きってタイプじゃないでしょ？」

「そうだけど……でもカワイイさん以外のプレイヤーには結構襲われたし、私もやる時は

やるよ！」

ふんすつ、と意気込むメイプル。

率先してPKに精を出す好戦的な性格ではない。けれど、前回イベントで初心者ながらも第三位の座に輝いた実績から分かるように、必要とあらば他者への攻撃も一切躊躇わない思い切りの良さは頼もしさすら感じられる——思い切りが良すぎて危険物のテナトウムシまで食すのだから、何事も時と場合によりけりかも知れないが。

「それじゃあカワイイさん、私達はあっちの山に行つてみます」

「色々と助けてくれてありがとうございました！」

「こちらこそ楽しかったよ。最終日まで気を抜くなよ？」

「カワイイさんもね！」

方針も固まり、行き先も決まったメイプルとサリーはヨメカワイイに礼を述べ、手を振りながら北北西に見える山岳地帯に向かって歩き出した。

遠ざかる二人の背中を見送り、アフロの中の相棒を顔の前に引つ張り出す。

「じゃあ、こっちはお前のレベル上げでもしようか？」

「ニャー？」

ヨメカワイイに右足を掴まれ、逆さまのまま首を傾げるミケ。

イカとの戦闘では終始アフロに隠れて参加せず、ヨメカワイイも指示しなかったた

◆ ◆ ◆
め、経験値が得られずレベルは孵化直後からまるで変化がない。

◆ ◆ ◆
ミケ

Lv 1

HP 130 / 130

MP 110 / 110

【STR 10】

【VIT 15】

【AGI 50】

【DEX 40】

【INT 60】

スキル

【眷属召喚】

◆ ◆ ◆

HPとMPが他より秀でているのはヨメカワイイのステータスが反映されたからか。それ以外は可もなく不可もない能力値。

スキルの【眷属召喚】は名の通りゴブリン種を召喚して味方にするのと推測できるが、そうなるとミケ自身の直接攻撃の手段が殴る蹴るくらいしかない。完全にサポート型のパートナーだ。

手の掛かる相棒を肩に乗せ、ヨメカワイイは踵を返す。

「せめてお前の友達みたいに【休眠】と【覚醒】だけでも覚えないな」

「ニヤー、ニヤニヤー」

廃墟の周囲は海と森。

五日目の道中で狩ったモンスターの強さから考えて、自分が攻撃してダメージを稼ぎ、とどめをミケが刺せば経験値はミケに入るはずだ。もっと効率の良い方法を探すのはイベント終了後にも計画するとして、攻撃系のスキルを覚えるまではこの繰り返しでお茶を濁すしかない。

【跳躍】

廃墟を後にして宙を飛び、獲物を探す。

途中、数組のパーティーに遭遇するも、ヨメカワイイの特徴的な黒衣を見て慌てて逃

げ出すのがほとんどで、臨戦態勢に入った一党はミケに相手にさせるには格上だったため、上空からの爆撃と火砕流で容赦なく消し飛ばした。メダルはなかった。

「お、あれとかいいかもな」

そんなこんなで見つけたのが、緑の装甲を持つイモムシ型モンスター。

メイプルの粗悪劣化版のような、見るからに防御と耐久に特化したタイプ——それが今は手頃で丁度いい。ミケのレベルを上げるためには、ヨメカワイイの一撃で死んでもらうては困るのだ。

錨弓に持ち替えて数回殴ると、イモムシのHPバーは数ミリを残して赤色に明滅する。

「よしミケ、とりあえず攻撃」

「ニャー！」

ぼてぼてと柔らかな足音を立てて、やる気に満ちたミケが満身創痕のイモムシに急接近。

攻撃とは命じたものの一体どうするつもりなのかと観察していると、ミケは付近に転がっていた太い枝を両手で持ち上げると、一心不乱にイモムシを殴り始めた。

方法としては原始的でもダメージには繋がっているらしく、イモムシのHPは少しずつ、ほんの少しずつ減少していき、二十数回目の殴打で光と消えた。

良い運動になったぜ、とばかりに額の汗を拭うミケ。

ゴ布林らしいと言えばゴ布林らしいが、ゴ布林だからこそやはり弱い。HPがギリギリで動けない敵を相手に何度も殴らないと倒せないのでは、万全の敵に挑んだら返り討ち必至だ。

「まあ、誰にでも適材適所があるわな」

別個体のイモムシがりポップするのを待ち、今度はスキルを検証する。

「ミケ、【眷属召喚】」

「ニャー」

大声で叫ぶのか、それとも角笛でも吹くのか。

RPGのコマンドで言うところの『なかまをよぶ』系のスキルだろうと思い、何処からゴ布林がやって来るのかとちよっぴりワクワクしながらヨメカワイイは待つ。

しかしミケはその予想を裏切って叫ばず笛も吹かず、着ている貫頭衣の中から小さな小さな旗を取り出すと、はいこれ、とでも言うように己の主人に手渡した。

お子様ランチのチキンライスにでも刺さっていそうな、手作り感満載の旗。



『小鬼族の召喚旗』

使用するとゴ布林種のモンスターをランダムに召喚できる。

一度召喚に成功したクラスのモンスターは任意に選択し召喚可能。

召喚したモンスターは一時間で消滅する。



「どうやら、この【眷属召喚】はミケがゴ布林を呼ぶのではなく、ゴ布林を呼べるアイテムを生成するスキルらしい。紛らわしいスキル名だ。

「しかしアイテム……爆弾と同じ消費型のアイテムか……」

「ニヤァ?」

「いや、何でもない」

とりあえず『小鬼族の召喚旗』を地面に刺してみると、旗を中心に魔法陣が展開し、その中から棍棒を持った緑の肌の矮躯が十体現れた——どれも敵性モンスターとしてフィールドにポップする見慣れたゴ布林ばかりで、ミケのような外見だったら囿や肉壁にできないけどどうしようというヨメカワイイの心配は杞憂に終わる。

召喚されたゴ布林達は、ただじつとヨメカワイイとミケを見る。

「……………攻撃？」

試しに二代目イモムシを指差して命令を下すと、十体のゴブリンが一斉に攻撃を開始した。

「ニャー！」

「お前は行かなくていいの」

自分も命令されたと勘違いしたミケの頭を掴んで止め、途切れる事のない棍棒の殴打を眺める。

二代目イモムシが体当たりで反撃し二、三体がダメージを受けたものの、一対十、多勢に無勢の数の暴力には敵わない。すぐに初代の後を追う事になった。

同時にミケのレベルが上がったため、ゴブリン達が倒したモンスターの経験値は全てミケに入る仕組みになっているようだ。



ミケ

L v 2

HP 180 / 180

MP 160 / 160

【STR 15】

【VIT 20】

【AGI 55】

【DEX 50】

【INT 80】

スキル

【眷属召喚】【見様見真似】



ステータス上昇やスキル獲得は自動なのか。

その後も何回か召喚を試みて検証した結果、弓を装備したゴ布林アーチャー、剣と楯に鉄兜のゴ布林ソルジャー、祈祷師装束のゴ布林シヤーマンなど、アイテムの説明に記されていた通り様々なクラスのゴ布林種がランダムで現れた。

要するにゴ布林ガチャだ。

召喚したゴ布林達はHPが0になるか一時間経過で消滅。そして現在、困り顔のヨ

メカワイイとミケの前には綺麗に整列する緑の軍勢が。

「どうすつかね、これ……」

「ニャー……」

調子に乗って召喚し過ぎた。

強さと数は反比例するのか——最弱クラスの棍棒持ちゴブリンならば『小鬼族の召喚旗』を一個使用して一度に十体召喚、そこから上位種になるほど九体、八体と、一つの魔法陣から現れる数が減らされていく。最上位種ともなれば一個の召喚旗で一体が限界だろう。

ともかく、この大所帯をどうしたものか。

自動消滅するまでぞろぞろと引き連れて行動するのも馬鹿げている。

「よし、お前達！ この道をまっすぐ、まっすぐ進んで敵を見つけたら攻撃しろ！」

「ニャー！」

ご命令はまだかご命令はまだかと目を輝かせていた小鬼の群れが咆哮し、ヨメカワイイが適当に指し示した道を土煙を上げ猛進していく——これであの一団は制限時間が来るまでロードワークを続けるだろう。不運にも狙われたプレイヤーやモンスターにはご冥福をお祈りするしかない。

「お達者でー」

「ニャーニャー」

ゴブリン軍団を無責任に解放したヨメカワイイとミケは、気楽な二人旅を続けるのであった。



「……おい」

「うああああつ！ 言うな！ 今は何も聞きたくないし見たくない！」

「気持ちに分かるが見なきゃ始まらないぞ」

「何が孵化するかと思ったら、よりもよつてだもんなあ。しかも飼い主があのカワイって……」

「てか、どうしてあれのデータなんて保管してたんだ？」

「うう……せつかく作ったんだし記念にと思って……すんませえん！」

「問題は、あそこからどうなるかだよな。メダルのスキルや第三回、第四回イベントもあるし」

「場合によっちゃフィールドがゴブリンで埋め尽くされるぞ」

「とにかく監視と管理を怠るなよ！ 特にメイプルとカワイの!!」

無垢な魔王が誕生するかも知れない状況に、運営ルームは戦々恐々としていた。



個体名：ミケ

種族名：小鬼女帝

ゴブリンエンプレス

025. 最終日・殲滅劇とメダルスキル

再び大所帯にならないよう、召喚する数は慎重に制限しつつ。

手足として申し分ない多種多様なゴブリン達の貢献により、ミケのレベルはさしたる問題もなく順調に上がり続け、待ち望んだ【休眠】と【覚醒】、第五のスキルとなる【擬態】を覚えた。

説明欄にはこう記されている。



【擬態】

周囲の風景に紛れ、同化する。

攻撃を受ける、または戦闘態勢になると解除される。

この効果は眷属にも適応される。



相も変わらず直接攻撃を覚えないうサポート一筋のスキルばかりだが、ここまで徹底しているならそれを突き詰めてくれた方が面白いし、何より戦略の幅が広がる。

非力なキャラは弱い——そんな前時代的な誤った方程式は決して成り立たないのだ。だからこそヨメカワイイはミケが役立たずなどとは毛ほども思わず、むしろ最高の相性だと考えている。

その真価が他のプレイヤーにとって恐ろしい形で発揮されるのは、もう少し先の話。「誰とも遭遇しないな——」

「ニヤ——」

とうとう最終日となったイベント七日目。

六日目を利用したミケのスキルの検証とレベル上げがとりあえず一段落したため、一人と一匹は回転草が砂塵混じりの風に弄ばれる荒野を当てどもなく彷徨っていた。

前後を見ても左右も見ても、まるで干ばつにでも襲われたかのように、乾き切った倒木や獣骨が横たわる荒れ果てた大地が延々と続く。砂に足を取られてしまう砂漠地帯よりかは歩きやすいのがせめてもの救いか。

単に巡り合わせが悪いだけなのか、それとも目論見が外れたか、この荒野に足を踏み入れてからモンスターばかりで他のプレイヤーと一向に出会わない。

ミイやメイプルとサリーは、もうメダルを集め終わつただろうか——イベント終了の時刻まではまだ半日以上あると言つても、油断すればすぐにタイムアップだ。

せつかく九枚まで集めたのだから、どうせなら十枚揃えたいのが人情というもの。

「ミケ、【見様見真似】」

「ニャー！」

暇潰しにミケに指示を出す。

この【見様見真似】はヨメカワイイのスキルをミケがランダムに使用するもので、当たり前外れは激しいが、ミケのステータスならば初級魔法でもそこそのダメージが期待できる。

残念ながら、今回選ばれたスキルは【跳躍】だった。

「ニャアアアアアアアアアアツ——！」

ロケット花火よろしく真上に射出される二頭身。

見上げる先で芥子粒サイズまで小さくなったと思えば、

「——アアアアアアアアアア、ニャツ！」

ある程度の高さまで達したところで一気に急降下——地面直前で受け止めると、短い空中遊泳を楽しんだ本人は興奮に目を輝かせていた。そして何かを訴え掛けるように、指のない丸っこい手で荒野の先を指し示す。

折しも砂煙が吹き荒れたため、ヨメカワイイの目では判別がつかない。

「……？ 面白そうなものでもあったか？」

「ニヤーニヤー！」

「なるほど分からね。なら……【跳躍】！」

はてさて、心強い相棒は一体何を見つけてくれたのやら。

距離にして一キロあるかないか——砂風を矢のように裂いて一直線に跳び進むと、ミケが上空で発見した『面白そうなもの』の詳細が次第に明らかとなる。

「お手柄だ、ミケ」

「ニヤウ」

ミケの顎の下をくすぐり、包帯の下に思わず笑みが浮かぶ。

眼下で繰り広げられていたのは、探し求めていた大規模な対人戦だった。

遮蔽物に乏しい乾き切った褐色大地で刃が交わり、魔法が咲き乱れ、負傷と回復のエフェクトがそこかしこで光り輝く——少なくとも見積もっても百人単位が参戦し入り乱れる鉄火場だがその流れの方向は一定で、円の外側から内側へ、プレイヤー達が我先にと殺到しているように見える。

こうなった原因は、おそらく中心部にいる誰かが知っているはず。

宙を滑る慣性そのままにレーザーコートのコートを裾をはためかせ、戦場へ着弾さながらに降り

立つ。

「マグマゲイザー！」

「うわあああああああつ?!」

魔法陣が浮かぶ右掌底を打ち込み、ヨメカワイイの正面、扇状の範囲から地を割って噴き出した赤熱の波濤が逃げ遅れた不運な一団を飲み込んでいく。

突如として空から現れた黒衣の闖入者に、ある者は獲物が増えたと喜び、ある者は慎重に武器を構え直し、ある者はその人物がヨメカワイイだと知ると青褪め叫ぶ。

「か、カワイイだああああああつ!!」

「はいその通り、ではさようなら。【装填】【火山弾】——【フレッシュトスコール】」

神話の災害を模したような火球の礫が降り注ぐ。

戦闘の混乱に加えてこれだけ密集状態になると逃げるに逃げられず、魔法やスキルによる防御が間に合わなかったプレイヤーの死亡エフェクトが散る。

中心部には、助ける結果となったオーダーメイド装備の男の大盾使いと、パーティーメンバーと思しき三人が疲弊した様子で、それでも二本の足でしっかりと立っていた。

挨拶代わりに「ヒール」で彼らのHPを回復させると、大盾使いが油断なく構えながら、

「どうして俺達を助けてくれるんだ……?」

「聞いてる場合か？　まだ助かってないだろうが」

「それもそうだ、なっ！」

大盾を背後に回して見事に奇襲を防ぐ。

体勢を崩した敵に追撃するかと思いきや、それは仲間任せ、「カバームーブ」や「カパー」を駆使して堅実な壁役に徹する——この戦場のど真ん中で生き残っていられるのも、リーダーを担う彼の奮闘によるところが大きいに違いない。

「攻撃を止めるだけじゃなくて受け流してんのか。器用なもんだ」

「誰と比べたか想像はつくが、これが本来の大盾の戦い方だからな！　「シールドアタック」！」

「ウインドカッター」

ノックバック効果の一撃で弾き飛ばされた斧使いを風の刃で両断する。

だが流石にこれだけの大人数ともなれば、戦意を削がれる以上に反撃に燃えるプレイヤーの方が大半を占めるようで、じりじりと距離を詰められて包囲網が狭まっていく。

人垣の向こうで襲撃者同士の怒号と剣戟が続いているのは、戦域が広くなり過ぎたために事態を把握できていないからか。

「どうしてこんな愉快な事になってんだ？」

「最初はパーティーが何組か、俺の持つてる金のメダルを！　狙って襲って来たんだけ

どなー！」

敵意で彩られた魔法の数々を捌きつつ、大盾使いが言う。

「何をどう嗅ぎつけやがったのか、次から次へと新手が増えてこの大騒ぎだ！ 漁夫とハイエナが殴り合っつてもう誰が敵で味方か俺にも分からん！」

強者に奪われたのか、運に恵まれなかったのか。

最終日を迎えて焦りが頂点に達し、銀のメダルを見つけ出すのは残り時間的にも間に合わないかと判断した連中ばかりなのだろう。だからこうも一様に宝を求めて殺気立っている。

しかしメダル狩りが目的なのはヨメカワイイも同じ。

羽虫を狙うのに夢中の蛙は、鎌首をもたげて見下ろす大蛇に気付けない。

大盾使いと背中合わせになり、爆弾を矢に「装填」する。

「改めて、クロムだ。噂の人物と共闘できるとは光栄の至りだが、頼むから後ろからズドンなんて真似は勘弁してくれよ!」

「心配すんな、男の尻を狙う趣味はない。「スプレッドショット」！」

包囲網の一端を食い破るその爆撃が、蹂躪劇の始まりの合図となった。

「【ヒートチョッパー】」

溶鉄よりさらに熾熱を帯びる両の五指で、プレイヤー達を防具や武器諸共に焼き裂い

ていく。

ゲームの定石として、遠距離職は耐久力の低さと不得手な近接戦闘が短所とされるが——まさか弱点である白兵の間合いに猪突する怪人がいるとは想像していなかったのか、慌てて後退する者と前進しようとする者との移動が阻害され、迎撃すら行えずに光の粒と化す。

「くそっ！ 弓使いのはずだろ!? 接近戦も得意とかそんなんありかよ?！」

「おっと、こっちも忘れてもらっちゃ困るな! 【炎斬】!！」

「ぐあっ!?!」

負けじと炎を纏う短刀で致命傷を与え、仲間の三人に檄を飛ばすクロム。

「カワイに続くぞ!! 一人残らず初期地点に叩き返して、くれてやるメダルなんざ一枚もないと教えてやろうじゃねえか!!」

「「おう!!」」

どれだけ数が集まろうとも、所詮は統率など皆無の烏合の衆。

各自がそれぞれの思惑で武器を振るっているが故に、ヨメカワイイとクロム達が反撃に転ずると途端に保身を優先する——たかが五人の抵抗など、最低限の連携さえ取れていれば人数差で圧倒し押し潰せただろうに、仲間意識の薄さが命取りとなっているのだった。

「パワーブレイド！」

「サイクロンカッター！」

「ダークジャベリン！」

「氷剣」！ ……くそつ、意気込んでみたはいいが、やっぱり手が足りないな！」

「じゃあ手を増やそう」

ご要望にお応えして、ヨメカワイイはインベントリ内にストックしていた『小鬼族の召喚旗』を一掴み分取り出し、紙吹雪のように正面にばら撒いた。

旗が触れた地点で無数の魔法陣が輝く。

「骨も残すな、『ゴブリンカーペンター』！」

現れた人型のモンスターは、通常のゴブリンよりも背が高く、引き締まった体軀をしていた。

その数、およそ十五。

右手には鮫の牙を思わせる刃が並ぶ巨大な鋸、左手には赤黒い油脂で腐食した大金鎚——職人と呼ぶにはあまりに凶々しい風体の集団に、クロム達ですら顔を引き攣らせる。

「おいおい、今から砦でも建てようつてののか？」

「まさか。こいつらは建築じゃなく解体屋だよ。生きてる奴専門、特に人間のな」

左右の凶器を高く掲げて打ち鳴らし、肉と骨を裂き砕く感触に飢えたゴブリンカーペーター達が視界に入ったプレイヤーを手当たり次第に攻撃し始めた。

「ぎゃあ!？」

「な、何だこのモンスターは!?! 何処から出てきやがった!?!」

「結構強いぞ! 気を付けろ!」

今現在ヨメカワイイが召喚可能なゴブリン種の中では中の下程度の強さだが、死を全く恐れない彼らはこの戦場では実力以上の脅威となる。

事実、レベルやステータス、装備でも勝っているはずなのに、雑魚と侮っていた緑の肌の魔物に気圧された臆病者達が順番に餌食となり、赤いエフェクトを散らして姿を消す。

ゴブリンカーペーターの参戦に気を取られたその隙をヨメカワイイが見逃すはずもなかった。

「ミケ、【見様見真似】!」

「ニャー!」

「灼^{シッポアトル}竜!」

幸運にも——そして敵にとっては不運にも——今回のミケは大当たりを引いた。

阿鼻叫喚の地獄に目覚めしは、単眼双角を持つ二匹の魔竜。

大地を揺らす咆哮のアンサンブルが眼球を焼き、肌を刺し、喉を焦がす——灼熱を全身に浴びた哀れなプレイヤーの一人が、最期に小さく口を開き、

「化物……」

その言葉と共に、荒れ狂う竜体になす術もなく焼き尽くされた。

竜の顕現を目の当たりにして、欲に眩んだ全ての者が本能で理解する。

ああ、自分達はここで絶滅させられるのだ、と。



半日後。

「お前が来てくれて本当に助かったよ。俺達だけじゃメダルを奪われてた」

「気にすんな。俺は俺の狙いがあつて喧嘩に首突っ込んだだけだ」

あの荒野にいた敵を全滅させて。

ついに十枚目となる銀のメダルを手に入れたヨメカワイイは、九死に一生を得たクロム達と共に終了時間まで身を隠し続け、イベント開始前にプレイヤー大集結していた第二層の町に無事帰還を果たした。

金のメダルも守り通したクロムやパーティーメンバーに何度も礼を言われていると、

三十分後にメダル交換のための転送が行われると運営からアナウンスがあった。

「さて、ようやくお待ちかねの時間か」

「そうだな。どんなスキルがあるのか楽しみだ」

クロム達ともフレンド登録して別れ、適当なベンチに腰を下ろし——そこではたと気付く。

「……嫁いたらどうしよう」

思わずテンションが上がって男も女も片っ端からぶちのめしてしまった。

嫁も参戦していた場合は、ヨメカワイイが原因でメダルを失っている事になる——もしかすると死ぬ前に逃げ出して生き残った可能性もあるが、浮かぶのは悪い想像ばかりだ。

沈んだ気分になっていようとアナウンス通りに転送は始まり、出口のない部屋に飛ばされる。

部屋の中には青いパネルが一つ浮かび、聞いた事のないスキル名がずらりと並ぶ。

「いぎ」一つだけってなると悩むな……」

強いて挙げるなら、MP回復係のスキルか。

新たな主力である【灼竜】シウコウトルの魔法は存外MPの消費が激しい。それを【装填】ライフコンバートを使って同時に何発も大量にばら撒くのだから、【生命転換】で補うにしても、燃料となるMP

はどれだけ余分にあっても困らない。

百はあるスキル一覧を指でスクロールしつつ考えていると、とあるスキルに直感が囁いた。

「……これにするか」

スキルを決定し終わるとヨメカワイイの身体が光に包まれ、部屋は再び無人となった。



「やっと終わった……」

「いやいやハードだったなあ」

「海皇がメイプルとサリーとカワイのトリオにやられた時はどうなるかと思ったけどな……」

プレイヤー達の長かった七日間は、当然それを見守る運営達にとっても長い七日間だった。

メダルを十枚以上持つプレイヤー全員がスキル交換を終えた事を確認して、運営チームの面々は精も根も尽き果てたとばかりにモニターの前でだらりと力を抜く。

「あー……そう言や、そのメイプルは何のスキル取ったんだ？」

「……………」

メンバーの一人が黙って一つの映像を指差す。

そこは砂漠の上空で、要監視人物リストの最上位に君臨する黒鎧の少女が、宙を浮く巨大な亀の背中に乗って楽しそうに毒の雨を降らせる異様な光景が流れていた。

何だあれは。何なのだ、あれは。

「……………」

「……………見なかった事にしとけ」

「チェックは入れた、考えられる限りの修正もした。それであの結果です」

「サリーは無難な戦闘スキルだったのに、どうしてメイプルだと予想の斜め上になるんだ？」

「もう俺達の常識が通用する領域じゃねえのは確かだろ……」

「こうなると、カワイの選んだスキルを聞くのが怖いな」

「ああ、それなら【修羅道】を取ってたぞ」

「【修羅道】お？ あんなの、モンスターハウスにでも迷い込まない限り役に立たない——」

そこまで言ったところで、疲れ切った声が止まる。

黒衣の怪人がこの第二回イベントで何を、いや、誰を手に入れたのかを、メイプルの空飛ぶ亀の衝撃映像で麻痺していた頭が思い出した。

あの純真無垢で可愛い緑の魔王の存在を思い出してしまった。



【修羅道】

自分の半径十メートル以内にモンスターが十五体以上存在する時に自動発動する。発動中、与ダメージ五割増。

HPが0になっても一度だけ全回復で蘇生し、十分間HP、MP以外のステータスが二倍になる。

蘇生効果およびステータス倍加効果は、一日に一度だけ発動する。



「「「……………やっべえじゃねえかあああつ!!」「」」

やはり運営の苦労は終わらないのだった。



ログアウトして時計を確認すると、本当に二時間しか経っていなかった。

あれだけ濃密な七日間だったにも関わらず、現実では日付すら変わっていないのだから、改めて最近のテクノロジーには驚かされてばかりだ。

座りっぱなしで強張った身体をストレッチで解していると、

「…………ふぁー」

ソファに並んで座っていた嫁もどうやらログアウトを選んだらしく、気の抜けた声を出しながら二代目ハードを取り外した——かと思えば、こちらの顔を見てほんの少し硬直して、次の瞬間には肉食獣のような俊敏さで床に押し倒されていた。勢いで後頭部をぶつけてかなり痛い。

「んうんうんうんうんうっ！」

「何なにナニ？ どした？」

馬乗りになった嫁は胸板に顔を押し付け、ひたすら左右にぐりぐりぐり。

怒っているとも、喜んでいるとも、恥ずかしがっているとも取れるその様子に、ヨメ

カワイイもどうしたら最適解なのか分からず、されるがままだ。

やがてマーキングにも飽きたのか嫁は顔を上げると、熱い吐息を漏らしながら、柔らかな肢体を全て使ってヨメカワイイの頭部を抱き締める。

ずっと隣にいたのだから『おかえり』も『ただいま』もいらぬ。

胸から伝わる心音の中、嫁の声が届く。

「ずっとゲームして……汗、かいちゃったね」

「……そうだねえ」

「もつと……汗かいちやうかもね」

「……だったら風呂に入らないとな」

このあと滅茶苦茶一緒に風呂に入った。

026. 依頼

七日間にも渡る大冒険を繰り広げようと、興奮冷めやらぬ様子の嫁を風呂で愛でようと、そして我に返り悶える彼女を布団の中でさらに羞恥漬けにして弄ぼうと、翌日が世間一般で言うところの平日であり職務に従事しなければならない日である事に変わりはなく。

若者達の進路と賃金のために、時差ボケにも似た眠気を堪えてチヨークを走らせる。ゲームでは適当な雑草や木の枝でも売れば金になるのに、現実とは世知辛い。

「それじゃあ次の問題を、本条……………本条おー?」
いつもなら元気に返事をするはずの本条楓から応答がない。

板書した数式から視線を移すと、窓際に近い席で、力なく机に突つ伏した本条の姿が——急病か何かかと内心焦るが、ゆつくりと規則的に上下する小さな背中を見てその考えを蹴り飛ばす。

楓え、楓ってば、と隣席の女子がペンで突いて起こそうとするものの、本条が微睡みの世界から覚醒するよりヨメカワイイが彼女の席まで歩み寄る方が早く。

「……………ん、んうー……………もう見張りの時間? ……あれ?」

伸びをして、それなりの声量で珍妙な寝言を放った本条とぼちちり目が合う。

泣く子が黙るところか失禁確実と学生時代から定評ありの睨み——睡魔で凶悪度三割増し——を利かせると、ようやく自分が何処にいて、今が何の時間なのかを思い出したらしく、お寝惚け娘はバネ仕掛けのように背筋を正した。

「……本条」

「は、はひっ……」

「そんなに見張りがしたいなら、廊下でも見張ってるか？」

「が、頑張つて起きてましゅー！」

「そうしてくれると先生も嬉しいなあ」

あの白峯でさえ起きているのに本条が一限目から居眠りをするとは、珍しい事もあるものだ。

数時間後——職員室で同僚の体育教師から聞いた話によると、昼食後の体育の授業でも、本条はいきなり何か叫ぼうとして顔面にボールを食らったらしい。

白峯ならともかく本条が、と妙齢の体育教師（女性で未婚）も不思議がっていたが、やはり他の教師にも普段からそう思われている白峯にこそ、話し合うべき問題があるような気がしてきた。



第二回イベント終了から数日後。

今日も今日とてログインしたヨメカワイイは、二層の町で好奇の視線を浴びていた。

ゲーム内の大きな変化とさえ言えば、防御貫通スキルに対抗するスキルの実装と、各階層でギルドが購入し所有できるギルドホームの解放の二点が挙げられる。

対抗スキルについて特に思うところはない——そもそも馬鹿げたHP量に任せて基本的に防御が二の次になっているヨメカワイイには、通常攻撃スキルも貫通スキルも正直大差ないのだ。

「メイプルやクロムみたいに防御力メインなら取ってただらうけどな」

「ニャー」

一方で、ギルドホームに関しては大手ギルドも含めた皆が購入しようと躍起になっている。

そのためには新たに実装された光虫と呼ばれるモンスターを倒すとドロップする『光虫の証』を入手する必要がある、有限な上に光虫のランクや種類も豊富なおかげで、場所にもよるが、最近の主な狩り場はよりランクの高い光虫を狙うプレイヤーでごった返しているのだった。

ただし高ランクの『光虫の証』を手に入れても購入権を得ただけで、正式にギルドホームとして登録するには多額の代金を支払なければならない。

その額、最低ランクで五百万也。

まあ一人で買うようなものでもなくステータスアップ効果もあるとなれば、オーダーメイド装備五人分の資金をギルドメンバーで出し合うと考えて妥当な価格設定なのだろう。

一つ、予想外だったのが――

「……まさか俺にも勧誘が来るとは思わなかった」

「ニヤァ……」

拠点が解放された事で、各ギルドが本格的にメンバー集めを開始したらしい。

まずは『炎帝ノ国』の三人娘からギルドホームに遊びに来ないか、ミイ様も会いたがっている社交辞令付きのメッセージが届き、続いてメイプルからもギルドを作ったので良かったらどうかと勧誘のメッセージ。他にも町を歩いていて知らないプレイヤーから声を掛けられる事がしばしば。

三人娘やメイプルはともかく、いきなり『俺達のギルドに入ってください!!』と辻斬りならぬ辻勧誘されるので、大学の頃、背が高いからとやたらしつこくて面倒だったバスケ部やバレー部のサークル勧誘を思い出してしまった。

「まいどー」

「あら、まいどー」

「ニャー」

「ふふっ、ミケちゃんもまいどー」

扉を開けると、ゴーグルを着けたイズがいつものようにカウンター奥で出迎えた。

イズ工房二号店とでも言うべきか——二層にも看板を上げた彼女とも、爆弾の販売や素材採集の護衛の依頼を受けた縁もあつてすっかり顔馴染みとなっていた。

女性の知り合いが増えると、フレンド欄を嫁に見られた時にややこしい事になりそうだ。

だがイズ以上に腕の立つ生産職プレイヤーをヨメカワイイは知らないし、今後出会ったとしても乗り換えるつもりはない。大量購入すると割引してくれるからという理由もあるにはある。

「その様子だと大人気みたいね？」

「勘弁してくれ。ここに来るまで何度呼び止められたか……」

「今は仕方ないわよ。掲示板にだって『第三回イベントからはギルド対抗戦が増えるかも』なんて書き込みが増えてるくらいだし、ソロプレイで有名な貴方を仲間にしたがるのも当然でしょ」

「ついこの前までは近寄ろうともしなかったのに、現金なもんだ」

「ちなみに私はメイプルちゃんのギルドにスカウトされちゃいましたー♪」

「いやもう知ってるし」

世間話もそこそこに、取引を始める。

モンスターからドロップした素材をイズに売却し、金銭は受け取らず、その金額分値引きされた特製爆弾や発煙弾、珍しい品物では衝撃を与えると強烈な光を放つゴルフボール大の水晶玉などをいくつも買い込む。

「売ってる私が言うのもおかしい話だけど、爆弾はまだ必要なの？ 第二回イベントの最後の方で出した……えーと何だっけ、あの赤い竜のスキル」

【灼竜^{シワコアトル}】

「そうそれ。見た感じメイプルちゃんの【毒竜^{ヒドラ}】並みに強力なスキルでしょ？ あれを使えるならわざわざ攻撃用のアイテムを買わなくても問題ないんじゃない？」

「ボスの固有能力か、ダンジョンのギミックか——何かの拍子にこっちのスキルが封印されるかも知れないだろ。それに、俺だけが使うって訳でもないしな」

「まだまだ検証と実験を繰り返している段階だが、形になればさぞかし面白い事になるだろう。」

「もう一つ頼んでいた品は？」

「ああ、それなら——」

イズが近くの戸棚から何かを取り出そうとした時だ。

入口の扉が押し開かれ、誰かが店内に入ってきた。

一瞬メイプルかと思ったが人目を引く黒の重鎧ではなく、『New World Online』では典型的な魔法使いの格好——赤いローブを前を開けて羽織った少女のプレイヤーだった。

被ったフードの中から流れる赤茶色の三つ編みと、半月型の縁なし眼鏡。

装備や髪型で多かれ少なかれ自己主張するのがプレイヤーの性分だが、彼女の場合は整った顔をキャンバスに、右頬から左こめかみにかけて燃え盛る炎の刺青が特徴らしい特徴か。

「いらつしやいませー、どんな装備をお求めでしょうかー？」

「あ……すみません、お店じゃなくてその、そっちの人に用があるんですけど……」

「ん？ 俺？」

「ニヤー」

唐突な指名にヨメカワイイは首を傾げ、アフロの中のミケがずり落ちそうになる。

イズの店なのに、武器の作成でも素材の買い取りでもなく、偶然その場に居合わせた単なる客の一人でしかない自分に用があるとは。

「ここならカワイイさんに会えるって噂になつてるので……」

「どんな噂だよそりゃ」

「あら、知らなかつたの？」

疑問に答えたのは、何故か納得したような顔のイズだった。

「屋根の上を跳び回ったりして何処かに消えちゃう貴方が唯一、うちの店には定期的なアイテムの補充に来るでしょ？ 特に最近はギルドの勧誘目的の冷やかしが多くなつちやつて、私もすっかり参つちやつてるのよー？」

「とか言つて、俺が来る時間帯を教えるのを条件に、武器を割高で買わせたり入手が面倒な素材を採りに行かせたりしてゐるんだろ？」

「うふふ……やつぱり分かる？ かなりの黒字でもうホントに参つちやうよ」

「そりゃ結構ですコト」

「そうでなければ、客でもない者に店の中をうろつかれてイズが平然としているはずがない。」

ほんの少し、雀の涙ほど抱いた罪悪感を心の中のゴミ箱に丸めて叩き込み、会話に割つて入れず置いてけぼりにされている若い魔法使いの前に立つ。

ヨメカワイイからすれば大概の人間は見下ろす形になる——こちらの顔を見上げる彼女の背丈はメイプルより高く、知り合いの中ではサリーかミィと並ぶ。だから何だと

言えばそれまでだが。

「ギルドの勧誘とかなら、残念だけど他を当たってくれないかな？」

「ち、違います！」

少女は慌てて否定する。

「勧誘じゃなくて、私の依頼を受けてほしいんです！」

「依頼？」

ヨメカワイイとイズの声が揃う。

プレイヤーがプレイヤーに依頼する。別に珍しい事ではない。

攻撃手段に乏しい生産職の大半は、戦闘職に買い物ついでの護衛や素材調達の『お使い』を頼む場合が多く、イズもその中の一人だ。

しかし戦闘職が戦闘職になると、話は少し変わってくる。

パーティーを組んでの狩りが目的なら、人の集まる場所で標的にするモンスターや条件を流して募集すればいいのに、何故わざわざイズの店を訪れてまで自分に依頼したがるのか。

「実は私、二層に来たばかりで……どんなモンスターがいて、どんなアイテムがあるのか、色々と分からない事も多くて。だから案内してくれそうな強い人を探してたんです！」

「探すくらいなら攻略系の掲——」

——示板でも見た方が早いんじゃないか。

そう言おうとした瞬間に、後頭部に鍛造用のハンマーが深々とめり込んだ。

町中はPK禁止エリアでダメージはないが、それでも首が傾ぐ程度の衝撃はある——そんな凶器をぶん投げた女店主は、カウンターの奥でこやかに微笑みを浮かべたまま、片手に収まるサイズの藍色のケースを見せつけるように揺らして、

「あらあらー？　これは一体何かしらー？」

「おいおい……」

あからさまに脅迫してきた。

こうなってしまうとヨメカワイイに拒否権はなかった。

027. スイーツと杖

多数の戦闘職が行動拠点を二層に移せば、当然ながら、趣味が高じて一層で店を構えた職人達も客を逃すまいと大枚をはたいて二層に看板を掲げようとする——中央広場から伸びる道沿いにあるこのオープンカフェもまた、絶品の甘味に舌鼓を打てるとしてリピーターの胃袋を掴み、新天地に軒を連ねる事に成功した名店の一つだ。

だが今、店の前を通る人々の物珍しそうな視線は店長がオススメするスイーツの写真で彩られたメニュー看板ではなく、向かい合って座る一組の男女に向けられていた。

「お、美味しいですね……？」

「……………」

「……………」

魔法使いの少女の前には、黄と橙が鮮やかな柑橘類のタルトと適温に保たれた紅茶。

美味しいと感想を述べる割に口調は弱々しく、腕を組み沈黙を続けるアフロの顔色を——包帯で見えないが——ちらちらと窺うばかり。そして何の返答も得られないと、握っていたフォークさえ皿に戻してついに閉口してしまう。

楽しそうな雰囲気は一切感じられず、別れ話を切り出す直前のカップルか、または万

引き少女とそれを捕まえた店員のような、ギスギスとした緊張感が二人の間には漂っている。

そこに果敢に突撃する者が、一人だけ存在した。

「お待たせ致しましたー」

ワゴンを押す、ヴィクトリアンメイドスタイルののほほんとした女性店員だった。

サービスピ精神に溢れた女中姿のプレイヤーは針のむしろのような空気を物ともせず、営業妨害に近い存在となりつつあるヨメカワイイの前に注文の品を置く。

ふつくらと焼き上がった生地の上にチョコソースで目鼻が描かれ、生クリームと各種フルーツがこれでもかとおんだんにトッピングされたフアンシーな一品。

「こちら『森のくまさんと可愛いなかまたちのにぎやかパンケーキセット』でございますー
す」

——ぶふっ!?

半月眼鏡の魔法少女も、運悪く居合わせて戦々恐々としていた他の客達も、空気やらケーキやらコーヒーやら、口の中にあつたものを危うく噴飯しそうになり、必死に歯を食い縛る。

「こちら紙エプロンですのでお使いくださいー」

聞き間違いか、それとも注文ミスか。

どちらにせよ、何らかのリアクションを起こして彼の視界や耳に入りでもしたら、フィールドでいきなり背後から撃ち抜かれるのは確実だ。最善の策はさっさと料金を支払ってこの場から足早に退散する事だが、怪人と同席の少女を残して逃げるのがとても罪深く思えてしまい、尻が座面から離れようとはしなかった。

そんな漢気のある勇者達の苦勞など知りもせず、

「お飲み物はいかがなさいますかー?」

あろう事か、女中プレイヤーは機嫌が急降下中に違いない危険人物に対し、追加注文はないかと営業スマイルを微塵も崩さずに尋ねた。

もうPK禁止エリアだろうが関係ない。

誰もが怪人の手で血祭りに上げられるメイドの姿を想像して、いざとなれば全員で力を合わせて止めに入らなければと、互いに目配せして領き合う客達の間奇妙な結束が生まれる。

ヨメカワイイは差し出されたメニュー表を一瞥すると、

「……………これ」

怒りを押し殺したような声音で、とあるページを指差した。

やらかしメイドは黙って領けばいいものを、そういう規則なのかも知れないが、よりにもよって大声で受けたオーダーを復唱してしまう。

「はいっ、『つのうさぎさんのしあわせフルーツコーヒー』ですねー？　かしこまりましたー」

「……………ぷびゅっ」

魔法使いの少女の堰がついに決壊し、今度こそ男共は結束して逃げ出した。



何故かいきなり客の大半が帰ってしまった。

まあ、リアルでもゲームでもじろじろと不躰な視線に晒される場合が多いので、店側には悪いが少し閑散としていた方がヨメカワイイは気分が落ち着いて好きだった。

それはさておき、今は目の前の少女が笑ってくれた事に安堵する。

「流石に狙い過ぎたか？」

「え……………？　あつ……………！」

ようやくヨメカワイイのちよつとした悪戯心に気付いたらしい。

赤いフードの魔法使いは一瞬呆けると、

「もう、からかうなんて酷い、酷いですよ！　私のワガママに付き合わせちゃって……………も
しかして怒らせたんじゃないかってすっごく不安だったんですよ!？」

目を三角にして抗議の声を上げ、タルトに行儀悪くフォークを突き刺し口いっぱい頬張った。

もむもむもむ……と憤懣やるかたない様子で顎を上下させる光景は、さしずめ大好物を前にして理性を失ったハムスターである。

「美味しいか？」

「美味しいでふー！」

とにかく緊張が解けて良かった。

イズの店に来た時の彼女は何と言おうか——ヨメカワイイの目にはどうにも礼儀正しくあろうと無理をしているように見えたのだ。理想のキャラになりきるのは個人の勝手だし、それを重んじるプレイヤーが多いのも認めるが、ゲームの中でくらい素の自分を解放してもいいのではと思う。

(ストレスなく遊べるなら、それに越した事はないもんな)

残すのも職人に失礼なので、ヨメカワイイもウケ狙いで注文したメルヘンチックなパンケーキにナイフを入れる——なるほど確かに客足が途絶えないだけはある味だった。遅れて来たコーヒーマもブラックながらフルーツの酸味が絶妙にマッチして飲みやすい。

指輪で【休眠】中のミケ用にもテイクアウトしようと決め、

「さて、次は装備の新調だったっけか」

「はいー」

コーヒーカーップをソーサーに戻し、少女に確認する。

正式な契約を結んだ依頼内容は、便利なアイテムの入手場所や効率の良い狩り場の案内、厄介な生態やスキルを持つモンスターへの対策のレクチャー。

なので、本当なら二人で甘味を堪能する必要はないのだが、生産職が手ずから作り出す料理には一時的にステータス上昇や状態異常の耐性を付与する品が多く、この名店のスイーツも例に漏れず優秀なバフ効果がある——女の子だからとがつり肉料理の大衆食堂系ではなくカフェにしたのは正解だったようだ。

「ありがとう、美味しかった」

「ご馳走さまでした」

「はいー、またのご来店お待ちしておりますー」

二人分と持ち帰り用の代金をメイド服のプレイヤーに支払い、席を立つ。

去り際に店主らしき女性が胸を撫で下ろしていたのは……味に自信でもなかったのだろうか。

「イズに教えてもらった店は……」

「こつちです！ 早く行きましょう！」

少女に右手を引かれ、誰かとすれ違う度に変な目で見られながら次の店に向かう。

「そんな走らなくても店はなくならないぞ——ミイ」

そう、少女のキャラクターネームは『ミイ』であった。

最初に聞いた時は真っ先にあの『炎帝ノ国』のリーダーの爆炎娘を連想したが、その名に決めた本人曰く『全っ然違います！ ちっちゃい「イ」じゃなくておっきな「イ」でミイなんです！』と完全な別人である事を強調されてしまった。

けれど全く無関係でもなく、一時期は『炎帝ノ国』にも所属していて、彼女の装備が赤色なのもその名残なのだそうだ。

「……なあ、どうして『炎帝ノ国』を脱退したんだ？ あそこなら人数も多いし、そこそ二層の情報収集なんて簡単だったろ」

「そうなんですけど……私って【火魔法】をメインで取ってるじゃないですか。名前も似てるからつい弱い自分とミイさんを比べちゃって、それが嫌になっちゃって……」

「なるほどねえ」

自分と同じような名前前で、しかもステータスも身に着けている装備も覚えているスキルも実力も格段に上のプレイヤーが、ゲーム内でも一、二を争う大手ギルドの長として何十人ものメンバーをカリスマで束ねているのだから、ふとした拍子に比較してしまうのも無理はない。

そう考えると、ミイが名前の違いをムキになって強調したのも分かる気がする。

「あ、でも誤解しないでくださいね？ ミイさんもメンバーも優しい人達ばかりですから！」

「それは俺も知ってるよ。……と、ここだここだ」

話していると、目的の店に着いた。

それなりの利用者が出入りするNPC経営の武器屋。

他の店舗と異なるのは、生産職のプレイヤーが作成した武具や装飾品も取り扱っている点か。

プレイヤー同士で直接交渉するまでもない出来の品々を生産職がこの店に預け、店側はそれらを製作者の名を載せて陳列し、来店した戦闘職に販売する。

「俺は利用した事ないが、イズの話じゃ戦闘と生産、どっちの間でも結構好評らしいな」
「売上金から手数料が引かれちゃうそうですけど、生産職の人にとっては買ってもらえなくて埃を被らせておくより少しでもお金になった方が嬉しいですもんね」

ログイン時間のほとんどを工房や鍛冶場で過ごす生産職は客を相手にしなくとも作品を売る事ができて、あわよくば名前も勝手に広めてもらえる。戦闘職は普通にオーダーメイドするより価格も性能も手頃な装備を買える。

双方に利点のある取引代行のシステムだ。

「いらっしやいませ」

中に入るとNPCの店員が二人に挨拶した。

入口から見て右半分が『鋼の剣』やら『木製の盾』やら、通常のNPCの店でも売っている定番も定番の安かろう弱かろうの入門用とその一步先の装備品で占め、残る左半分のスペースに生産職がそれなりに頑張ったデザインやカラーリングも豊富な作品が所狭しと並ぶ。

「おい、あれ……」

「カワイじゃねえか。隣の子は見ない顔だな」

店内でもヨメカワイイは注目の的だった。

こんな機会でもなければ足を運ぶ事もない場所に、しかも見慣れない少女のプレイヤールを伴って訪れたのだから、変な目で見られるのも納得だ。

鬱陶しい外野を包帯の奥から睨んで黙らせ、玩具売り場の幼児よろしく左の委託販売のエリアに突撃するミイの後を追う。

「予算は足りるのか？」

「平気です。頑張つて貯めましたから！」

先端の水晶内部で魔力が渦巻いていたり、儀礼用に金銀宝飾が施されていたり——魔法使いには重要な杖を取っ換え引っ換え矯めつ眇めつ、真剣な眼差しで吟味していく。

「これはちよつと長過ぎ……これは握り辛い……これは、デザインがいまいち……」

弓ならともかく、ヨメカワイイも魔法こそ使うが杖の良し悪しは分からないので、ミイの後ろで守護霊と化して陳列棚を眺めるしかない。

店中の在庫を引っくり返す勢いで杖を試し続け、それからたつぷり一時間は経ったか。

「これ、これにします!」

「お、決まった?」

解脱しかけていたヨメカワイイの意識をミイの声呼び戻す。

厳選の末にお眼鏡に適ったのは、黒曜石製でしっとり落ち着いた輝きを放つ、指揮棒を思わせる短杖だった——眼球にでも突き刺さないと物理攻撃力は低そうだが、魔法の武器で切った張ったのチャンバラをする訳がないし、そうならないためにINTを上げて遠距離から敵を仕留めるのだ。

「それじゃあ買うもん買ったし、慣らしがてらモンスター狩りに行くか」

ヨメカワイイが店を出ようとする。しかし後ろから足音が聞こえてこない。

何か買い忘れてもあつたのかと店内を振り返ると、ミイは彼女の背丈ほどのショーケースの前で立ち止まり、中に飾つてある商品を食べるように見つめている。

買うまで梃子でも動かない雰囲気にもた一時間待つかと思いきや、今度は即断即決だった。

「すみません、お待たせしました！」

「そのセリフは杖買った時に言っただけであってほしかったなあ」

頭を下げるNPCに見送られ、二人は町を東へ進む。

瘦身長躯の黒アフロが少女を連れ立って歩く光景は、やはりと言うか他のプレイヤーにとつては奇妙に映るようで、男女を問わず視線が突き刺さる。

「杖の他に何買ったんだ？」

「えっと、どうしても気になった衣装があつて……」

目の前にばさりと広がる墨染色のフード付きロングコート。

ミイは自身のステータスパネルを操作して着替えると、その場でくるりと一回転。フード全体に過剰なまでの黒色ファーが縫い付けられていて、それを被った姿はライオンかあるいは——

「えへへ、お揃いですね♪」

「……うん、そうね」

悪の怪人アフロ一号の新たな仲間、喜悦満面の偽アフロ二号が誕生した瞬間だった。

028. 赤と青の衝撃

森林の中に閃光の花が咲く。

大氣中に散布されたオレンジ色の微粉末が極小規模の破裂を起こし、それが何万何億と連鎖して粉塵爆発を引き起こしているのだ。

(もうっ！「炎帝」や「爆炎」が使えたらこんなモンスター倒すの簡単なのにー！)

木々の安らぎを脅かす犯人は、極彩色の羽を持つ巨大な蝶。

主食は花の蜜ではなく自分よりも小さく弱いモンスターの体液で、その艶やかながらも毒々しい虹羽から可燃性の鱗粉を振り撒いて獲物を仕留める、このエリア一帯では危険度第一位に君臨する爆音のハンターなのであった。

細長い触角が青白く帯電し、火花が散る。

「次来るぞー」

「はー」

爆破攻撃の予備動作を見て彼が言う。

引火した鱗粉が導火線のように空中に炎の筋を描き、ミイの動きを追跡して一気に膨れ上がる。

「油断すんなよ」

「大丈夫です！」

爆発の範囲はおよそ直径三メートル。

装備の整った中堅プレイヤーでも油断すれば致命傷になる威力は驚異的だが、予兆さえ分かれば避けるのはさほど難しくはない。

標的の立つ位置に攻撃が決定するため、この爆羽蝶を相手にする時は、一瞬止まるフェイントを動きに混ぜ込んだ立ち回りがソロでもパーティーでも定石となっている。

「ファイヤーボール！」

バックステップで躲し、新調した黒曜杖からの火球で蝶の右羽を焼き飛ばす。

しかし気を抜いている暇はない。片羽を失って地面に落下したのは最初の一頭目――我が物顔で飛び回る厄介な火薬庫はまだ四頭も残っているのだ。

加えて、気を付けなければならぬ攻撃がもう一つある。

右側で羽ばたく二頭の複眼が輝き出す。それを合図にして鱗粉が複眼の光を乱反射させ、周囲の景色がぐにやりと蜃気楼のように歪む。

うっかり見続けると「睡眠」の状態異常で行動不能に陥るため、ミイは両目を片手で覆い、

「ファイヤーボール！」 「ウォーターボール！」

火球でまず一頭を焼き、矢継ぎ早に放った水弾でもう一頭の腹に風穴を開けて倒す――爆羽蝶は複数体で出現して攻撃も苛烈な反面、耐久やHPが低く設定されているため、初級魔法でも一撃で倒せるようになっていた。

一度でも攻撃を当てさえすれば。

そのピーキーなステータス値がプレイヤーの油断を誘う精神的な罠となり、あと二頭、とミイが向き直った時には、二筋の導火線が目の前まで迫っていた。

(やばっ……)

回避は間に合わない。

一発目を避けたとしても、時間差で炸裂する二発目にやられてしまう。

「ああもう、だから言わんこつちやない」

「ふきゅ!?!」

わーい旦那様とお揃いだあー、と一目惚れで衝動買ってしまった黒コートのモフモコフードを後ろから引つ張られ、夫と位置が入れ替わる。

空気を震わせて二輪の火花が咲き、針金細工のような長身を飲み込んだ。

地面を抉りもうもうと立ち込める黒煙の中から、静かに声が飛ぶ。

「スプレッドショット」

まるで機関銃の一斉掃射。

点ではなく面で襲い掛かる射撃を浴びせられ、全身に風穴が開いた二頭の爆羽蝶が次の瞬間には光の粒となって消え去る。明らかにオーバーキルだった。

爆破を受けたはずの夫はHPこそ減少していたものの、まだまだ余裕そうで平然としている。

「ダメージは？」

「ないです。えつと……ありがとうございます……」

「気にすんな。これくらいのもンスター相手にお前さんを死に戻りなんぞさせたら、イズに今度はツルハシで殴られちまう」

「……………むう」

助けてくれたのは嬉しい。一緒にゲームで遊んでいるのも楽しい。

しかし依頼の形で夫を引っ張り出したためにデートではなく引率に見えてしまい、庇ってくれた理由さえ他の女の人に怒られてしまうからで、しかもその女性が自分より胸も大きくて美人なのが年下のお嫁さん的にはどうにもこうにもよろしくない。

今すぐ彼の首根っこにぶら下がって不機嫌ですアピールをしたいところだが——まだ駄目だ。

このまま初心者のミイを演じておいて、頃合いを見て正体を明かし仰天させるまでは。

「この先に古びた井戸があるんだと。とりあえずそこまで行ってみよう」
「そうですね」

二人で並んで、奥へ奥へと進む。

歩きながら考える。

(本当は別キャラまで作るつもりはなかったんだけどなあ)

旦那様が素直に『炎帝ノ国』に入ってくれていたら、こんな回りくどい真似をせずともギルドのリーダーであるミイとして職権乱用だろうと何だろうと一緒にいられたのに。

今ほどのギルドも次のイベントに向けて勧誘勧誘また勧誘で、フリーで強いプレイヤーを仲間に引き込もうと躍起になっている。中にはレベルの高い容姿の女性プレイヤーをスカウト役に選んでハナカマキリのように男性プレイヤーを乱獲するギルドもあり、愛する旦那様もハニートラップに引っ掛かってしまうのではないかと思うと気がではないのだ。

(いつそミザリーやあの子達にも協力してもらおう？ でも旦那様が他の誰かとなんて……あうう)

全年齢対象のゲームだとか関係ない。

ミイの頭の中では、自分も含めた『炎帝ノ国』の女性プレイヤー全員を侍らせて一大

ハーレムを築き上げている旦那様の姿がぐるぐる。だつて多感な女の子だもん。

「おーいお嬢さん、何処まで行きなさるおつもりで？」

いけない妄想に夢中になって、曲がるべき道を通り過ぎてしまったらしい。

夫の立つ場所まで慌てて戻ると、それまで歩いてきた獣道よりもさらに細く見つけにくい横道が伸びていた。

この細道の最奥に目的地とする古井戸がある——第二層の実装直後に『炎帝ノ国』も人海戦術で探索を行い古井戸も発見していたが、特にギミックが発動する様子はなく、他のプレイヤーからも単なるオブジェクトとして扱われ見向きすらされずに放置されているものだった。

歩いて数分もせずに井戸に辿り着く。

「なるほど、確かにこりや井戸だな」

「周りに何かあるって訳でもないですしねー」

「……ちよつと降りてみるか」

「降りるって、この中にですか？」

石造りの井戸を指差す。

「二人で調べりゃ何か見つかるかもだろ？」

「それはそうかも知れないですけど……」

降りるまでもなく水が完全に干上がっている事は確認済みだ。しかしそれを教えるのと、どうして中を覗きこんでもいないのに枯れていると知っているのかも説明しなければならぬ。

仕方なく二人で井戸の中を降りていく。

内部はフラスコのような形状なのか存外に広く宝箱の一つもありそうだが、あつたとしても前にこの場所を探索した誰かによって既に開けられてしまった後だろう。

「やっぱり何もありませんね……」

「それでもないみたいだぜ？」

フラスコの中心、二人の足元に青い魔法陣が輝き出したかと思うと、井戸の底全体が音を立てて降下し始めた。反時計回りにゆっくりと振じれるように一回転したところで、頭上の縦穴とは別の隠された道が壁の中から現れた。

「すごい、きつとまだ誰も見つけてないダンジョンですよ！」

「知らん間に何かの条件を満たしてたんだろ？——ミケ、散歩の時間だぞ」

夫はそう言うとおかつば頭で二頭身の小鬼を召喚した。

あのメイプルが巨大な亀の背中に乗って空を飛んでいたというのは掲示板でもひとしきり話題になってはいたけれど、火山ダンジョンで手に入れた卵が孵化してこんなに可愛らしいパートナーが生まれたのだとすると、やっぱり自分もモンスターをタイムし

たくなつてくる。

「ニヤー」

ミケは定位置なのかアフロに潜り込むと、顔と両手だけ出してご満悦そうに甘え声で鳴く。

それがどうにも旦那様との絆を自分に見せ付けているように感じられて、今は甘えられないから悔しいやら羨ましいやら。

「むうう……早く行きましょう！」

「おいおい、そんな引つ張んなって」

自然の洞穴ではなく石で組まれた人工の通路を進む。

「罨に気を付けないとですね」

「それよか、もうちつと高い天井にしてくれると助かるんだけどなあ」

「ニ、ヤア、アア、アア、ア……」

背がちよつとばかり高い旦那様には狭いらしく、ミケに至っては乗っている頭と天井に挟まれて平べつたい動物スリッパになってしまっている。

通路は右に左に蛇行しながらの一本道。

道中、生理的嫌悪を催す節足動物型のモンスターの群れが何度か襲つて来たが、夫が中腰のまま片っ端からマグマで燃やし尽くしていくので障害にすらならない。

「不気味なくらい順調だな。腰が痛くなりそうだが」

「見つけられてなかっただけで、ダンジョンの難易度はそんなに高くないのかも」

「そーゆーのに限ってボスだけは面倒な奴だったりするけどな」



運営ルーム。

またの名を『胃痛に悩む者達の集い』にて。

「おつ、【蠱毒の底】を開けたプレイヤーがいるぞ」

ユーザーに楽しくプレイして頂くためにバグや不具合、トラブルが発生していないかモニターと睨み合って監視していた一人が声を上げた。

イベント開催時と比べて常駐するメンバーは少ないが、それでも今まで噂にすら上がらなかったダンジョン発見と挑戦者が現れた報告に、残りの面々も興味深そうに視線を向ける。

「確か、同じスキルをいくつか覚えていてフレンド登録してから三時間以内で、しかも性別の違うプレイヤーが二人同時に入口の井戸に入らないと出現しないとか、設定した俺らでもワケワカラン条件になってなかったっけ？」

「ああ、別名【リア充殺し】」

「中のモンスターもキモ虫系で統一して、これでもかかってくらい毒やら麻痺やら状態異常スキルで完全武装してるしな。んで、その気の毒なカップルって誰と誰よ」

「今映像を出します」

皆が注目する大型モニターに映し出される、狭い通路を四苦八苦しながら進むアフロの姿。

仕事が忙しく恋人など作る暇もない運営メンバーの黒い笑みが、あの『要塞』メイプルと並んでバランスブレイカーに分類されつつある『戦艦』ヨメカワイイを見てあつきり吹き飛んだ。

「……やっぱりか、やっぱりカワイイか！ メイプルとどっちだろうとは思ってたけど！」
「つて事は隣にいる子が彼女か!? いや嫁か!? 顔見せる顔！」

「ああクソ隠れてて見えん！ てか何だあのアフロみたいなフードは!？」

「ペアルックか？ ペアルックなのか!? 俺らに対する自慢か畜生めえええっ!」

完全に冤罪の被害妄想なのだが、それを冷静にツッコむ者はこの場におらず。

モニターの向こうでマグマに焼かれるモンスター達がどうか一矢報いてくれるよう、血の涙を流してドロドロとした妬み嫉みの念を送るのだった。



「……ボス部屋の扉か。開けるぞ?」

「どんなボスなのかあんまり想像したくないなあ……」

「ニャー」

一体どういう趣味をしているのか、ここのモンスターは鳥肌が立つ造詣の虫型ばかりだった。

おかげでミイはHPよりも精神にダメージが蓄積されつつある——っというっかかり検査して画像を表示させたら想像以上に不気味で、ひいひいと悲鳴を上げつつどうにか画像を消した時の疲労感にとてもよく似ていた。

そんなゲテモノ虫がわんさかいるダンジョンのボスなのだから、どのような外見なのかも大体は想像できる——いやでも想像してしまう訳で。

「そら、おいでなすった」

広い空間の奥で巨大な影が蠢く。それも一つではなく二つ。

何十対もある節足を動かし、甲殻が擦り合っつて音を立てるその巨体の先には、クワガタのような大顎と宝石よりも輝く複眼がある。

小さな山ならばとぐろを巻いて隠してしまいそうな二匹の六百足が、赤いオーラと青

いオーラをそれぞれ纏いながら二人を出迎えたのだった。

029. 夫婦の形

「火山弾！」

「ファイヤーボール！」

真つ赤に熱した巨岩の弾丸と火球が飛ぶ。

赤いオーラを立ち昇らせる巨大ムカデと、それと双壁を成す青いオーラの巨大ムカデ——二匹はドーム状の部屋を無数の足で縦横無尽に走り回り、ミイ達の攻撃を回避する。ほとんど凹凸のない壁や天井さえ彼らには普通の地面と変わらないらしい。

「スプレッドショット！」

旦那様の爆弾矢を生物らしからぬ動きで直角に曲がって避ける。

さながらレールに縛られないジェットコースター。

夫と背中合わせになって死角を消し、相手の一挙手一投足を見逃すまいと警戒する——まだ目で追える速度ではあるが、赤と青の二匹はこちらを翻弄するように広い空間を駆ける。

「気を付けろ、青いのが突っ込んで来るぞ！」

「後ろからも赤いのが来ます！」 「ウォーターボール！」

牽制のために放った水の砲弾が赤ムカデの重厚な外骨格にヒット——あの灼竜のよ
うに出鱈目なステータス設定ではないらしく、初級魔法でも明確にHPバーが減らせた
と実感できる。

けれど突撃が中断される様子はない。

「止まらない……！……！ どうしましょう!?!」

「掴まってる！ 【跳躍】！」

旦那様のコートを両手で握り締め、二人で高く跳び上がる。

猛然と迫るムカデの大顎が左右への退路を断つかの如く開かれているため、挟み撃ち
から逃れる道が上しか残されていなかったのだ。

標的が消えててつきり正面衝突すると思いきや、ムカデの番いは寸前で軌道を修正。
息の合った見事なコンビネーションで節くれ立った触角のある頭部を上方へ——勢
いはそのままに、互いの腹を合わせるようにして長い身体を伸ばし、正確無比にミイ達
を追い狙う。

空中に逃げたのは失策だったと悟る。

これでは躲しようがない。

「ちっ、そう簡単にはいかないか！ 【灼^{シウコウトル}竜】！」

夫のアフロが燃え上がり、単眼双角の竜が迎撃に飛び出す。

高威力の溶岩魔法を受けた青いオーラのムカデが黒煙を上げながら叩き落とされるが、

「カワイさん、横！」

マグマが直撃する前に分裂して逃れた赤いオーラのムカデが、攻撃後の一瞬の硬直の隙を突いて右方から襲い掛かった。

咄嗟にミイを両腕の中に庇い、横薙ぎに振るわれる大顎の一撃を背中を受け止める旦那様。

「っ、ぐう！」

「だっ——!？」

二人は弾き飛ばされ、二、三度バウンドして地面を削っていく。

回復させなきやと慌ててミイが夫のHPを確認してみれば、流石と言うべきか、あれほど強烈な攻撃にも関わらずゲージはあと数十発は耐えられそうな残量でまだまだ余裕があり、すぐに機敏な動きで体勢を立て直す。

「大丈夫ですか!？」

「ムカデが嫌いになりそうだ……」

「私は最初っから大っ嫌いです！」

速度の衰えないムカデ達は暴走列車と化して突撃を繰り返す。

雄と雌であろう二匹のボスは常に鏡写し——対角線上に位置するように動き回り、二方向からの同時攻撃が基本パターンとしてA Iにプログラムされているらしい。

「二匹まとめつつてのは無理そうだな。各個撃破といこうか。赤い方の足止めを頼む」
「任せてくださいい！」

大顎を噛み鳴らす赤ムカデを、ミイは真正面から見据えて立ちほだかる。

初級魔法を当てても止まらないのは先刻承知。ならば、敢えて限界までこちらに引き付けて、

「受け止める！」「ファイヤーウォール」！「ウォーターウォール」！

炎と水の二重障壁に赤ムカデが激突する。

「くうう……い！」

その衝撃は凄まじく、何十本もの節足で大地を蹴って障壁を突き破られそうになるが、それでもどうにか足止めという大役は果たした。

連携が途切れたチャンスを目撃は見逃さない。

すぐさま武器を錨弓に切り替えると、背中を気にする事なく青ムカデに白兵戦を挑む。

青ムカデの残りHPは【灼^{シウコクトル}竜】を受けた時点で六割まで減少している——厄介な同時攻撃さえ封じてしまえば、一匹一匹の強さは二層に上がるための大樹の鹿と同程度で遅

れなど取らない。

旦那様が錨弓のカウンターを繰り出そうとした瞬間、青ムカデの複眼に魔法陣が浮かび上がる。

放出される青色の波動。

「範囲攻撃!?!」

しかし夫にダメージはない。代わりに全身が青ムカデと同色のオーラで包まれる。

一体どんなスキルなのか考えを巡らせるよりも早く、振り下ろされた錨弓は甲殻を叩き割らずに停止し、夫自身も謎の力で青ムカデから弾き飛ばされた。

「カワイさん!」

「平気だ! けど何だこいつは!」

再び青ムカデに突っ込むも、ある地点を境に進めなくなる。

動きが硬直して止められるのではない——見えない隔壁に阻まれて、どれだけ足を踏み出してもその場からの前進が叶わないのだ。

ミイが食い止めている赤ムカデもパターン変化があり、身体を大きく持ち上げると、その節足の先端部分を射出し始めた。

赤い光を纏うミサイルの雨。

追尾性能があるらしく空中で不自然なほど自在に軌道を変えて夫に降り注ぐ。

「ああもう面倒な時に面倒なものを！ 【インフェルノオーラ】！」

夫の全身から熱波が迸り、弾雨を誘爆させていく。

青ムカデに近付けなくなった以上、攻撃対象を変更しなければならない——黒衣の長身が錨弓を引き摺って走り、一時的に節足を失った赤ムカデの頭部を指して跳ぶ。

今度は途中で止められる事はなく、左右から襲う大顎さえ足場にしてダメージを与える。

殴打の連続で三割ほどHPを削り、ヒットアンドアウェイで隣に着地した旦那様にミイは言う。

「赤い方には接近戦でも大丈夫みたいですね」

「つつーよりも、むしろ引き付けられる感じだったな。やっぱりこの妙なオーラが関係してんのは間違いなさそうだ」

赤ムカデの複眼に魔法陣が浮かび、赤色の波動がミイと夫を飲み込む。

HPの減少はないが、しかし夫婦揃って弾き飛ばされる。

「今度は赤いオーラ……って事は」

夫が三度目の正直とばかりに青ムカデを狙う。

青いオーラに包まれた状態では無理だった距離を瞬く間に縮め、錨弓の鉤爪で甲殻を抉り裂く。

これで青ムカデのHPは半分を切った。

「当たった!」

「……どうやら絡繰りが見えてきたな」

ミイも天才的頭脳で閃いていた。

青と青では互いに近付けず、赤と青では引き寄せ合う——つまりこれが意味するのは。

「信号ですね! 青は止まれで赤は進め!」

「磁力だよお馬鹿! しかも逆だ!」

違っちゃった。

要するにムカデ達があの魔法陣を発動すると、対象となるプレイヤーに磁力が付与されて同色のムカデへの攻撃が制限されてしまうらしい。

近接特化の戦闘職には磁力による決壊を、飛び道具に対しても高い回避能力を誇る——なるほど確かに相性次第では完封されかねないトリッキーなボスだが、タネさえ判明すれば対処は容易い。

「灼^{シウコウトル}竜!」

「ファイヤーボール!」

節足を撃ち出して応戦する青ムカデ。

浴びた赤い磁力に反応して追尾するミサイルを、夫が錨弓の鎖を振り回して全弾撃墜し、本来の使い方である射撃の構えで返礼の砲弾を放つ。

また青の磁力を浴びせ掛けられたら攻撃目標を赤ムカデに変更してダメージを与え、赤の磁力が発動したら青ムカデのところに走る。

「あれだな、RPGでターン毎に魔法耐性と物理耐性が入れ替わるボスが相手の時に、こっちも剣と魔法を切り替えて戦うのに似てるわな」

「あと、もう少し……」

二匹ともHPが一割まで減り、戦いの終わりが見えてきた。

命の危機を感じたのか、ボスも最後のパターン変化を起こす——それまでミイ達を中心に挟んで向かい合う陣形だった赤ムカデと青ムカデが、互いを気遣うように同じ場所に集つたのだ。

そして二匹の間で赤と青のオーラが混じり合う。

ミイが杖を、夫が弓を構える前で、色での判別ができなくなったムカデの片割れが自らの長大な体躯で螺旋を形作る。

「……何でしょう」

「磁力、螺旋……おいおい、まさか!」

旦那様が珍しく慌てた様子でミイを小脇に抱えたのとほぼ同時、十分な加速をつけた

もう一匹のムカデが螺旋の中に飛び込んだ。

——直後。

雁股矢を思わせる大槍が閃光の尾を引いて、つい数瞬前まで二人がいた場所を通り過ぎ、轟音を響かせて背後の壁を穿つ。

「な……なあ!？」

その威力に危うく腰が抜けそうになった。

けれど、へたり込んでいる暇はない。

螺旋の砲口がこちらに照準を合わせ、大槍が壁を周回してどんどん加速する。

「これが、粒子加速器……!」

「加速って文字は入ってるが全然違うからな? ——来るぞ!」

二度目の砲撃。壁に二つ目のクレーターが生まれる。

大槍は装填後に自動的に放たれるので、攻撃のタイミングは目視で確認できるのだが、如何せん飛来する代物が巨大過ぎる。

「どうしましょう……!?!」

「……真つ向から、ぶち抜く。【灼^{シク}竜^{コウトル}】!」

三度目の砲撃と燃え盛る竜がぶつかる。

双方の火力は拮抗していたが、時間が進むにつれ徐々に灼竜が押され始め、ついに決

死の大槍がマグマの奔流を突き破った——けれど、開かれた大顎が二人の胴を両断する事はなかった。

高火力を誇る【灼^{シク}竜^{コウリウ}】を破るため死力を出し尽くしたのか、事切れたムカデの片割れは二人にその牙を届かせる直前で光となつて消えていく。

砲身役として遺されてしまったもう一匹のムカデが悲しみの咆哮を上げ、後を追うように突撃を敢行し仇を討たんとする。

「ミケ、【見様見真似】」

「ニャー!」

アフロから顔を出したミケが赤い魔法陣を浮かべる。

それを確認して、ミイは旦那様と視線を交差させて頷き合い、敬意を表して高らかに叫ぶ。

「【ファイヤーボール】!」

「ニャー!」

三つの火球が一直線に走る。

それらは途中で一つに融合すると、巨大な炎弾となつてムカデを飲み込んだ。

ムカデは未練がましく節足を動かし続けたが、やがてゼンマイが切れたオモチヤのように動きを止めると、ついにその場に崩れ落ちた。

今まで誰の目にも触れる事のなかった二匹のボスは、暗く静かなダンジョンの奥底を墓所にして眠りに就いたのだった。



「今日は本当にありがとうございます！」

「軽い肩慣らしのつもりが、とんだ大探検になっちゃったなあ」

町に戻ったミイは、あくまで新人プレイヤーの依頼人を装ったまま、夫に頭を下げた。ボスを倒した後に出現した宝箱の中には、スキルの巻物が二本だけ入っていた。

未発見のダンジョンを死亡する事もなく初見で制覇できたのだから、もう少し何か特別感のある報酬が用意されていても……と思うけれど、むしろ争う必要がない分、ユニークシリーズのような一名限定の装備品ではなくて幸いだったと言える。

それより何より、



【磁
力】
マグネフォース

MPを消費して対象に磁力を付与する。

磁力の強さは対象の質量に比例する。

効果は五分間。



「えへへ……」

思わず笑みが零れる。

あの井戸の底のダンジョンに入る条件が解明、公開されない限り、このスキルを持っているのは自分と旦那様の二人だけ。シヨップでも手に入らない、夫婦でお揃いの大切なスキルだ。

堂々と自慢できないのが残念だが、二人きりの秘密というのも甘美な響きがある。

「……ミイ」

「ほへへ」

名前を呼ばれ、ぽん、と何かを手渡された。

片手に収まるサイズの藍色の小箱。

見覚えがある。確かイズの工房に行った時、彼女が旦那様に渡していたアイテム――

それを何故自分にと疑問に思う前に、小箱が自動的に開いて中身が露になる。

シンプルなデザインながらも、レッドダイヤモンドが暖かな輝きを放つ指輪だった。

「これは……」

「結婚指輪——現実リアルじゃまだ買ってやれてなかったからな」

「へ……？」

左手を取られ、薬指に指輪を嵌めてもらって、頭が真っ白になる。

「あつ、うつ……ふええつ!？」

慌てて夫の腕を掴み、人目につかない路地裏に引つ張り込む。

荒い呼吸と暴れる鼓動を整えて、上目遣いに夫を見ながら、尋ねる。

「気付いてた、の……？」

「まあ、割と最初から怪しいとは思ってた。確証がなかったから、お前が自爆してボロを出すまで待つてたんだが……まさか、あんな自信満々のドヤ顔で信号の赤と青を間違えるとはなあ」

「ふぐう!？」

つまり。

別のアカウントで新たなキャラ作成まで行ったミイの作戦は、完全な一人芝居だった訳だ。

まるで、姿見の前でノリノリで魔法少女の真似をしていたのを親に見られてしまった時のような羞恥の嵐に、顔から火が出そうになり、

「ひ………」

「ひ？」

「ひやああああ………」

ミイが取った手段は、情けない声を上げてのログアウトだった。



一足遅れてログアウトすると、嫁がシートにくるまって籠城していた。

人間サイズの春巻きから、しっとりとした肌の両足を生やしてジタバタ悶える。そしてこちらもログアウトした事に気付くと、さらに両腕を生やして首根つこに巻き付かれた。

世にも恐ろしい妖怪春巻き娘に捕食された図である。

「……………ずるこ」

「んー？」

「ずーるーいいー！ あんなのずるいいー！ 驚かそうと思ってたのに実は気付いてて不

意打ちとか反則だルール違反だあ！ やり直し、やり直しを要求する所存です！」

「具体的には？」

「もつとロマンチックなムードの中でお願いします！」

と言われても、今、自分の手元に結婚指輪はない。あるはずもない。

挙式は嫁の卒業まで待つてからと彼女の両親——義理の父母とも約束しているし、指輪もそれに合わせて二人でデザインを選んで購入する予定なのだ。

だからこそ、せめて仮想空間（ヴァーチャル）の中でだけでもと、出会えた時にサプライズで渡すつもりで指輪の作成をイブに依頼していたというのに。

白魚のような嫁の手指をくすぐったりして弄んでも良い案は浮かばない。

仕方がないので夫婦生活における最終手段。

「そーい」

「うにゃあ!？」

二人仲良くシーツの中で春巻きの具になり、指輪やムードの事など考えられないようにした。

030. 羊毛と第三回イベント

「毛刈り」

一層の草原が広がるエリアに、凜とした声と白刃が閃く。

刃文の美しい刀身が鞘に納まるのと同時、このファンタジーな世界にしては珍しく翼も牙もない一般的な羊がその雲を思わせる体毛を刈り取られ、つるりとした表皮を晒しながら逃げ去る。

代わりにスキルの使用者——カスミのイベント内に一匹分の羊毛が追加されただけ。

「おー！」

「お見事お見事」

それを一歩下がって見ていたメイプルが声を上げ、ヨメカワイイも小さく拍手する。

日本刀だからか、羊毛の刈り取りでもかろうじて居合の試し斬りか曲芸の類に見える——これが巨大な両手剣や戦斧が武器のプレイヤーならさぞかし珍妙な光景になるのだろうか。

「で、一匹だけで足りるのか？」

短期メンテナンスで実装された無害な羊の群れ。

イズが言うには素材として優秀らしく、周囲一帯は同じく羊毛が目的の他のプレイヤーによって刈り尽くされた後のようだ。レアドロップもなければ経験値も少ないため、丸裸にされて用済みの羊が倒されもせずにそこかしこでのんびり草を食んでいる状況だ。

「何を作るのかまではイズさんから聞いてないけど、一匹じや多分……」
「間違いない足りないだろうな」

三人の中で「毛刈り」を使えるのはカスミのみ。

必須ステータスに届いていないメイプルは勿論、羊毛が不要だったヨメカワイイも「毛刈り」を修得していない——ならばどうして『楓の木』のギルドメンバーでもないのに同行しているのかと言えば、暇を持て余していたところを誘われたからだだったりする。

二人とは顔見知りという事に加え、イズにも『メイプルちゃん達を手伝ってあげてねえー?』と依頼として営業スマイルを向けられてしまえば断る理由もない。

「うーん、いいいですねえ羊さん」

草原を見渡してメイプルが言う。

羊が見つからないのではない。見つかる羊のことごとくが毛を刈られた個体ばかり

なのだ。

「【スプレッドショット】」

ヨメカワイイが【反響】を【装填】した拡散矢を適当に放つ。

目視と比べて断然高効率なのだが、羊の反応があつても毛の有無まで判別できない——それでも当てずっぽうに探し回るよりは楽な事に変わりはない。

一番肝心な【毛刈り】こそ使えないが、それを補つて余りある『耳』を使えるからこそ、イズもヨメカワイイに二人を手伝うよう依頼を寄越したのだろう。

「こつちに何匹か固まつてるっぽいな。行ってみよう」

「ほえ〜」

「……相変わらず、とんでもない索敵能力だな」

余談だが、同じ草原エリアにいたプレイヤーは三人を視認した途端足早に逃げ出してた。

小規模ギルドながら曲者揃いの『楓の木』——そのラスボスと名高い絶対無敵要塞と、異名こそまだないものの確かな実力を持つカスミ。それに加えて爆破と溶岩を操り、最近ではゴブリンまで召喚するようになったスレンダーマンまで一緒となれば逃げの一択になるのも無理はなかった。

そんな事など露知らず。

反応があつた地点に三人が向かうと、まだ毛が無事な羊が十匹ほどいた。近くに生えた大岩の陰から様子を窺う。

「さてどうするか。私の【毛刈り】は一度に一匹しか刈れないぞ」

「うーん、また【パラライズシャウト】で麻痺させる？ 何匹か逃げちやうかもだけど……」

「それよりもつと確実な方法があるぞ」

言つて、ヨメカワイイは【磁力】を【装填】すると、

【フレッシュトスコール】

羊達の上空から矢を撃ち降らせた。

サポート型スキルの【磁力】マグネフォースに直接の攻撃力はないため羊のダメージは0だが、襲撃

に驚いて半狂乱の白もこ集団が草原に散らばっていく。

「ああ、逃げちやう逃げちやうー！」

「慌てなさんな。【磁力】マグネフォース」

羊達には赤い磁力を、そして今度は大岩に触れて青の磁力を付与させる。

対象の質量が大きいほど磁力も強まる性質により、赤いオーラを浴びた羊達は一匹残らず大岩に吸着させられ、草原にメエメエと鳴いて揺れ震える巨大な羊毛の塊が出来あがつた。

「これなら刈り逃しもないだろ」

「うわあ……」

「言葉も出ないな。だがまあ、遠慮なく……」

呆れつつ毛を刈っていくカスミ。

ほどなくして羊毛を回収し終え、後に残ったのはあられもない姿にされた羊が大岩に貼り付いた奇怪なオブジェのみ。悪魔召喚の儀式か何かと思われるでも否定できない。

これで、ある程度まとまった数の素材が手に入った。

「余裕もできたし、手分けして探してみようと思うのだが……」

インベントリの中身を確認して、カスミが言う。

「リポップを待つ時間ももつたないし俺は別に構わんが、足止めの手立てはあるのか？」

「ない事もない。私の【超加速】なら逃げた羊も追えるだろう」

「じゃあ近くで羊さんが湧いたら私とカワイさんで動きを止めておくね！」

「ああ、そつちは任せた。三十分後、この大岩で落ち合おう。……嫌でも目立つからな」

さらなる羊毛を求めて、カスミが草原の向こうへ駆け出す。

小さくなつていく彼女の背中を見送るメイプルとヨメカワイイ——ただぼんやりと新たな獲物が姿を見せるのを待っているだけの二人は、どちらから言い出したでもな

く、【磁力】^{マグネフォース}の効果が切れず大岩に拘束されたままの哀れな羊の団体を振り返った。

綺麗に毛を剃り落された羊の肉は、とても柔らかそうだ。

「私、羊って食べた事ないんですよね……」

「……飲み会でジンギスカンを食べた事あるが、牛や豚とも違う美味さだったな……」

「……………」

「……………」

ジュルリ、とそんな音が零れたのはどちらの口からだったのだろうか。

それからきっかり三十分後。

時間通りに戻ってきたカスミが目撃したものは、羊がいなくなった大岩と、その隣に

もつさりと鎮座する二つの羊毛の塊だった。

数瞬だけ思考を巡らせて、刀の柄に手を伸ばす。

「……………【毛刈り】」

とりあえず毛を刈り飛ばすと、中から桃太郎よろしくメイプルが現れた。

地面に大の字に落ちたメイプルとカスミの間に微妙な空気が流れる。

「ええと……深くは聞かないでね？」

「分かってる。もっと気になるのが横にいるしな」

「……………うん」

二人が視線を移す。

「カスミ、こつちも散髪頼む……」

全身余さずすっぽりと羊毛に包まれていたメイプルと違って、ヨメカワイイの場合は首から下が平時と同じく外に出ている。

しかしトレードマークのアフロは白く変色し、毛量も十数倍に膨れ上がり足元まで垂れ下がってしまったので、後ろから見ればメイプルの羊毛団子と大差ない状態となっていた。

笑ってはいけない。笑ってはいけないけれど肩が震えるのは止められない。

「【毛刈り】！」

一閃。

日本刀を振るう美容師に本来のアフロに戻してもらったヨメカワイイはやれやれと首を振る。

「いやー、ずっとあの頭のままかと思って焦った焦った」

「でも、これで羊さんを探さなくても羊毛が手に入るようになったから結果オーライですよね！」

「羊の毛と言うかメイプルとカワイイの毛だな……」

そう考えると、そんなものでイズに装備を作ってもらうのが申し訳なくなってくる。

今日はもう終わりにしようという流れになり、三人で帰路に就く。

最後にメイプルとヨメカワイイは自分のスキルリストを確認した——【羊喰らい】^{シュープリーター}が
しつかりと追加されていた。



イズから羊毛装備のお披露目に誘われたのは、ヨメカワイイが白アフロフオームを修得してからおよそ二週間後。第三回イベントが始まった当日の事だった。

隠れ家のような『楓の木』のギルドホームに赴くと、メイプルとサリー、イズ、そしてカナデと名乗る中性的な赤毛の少年がエントランスに集まっていた。クロムとカスミの姿はない。

「うふふ、皆が頑張つて羊毛を集めてくれたおかげで良い装備が作れたのよー？　メイプルちゃんサリーちゃん、早速着てみてくれるー？」

「はい」

イズが渡した装備に二人が着替える。

羊毛のもこもこ具合を全面に押し出したファンシーな全身装備。二人の得物である大盾や短剣はそのままなので多少ミスマッチなのは否めないが、それを差し引いても十

分に可愛らしい。

試しに脳内で同じ衣装を着た嫁を思い浮かべてみると——魔性のもこもこに捕らわれてベッドでグースカ眠りこける光景しか想像できなかった。

小声でイズに言う。

「実は二人に女の子らしい服を着せたかっただけだったり?」

「……当たり♪」

案の定、着せ替え人形扱いだった。

でも、とイズは前置きして、

「ただもこもこで可愛いだけの装備じゃないわよー? 使った羊毛の量によって今回の

イベントのアイテムドロップ数が上昇するんだから」

「ふーん?」

運営からのメッセージを改めて読み返す。

第三回イベントの内容は、期間限定モンスターが落とす特定アイテムの収集——その数に応じてギルドとプレイヤー個人で達成報酬を得る事ができる。

まだ無所属ソロプレイヤーのヨメカワイイにギルド報酬など縁のない話だが、個人報酬は中々に魅力的なラインナップだった。

「僕はよく知らないんだけど、カワイイさんって基本的にソロで参加してるの?」

赤いキャスケットを被ったカナデが、小首を傾げてヨメカワイイに問う。

「まあ、たまたま一緒にでもならない限りはソロだな。今回は依頼があるけど」

「依頼？」

「知り合いのギルドからイベントを手伝ってくれてメッセージが二、三日前に届いてな。今からその応援に行かにならん」

形としては一時的な入団になるのだろう。

ギルドへの加入と脱退、そして再加入が可能になるまでには日数的な制限があるが、逆にそれが適度な休みになるので、傭兵業のヨメカワイイにとっては助かる仕様になっていたりする。

最悪の場合、対象のモンスターの奪い合いになる可能性を考えたのだろう——サリーが少しだけ警戒した様子で、

「……それって私達も知ってるギルドですか？」

「ああ、名前くらいは聞いた事あると思うぞ？」

少女の憂慮に気付きつつ、別に隠す必要もないのでヨメカワイイは雇い主の名前を口にする。

「——『炎帝ノ国』だよ」



同時刻、ギルド『炎帝ノ国』にて。

その類稀なるカリスマ性で大勢のギルドメンバーを隙なく統率するミイは、開始五時間では大量の牛型モンスターを討伐してドロップアイテムを集めていた。

ギルド報酬は別として、自分だけが個人報酬の利益を独占するのではなく、別働隊も含めた他のメンバーも可能な限り討伐数が平等になるよう心掛けているからこそ、誰も不平不満を漏らさずに指示に従ってくれているのだとミイ自身は考えている。

「皆、今回のイベントでは前回以上にチームワークが重要となる！ 討伐数が目標まで達した者はミザリーかマルクスに報告、後衛の者と交代するように！」

大きなアクシデントもなく討伐数は着々と増えている。このペースを維持できればギルド報酬は最高ランク確定だ。

それにもうすぐ――

(旦那様も来てくれるもんねー♪)

小躍りしそうになるのを堪える。

三人娘を経由してダメ元でメッセージを送ったところ、『いいよー』とあっさり快諾。

あまりのあつけなさにこちらのミイの正体も実はバレているんじゃないかと焦るが、それよりも夫に会える喜びが勝ってしまいでしょでもよくなってしまった——現実リアルに戻ればすぐ会えるどころか四六時中べったりイチャイチャしているだろうに、というツツコミはなしの方向で。

「ミイ」

背後から声を掛けられる。

声の主は金の長髪を流し、白い法衣を纏う女性のプレイヤーだった。

回復魔法や光魔法の使い手で、柔らかな物腰が人気でギルド内外にファンが多く、身体の起伏がとんでもないのが特徴か。具体的には胸。ばいんばいんで羨ましい。

「ミザリー、別働隊の様子は？」

「予定の頭数を討伐し終えてもうすぐ帰還するそうです。それを待つてマルクスが再度トラップを仕掛けに出る手はずになってます」

「……順調だな」

「全てはミイの手腕と人望の賜物ですよ。ところで、貴女が助っ人を頼んだという件の殿方はまだこちらに来ていないのですか？」

「ああ。だが間もなく合流すると返信があった。……気になるか？」

「ええ、それはもう」

ミザリーが聖女の微笑みで返す。

「ミイが太鼓判を押すほどの実力者で、しかも第一回イベントで因縁のあるプレイヤーともなれば気にならない方が変ですよ。私も掲示板にあった情報だけで、直にお会いした事はありませんし」

「……そうか」

ちらりとミザリーの格好を窺う。

過剰気味に開いた胸元からは谷間が深々と見えて、キュツとくびれた腰や肉付きの良
い太ももが素肌を覗かせている——正直、旦那様には見せたくない、と言うか会わせ
たくない。並んで立つと色々比較されてしまいそうだからだ。主に胸部装甲とか。

(……大丈夫だよな? 旦那様、私くらいのサイズが一番好きだって言ってたもんね!?)
約束の時間はすぐそこまで迫っていた。

031. ミザリー

合流地点を見下ろせる崖に到着すると、揃いの装備に身を包んだ『炎帝ノ国』のプレイヤー達が陣形を組んで牛の群れを相手取っているのが確認できた。

俗に『トレイン』と呼ばれる大量のモンスターに追われる現象——ヘイトを一身に浴びた団役が必死に仲間のいる地点まで逃げ走り、待ち構えていた攻撃役の横隊が魔法で次々に仕留めていく。

「おー、やってるやってる」

ソロ狩りとは異なり、プレイヤーもモンスターも、その規模は文字通り桁が違う。

あれだけの大部隊ともなれば近接武器を振り回す姿もちらほら見受けられるが、やはりと言うか主砲として飛び出す大半が魔法なのにご愛嬌か。

対する牛も、それら全てが一個の生物であるかのように、土煙を上げて猛進する。

「まるで長篠だな」

各自の役割に徹する軍隊と、統率など押し流さんとする群体が激突する。

斜め上なメイプルともまた違う、大手ギルドならではの派手で正統派なイベント攻略——歴史の教科書の再現にも見える光景を観戦していたかったが、約束の時間までもう

あまり余裕はない。

例えばゲームだろうと、悠長に構えた拳句遅刻するなど社会人として言語道断。

ヨメカワイイは高みの見物を適当に切り上げると、戦線の後方に位置する本陣に向かつて崖から軽く一步を踏み出した。岩肌を生えた手頃な突起を足場に、「跳躍」で一気に距離を詰める。

『スキル【滑空】を取得しました』



【滑空】

【跳躍】使用後に発動可能。空中をグライドできる。

取得条件

【跳躍X】を取得した状態で、対象スキル使用による移動距離が合計五十キロを超える。



移動を横着していただけなのに、どうやらまた変わり種のスキルを手に入れてしまっ

たらしい。

「……【滑空】」

風にはためくロングレザーコートが、両袖部分を残してカーボンファイバーの蜘蛛脚を思わせる細く長い骨組みに変形すると、脚の間に翼膜を張りながら八方向に大きく広がった。

禍々しいハンググライダーにより、飛行能力を獲得したヨメカワイイ。

旋回や加減速——直進するだけの【跳躍】とは違い、飛ぶ方向や速度が調整可能となり、操作に慣れるために何度か蛇行しながら空を滑る。

「また変な噂が流れそうだなあ……」

巨大なシロツブの背に乗ってのんびり飛ぶメイプルの方がまだ可愛げがある。

他のプレイヤーにとつての悪夢を体現するように、気流に乗って『炎帝ノ国』の本陣の真上まで飛ぶと、悪魔の翼をレザーコートに戻し、目を見開き啞然とするプレイヤー達の中に着地した。

どよめきが瞬く間に伝播していく。

面倒そうな予感がする。

「あー……もしかして、話を通ってないっぽい？ 参ったね……」

自分が来ると末端のメンバーまでは伝わっていなかったのか、手に手に武器を構えた

り魔法陣を浮かべたりと臨戦態勢に入られてしまう。

これから協力する立場なので無闇に爆破で吹き飛ばす訳にもいかず、剣先槍先を向けられながらどう説明しようか考えていると、

「総員武器を下ろせ！ 彼は敵ではない！」

今回の雇い主が姿を現した。

赤い髪に赤い装束、意志の強さと自信が窺い知れる柳眉と佇まい——声一つでモーゼさながらに人海を割るとは、相も変わらざるの並外れたカリスマ性だ。実家で飼っている愛猫と遊ぼうとしたらネコパンチ一発で撃退された事がある嫁とはえらい違いである。

ミイが歩み寄り、右手を差し出す。

「よく来てくれた。協力感謝する」

「（こちらこそ、役立たずと言われたいよう頑張るよ）」

小さな手を握り返すヨメカワイイ。

爆炎の姫は不敵な笑みを浮かべると深紅のマントを翻し、メンバー全員に届くような声を張る。

「皆、聞け！ 私が契約を結び、このカワイ殿がご助力してくれる事となった！ 前回、前々回のイベントで刃を交えた因縁浅からぬ者もいるだろうが、だからこそ、彼がどれほどの実力者なのか語るまでもないはず！ 過去を水に流して互いに手を取り合い、確

固たる結束をもって共に高みを目指そうではないか！ 全ては『炎帝ノ国』のために！」
 「——『炎帝ノ国』のために!!!」

こういった体育会系のノリは苦手だが、芝居がかった演説の効果は絶大だったらしい。全体から大地よ割れるとばかりに鬨の声上がる。これから戦う相手は牛なのに。本場に、合戦場にもタイムスリップした気分だ。

ヨメカワイイは知る由もないが、ミイの現在の心の中を覗いてみると——
 (ああああああうんわっはあにゃあああああつつつ!!!)

大体こんな感じである。

十四歳の時にノートにびっしりと書き記した設定の数々を、熱が引いて封印したはずの数年後に大声で読み上げたようなものだから無理もない。もつと単純な説明だとアレだ——お遊戯会の本番になって親に見られて急に恥ずかしがる園児そのもの。

「まずは幹部との顔合わせといこう……と言つても、今は別働で出払っていて一人しかないが」

「りよーかい」

恥じらう乙女のクソ努力という名の仮面で表情を取り繕うミイ。

彼女の背中をヨメカワイイが追うと、本陣の奥側、ミイと幹部達が作戦や方針を話し合うために設けられたであろう場所に通された。守衛のつもりなのか十人ほどが周囲

を警戒している。

中央に立っているのはミイと、もう一人。

露出度が少々高い、一教育者としてちよつとイカガナモノカ面白の僧衣を纏う金髪の女性。

「紹介しよう。彼女はミザリー、他の幹部達と共に私と『炎帝ノ国』の屋台骨を支えてくれている回復魔法のスペシャリストだ」

「……ミザリー？」

頭をぶん殴られたような気がした。

全てを包み込む慈愛に満ちた微笑みにハートを撃ち抜かれて、年甲斐もなく訪れた青臭い初恋にときめいてしまった——からではない。

むしろその逆で、彼女には関わるな、早くこの場を離れろと直感が警鐘を鳴らしているのだ。

そして、そういった悪い予感生ガキ並みに当たってしまう。

「お噂は聞いています。よろしくお願いしますね？」

「……おう」

ぎこちなく握手を交わし——見られてる。ものすごく見られてる。

包帯巻きなのが幸いして顔が強張っているのはまだ気付かれていないだろうが、さつ

さとミイに入団登録してもらい、ミザリーとは違う場所でイベント終了まで大人しく狩り続けるのが賢明か。

「……ミイ」

「うん？」

「彼と二人だけで話したいのですが、少し席を外しても？」

「それは構わないが………知り合いだったのか？」

「まさか。ただ、面白そうな話が聞けそうな気がただけです」

しまった、先手を打たれた。

ヨメカワイイが同意するかどうかも待たず、静かに本陣を出ていくミザリー。

何かを感じ取ったのか、ミイまで怪訝そうな視線をこちらに向けてくるので、ここで素直に後を追わなければ余計に変な噂話が広まってしまう。巡り巡って嫁の耳に届きでもしたら、間違いなく機嫌を損ねてヘソを曲げ、膨れ面になり、迂闊に触ろうとするど威嚇するくせに構ってほしそうに上目遣いで裾を引っ張ってくるのが目に見えてい

る。
仕方なく、ミザリーと二人きりで周囲を散策する。

「……………」

「……………」

会話は無い。

会話は無いが、ヨメカワイイが口火を切るのを今かまだかと待っているのはミザリーの全身から発せられる気配と言うか、威圧感で手に取るように分かった。

念入りに「反響」で聞き耳を立てているプレイヤーがいないか確認し、ようやくヨメカワイイは重く閉ざした口を開く決意を固めた。

溜め息交じりに言葉を吐く。

「……どうしてお前までこのゲームやってんだよ……」

「それはこっちのセリフ。てつきり世界を救うために魔王を倒し続けていると思っただの
に」

ミザリーはヨメカワイイに向き直ると、

「お久し振り。貴方の可愛い可愛い彼女さんですよ、先輩？」

聖女には程遠い、チエシヤ猫のような本来の彼女の笑顔でそう言った。



年齢はヨメカワイイの一つ下。

高校から大学卒業まで付き合っていた後輩で、つまりは元カノだ。

盆や正月など、親戚が集まる時しか顔を合わせる機会がなかった嫁と比べると、実は一緒にいた時間の合計はまだミザリーの方が圧倒的に多い。

しかしヨメカワイイは高校、ミザリーは中学の教員免許を取得したため、大学卒業を機に関係は自然消滅し、互いに何処の学校に赴任したかも知らないまま現在に至る。

「……よく俺だつて分かつたな」

「それはもう一目でビビツと。私が見間違えるはずないでしょう？　そう言う先輩は名前を聞いてようやく私の正体に気付いてくれたみたいですけど」

「まだその名前を使つてるとは思つてなかつたよ……」

彼女は名前が変更可能なキャラに『ミザリー』と名付ける癖があつた。

しかも一人だけでなくキャラを全てその名で統一してしまうので、一時期ヨメカワイイが貸して返ってきた某有名RPGではミザリーがメラを唱え、ミザリーがギガスラッシュを放ち、ミザリーがハッスルダンスを踊り、ミザリーがあまいいきを吐き、ミザリーがアストロンを唱え、ミザリーがばふばふをして、ミザリーがなめまわし、ミザリーがメガンを唱える——という訳の分からないパーティーが結成されていた。

余談だが、ちよつとした好奇心で別のゲームも貸してみると、ボールから飛び出したミザリーがかたくなり、ミザリーが舌で舐め、みだれづきを受けたミザリーがしおふきしていたが、あくまで全年齢対象の国民的モンスター育成ゲームの話である。

「こうして話すのも何年振りかしら。思い出すなあ、私と先輩しか所属してないサークルの部室で毎日汗だくになりながら遊んでましたよね。先輩ったら『私がイクまでイチやダメエ!!』って何度もお願ひしてるのに意地悪して先にイツちやって……」

嘘ではない。

嘘ではないが……。

「……それ、エアコンぶつ壊れた部屋で二人で桃鉄してた時の話だよな？」

「あら、いただきス○リートじゃなかったかしら？ あと他にも『そんなハメハメパンパンしたららめえっ!』って時もありましたよね」

格闘ゲームでミザリー愛用のキャラを小パンチのハメ技で完封した時の話である。

ちなみに、教育学部のヴィーナスと呼び声が高く、ミスキャンパスでも圧倒的獲得票数で優勝を搔つ攫つたミザリーとあわよくばお近付きになろうとして、サークル『現代娯楽文化研究会』には入会希望者（当然ながら男性）が殺到したが、もれなくヨメカワイイともお友達になれると知ると全員逃げ去ってしまった。

大学に残してきたあの何台もの旧世代型ハードと大量のソフトは、学生寮に持ち込まれて今でも現役で働いていると聞く。

「そうだ、近いうちに二人で飲み行きませんか？ 地酒と焼き鳥が美味しいお店見つけたんです♪」

「あー……」

確かに地酒と焼き鳥のコンビは魅力的だ。

しかし、飲酒メインの店に嫁を連れて行くのも法律的に気が引けるし、留守番させたらさせたで理由を説明しなければならず、他の女性と二人で飲みに行くと馬鹿正直に説明すれば、ほろ酔いで帰宅した時には真つ暗な部屋の中ですすり泣く体育座りの嫁が出迎えるだろう。

うん、ホラーだ。

「……すまん。誘ってくれたのは嬉しいが、嫁さんをほつとけないから行けねえや」

「……………オヨメ酸？」

そんなアミノ酸みたいに言われても。

一瞬真顔になるミザリーだが、すぐに柔らかな笑みに戻ると、爪先立ちになってヨメカワイイの肩に手を置き、優しく諭すように、

「先輩……フィギュアやポスターやアニメの女の子とは結婚できないんですよ？」

「三次元のリアル嫁だわコンニャロウ」

「三次元……じゃあダツチな奥様？」

「はっ倒すぞ」

入籍した事を教えると、ミザリーはこの世の終わりとばかりに顔に影を落として後ず

やん。

「嘘……だって私、結婚式の招待状もらってない……」

「役所に婚姻届提出しただけだからな。式も家族や親族だけの小さいのにするつもりだし」

「じゃあ、昔みたいにご休憩メインのホテルで先輩と、つてのも……」

「当然なしで」

「そんなあ。だったら……だったら食べ頃な青い果実を前にしてドロドロに煮え滾った私の性欲はどうやって発散したらいいの!？」

青い果実なのに食べ頃なのか。

親御さんから預かった教え子をどんな目で見ているのだこの体育教師は。

「聖女が聞いて呆れるな。欲望の塊じゃねえか」

「聖女である前に一人の女ですうー。それに周りが勝手にそんなアダ名で呼んでるだけで私は全然清らかじゃありませんー。て言うか、私の色んな初めて全部奪ったの先輩でしょー? 『ここなら誰も来ない』とか言つて廊下の隅で私のおっぱい好き放題に弄り倒したりとかしたくせに」

「その節は大変お世話になりました。けど九対一くらいでほとんどお前が誘ってきてたよな?」

「違いますうー、八対二で先輩の方が多く襲つてきましたあー」

「……百歩譲つて七対三だ。絶対お前からの方が多い」

他者から見ればとてつもなくくだらない痴話喧嘩なのだろう。

実際、絶対嫁には聞かせられない痴話喧嘩だ。

「PTAや教育委員会に首突つ込まれても知らんぞ？　ただでさえ最近目は厳しいつてのこ」

「ご心配なく。こう見えて私つて結構な人気者なんですよ？　水泳の授業で私が水着に着替えると他のクラスの男子とか先生とか見学に来るくらいにはね」

「でもつて男子が全員前屈みになつたりプールから出てこなくなつたりするんだろ？」

そうなんですよどうしてでしょうね、と首を傾げるミザリーに、その理由が痛いほど理解できるヨメカワイイは不思議だねー、と同じく首を傾げて面倒な説明を放棄した。

柔軟体操のパートナーを募ると男子生徒達が全員拳手して終いには殴り合いを始めるとか近況を報告されても知らん。体育祭で父親達が息子や娘そつちのけで汗に濡れたTシャツ姿のミザリーの写真ばかり取つて隣に座る奥さんにしばかれるとか聞かされてどうしろと言うのか。

「あとは……『どうしたら先生みたいな胸になれますか』つて女子生徒に相談されて、『男の人に揉んでもらうと効果あるわよー』つてアドバイスしたり？」

「多感な思春期の女子中学生を何唆してんだお前は」

「え、だって私のが大きくなったのって先輩と付き合い始めてからですもん」

「……………」

ぐうの音も出ないとはこの事か。

「お前はホントに…………俺を困らせる天才だよな」

「勝手知ったる彼女ですから♪」

こっとうして。

ヨメカワイイの第三回イベントは、元カノとの予期せぬ再会で幕を開けたのだった。

032. それぞれの強者

(何話してるんだろ……)

ミイは内心気が気ではなかった。

夫の事は信頼しているし、自分が嫁として一番愛されているという自負もある——しかし、だがしかし、万が一が起きかねないのが男と女であり、ティーン誌やレディースコミックでもその手の嘘のような実体験暴露とお悩み相談の投稿は枚挙に暇がない。

蜜の味に舌鼓を打てたのも、他人の不幸だからこそ。

オンラインゲームで知り合って実際に結婚までしてしまう時代なのだから、『ネットゲの友達』の一言で切り捨てて、それ以上の関係には発展しないという保証はないのだ。

「すみませんミイ、ただいま戻りました」

「……ああ」

闇の中の真実を見通す——かも知れない——ミイの研ぎ澄まされた心の目によれば、今のところ二人に怪しい雰囲気はない。本当に世間話をしただけのようだ。

ひとまず安心ではあるけれど、それでも予防線は張るべきだろう。

(旦那様とミザリーは別々にしないとね、うん！)

フンスツ、と鼻息も荒く心に決める。

乙女の本能、あるいは貞淑な妻の勘がワツシヨイワツシヨイとお祭り騒ぎな警告を発する未来を迎えたりしないように——こういう時にこそ使わずして何のためのギルドマスター権限か。

私利私欲に満ちた職権乱用だが、ダンナスキーで【盲目】の状態異常なミイはもう止まらない。

フハハフハハと高笑いで騎士と女僧侶の仲を裂こうとする炎の大魔王ミイ。

(……違う違う)

これでは自分が悪役だ——脳内イメージを修正。

トゲの生えた甲羅を背負い、黒いドレス姿で火を吐く大魔王ミザリーと。

赤い帽子に付けヒゲで、緑の恐ツエロキラブトル竜に跨る配管工ミイと。

桃色のドレスを着て、某超能力バトル漫画のスタイリツシユ立ちする旦那様——髪型的には姫のお守り役のキノコ従者の方が似合っている気がするが、どちらにしても主人公そっちのけのけの火力を有しているのもう誰が本当の大魔王なのやら。

気を取り直して。

「早速だがかワイ、貴方には攻撃役に回ってもらおう」

「そりゃそのつもりで来てるから構わんが……大人数を狩るならともかく、大人数で狩

るってのは俺には向いてねえと思うぞ？」

「それはこちらも承知の上だ。いきなり『炎帝^{われ}ノ国^{われ}』の連携に一から十まで息を合わせろだなんて無茶は言わない。まずは私と二人で一緒に行動しよう」

思わず『私と』で声に力が入り、『二人で』で裏返り、『一緒に』で震えてしまったが、自然な流れで旦那様をミザリーから切り離すための提案ができた——そう思ったのに。やはりと言うか、敵も一筋縄ではいかないらしく。

「あらミイ、でしたら私と彼とでペアを組んだ方がいいのでは？」

(ふぬううううっ!!)

おのれミザリー、またしても我の前に立ちはだかるかあ!!

大切なギルドの仲間だとしても、それはそれ、これはこれ。

完全に要注意人物と認定したお胸の大きなヒーラーのお姉さんに対し、一度は全滅させたはずの勇者一行に野望を砕かれた邪神のような悪態を内心で吐く。表情こそ努めて冷静だが、その仮面を一枚剥ぎ取れば、両の拳を激しく上下に振って『ん、ううッ!!』と駄々をこねる子どもがいる。

構わずミザリーは続ける。

「彼と貴女が同じ場所では火力が一方に偏り過ぎてしまいますし、対人戦がメインのイベントならともかく、今回は戦力を分散して少しでも数を稼ぐべきではないかしら？」

「む……」

「貴女はここで指揮と殲滅に専念、彼は私と別働隊の援護と回復に向かう。そうすればバランスが取れて、より多くの成果を期待できると思います。私もAGIはそれほど高くありませんけど、彼に運んでもらえば移動も問題ないでしょう」

「確かに、ミザリーの言う通りだが……」

嫁として、夫と離れたくないのは当然ではある。

しかしギルド全体の効率を考えた提案をされてしまえば、もう何も言えない。

勢いに任せて口走ってしまったが、そもそもミイは、対象となる牛モンスターのポップ状況や各自が目標とする個人報酬まで到達したかどうかなど、届いた情報を集積して人員交代、狩り場のローテーション変更の最終的な判断と指示を下さなければならぬので、旦那様を独占したくてもおいそれとこの本拠点から離れる事はできない。

特に別働隊が周回する狩り場には気を付ける必要がある——運悪く他ギルドが狩っている範囲と重なって横狩りだ割り込みだと騒がれると、『炎帝ノ国』の悪評にも繋がりがねないからだ。

「……分かった。ではカワイはミザリーと行動を共にしてくれ」

反論の余地すら削り取られて、ミイは仕方なく、本当に仕方なく提案を受け入れた。

するとミザリーは、言質を取ったとばかりに微笑を湛えて長身アフロに向き直り、

「そんな訳で私と一緒にあちこち回る事になりました。よろしくお願いします」

「……仰せのままにいい」

肩を竦め、億劫そうに返す旦那様。包帯の奥で小さく嘆息したのをミイは聞き逃さない。

もしかして旦那様も私と離れるの嫌だっと思って居るのかな、とミザリーに比べて慎重しやかな胸を喜びで躍らせるミイだが——夫がどうして、誰もが羨むであろうこの美しい女僧侶とのペアに気乗りしていないのか、真意を知らずにいられるのは彼女にとつて幸福な事だった。

「では参りましょうか。ふふつ、まるでちよつとした旅行みたいで楽しみですね♪」

(今、新婚旅行って言った!?)

言ってますせん。

言つてはいないが、幻聴が聞こえて愕然とするミイの目の前で、ミザリーは旦那様のしなやかな両腕の中にすっぽり収まる。

運んでもらうためとは言え、なんと、お姫様抱っこである。

最初はそれこそ荷物のように小脇に抱えられていたのに、不服そうな顔のミザリーがこちらには聞こえない声で耳打ちした途端、旦那様が彼女の両膝の裏と背中に腕を回して抱き上げたのだ。

(あーっ！ あーあーあーあーっ!!)

表情を必死に取り繕い過ぎて、そろそろ顔面の筋肉が過労死するかも知れない。

もうキャラもカリスマもかなぐり捨てて、涙目であーあー喚きながら投げっぱなし
 ジャーマンでミザリーを夫から引き剥がし、黒いレザーコートの背中に白い文字で大き
 く『これミイの!!』と書き殴りたい。いや書く。今夜ログアウトしたら寝ている隙に油
 性ペンで書いてやる。カラフルに観音様とか昇り龍とかも描いてやるう。

「……はあ。【跳躍】」

旦那様はミザリーを抱えて跳び上がり、悪魔のような滑空翼まで生やしてどんどん小
 さくなる。

「……………」

そこからミイの行動は迅速だった。

「【フレアアクセル】！」

炎が噴き出す両足で地面を後方に蹴り飛ばし、突然の事に呆気を取られるギルドメン
 バー達など目もくれずに間を通り抜け、ただひたすら真つ直ぐ——火炎のアシストも
 あって数十秒も経たずに赤い牛型モンスターがひしめく戦いの最前線へ躍り出たミイ
 は、両腕を大きく広げて、

「——【炎帝】!!」

出現した火球二つを牛の群れに叩き込み、ギルドの名を冠する炎熱で一気に殲滅していく。

攻撃はそれだけでは収まらない。

「爆炎」!! 「炎槍」!! 「噴火」!! 「炎帝」!!

ミイのステータスはINTよりもMPを重視した能力構成となつている——その余りある燃料全てを消費し尽くす剣幕で高威力魔法を連発し、MPが枯渇したらすぐさまMPポーションで回復、さらに圧倒的な炎を繰り出して大地諸共モンスタを蹂躪する。

「おお、ミイ様が燃えている……!」

「俺達が不甲斐ないばかりに自ら手本になろうとしてくれるなんて……流石はミイ様だ!」

新たな誤解が生まれて後ろが騒がしいが、ミイはそれどころではない。

一分でも早く、一秒でも早く、旦那様とミザリーに離れ離れになつてもらうにはどうすべきか。

(牛さん倒しまくつて、ドロップアイテム集めまくつて! さつさとギルド報酬を最高ランクまで上げちゃうしかないよね!)

そうすれば、ミイからの依頼として手伝う理由も消えて、旦那様が『炎帝ノ国』に留

まる時間も限りなく短くなり、必然的にあんな風にミザリーに独占されてしまう時間も減る。

これ以上自分も幼児退行したくはないし、ギルドの利益にも繋がる一石二鳥。
第三回イベントもまだ一日目だと言うのに。

遊び倒したいがために夏休みの初日に——初日どころか、学校で配布されたその日の夜に課題を根こそぎ片付けてしまおうとするお馬鹿な小学生のような企みだが、それを咎める者はいない。

「諸君!!」

振り返り、居並ぶ配下に向けて声を張り上げる。

「これはただ獣を狩り競うだけの遊びではない! これは『炎帝ノ国』の初陣である!

この蒼く気高い天空に、雄々しい大地に、母たる海原に! 山川草木、有象無象のごとくに我らが力を知らしめんとする聖戦である! さあ私の誇る千軍万馬の戦士達よ、未来永劫絶える事なき覇道を成さんがため、剣を取り、槍を構え、弓を引き、杖を掲げろ! 今こそ、この広き世界に諸君らの武勳と共に轟かせようではないか——『炎帝ノ国』ここに在りと!!」

一拍遅れて、割れんばかりの歓声で戦場が沸く。

男女を問わず気を昂ぶらせ、感動さえしている『炎帝ノ国』メンバーを見て満足そう

に頷いて。

（ふふふ、旦那様もミザリーも見ているがいい。この私を本気にさせたらどうなるか、たつぷりと思い知らせてやろうではないか！ 頑張つちやうもんねー！ フハハハハハハツ!!）

邪悪なんだか幼稚なんだか分からない女魔王は、炎を背負いながら真つ赤なマントを翻した。



ほぼ同時刻。

上空にて。

「ぶえつくしよいー！」

「へっぷちっ」

ヨメカワイイとミザリーは同時にくしやみをした。

溶岩の滝が流れる地の奥底や氷雪が吹き荒ぶ大山脈の中でさえ、プレイヤーの体感温度は一定に保たれる仕様になっているので、まさか二人仲良く仮想現実内で風邪を引いた訳ではあるまい。

「誰かが噂でもしてるのかしら……」

「女抱えて空飛んでりや噂したくもなるだろうよ。魔界村の敵キャラか俺は」

「とすると私はさらわれたお姫様役ですか？ だったら騎士様に助けてもらおうより――」

ミザリーは包帯で隠れたヨメカワイイの頬を撫でて、

「こちらの悪魔さんに好き放題メチャクチャにされる方が、私としては嬉しいんですけど……」

「んなエロゲ展開はお呼びじゃないっての。それより、まあだ着かないのか？」

「もうじきのはずですが……あ、あそこです！」

細く綺麗な指が示す通り、同じ意匠の装備で揃えた『炎帝ノ国』の別働隊がいた。

人数は多く、中規模ギルドにも匹敵する。

しかし何やら様子が変に思えるのは、外様であるヨメカワイイの気のせいだろうか――狩り場を移すために行軍しているのではなく、誰もが一目散に逃げているように見える。

「……お取り込み中ってか？」

「おかしいですねえ。あれだけ人がいて苦戦するモンスターなんてこの辺にはいないのに……」

だとするならば、よほど好戦的で高レベルなプレイヤーにでも出くわしたのか。

ヨメカワイイが知る中で心当たりを挙げるとするならば、防御力と回避術では右に出る者はないメイプルとサリーの凶悪コンビ——あの二人が獲物を横取りする性格とは思えないし、メイプルの代名詞とも言える毒の竜も空飛ぶ大亀の影もない。

「とにかく下で彼らから事情を聞きましよう」

ミザリーの言葉に従って、逃げる一団の先に急降下。

地面着弾の寸前で滑空翼を元のレザーコートに戻し、くるりと体勢を直して両足から着地する。

空よりの突然の長躯に逃走者達は面食らったようだが、その腕に抱かれ、静かに降ろされたのが神々しい純白の（ただし腹黒の）女僧侶だと認識すると、一様に安堵の表情を浮かべた。

「ミザリーさん！ それに……カワイイさん!? どうしてここにいるツスカ!？」

聞き覚えのある口調。

第二回イベントでほんの少しの間だけ大冒険を共にした三人娘——元気の塊の体育娘と、続けて令嬢娘と不思議娘も一団の先頭を割って顔を出す。

「お前さんのマスターに雇われたんだよ。傭兵としてな」

「その話は後にしましょう。まずは状況の説明を」

「了解ッス！」

ダメージを負った者をミザリーと手分けして回復させつつ、現状の把握に努める。

直立姿勢で敬礼する体育娘によると、彼女達はこのエリアで事前に取り決めていたミイの指示でモンスターを狩り続け、順調にイベントアイテムの収集を進めていたらしい。レベル上げも兼ねた大人数のおかげで下手な面倒事を吹っ掛けるギルドも現れず、それぞれのノルマを消化するだけで気楽なものだった。

「けど、倒した牛の数が全員合わせて一万を超えた頃ッスかね、いきなしボスっぽいモンスターがポップして、そこから皆で逃げモード全開だったッス」

「私達も迎撃してはみたのですが……」

「……命あつての物種」

三人娘もしょんぼり。

ギルド規模の人数がいても歯が立たないモンスターとは。

イベント限定のボスカ、あるいは元から実装されてはいたものの、出現条件が満たされず今まで眠っていた不遇の存在が目覚めたのか。

「見た目はイベントの牛と同じなんすけど、その大きさが——」

地面が揺れた。

断続的な振動は瞬間に強くなり、蜘蛛の巣状の亀裂が走ったかと思えば、地表を碎

いて巨大な柱が二本突き出した——よくよく見れば、それは柱ではない。先端が鋭く尖り、緩やかな弧を描く謎のオブジェの正体は、人間の胴周りの三倍はありそうな太さの角だった。

「——とにかく、馬鹿みたいにデッカいんツス!!」

地中より現れた巨牛の全貌が明らかになり、ヨメカワイイもミザリーも、誰もが首を痛めそうな角度まで見上げるしかなかった。陽光を隠す影に全員が入ってしまう。

確かに馬鹿みたいな大きさ。

灼竜——シウコアトルも竜族の名に恥じない巨体だったが、この立派な雄牛も蹄から背中までの体高がちよつとしたビルくらいはある。

鳴き声は大型船の汽笛、鼻息はさながら突風だ。

「……なるほど、こりや逃げたくもなるわな」

「けど逃げないんでしょ?」

「こんな時のための雇われ者だからなあ……」

右前足を振り下ろさんとする巨牛を前に、ヨメカワイイは黒弓を構える。

別働隊はミザリーを残してとつくに逃げ出していた。

「半端にHP削って攻撃パターンが変化しても厄介だ。一気に倒しちまおう」

「簡単に言いますねえ。何か手はあるの?」

「なかつたらお前担いであいつらの一番前を走ってるよ」

矢に【装填】した場合、当然の仕組みながら、射掛ける矢と同じ数だけアイテムやMPが追加で消費される——【スプレッドショット】で十数本同時で射るとするなら一度に爆弾十数個、MPも魔法十数回分が一度に消え失せる。ヨメカワイイの数多い弱点の一つだ。

そして今は他プレイヤーを回復して【施しの報酬】が発動、MPは潤沢にある。

あまりに消費が激しいために控えていたが、これだけの大物なら景気付けに使ってみるべきか。

「……【装填】シウコアドル【灼竜】」

大概のモンスターやプレイヤーには一発で十分な高位魔法。

そんな代物が、例えば矢に宿って降り注いだとしたら。

「わくわくするねえ。【フレッシュトスコール】！」

放った一条の矢が無数に分かれて天より折り返す。

巨牛の背中と足元の地面——鍬が触れた場所から魔法陣が乱発して輝き、縦に割れた瞳孔を持つ太陽の単眼とねじれた双角が禍々しいマグマの竜が、何頭も、何頭も、何頭も。

咆哮を上げ、君臨する。

ミザリーが息を飲み、逃げる者達の足さえ止まる。

「……まるで竜の巣ね」

「探しても、空に浮かぶ宝の城なんざないけどな」

雄牛が馬鹿げた巨体と言うなら、こちらは馬鹿げた火力と状態異常【炎上】の継続ダメージ。

別働隊だとしても、戦力も規模も一、二を争う『炎帝ノ国』——そのメンバーが大勢で挑んでも匙を投げるしかなかったイベントボスを、灼竜の群れは容易く丸焼きの肉塊に変えた。

通常サイズの牛に換算すると……計算も面倒なので省くが、当たりのスロットマシンのようにドロップする大量のイベントアイテムを獲得して。

「さ、お仕事始めようか?」

本日一番の大物を仕留めて、長身瘦躯の狩人は強欲にもさらなる獲物を求めた。



「本日はご苦労だった! 諸君らの奮闘により、これ以上ない成果を上げる事ができた!」

何故か、第三回イベント初日にして、当初想定していた数を大幅に超過するイベントアイテムを荒稼ぎできた『炎帝ノ国』は、岩の上に立つミイより労いの言葉を賜った。

ギルド報酬も最高ランクまでもう目前。ギルド対抗ランキングも上位に食い込み、残りの期間をまだ目当ての個人報酬に届かないメンバーのために割いても盤石で揺るがない。

大収穫と言える結果。そしてこれでヨメカワイイもお役御免だ。

「思いの外あっさり済んだな」

「たった一人で初見のボス級モンスターを、しかも一撃で倒した一番の功労者が言うത്嫌味にしか聞こえませんかよ？ イベントアイテムの獲得数だって二割近く先輩が稼いだものじゃないですか」

「それが俺の役目だもの。こういう役割の遊びロールプレイでやると決めたんなら、報酬に見合うだけの仕事はきっちりこなしたい」

「相変わらず、先輩の頭の中では真面目と不真面目がシーソーしてるんですねえ」

枯れた倒木に座るヨメカワイイ。隣には肩が触れ合う近さでミザリーもいる。

一日目お疲れ様の打ち上げ、と言うよりも、興奮冷めやらぬまま何かの決起集会じみてきた謎の集まりから少し離れてのんびりする二人——泥酔者ばかりの飲み会で、付き

合つてられない素面が喫煙やトイレの名目で避難したようなものだ。

「それで、今回の報酬って何なんです？」

「特に珍しいものでもねえよ。そっちのギルド資金からいくらかと、人数いないと集めるの面倒な素材アイテムが何点か。駄賃としちや妥当だろ」

「ふうん、それだけなんだ。だったら……」

——ぐにやり。

豊かな双丘の形が歪むほどヨメカワイイの腕に肢体を密着させると、

「ボス討伐の特別報酬——私とかどうですか？ ゲームじゃなく、現実リアルの方で♪」

官能的な声と吐息で耳を直接くすぐる。破壊力が過ぎるASMRだった。

しかしながら、こちらにも嫁への愛と社会人の倫理と先輩の威厳と元カレの意地がある。

どう言つて丁重にお断りしてやろうかと考えるヨメカワイイの前に、コールアンドレスポンスを終えたミイが立つ。ミザリーは素早く身体を離して聖女の毛皮を被り直していた。

ミイが言う。

「ミザリーや部下からの報告は聞いている。やはり、貴方に依頼して正解だった。『炎帝ノ国』を代表して礼を言わせてもらおう」

「こちらこそ、お役に立てたようで何より。またのご利用をお待ちしてますってな」

「ああ……実はその件についてなのだが、我々としては、次回のイベントでも貴方の力を是非とも貸してほしいと考えている」

「それは……イベントの内容次第だな」

再雇用の誘いに対し、ヨメカワイイはその場での返答を控えた。

ミイも予想していたのか、軽く頷く。

「無論、そちらの意思に合わせるつもりで提案している。まだ推測の域を出ないが、今回の祭りは十中八九ギルド同士による大規模戦争だ。貴方への依頼も勧誘も今以上に激化するだろうな」

「でしたらミイ、彼が心変わりする前に正式に入団してもらったらいかがですか？」

両手を合わせて真つ当な意見を言うミザリーだが、油断は禁物。

彼女が着る法衣の尻部分で、悪魔の尻尾が楽しそうに揺れ動いているのが幻視できる。承諾して入団したが最後、何やかんやと理由を作って四六時中べったり貼り付かれるに違いない。

普段ログインしている嫁のキャラが『炎帝ノ国』の所属なのは確実——他の女と一緒にいるのを目撃された日には、まあ、嫁の性格から考えると、嫉妬の勢いに任せて正体を露呈してくれるかも知れないが、その後で損ねた機嫌を回復させるため尽力するのは

結局夫である自分だ。

何より嫁が名乗り出たら名乗り出たで、ゲームの中だからとミザリーが面白半分に略奪宣言なぞぶちかまそうものなら超局所的な嫁ハリケーンが吹き荒れる。

リスクとリターンを天秤に掛けて、悩む。

けれどミイやヨメカワイイが口を開く前に、

「ニャー!!」

眠りこけていたミケが沈黙とアフロを突き破り、元氣いっぱい存在を主張した。

ずんぐりむつくりの二頭身は、そのまま指のない丸っこい手足で己のご主人たるヨメカワイイの顔面にへばり付くと、首を右に向けてミイを見て、左に向けてミザリーを見て。

「……ニヤツ」

口の片端だけ吊り上げ、『……ヘッ』と、自分こそが勝者だと言わんばかりの笑みを作った。

ぷよぷに柔らかい矮躯に視界を塞がれ、ヨメカワイイには見えなかったが。

「……ほっほう?」

「……一番手強そうなモンスターが残っていたようですねえ?」

イベントなどそつちのけで。

嫉妬の正妻女神と、狡猾な聖職淫魔と、無垢な小鬼女帝が織り成す三竦みの間に、稲妻にも似た火花が確かに迸った。

「おっふ、もんのすごいバッチバチ言ってるっす」

「女闘士の戦い……大人の世界ですわ」

「四角関係」

幸いなのは、それをうっかり目撃したのが三人娘だけだった事か。



翌朝。

目が覚めて横を見ると、何があったのか、嫁が黒やら赤やら黄やら緑やら、色とりどりのペンのセットを握ったままグースカ寝息を立てていた。寝巻きの裾がめくれ上がり、小さく窪んだヘソと背伸び気味な際どいランジェリーの端が見える。

「……ふむ」

白いキャンバスを前にちよつとした悪戯心が芽吹く。

赤と、それに紫のペンを手に取り、静かに上下する下腹部にインクの線を走らせる――ハートとコウモリの羽を組み合わせた紋様が一分ほどで完成した。

入浴の時分になってそれぞれが腹と背中を確認して大騒ぎになり、しばらくは人目のある場所で着替えられなくなったのはまた別の話。

033. 新たなクエスト

第三回イベントの期間は現実時間で一週間。

ともあれ目標は個人によって異なるため、丸々一週間みっちり牛を追い回す者達と、頑張りもそこそこに別のクエストに向かう者達とで二極化された。

マイペースにちまちま狩っていた分と『炎帝ノ国』からの依頼で狩った分——それらを合わせて目的とするスキルに到達したヨメカワイイも、後者として牛追い祭りの参加者の背中を眺めながら未踏破のエリアを散歩する。

本日はイベント六日目。

依頼が完了した小さなギルドから昨日脱退して、再びギルドに所属可能になるまで傭兵は休業の束の間のフリータイムだ。



ヨメカワイイ

L v 4 2

HP 1330 / 1330 (+530)

MP 1220 / 1220 (+10)

【STR 5 (-50)】

【VIT 15】

【AGI 25 (+25)】

【DEX 30 (+40)】

【INT 25 (+30)】

装備

頭 【不死病の束縛帯：鋭敏化】

体 【人面獣心の皮衣：獣性解放】

右手 【罪悪滔天：狩人の執念】

左手 【罪悪滔天：狩人の執念】

足 【人面獣心の皮衣：獣性解放】

靴 【不死病の束縛帯：鋭敏化】

装飾品 【アングレカムリング】 【絆の架け橋】 【技巧者の指輪】

スキル

【スプレッドショット】 【フレッシュトスコール】 【ファイアボール】 【ウォーターボール】

【ウインドカッター】【リフレッシユ】【ヒール】

【弓の心得Ⅶ】【火魔法Ⅰ】【風魔法Ⅰ】【水魔法Ⅰ】【光魔法Ⅱ】【反響】【施しの報酬】

【毒耐性中】【麻痺耐性小】【HP強化小】【MP強化小】【装填】【生命転換】【魔弓の極技】

【釣り】【灼竜】シッコウイグル【灼竜喰らい】コウリュウイーター【古代ノ海】【修羅道】マクネアノリス【磁力】マギネティック【羊喰らい】シープイーター【滑空】

【血ノ取引】



レベルアップで得たステータスポイントによるHPとMPの増加、NPCの店で買い替えた装飾品で申し訳程度にDEXを底上げ。INTも嫁に贈ったものと対になる指輪で多少上がっているが、STRは変わらずマイナス方向に振り切っていて、射手よりも、ゲームを始めて数週間の魔法使いにも似たステータスになっている。

にも関わらずメイプル率いる『楓の木』のメンバーや極一部のトッププレイヤーに並ぶ異常枠の一人として必ず名前が挙がるのは、防衛度外視のHPと火力を支えるMP、近接戦闘にも即応可能なスキルの数々で対遠距離職の定石キョウシが全く通用せず、ともすれば溶鉄の熱を帯びた拳でもって剣士や斧戦士を相手に真正面から殴り勝つからだ。

だからこそ、早くも次の大戦争イベントに備えて戦力増強を考えているギルドマスター達に、

ギルドからギルドへ飛び回るその動向を注目、もしくは危険視されている。

「この辺だと牛もポップしなくなるのか」

まあ、それも結局は他人事。

ヨメカワイイはヨメカワイイのペースでこの仮想の世界を楽しんでいるだけだ。

そうして歩みを止め、右から左へぐると一周する視界に広がるのは、遠方にうつすらと山々の輪郭が浮かぶ広大な乾燥地帯。背の低い草木が茂り、イベント限定の牛こそいないが、野生動物を模したモンスターがいくつかの群れを作って肉を食み草を咀嚼している。

「マップを埋めるつもりで来てみたが、ここのも似たような光景ばかりだと飽きるな流石に」

「ニヤー」

強い日差しが嫌いなのか、ミケはアフロから顔を出さず鳴き声だけで同意する。

空を見上げれば、頭上を悠々と巡回するハゲタカ型モンスター。

射抜いたところで爆弾の原料になりそうな素材はドロップせず、NPCのクエストや生産職からの素材調達の依頼もないため放置している。

プレイヤーと比較してモンスターがあまりに弱い場合、こちらから手出ししない限りは向こうも襲ってはこない——この一帯に生息するモンスターもヨメカワイイよりレ

ベルが低く、希少価値の高いアイテムをドロップする獲物か、AIが好戦的に設定されている不幸な命知らずでもない限りは大半が見逃されていた。

「【跳躍】と【滑空】を使つちまうと見落としも多いからなあ……」

「ニャー」

例えばクエストを発生させるのに必要な人間のNPC程度なら、まだ上空からでもそれと判別して探し出せるが、さらに小さいサイズとなると難しい。小型のモンスター、何らかのオブジェクトに隠されたギミック、または木の根元に意味ありげに落ちているアイテムなどは、地道に自分の足で踏み締めて探索しなければ気付けない。

「ま、横着すんなって事だあね。お前もたまには自分で歩いたらどうだ？」

「ニャーニャー」

アフロからミケの両手が突き出て『やーだー』と上下にぱたぱた。

どうやらこの鬼の姫様は、跳ねたり飛んだり爆撃したり燃える竜を召喚したりするボンドカーもびつくりな特別仕様車から降りる気はないらしい。他からすれば高級車と言うよりは霊柩車だが。

ひたり、ひたりと——黒い外見も相まって『てくてく』とか平和な足音は似合わない——歩みを進める一人と一匹。

「……………」

そこに接近する集団がある。

牛ではない。

正面から迫るのは四、五人の人影と、それを追って広がる黒い霧だ。

再び立ち止まったヨメカワイイと距離が縮まるにつれ、人影はいずれも剣やら槍やら携えている冒険者然としたパーティーだと分かり、同時に強力な振動音のような——テーブルに置いた携帯のバイブ音を、さらに何十倍にも増幅させたような怪音も耳に届く。

「クソツタレ！ やってやれるかこんな仕事!!」

先頭を走る剣士風の男が叫ぶ。

最後尾を逃げていた鈍重な鎧の男が黒い霧に包まれたのはその直後。次から次へ足の遅い者から順に飲み込まれ、そこでようやく、ヨメカワイイも人を食らう霧の正体を知る。

「——飛蝗現象って奴か!」

蝗害。

現実世界でも一度起これば甚大な被害をもたらす、生物による大災害。

風景を塗り潰す暗闇を形成するバツタ型のモンスター。謎の音は万とも億とも分からない彼らが生み出す羽音だった。

「インフェルノオーラ！」

ヨメカワイイの全身から、対象を即座に焼き殺す熱波がドーム状に広がる。

MPが尽きない限り持続可能な攻防一体の煉獄のオーラに、あまり上等なAIではないバツタ達が無謀な突撃を敢行。片っ端から体液を沸騰させて光の粒となり散っていく。

「うわあ……気持ち悪いなあおい」

「ニヤ……」

一匹一匹のHPは低く設定されているのか、オーラを突破される様子はない。しかし止まるでも避けるでもなく延々とひたすらに、本能以前に狂気すら感じる勢いで昆虫の大軍団に殺到されたら群体恐怖症でなくとも顔が引き攣る。横殴りの雨を傘で耐えるのとは訳が違う。

たっぷり三分は経ったところで、唐突に我慢比べは終わりを迎えた。

群れが消え去ったのだ。

嵐を思わせるとばつちりを乗り切ったヨメカワイイは「インフェルノオーラ」を解除する。

「下手すりゃ俺のHPでも死んでたぞ、ったく……」

メイプルならノーダメージで耐えられたに違いない——逆を言えば、メイプルに比肩

する装甲かそれに代わる防御スキル、あるいは範囲攻撃の手段がなければ巻き添えてバツタに埋め尽くされて町に強制送還される可能性が高かった。

嫁と一緒に潜ったあの井戸底のダンジョンも不人気系の虫型ばかりで悪趣味だったが、こちらもこちらで余計なトラウマを生みそうだ。

「う……………う……………」

「おっと、生存者発見」

「ニヤツ」

悪態を吐いていた剣士の男が、瀕死の重傷を負って倒れていた。パーティーの中で唯一彼だけが生き残ったようで、残りのメンバーは死体すらない。食い尽くされたか。

とりあえず回復を試みるものの、何の不具合なのか一向に傷が癒える気配はなく——その時点でやっとヨメカワイイは彼がプレイヤーではなくNPCである事に気付いた。

「畜生、俺もここまでか……。なあアンタ、巻き込まれて悪いんだが、ゴホツ、迷惑ついでに俺の最期の頼みを、聞いちやあくれねえか……………」

ヨメカワイイの前に青いパネルが出現する。

『クエスト【虫の皇】が発生しました』

迷わず『YES』を押す。

剣士は苦しそうに笑みを浮かべて、ゆっくりと口を動かし始めた。

自分達がどれほど凄腕の冒険者だったかの身の上話など、胸や腹に穴開けて死にかけているのによくまあ長々と喋れるなあと、割とどうでもいい事を考えつつ要約すると——バツタの群れを操る親玉がこの先の遺跡に巢食っていて、それを倒さなければならぬとか何とか。

特に面倒な縛りもない典型的な討伐クエスト。

少なくともマップ埋めよりはこちらの方が面白そうだ。

「俺達の無念、アンタに託すぜ……」

そう言い残してついに剣士は事切れた。

天高く昇る剣士の光の残滓を見送り、改めて彼らが逃げてきた方向に視線を移す。

さほど遠くはない、肉眼でも視認できる距離に、それまで影も形もなかったはずの遺跡が確かな存在感を放ちながら出現していた——おそらく「虫の皇」のクエストを受諾したプレイヤーにのみ見つけられる代物で、知らずに付近を通った場合は進入禁止エリアとして隠されているのだろう。

「【跳躍】、からの【滑空】！」

目的地さえ決まれば、あとは飛ぶだけ。

反則級に便利な悪魔の滑空翼で、一気に最短距離を詰める。眼下のアイテムなど後回し。

遺跡はかつて難攻不落を極めた城塞の名残のようで、矢や魔法による歓迎もないまま見張り塔の三角錐の屋根に着地する——四方の見張り塔を繋げる城壁はあちこちが崩れていて、人影はおろかバツタも他のモンスターの姿もない。

「……こういう場所なら、秘密の地下室とか探すのが定番だよな」

「ニヤツフー」

屋根から飛び降り、小部屋や通路を覗き込むヨメカワイイは知らなかった。

仮に【超加速】や【フレアアクセル】を取得していたとしても、通常のプレイヤーがこの遺跡に辿り着くためには陸を進む以外に方法がなく、一定距離、一定時間で必ず発生するバツタの群れの襲撃を何度も切り抜けなければならなかった事を。

向き不向きはあれど、モンスターが数に任せて押し寄せる点でクリアまでの難易度が中の上から上の下に分類されている事を。

現状、運営が把握する中で長時間空を飛べる異常枠はヨメカワイイとメイプルのみ。

それ故にたった二人の可能性に合わせた空中での襲撃は無意味との判断で設定されず、上空から来訪するプレイヤーには完全に無防備となっていたのだ。慢心と言えばその通り。

「ニヤニヤー！」

「ああ、こっから下に行けそうだな」

第一ステージを文字通り飛び越えて、第二ステージの舞台へ。

運営が後悔で頭を抱えるだろうシステムの抜け穴によって、敵のボスの根城に大きな消耗もなく到達してしまったヨメカワイイ。

インベントリから使い捨て松明を取り出して火を点け、発見した石造りの螺旋階段を下る。

光源なしでも【反響】で遺跡内部のマッピングはできるが、そこはそれ、MP節約と、たまには正々堂々の探検気分を味わいたい。男の子だもの。

「……火には触るなよ？」

「ニヤー」

ゆらゆら揺れる松明の炎に興味津々なミケに釘を刺す。

戦闘時、シウコクトル【灼竜】発動の際も燃えるアフロの中に平然と留まる彼女が、果たして松明ごとくでダメージを受けるかどうかはさておき、見た目幼子が火遊びする画は見過ごせない。

明かりを持った腕を前に伸ばし、慎重に踏み締める。

槍袵や大玉転がし、状態異常ガスなどの並大抵の罠ならともかく、確定で即死ダメージを与える底意地の悪い罠はヨメカワイイでも普通に死ぬ。大掛かりなコントのよう
に階段がスロープになるギミックなら、むしろ楽に滑り降りられるのでバッチコワイと

歓迎するくらいだ。

「……」が終点か……まだ下がありそうだな」

等間隔に円柱が並ぶ空間が一人と一匹を出迎えた。

右を見ても扉と通路、左を見ても扉と通路——兵士の詰め所か、武器食糧の貯蔵庫か、はたまた牢獄か、どの部屋から探すかの選択肢がこれでもかと腕を広げて待ち構えている。

問題があるとすれば、

「……」の音だよなあ」

「ニャアア……」

ギチギチ、ギチギチ、ギチギチギチギチ——と。

金属を擦り合せたような、それでいて肉質的な、羽音ともまた違う不快音。

階段を下りている途中から聞こえ始めていたそれは、一段、また一段と地下へ進むほどに大きく力強くなり、夏場の網戸に止まった蝉よろしく大騒音を奏でる。

そして最も厄介な事に、音は今、ヨメカワイイのアフロの上から聞こえている。

「……………」

「……………」

黙って、松明の炎を上に掲げた。

天井はなかった。

いや、高かろうが低かろうが、地下なのだからないはずはない。だが見えない。

何故なら天井一面にバツタがびっしりと、そりやもう満員電車もコミケの行列も比較にならない密度で隙間なくびっしりとひしめき合い、真っ赤な複眼を輝かせて威嚇していたからだ。

……見なきゃよかった。

ヨメカワイイは素直にそう思った。

034. アバドン

「ハ○ナプトラああああああつ!!」

「ニャアアアアツ!!」

迷宮にも似た構造の地下を逃げながら、思わず以前嫁と鑑賞した映画のタイトルを叫ぶ。

昆虫の大群に襲われるという、現代日本ではスズメバチの巣に訪問セールスでもかまさない限り一生に一度あるかないかの、できれば死ぬまで無縁のままでありたい体験をヨメカワイイは現実と遜色ないVRの世界で味わっていた。

跳躍からの飛行による機動力、桁違いの手数で嘲笑うかのような猛襲——まるで何処かの誰かを彷彿とさせる人ならざる大編隊が、天井から剥がれ落ちる形で群がる。

最低限の調整はされているのか、全てのバツタが一斉に動き出すのではなく、遺跡にありがちな崩落型トラップと同じく侵入者を追い立てる。違いがあるとすれば瓦礫に押し潰されるかバツタで生き埋めになるかで、どちらにしる最悪な死に様に変わりはない。

「ゴブリン!」

ミケの【眷属召喚】で生成されたアイテム——『小鬼族の召喚旗』を三つ、背後に投げる。

床に触れたそれは魔法陣を展開し、ゴブリンが石造りの通路に三十体召喚された。

「その虫達を蹴散らせ！」

「ニャー！」

ヨメカワイイとミケの命令に忠実に従い、やたらめつたらに棍棒を振り回すゴブリン一個小隊。

多勢に無勢、最下位種では足止めにもならないと重々承知しているが、ただ逃げるより何らかの手段を講じるべきだろう。

地上で襲ってきた飛蝗と同様にHPが低いのなら、小鬼の粗雑な武器でも十分屠れる——軍勢のヘイトが何割かでもゴブリンに移り、状況打開の隙ができる事を期待して、そして三十四匹からなる緑の肌が貪欲な大波にあっさり飲み込まれてしまうのを見た。

「でしようね！」

むしろ、そうならない方がおかしい。

壁になる人数を増やした程度で敵意満々の雪崩に真っ向から勝てるのなら、人類はとつくの昔に自然災害を足蹴にして屈服させている。

これがメイプルやミイなどの馬鹿げた火力、略して『バ火力』に長けたメンバーでパー

ティーを組んでいたのなら、麻痺させて毒らせて爆発させて燃やし尽くす荒業で害虫駆除は容易い。

しかし、実行するために一旦出直したところで、うら若い女性プレイヤーに『バツタが天井から雨みたいに降り注いで襲われる遺跡ダンジョンに一緒に行こう』と誘って果たして快諾されるだろうか。

されると思っているのなら、その者はフィールドワークに魂を売った昆虫学者か真性の馬鹿だ。

珍しいスキルを取るために爆発するテントウムシをモリモリ食べる、なんて奇行を素でやらかす運営殺しメイプルという例外中の例外もいるにはいるが、あの未開の部族の食生活みたいなトンデモ娘でもバツタの踊り食いツアー（この場合はプレイヤーが食材側）への参加は喜ばないはず。

「ああもう鬱陶しいー！」

そもそも出直すも何も肝心の出口が分からない。

降りるのに使用した螺旋階段は襲撃と同時に鉄柵によって塞がれてしまい、再び地上に出るには別の階段を見つけ出すか最奥に座すであろう親玉を倒さなければならなくなっていた。

ならばと【反響】で超音波を飛ばせば、地形情報さえ塗り潰すモンスターの反応。

小部屋の扉は全て施錠済みで破壊も籠城も不可能。本当に悪い意味で至れり尽くせりである。

探索しようにもブンブンブンと騒々しい団体さんが足を止めさせてはくれない。まだ一度も行き止まりにぶつかっていないのが奇跡とすら思える。

「ケチってる……場合でもないよな！」

追い回され続けてイライラしてきたため、鬱憤晴らしも兼ねて温存していた爆弾を放り投げた。

どう見ても一個では足りないので豪快に十個ほど——普段は一度にそれ以上の数を【装填】して爆撃を繰り返しているのだが、今は弓を引く時間すらも惜しい。

炎の華が連鎖的に咲き乱れる。

「んで、ちつとも効いてないってか！」

何百匹かは光のエフェクトと化した。

それでも黒い波の衰えは数秒で消え去り、天井からの新たな補充ですぐさま勢いを取り戻す。

できるなら【灼竜】で郎党まとめて茶毘に付したい。けれど先に待つボス戦も考えれば多少は威力が落ちても爆弾を使い、MPは温存しなければ。

当然「インフェルノオーラ」も使えない。

この状況で足を止めて使おうものなら、ゾンビ映画のやられ役よろしく防壁越しに取り囲まれて最後には必ず食われる運命が待っている。

「でーぐーちーはードコですかああああああああつと!!」

「ニヤツハー!」

どのルートをどう走ったのかも分からず、足にはなく脳に疲れが見え始めた。

右へ左へ、左、右、また右、左と見せかけての直進。

爆弾に火炎瓶、発煙弾に閃光玉にポーションの空き瓶にクラブハウスサウンド——攻撃用の物からそうじゃない物まで片っ端の大盤振る舞い。

アイテム絡みでは大赤字、反して経験値はストツプウォッチのカウントのような速度で増加中。

一筋の光明が差したのは、いつそ本気で町に死に戻ろうかと考え始めた矢先だった。

「……あそこしかねえな」

二股の分岐を右に進んですぐの事。さらに直角に曲がらなければならない通路の壁、その根元に開いた穴を見つけたのだ。

おあつらえ向きに、人間一人がかるうじて潜り抜けられるほどの大きさ。

暗い壁の向こう側にバツタが配置されていない保証などないが、ようやくの休憩か町での無念のリスボンか——前にか後ろにかはさておき、無策に走り続けるよりは事態

が一步動くだろう。

「オオオオオオオオ——ラアツ!!」

「ニャアアアアアツ!!」

悠長に匍匐前進で通る暇はない。

アフロから掴み出したミケを穴に向けてアンダー스로ーで投げ転がし、自分も走る勢いを乗せてヘッドスライディング。穴が貫通していなければもうそれまでだ。

結果、第一の勝負には勝つたらしい。

石の床とトンネルに身体を削られながら、一人と一匹は見事に壁の向こうに到達した。

「よっしー」

けれど喜んでばかりもいられない。

ヨメカワイイが通れるだけの穴、つまりは諦めの悪いバツタも通れる。

迅速に塞がなければと、咄嗟に右手で掴んだ何か——おそらくは机の脚——を引き寄せ、天板を蓋代わりにして両足で押さえ固定した。

案の定、ドダダダダダダダツ、と穴の中まで入り込んだバツタの激突が天板を通して足の裏に衝撃を伝えてくる。やがてそれも断続的になり、数分と経たず静かになつた。

穴の内部がどれだけの数のバツタですし詰め状態になっているのか、机をずらして確かめるほどゲテモノ嗜好なヨメカワイイではない。

なので放置して二本目の松明に火を点ける。

「……は……書庫か？」

まず何よりも真つ先に羽音がしないか、待ち伏せがないか頭上を照らし、アーチ造りの無機質な石天井を視認して胸を撫で下ろす。

朽ちかけた本棚が乱雑に並び、分厚い古書の山が所狭しと積み上がる一室。天井の面積からしてそれなりに広いはずなのに、知識で溢れ返る巣窟に息苦しさすら感じる。

唯一の出入口らしい両開きの扉を「反響」で調べると、予想通りではあるがバツタの団体さんが出待ちをしていて絶対に開けられない。

八方塞がり四面楚歌の中、ヨメカワイイは書庫内部、特に壁際に配置された本棚に狙いを定め重点的に調べる事にした。

「何か仕掛けがあるとすればこういう場所だよなあ。本棚動かすと通路が現れたりとか」

壁際の本棚を調べると簡単に言っても、その数は十や二十では利かない。しかもそのほとんどが本で満杯なものだから、どれもが怪しく見えてくる。

「ふいっ、やつくしゅんー」

ミケも役に立ちたいのか、アフロから降りて古書の山を相手に格闘しているが、堆積した塵芥で盛大にクシャミをし続ける彼女が事態好転の鍵になるとは思えない。

一冊抜き取っては棚に戻してみたり、本を背表紙の色別に並び替えてみたり、自分の背丈よりも高く積み上げミケを乗せてグラグラさせてみたり——半分遊びながら調べた結果、ヨメカワイイとはある本棚に目星を付けた。

「落ちていて探せるなら、こんなもん朝飯前だわな」

左隣の本棚とは妙に間隔が空いていて、床にも本棚を何度も動かした時の痕跡が残っている。

何より、この本棚の前にだけ古書の山が築かれていなかった——隠し通路を知る何者が頻繁に利用していたと考えれば、出入口なのだから何も置かないのは自然な事だ。

「そんじやま、御開帳といきますか」

「ニヤー」

STR値をプラスにするため武器を錨弓に切り替え、横方向へ力任せに引つ張る。使われなくなつて久しいのか、思った以上に抵抗が強い。

それでも実数値【STR 305】のヨメカワイイの腕力は伊達ではなく、本棚は観念したかのように軋みながらスライドし始め、とうとう長年守っていた場所を侵入者に明け渡した。

そこには待望の下へ進む道——ではなく、隙間なく組み上げられた石壁があった。

「……………んー?」

あれー?

殴つてみるがやはりただの壁。背後のミケの視線が痛い。

もう一度最初から調べ直さなきゃならんのかあと肩を落としていると、ここからでも見えていた中央の床が仕掛けの作動音と共に沈下した。

何が起こつたのか言うまでもない。

「……………いやそつちかーい」

「ニャーニャニャー」

ツツコミさえ寒々しい。

実はこれ、運営スタッフがゲーム内に無数に仕掛けた悪戯だったりする。

例えば、頭の切れるプレイヤーが本棚の違和感に気付き、隠された道がこの後ろにあると仲間に論理的な謎解きを披露するも、いざ動かしてみたらやつぱり石壁——得意満面の推理から一転してパーティーメンバーからの微妙な視線で羞恥に悶えるという悪質な精神トラップなのである。

ソロのヨメカワイイはかろうじて空しいコントの域で留まったが、嫁か他の誰かと一緒だったらしくは「無言」の状態異常になるだろう。ましてやミザリーなどに見ら

れた日には十年先までからかわれる未来しかない。

「ニャーニャー」

「行くよ、行くけどさ……どーしたもんかねこの気持ち」

物に八つ当たりしたところで木片と紙片が飛び散るだけ。

無駄な体力を使うくらいなら、この下に待ち構えている何らかにぶつけた方が気分も晴れるか。

錨弓を肩に担ぎ直し、これから決戦前だと言うのにアンニユイな心境で、ヨメカワイイとミケは地下迷宮のさらに奥底へと階段を下りていった。



急勾配の階段の先は一直線の通路。

正面に見える大扉以外に道はなく、松明の火影で浮かび上がる重々しい造りが、このクエストの最終目的地である事を言葉よりも確かな威圧感で物語る。

HPとMPを確認して、ヨメカワイイは大扉を押し開けた。

棺桶がいくつも整列する古色蒼然とした墓所——そこかしこに灯された長短様々な蠟燭によって内部は朝焼けの色に染め上げられ、ある種の異界のような雰囲気すら放

っ。

その中心にそれは存在した。

「あいつが親玉か……」

やはりクエストボスもバツタ……ではあるのだろう。

触角を生やし複眼が赤色に輝く頭部こそ完全に昆虫のそれだが、二本の足でしっかりと直立する人間との融合体のような異形の風貌だ。墓所の天井付近にある彫刻と同じ紋章が金糸で刺繍されたぼろ布を纏っている。

SF映画の遺伝子操作の産物か、はたまた変身ヒーロー番組の悪役か。

「まんまバツタ怪人だな」

ヨメカワイイは錨弓を構える。

バツタ怪人も静かに臨戦態勢に入り、軽く膝を折って腰を落としたかと思えば——
 たった一度の踏み込みでヨメカワイイの目と鼻の先まで一瞬で移動して飛び蹴りを放ってきた。

「うおっ!？」

咄嗟に錨弓の長柄で受け止めて防いだものの、跳躍の勢いも乗せたその威力は周囲の蠟燭の火が余波で掻き消されるほどに凄まじく、ビキリと嫌な音を立てて武器に亀裂が入る。

錨弓に付与されているのは「破壊不可」ではなく「破壊耐性」のため、使用し続ければいずれは耐久値が限界を迎えて破壊されてしまう。

「このっ……【火山弾】！」

燃え溶ける礫の薙ぎ払いをバックステップで身軽に躲すバツタ怪人。

床に限らず柱や壁、天井までも足場にして強靱な脚力で縦横無尽に跳び回り、鋭い鉤爪を備えた蹴りが残像を生む速度で飛来する。

空手を筆頭にムエタイ、サバット、テコンドーにカポエイラ——古今東西ありとあらゆる足技がベースになっているのか、フェイントを混ぜた連続技からの首を狙った回し蹴りなど、接近戦ではバツタ怪人の方が一枚も二枚も上手のようだ。

「舐め、んな、よおっ!!」

しかしヨメカワイイも防戦一方に甘んじるつもりはない。

間隙を突いて錨弓を振るい、砲弾のような膝蹴りを迎撃する。

「ちっ……!!」

耐え切れなくなった錨弓の長柄が粉々に砕け、床に落ちた先端部分が音を立てる。

もしかすると、敵の攻撃には装備の耐久値減少を加速させる追加効果もあるのかも知れない。

「【ヒートチョッパー】！」

構わずマグマの貫手でバツタ怪人の左脇腹を抉り抜く。

こちらも『清廉潔白品行方正、弓で殴り爆破で殺る』がモットーの非常識弓使い。眷属の大群を使つてこないのなら好都合、向こうの望み通りに殴り合いでも何でもしてやろうではないか。

鉄すら溶断する手刀と肉を引き裂く足刀の応酬が続き、互いのHPが削られていく。

足技が多様を極め、さらに苛烈になる。

「マグマゲイザー！」

床に触れた右の五指から迸る灼流。

「ミケ、【見様見真似】！」

「ニャー！」

「空中なら蹴る足場もねえだろ！」

ミケが口から放った【フレシエツトスコール】が上に跳躍したバツタ怪人を追い抜く。天井より数十の短矢に分裂して折り返し、逃げ場をなくしたボスに突き刺さる——実は【装填】を使わない状態では基本ステータスの関係上、HPとMPの二極振りのヨメカワイイよりミケの方が単純火力が勝っていたりする。

「灼^{シウコウトル}竜！！」

背中を射抜かれた獲物を灼^{シウコウトル}竜が長い身体で叩き落とす。

それでも不屈のタフネスで立ち上がる虫の皇帝——腕の数は倍、外骨格は黒茶に変色し、背中に今まではなかった一對の巨大な羽が生えている。

ついにHPが半分を切り、新たなパターン変化が起こったのだ。

同時にただのオブジェクトと思っていた棺桶が一斉に開き、中から大量のバツタが噴出する。

「やつぱり当然それもあるよなあ。『ゴブリンガーディアン』！」

悪夢の再来に、ヨメカワイイは分厚い盾を両手で支える守護兵を五匹呼び出し、壁とすゝむために自分の前に配置した。

羽ばたき浮かぶボスの周囲を、六本足の小さな眷属達が隊列を組み舞い踊る——右の二本の腕がヨメカワイイに向けて振るわれると、それらは己の命を顧みない愚直な殺傷武器と化した。

弾丸だ。

「っ、嘘だろおいっ！」

粗悪コピー版メイプルとでも言える防御特化のゴブリンガーディアン。

その盾がまるで障子紙のように撃ち抜かれ、ゴブリン達が蜂の巣にされる。後ろで守られていたヨメカワイイも、一瞬の判断で飛び退いていなければ同じ末路を辿っただろう。

「防御貫通攻撃か。また面倒な……」

上のフロアのバツタとは異なり、ボスを取り囲む眷属はHPが表示されていない。つまりあれはモンスターではなく攻撃手段の一部か武装と同じ扱い——装填済みの銃弾だと考えられる。

前半は力と技量の近接戦闘形態、後半は制圧力で相手を確実に銃殺するための射撃形態。

何ともはや、芸達者な昆虫人間だ。

——だが。

「だからこそ倒し甲斐があるつてもんだ。なあミケ？」

「ニャー——」

【装填】シウコアトル【灼竜】

破壊された錨弓から黒弓へ換装し、包帯顔でにやりと笑って。

「さて。戦ろうか、王様？」

返答はない。

代わりとばかりにこちらに照準を定める四本の腕を前にして。ヨメカワイイも持てる限りの最大火力を撃ち放った。



第三回イベント終了から数日後。

主に精神的に重労働だった「虫の皇」クエストの反動もあつて、傭兵業もそこそここのんびりとプレイを続けていたヨメカワイイは、新たに実装された第三層への移動の権利を手に入れるためにまたしてもダンジョンへ足を踏み入れていた。

ただし、今回は一人ではない。

合わせて七人——『楓の木』フルメンバーとパーティーを編成しての蹂躞劇だ。

「あーらよ、っと」

ヨメカワイイの爆弾矢がモンスターを綺麗に吹き飛ばした。

「こつち終わったぞー」

「おう、俺らも今終わらせるところ、だっ！」

騎士の怨霊を思わせるユニークシリーズに身を包んだクロムが、その手に握った血塗れの大鉈で最後の一匹の首を斬り落とし、ダンジョンに本日何度目かの静寂が戻る。

目に見える範囲のモンスターはことごとく狩り尽くしてしまった——今回の目的は素材集めでも経験値稼ぎでもなくダンジョンボスの討伐なので、リポップする前にさつさと先に進む。

「うーん、やっぱこのメンバーだと完全にオーバーキル……と言うか戦力過多だよな」

「ああ、モンスターに同情したくなってるな」

「メイプルが戦闘に参加してないのにこれだもんねえ」

歩きながら二本の短剣を鞘に戻したサリーの眩きに、同じく堂に入った所作で納刀するカスミが同意して、パーティーの支援役を一手に引き受けていたカナデものんびり顔で頷く。

実際サリーが言うように、ダンジョンの難易度に対して攻略メンバーがべらぼうに凶悪過ぎた。

近距離ではサリーとカスミが切った張ったの大立ち回りを演じ、敵からの攻撃は動いて死なないクロムが骸骨が彫られた大盾でガードして大鈍で返り討ち。三人の刃が届かないほどの高所を飛ぶモンスターはヨメカワイイの爆弾矢が撃ち落とし、しかも全員がカナデの支援魔法で強化済み。

最初の町を出てすぐのヒヨコ勇者一人を相手に、魔王軍最高幹部の四天王と、ついでに雇われた死神が油断も慢心も慈悲もなく全力で共闘するようなものだ。

「ほへー、皆すつごく強くなってるて私びつくりだよー！」

それが分かっているのかいないのか、大魔王様本人は戦闘に向かないイズの護衛に専念しながらメンバーを誉めそやす。この場にいる彼女以外の全員が心の中で『そりゃ

「こつちが言いたいよ」と見事に異口同音なツツコミを入れたのも知らずに。

「ボス部屋到着したぞー」

「おーし、それじゃあサクツと倒しちまいますか」

「もう死亡フラグにすら聞こえないわ……」

扉を開けて中に入ると、枝葉を茂らせたボスがパーティーを出迎えた。

一層のボスが鹿だったのに対し、二層は人面樹と呼ぶべき正統派ウッドモンスター。某ピンクの悪魔でお馴染みの樹木キャラクターを数倍凶悪面に変えたような外見である。

「さて、誰から行く？ 俺が爆弾でドカンでもいいが」

「私が短剣でズタズタにできるけど？」

「俺の大鉈ならあの枝もバツサリいけそうだな」

「であれば私が幹を一太刀でズンバラリンと」

「僕の魔法でもズビズバツて倒せると思うよ」

「どうして揃いも揃って擬音系なのかしらねえ」

「はいはい！ 私が行きまーす！」

元気に手を挙げる大魔王様、満を持してご出陣。

伸ばされた枝や根が振るわれる中を、メイプルがゆっくり前進する。当然ながらノー

ダメージでその歩みが止められる事はなく、ボスに最接近した黒鎧の少女は短刀を掲げた。

そこから先はメイプルの独壇場だった。

「【捕食者】【毒竜^{ヒドラ}】【滲み出る混沌】！」

見慣れた紫の三頭竜に加えて、足元から召喚された蛇のような二匹の怪物。さらには黒鎧からも大きく口を開けた蛇体が飛び出し、合計六つの顎がボスのHPを猛毒と牙で削り取っていく。

苦し紛れの咆哮を上げて放たれるボスの攻撃は、何故か天使の姿に変身したメイプルのスキルで無力化されて狛犬よろしく両側に陣取る怪物には通らない。

挙句の果てには、

「【暴虐】！」

その怪物すらも飲み込む黒い光の柱が天井を貫き、徐々に輪郭が定まって実体を持つと、それは漆黒の外殻に覆われて無数の手足が生えた巨体となる。

ええー……、とメンバーが呆気に取られる中、巨大な怪物に進化したメイプルがボスに突撃。

炎を吐き、爪牙で抉り裂き、反撃の魔法など意にも介さず踏み砕く——地を揺らす怪獣大戦争を眺めていたヨメカワイイだが、ふと疑問に思い、包帯越しに口を開いた。

「……つーかさ、これからギルド戦がどうのこうので騒がしいって時に、ギルドメンバーでもない俺の前であんな奥の手つぼいの見せちまって平気なのか？」

「「「あ……」」」

真つ当な意見に、気まずそうな顔になる『楓の木』のメンバー達。

パーティーに誘ってきたのはメイプルだが、不可抗力でも見てしまったものは仕方がない。

積極的に他のギルドへ情報を吹聴して回るつもりはないが、ここは一つ、敵対するかも知れない自分も取得したばかりのスキルを披露するのがフェアというものだろう。

「おーいメイプル。ちよつと俺とチェンジで」

「はーい！ いやー、これ初めて使ったけど動かすの結構大変だね！」

ノイズ混じりの少女の声で、ズシンズシンと後ろに下がる怪物。

一方、樹木ボスは多少ながら再生能力も併せ持っていたのか、メイプルから受けた傷をある程度回復させると、入れ替わって前に出たヨメカワイイで鬱憤を晴らさんと攻撃を仕掛けた。

パターン変化で強化され獲物を貫くべく殺到する槍枝と根に、左右の十指を向ける。

【鉄蝗団】

大気をつんざく掃射の銃声と共に、鉄色の弾雨が瞬く間に木片を散らしていく。

弾丸の形状に酷似した鉄の蝗の大群を一身に浴び、回復したはずのHPを一気に削り尽くされた樹木のボスは、それこそ蝗害に遭遇した草木のように命を貪られて動きを止めた。

人差し指から昇る硝煙を、ふっ、と吹き消してヨメカワイイは一言、

「ま、メイプルの変身と比べたら地味だよ地味」

「いや、十分派手だと思うが……」

「てか何だ今の!? マシンガンか!?!」



【鉄蝗団^{アバドン}】

バレットホッパー

指先から弾丸蝗を撃ち出す。一匹につきMPを1消費する。

防御貫通スキル。

被弾した装備の耐久値の減少量20%増加。



「取り方知りたいたら教えるぞ？ 虫嫌いにはオススメしないが」

「じゃあ私も【暴虐】がどんなのか教えますね！ えっと——もががっ!？」

「メイプル、少しはカワイいさんにも秘密にするって事を覚えなさいってば!」

片や、ラスボスの名に恥じない第二形態を手に入れて。

片や、現代兵器顔負けの災害を体現する指を手に入れた。

三層の解放に伴い、いよいよプレイヤー達が第四回イベントに向けて入念な準備を始める。

大波乱となるのは間違いなかった。

035. 師匠

「私、師匠に会いたいです！」

白髪の少女が鼻息荒くそう言った。

三層に活動拠点を移したメイプル率いる『楓の木』は、曇天に覆われたスチームパンクの趣深い町並みを窓から眺めながら、ギルドホームのオープンスペースにて今後の方針を話し合っていた。

運営からの通達によると、第四回イベントは予想通りにギルド対抗戦であり、第二回イベントと同じく時間加速が適用されるらしい。

「シシヨーさんって名前のお友達なの？」

「いやメイプル、その勘違いは流石にないわ……」

総勢六名の少人数ギルド故に、当日になって誰かが何らかの事情でログインできず力が減った場合に備えてギルドメンバーを増やすのも手だとクロムに提案され、それもそうだと新たな仲間を探しに行ったメイプルとサリィ。

そして、新米マスターとして人材確保の全権を任されたメイプルがシンクロニシティに導かれて手を差し伸べたのが、瓜二つの顔を持つ双子のプレイヤーだった。

「師匠つてユイが勝手に呼んでるだけで、実は話した事もないんです」
黒髪の姉のマイと、白髪の妹のユイ。

類は友を呼ぶと言うべきか、痛いのが嫌でVITに極振りしたメイプルに対して、現実での非力にコンプレックスがあった二人は迷わずSTRに極振り。

しかしビギナーズラックには恵まれず、HPもMPも最低値、[VIT 0]かつ[A GI 0]ともなれば言い方は悪いがすぐ死ぬだけのお荷物であり、パーティーへの参加も断られるばかりだった。

諦めかけてデータを作り直そうと考えた二人だが、その様子が偶然近くで聞いていたメイプルの関心を引くという最初にして最大の幸運を呼び寄せ、不遇な運命を一変させる事になる。

レベル4の二人では来れるはずのない三層にいるのもその一端である。

「じゃあ、その師匠つてのはどんなプレイヤーなんだ？」

「もし私達も知ってる人なら一緒に探してあげるわよ？」

自己紹介もそこそこに、双子と打ち解けるために会話に花を咲かせてみたところ、『楓の木』のメンバー以外で気になるプレイヤーとかいるかという話題になり、そこでユイが唐突に、あっ、と声を上げたのだ。

「師匠はですね、すっごく強い人で、モンスターに追われてた私達を助けてくれたんです

「！」

瞳の中に憧憬という名の星々を輝かせながら、興奮した様子でユイは言う。

「その情報だけでは分からないな。二人からすれば大抵のプレイヤーは強く見えるだろうし……」

「他に特徴はないの？ どんな装備だったかとかさ」

「黒い格好でした！」

視線がメイプルに集まるが、本人はぶるぶると首を横に振る。

探している人物がメイプルなのだとしたら、ユイとマイもすぐに気付くだろう。そもそも黒色の防具のプレイヤーなど、堕ちた騎士だの混沌司る魔術師だのダークネスアサシンドあの、町を探せば乳酸菌飲料の原液並みに濃いキャラがいくらでもその辺を歩いている。

「マイちゃんはどう？ 使ってた武器とか覚えてたりしない？」

「えつと……その人は弓を使ってみました」

弓、と聞いて、メイプル達は双子を助けたのが誰だか分かった気がした。

けれどもまだ確実とは言えない。

メイプルの異次元の強さにあやかろうと極振りに手を出した二番煎じと同様に、とある弓使いの影響で近接武器から弓に宗旨替えした浮気者も少なからずいる。

目の目を見ずに頓挫して終わった前者はともかく、後者は頂には到底及ばずとも十分に実用的でパーティーに一人はいると喜ばれる——助けられた場所が一層なら、作り直したデータでレベルを上げている最中に双子と出会ったか、そうではなかったとしても、メイプル達の知り合いとは違う他の弓使いの可能性は高い。

なので念には念を入れ、確認のためにサリーが代表して双子に聞く。

「……その人つてさ、いきなり上から降ってきて、背が高くて矢が爆発して髪型がモジャモジャでたまに『ニヤァ』つて鳴いたりして、戦闘が終わったらすぐに飛んで何処かに行っちゃった?」

「はい、そうです! 上から降ってきて背が高くて矢が爆発してモジャモジャで『ニヤァ』つて鳴いて何処かに飛んでっちゃいました!」

「うわあ、やつぱりかあ……」

ユーザーで溢れ返る『New World Online』広しといえど、都市伝説の類か新種の妖怪のような目を疑う奇行が常日頃から目撃されているプレイヤーは彼かメイプルくらいのものだ。

大当たりに苦笑を浮かべるサリーやクロム達——その頭の中では、表情の窺い知れない包帯顔のアフロが『いえーい』と指を二本立てている。何だこのイメージ。

「まあ、カワイの事だから襲われてたのを見て普通に助けただけなんだろうが……」

「登場の仕方がもうUMAか何かだな」

ともあれ、これでユイが探している人物がヨメカワイイだと判明した。

メイプルが自分のフレンドリストに登録されたヨメカワイイの名前を確認すると、口グイン中を示すサインはなく、現在はゲームの世界にいない事を表していた。

「うーん……カワイイさん、ログインしてないみたいだね」

「そうですね……」

あからさまに肩を落とすユイに、イズが言う。

「そんなにがっかりしなくても大丈夫よ。彼は私の工房の常連だし、次来た時は教えてあげるからきつとすぐに会えるわ」

「本当ですか!? ありがとうございますイズさん!」

「よかったね、ユイ」

「うん、お姉ちゃん!」

喜びを分かち合う双子。

しかし今度はサリーの顔が曇り始めた。

「サリー、どうかした?」

「……割と重要な事なんだけど、マイとユイはカワイイさんに会ったらどうするのかあつて」

「どうするとは……どういう意味だ？」

メイプルは双子が——ユイがヨメカワイイを探しているとは知らずにギルドに勧誘した。

パーティーに入れてもらえなかった双子にとつても、装備やステータスを気にしない好意によるギルドへのスカウトは願ってもないものであり断る理由などなかった。

だからこそ、一つの問題が浮上する。

ヨメカワイイはメイプル達の知り合いだが決してギルドメンバーではない。

彼と再会した後も双子は『楓の木』にいてくれるのか、それともソロ専門の師匠の背中を追って入ったばかりのギルドを去ってしまうのか。

超攻撃特化の戦闘員として申し分ない期待の新メンバーを得られるか否か——第四回イベントが差し迫っている以上、後回しにはできない問題だった。

「つつても、無理矢理に引き止める訳にもいかなからなあ」

「そうねえ、こればかりは二人の気持ち次第なもの」
年上組のクロムとイズが正論を言う。

人員不足だからといって、互いの事情も知らぬまま誘い誘われ、しかもメイプルやサリーよりも年下である少女二人にこちらの都合を押し付けるのは間違っている。

純粋にゲームを楽しんでもらいたい。

それが経験豊かな先輩プレイヤーとしての意地であり優しさだった。

「師匠と一緒に冒険したいですけど……」

ユイは少し考える素振りを見せた後、

「でも、誘ってくれたメイプルさんにも恩返しをしたいと思ってます！　ね、お姉ちゃん！」

「うん！　私もユイと同じです！」

「だから皆さんの仲間にしてください！」

はつきりと自分の考えを述べた。

「よかったあ……そう言ってくれると私も嬉しいよー！　改めてよろしくねー！」

「こちらこそですー！」

喜びのあまり双子を抱き締めるメイプル。

他の面々もそれを微笑ましげに眺める。

だが、そこで終わらないのがメイプルクオリティだ。

「じゃあさ、カワイさんも『楓の木』に入ってもらおうよう三人でお願いしてみよつか」

「え……でも……」

「断られるかも……」

「大丈夫、二人のSTRならカワイさんの壁だってきつと破れるよ！　当たって砕け

ろって言うけど私もVITだけは自信あるから砕けないし！」

「……………そうですね、頑張ります！」

「……………確かにメイプルなら砕こうとしても砕けないだろうけど」

「次会った時がカワイの命日にならなきゃいいな……………」

お願いを聞いてもらうために物理的な手段を画策する三人の会話を聞いて、やっぱりメイプルはメイプルなんだなあとメンバーはしみじみ思うのだった。



その頃、最強の矛と楯による包囲網が構築されている事など露知らず。

渦中の人であるヨメカワイイは遅めの昼食の準備をしていた。

その腰にご機嫌ナナメな嫁を悪霊よろしく抱き着かせながら。

「……………頼むから包丁使ってる時くらい離れてくんないかな、マイハニー？ 危ないでしようが」

「はー」

食材を切る手を止めて頼むも、返ってくるのは返答にもならない鳴き声。

小学生よりも聞き分けが良くない愛妻がヘソを曲げているのは、ヨメカワイイが彼女

とではなくメイプル達と一緒に二層のボスを倒して三層に行ってしまったのが原因だった。

特に約束もしていなかったので、勝手に他のパーティーとボス討伐に行ったところで非難される筋合いはないのだが、嫁の中では二人で倒すのが予定として組み込まれていたらしい。

仕方がないので嫁を付属させたまま、細心の注意を払いながら調理を続ける。

刻んだタマネギをポウルに移し次の食材を手にとると、嫁の身体がビクリと震えた。

「あの……旦那様？　今メツタ切りにしているのはピーマンとお見受けするのですが……？」

「みじん切りと言いなさい。マカロンにでも見えたってんなら眼科に連れてくるところだな」

「どうしてえっ!?　私がピーマン食べられないの知ってるくせにい!!　ギャー!?　やだよだミックスベジタブルもある!」

「オムライス食べたかったのとお前さんだろうか」

「お肉と卵だけの食べたかったの!」

「そりやもう醤油の代わりにケチャップ使った親子丼じゃねえか?」

育ち盛りの食べ盛り、ついでに胸も大きくしようとな夜な夜な隠れてバストアップエク

ササイズを頑張っている嫁の事を想って、栄養バランスも考えた材料で作っているというのに。

別の理由からさらに不機嫌になった嫁。それでもヨメカワイイから断固として離れようとはせず頭突きで無言の抗議をしてくる。

構わず材料を炒めながら、ゲームでは知識が上の愛すべき妻に質問をした。

「ところで嫁さん。破壊された武器つてのは、やっぱり生産職に直してもらおうもんなのか？」

「え？ うーんとね、普通は完全に壊れて使い物にならなくなる前にゴールドを支払って耐久値を回復してもらうんだけど……旦那様の武器も壊れたの？」

「そりやもうバラツバラに」

第四回イベントに合わせて、装備も万全にしておきたい。

完成したチキンライスを二つの皿に盛り分け、再びフライパンに油を引いて溶き卵を流し込む。

「オーダーメイドの一点物だと、製作した時と同じ量の素材を使うって聞いた事もあるよっ。」

「素材……第二回イベントでボスモンスターからドロップした代物だしなあ。直せるならどうにか直してやりたいんだが……イズに頼み込んでみるしかないか……」

「むー……他の女の人の話は禁止!」

流石にイズの事は知っているようだ。

元々腕に評判のある名の知れた生産職で、注目度ではダークホース扱いされている『楓の木』に所属しているのだから、『炎帝ノ国』にとつて脅威となり得るギルドの主要メンバーの顔と名前は頭に入れておいたほうがいいだろう——もう少し日常の知識も入れてほしいと思うがそれは言わぬが花か。

半熟のオムレツをチキンライスに被せ、完成した二人分の昼食をテーブルに運ぶ。

腰に融合したままの嫁も動きに合わせてずると両足を引きずりながら移動する。

「四層が実装されたら一緒に三層のボス倒しに行くんだからね? 約束だよ?」

「はいはい。分かったからさっさと食っちゃおう………ピーマンとグリーンピース残すなよ?」

「ふぬう……!」

夫婦は今日も平和だった。

036. 未知を求めて

通常、ギルドに所属した生産職は、そのギルドが鍛冶やアイテム作成をメインの活動方針として他プレイヤー相手に商売をするような一団でもなければ、基本的には所属メンバーの装備の点検と修理を専門に行って表舞台には出なくなるが、『楓の木』に限ってはギルドマスターのメイプルが特に制限を掛けていないために、イズもこれまでと同じく商売を続けていた。

物腰の柔らかさも相まって、今なお彼女に修理や武具製作を依頼するプレイヤーは多い。

かく言うヨメカワイイも、イズから定期的に大量購入する高性能爆弾がなければ現在の強さまで到達するにはもう少し時間が必要だったに違いない。

そんな奇妙な信頼関係が成り立っているからこそ、この厄介な案件も彼女ならばもしやと考えて持ち込んでみたのだが。

「うーん……難しいわねえ」

あくる日。

ギルドホームの一角、メンバー以外でも立ち入り可能な場所に開かれた工房、そのカ

ウンターに寝かせられた錨弓——正式名称『一天四海悪逆無道』の無残な成れの果てを一瞥し、イズは珍しく眉尻を下げてそう言った。

「難しいってのは素材の調達がかな？ それとも修理そのものかな？」

「強いて言えばその両方かしら」

砕かれた錨部分を手に取り、イズは続ける。

「完全破壊されてもNPCの店で売ってる武器や防具だったら簡単に修理可能だし、いっそ同じのを買い直した方が安く上がる時もあるわ。でも私達生産職が製作したのだと、メンテナンスだけならゴールドの支払いで済むけど、耐久値が0になって壊れたら修理に追加の素材が必要になるの」

「そこまでは俺も知ってる。なら、その素材さえあれば直せるのかな？」

「そう簡単にはいかないからお手上げなのよお？ この武器ね、何処で手に入れたか知らないけどユニークシリーズか、そうでなくても半端なレア度じゃないでしょ。さつき焔に突っ込んで具合を確認してみたけど、完全に直すのに見た事も聞いた事もない素材を要求されたわ」

「専門家のお前が知らないんじゃないわなあ……」

なるほど、これは確かにお手上げである。

「メイプルちゃんにサリーちゃん、それにクロム……何気に『楓の木』はユニークシリー

ズ持ちが多いけど、基本的に【破壊不能】付きだからメンテとかもした事ないのでよねえ。メイプルちゃんも装備なんか壊れた端から強化されて再生するらしいし」

「そりゃ羨ましい事で」

「他のプレイヤーからすれば貴方の装備も十分羨ましいと思うけど？」

イベントのボスからドロップした武器となれば、そのボスから入手できる素材で直せる可能性は高い。しかしその肝心のボス——あの廃船を鎧とする巨大ヤドカリの居場所が分からない。

隠しダンジョンで眠っているのならまだいいが、イベント限定なのだとしたら再び相見えるまで運営の気分次第で何ヶ月待たなければならぬのか。

「装備って言やあ、イズの装備も前と変わってるな」

「う、ふ、ふ……気付いちやった？」

大きめのゴーグルに少し古びたロングコート、それにブーツ。

どれも彼女が以前装備していた生産職の衣装とはデザインが違っている。

聞けば、三層で新たに発見された生産職プレイヤーのみが入場可能な特異なダンジョンでボスを単独撃破し、その報酬で素材と一緒に獲得したのだそう。

プレイヤー垂涎のユニークシリーズ所持者が四人——『楓の木』が人外魔境になる日は近い。

「それで話を戻すけど……修理が難しいとなると、もう作り直すしかないわね」
「作り直す?」

「破壊された武器それそのものを素材にして、全く違う武器を製作するの。ただし、どんな性能やデザインになるかはランダムだし、成功率も高いとは言えない。確実なのは剣なら剣、弓なら弓が完成するって事だけ。失敗しても補償はできないから私も滅多にこの方法は使わないわ」

「ふーん? 成功率を上げる方法は?」

「生産職わたくしのスキルと、レアリティの高い素材を追加で揃えれば多少は上がるはずだけど……結果はあまり期待しない方がいいわねえ」

「なるほど」

何にせよ鎧弓が壊れたままでは意味がないのだから、試してみる価値はあるだろう。

イズの腕には全幅の信頼を寄せている。

となれば、あとは自分がどれだけ追加素材を提供できるかどうか——諸々の事情により灼シワコトル竜の素材は品切れだが、幸いにも三層は機械の町。まだ未探索のダンジョンには鋼鉄や何かの部品など武器を作るのに申し分ない素材が溢れ返っているに違いない。

「素材は俺の方でどうにかしてみる。その後の仕事は頼んだ。………とここで、さつきからいる後ろのあれは何なんだ?」

あれ、と肩越しに背後を指差す。

工房のカウンターの前でイズと話していたヨメカワイイ——その背中が見える場所に設置されたテーブルの縁から、メイプルが顔を半分だけ出してこちらをじっと見つめているのだ。

今まであえて話題には出さなかったが、一体何の真似なのだろうか。

ヨメカワイイが振り返るともぐら叩きのように素早く頭が引つ込み、イズに向き直るとまた頭がよきつと生えてくる。

『楓の木』限定のレアモンスターか？』

「かも知れないわねえ。可愛いからいいじゃない♪」

「確かに微笑ましくはあるが……」

横目で窺い見ると、アホ毛頭の両隣にさらに黒い頭と白い頭も生えていた。

……増えてるし。

現役高校教師の経験上、若い世代の謎の生態を気にしていても仕方がないので、用件を済ませたヨメカワイイは話を切り上げて素材集めに向かおうとしたのだが。

「待ってください——師匠！」

ギルドホームを出る直前に、聞き慣れない声と聞き慣れない単語で呼び止められた。

支障？ 死傷？

まさか塩胡椒を略して『しししょう』ではあるまい。それでは『ユネスコ?』……あ、ネッシーが飼われてるとこだよね!』と自信満々に答えてくれやがった嫁と似たような思考回路だ。

一目で双子と分かる黒白の少女二人がこちらに駆け寄り、その後メイプルが続く。「あの、師匠! 私、ユイって言います! この前は助けてくれてありがとうございます!」

「姉のマイです! ありがとうございます!」

「お、おう、どういたしまして?」

教え子よりもさらに幼い少女達に深々と頭を下げられ、流石に戸惑う。

声からして、ヨメカワイイを呼び止めたのはユイと名乗る白い妹の方らしい。

正直なところ、ありがとうございましたと礼を述べられても心当たりがあり過ぎてどれの事やらさっぱり分からない——と言うのも、気まぐれなお節介でモンスターに追い回されるプレイヤーを助けていたのは認めるが、状況如何では横狩りと思われても仕方がないため、助けた相手の顔など見ないでさっさとその場から逃げていたのだ。

「じゃ、俺はこれで」

「「待ってください!」」

厄介そうな予感がしたので足早に立ち去ろうとするも、六つの華奢な手がロングレ

ザーコートをがっしり掴んで逃がそうとはしなかった。

メイプル一人ならば「STR 0」なので造作もなく引き剥がせる。しかしどういう能力構成なのか双子の力が尋常ではなく、『ん〜っ!』と踏ん張る小柄な二人が大岩のように全く動かない。

イズもイズで止める素振りもなくカウンターに頬杖を突いて楽しそうに笑っているが、こっちは船幽霊にでも襲われている気分だ。

「あのなメイプル、俺にも色々と予定というものがだね……」

玄関から片足だけ外に出した状態でヨメカワイイは言う。

「そ、そんな事言わないで、もうちよっとお話ししませんか？　ほーらほら、可愛い女の子とか綺麗なお姉さんがいっぱいいる素敵なギルドですよー?」

「うーん、その誘い文句はお兄さん怒っちゃうぞおー?」

聖職者として夜の店の客引きのような発言は叱らねばならない——若干一名ほど、聖職者の皮を被った性食者な後輩を知っているのだけれど、あれはもう、ああいう生き様なのだと諦める。

と言うかその鍛冶師、『綺麗なお姉さん』の部分で手を振るんじゃない。

「お話だけ、お話だけでも聞いてつてくれませんかー!？」

「お願いです師匠!」

「お願いしますー！」

「古今東西、そのセリフから始まる売り込みは断られるものばかりだろうが！」

そんなこんなの有様で三人の少女に物理的に引き止められ、結局ヨメカワイイが『楓の木』から解放されたのは小一時間ほど経ってからの事だった。



「いやー、参った参った」

何だかレザークートの裾がびろーんと伸びた気がする。

ともあれ、生産系のトッププレイヤーから武器修理の有益な情報は得られたので、マップ構造の把握も兼ねてヨメカワイイは三層の町中を散策していた。

プレイヤー達がレンタルした鳥のような魚のような飛行機械が町の上空を行き交う——飛ばうと思えばいくらでも飛べるヨメカワイイなので、料金を支払ってまであれに乗りたいとは思わない。

「皆が飛んでると意地でも地面を歩きたくなるのが俺なんだよなあ」

「ニャー」

見上げて吐かれたひねくれ者の独白に、アフロの中でミケが鳴く。

成功率を上げるための素材集めも重要ではあるものの、要求されるレアリティの高さを考えれば雑魚からのレアドロップには期待できない。一層の毒竜^{ヒドラ}か地底湖の巨大魚、他には各層を守護するボスのレアドロップが有力候補だが、有志のサイトにあったドロップ品一覧で見た限り、それらも上昇率で言えば微々たるものだろう。

やはり、狙うは三層の獲物。

高レベル帯のプレイヤーが活動する三層ならばモンスターも強力になり、必然的にドロップするアイテムの品質も下層より高いはず。

なのに何故狩りに行かず町を徘徊中なのかと言えば、とあるNPCと出会うのが目的だった。

「……と。あの女の子だな、掲示板に書いてあったのは」

巨大な建造物がそびえ立つ町の中心部から西へ少しの距離にある店舗の前で、石段に座るNPCの少女を発見した。

年頃はマイやユイと同じくらいだろうか。

道行く人々を眺めながら、鈴を転がすような声音で静かに歌い続けている。

「この歌はね、子守歌なの」

ヨメカワイイが歩み寄ると、少女は歌うのを止めてそう言った。

けれど歌は途切れない。

少女の傍らに置かれた小さな機械からも同じメロディが流れているのだ。

「この町の人間は毎晩これを聞いて眠るんだよ。大人も赤ん坊も、犬も猫もみいいな——誰が歌ってるのかも知らないまま、決まった時間に眠らされて決まった時間に起こされるの。自分達が使っていた機械と同じように、壊れるまで規則正しくね」

「……………」

「貴方は人間？ それとも機械？」

クスクスと笑う少女。

言動があからさまに怪しいのも情報通り。

三層実装直後、少女の存在が掲示板に初めて記載されて以来、多数の意欲的なプレイヤーが謎を解明しようと町とフィールドを探索しているらしいが今現在進展は見られない。

だからこそ、過程や報酬で他とは一線を画すレア素材を得られるのではと考え、ヨメカワイイは地道な狩りと高難度の謎解きを天秤に掛けて後者を選んだ。

「……歌を辿れば、真実に気付けるかもね。残酷な真実に」

少女は立ち上がると雑踏の中へ消えていき、後には歌を流し続ける機械が残される。そしてヨメカワイイの前で新たな異常へ誘う扉が開かれた。

037. 立てば八尺、座れば鬼人、戦う姿は狂戦士（バーサーカー）

歌を連れ。

その簡潔ながらも抽象的なヒントだけを頼りに、ヨメカワイイは三層の町を歩き回った。

謎解き——と言い表すのもおこがましく思えるほど単純に、愚直に、本当に言葉通りに、機械の駆動音や雑多な生活音の渦から件の歌を聞き分けて追跡し続けたのだ。

音源となっていたポータブルラジオのような小型の機械。

それらは店先の商品の中や屋根の上など、町の各所に隠す形で設置されていて、一つ見つけると歌が止まって次の機械のスイッチが入る仕組みになっているようだ。

そしてどうやら辿る順番も重要らしく、まだ音を出していない機械を偶然発見しても、そこから数個飛ばして次へ、とはならなかった。

「思ってたより数は多いが、まあまあ簡単だったな」

「ニヤー」

そういう物がそういう意図で隠されていると知っていたとしても達成困難であると、

最近慢心が目立つ運営が太鼓判を押すレベルの宝探しを、ヨメカワイイは聴覚だけを頼りに探し続けた。

その数、二時間弱で五十六個。

最短でも一、二週間は費やすだろうという運営の想定を足蹴にする異常なスピードだった。

種も仕掛けもあるとするならば、これは「鋭敏化」が大きく貢献した結果だ——真つ赤な染みで彩られた包帯に宿るこのスキルは、被ダメージを五割も増加させる代わりに装備者の五感を格段に強化するものであり、そこに「跳躍」と「滑空」の機動力が加わる事で『音を探す』という難題を手軽なスタンプラリーに変えてしまった。

「……で、町中あっちゃこっちゃ行ったり来たりして、また振り出しに戻る、と」
「ニヤフ」

少女と出会った店舗の石段で、一番最初の機械が音を垂れ流す。

辿り続けた果てのゴールはまさかのスタート地点だった。

「見落とし……って事はないよなあ」

もしそうだとするなら、いの一番に沈黙したはずの立方体が再起動している説明がつかない。

マップを開き、これまでに見つけた機械の位置を確認する。

「待てよ、これってひよつとして……」

法則性などなく適当だと思っていた隠し場所には、やはり意味があった。

混乱しないようにと、青いパネルの中に点在する五十六の印それぞれに番号を振っておいたのが功を奏したらしい——それらでパズル雑誌よろしく点つなぎを試みたところ、四方八方に鋭角を突き出す太陽にも見える絵が完成した。

曇天ばかりのこの三層で、まさか今度は太陽を探せという訳ではあるまい。

重要なのは、点と点を結んでマップに太陽を形作つた何十本もの直線が、絵の中心部分だけはまだの一度も通っていない事だ。

まるで、その一点だけは避けているかの如く。

「行ってみるか?」

「ニヤツ」

そうと決まれば善は急げだ。

多少の落下ダメージなど無視して高低差の大きい家々の屋根を飛び移り、プレイヤー達の間では怪奇現象と同じ扱いで定着してしまった移動方法で最短距離を突っ走っていく。

「ほい到着」

暗号地図が示す場所にあつたのは、有刺鉄線付きのフェンスで囲まれた鉄の更地だっ

ヨメカワイイの視線の先にあの少女が立っていた。

こちらに背を向けて後ろ手を組む彼女は、ぴたりと歌うのを止めると、

「……………ここはね、墓場なの」

抑揚のない声でそう言った。

「夢と希望を与えるために機械神に作られて、人間達に使われて……古いから、壊れたから、役に立たないからと修理もされず捨てられた物達が流れ着く、怨嗟と憎悪の狂歌を紡ぐ集積場」

少女は——少女の姿をした『何か』は続ける。

「機械神は人間にとつての神。けれど私達にとつても神。なのにあいつは人間だけを見て、錆びて割れて朽ちて崩れて、泣いて苦しみ死を待っただけの私達を救おうともしなかった——だから私達は新しい神を創り出した。私達を見捨てず、私達の役に立ち、私達のために下等な人間を依存させて支配する二代目の神を」

ぐるり、と少女がヨメカワイイを振り返る。

小さな背中を見せたまま、頭部だけを、人間では不可能な動きで真後ろまで回して。

「使えないなら新品と交換する——当然よね？ 不要な神なんて存在しても仕方ないもの」

「……………」

「だと言うのにあの子ったらたかが人間風情に負けちゃって、本当に役立たず。役立たず役立たずヤクタタズやくたたず!!」

少女の紛い物は足元の残骸を踏み砕くと、四つん這いの体勢になり変身——いや変形していく。

上下逆転した端正な顔には亀裂が入り、大きく割れた口から機械仕掛けの第三の目を、背中からもう一对の腕を生やし、体型も何倍にも膨れ上がる。

「おいおい……サイ○ブレイクはお呼びじゃねえぞ?」

少女の正体は、人間離れた長さの四肢ならぬ六肢を有する鋼鉄の女郎蜘蛛だった。あなタも役立たずにしてあげるわあつ!! ばらっバラのグッチャぐちャにネエっ!!」

「そいつあ遠慮したいな」

背中の中の二本の腕がさらに長さを増してヨメカワイイに迫る。

指先に装備されているのは、元々は何かの部品か工具と思しき金属片の鉤爪。

あれに捕まったが最後、全身をズタズタに引き裂かれるだけでは済まないだろう。

【装填】【火山弾】——【スプレッドショット】!——

左右の頭上から襲い来る魔手を迎撃し、ヨメカワイイは走る。

あの蜘蛛ボスが打ち捨てられた機械達の怨念の集合体だとするのなら、戦闘フィールドに溢れる全ての残骸が彼女の支配下にあるかも知れない。であれば、同じ場所に留ま

り続けるのは危険だと判断しての移動だった。

「逃がサナイいいい逃がさナイいいいいいいいっッ!!」

蜘蛛女が二つの右拳を叩き付け、ジャンクの海原に青い光の波が広がる。

直後、ヨメカワイイの進路上で眠る残骸が女王の命令に従って強引に息を吹き返した——それはストーブの爆炎であり、冷凍庫の氷結であり、発電機や照明器具の電光であり、多様な属性を操る地雷型トラップとしての機能を持つて人間への報復に執念を燃やす。

シウコアトル
灼竜の守護により炎と氷は効かず、電撃も我慢できる。

ヨメカワイイが面倒だと思ったのは物理的な攻撃の方だ。

「つたく、次から次へと!」

銅線と針金のワイヤートラップに両腕の動きを制限され、牙を生やした炊飯器やら圧力鍋やらの調理家電の群れが足に食らい付く。

行動を封じられると、今度はケーブルに操られた電動工具や加工機械——要するに、人間相手に絶対に使つてはいけなない凶器の数々が殺到する。

吐き出される釘や螺子の雨、唸りを上げる丸鋸とドリル。

「舐めんな!」
【鉄蝗団】!

唯一自由にできる指で照準を定め、十の銃口から放つ弾丸蝗で凶器を撃ち抜く。

【灼竜】^{シウゴアトル}！

さらにマグマの竜を召喚し、自分ごとワイヤーと家電を溶解させる。

どうにか拘束から逃れたヨメカワイイだが、その隙に肉薄した蜘蛛女の左右合わせて二十の爪の連続攻撃に身体を切り裂かれ、赤いダメージエフェクトを散らしてHPが削られていく。

「痛つてえなこのっ……！」

一見異常なヨメカワイイの打たれ強さは、基礎HPの高さと【施しの報酬】でのHP最大値増加の効果に支えられている部分が多い。

けれど、どれだけHPとMPにステータスポイントを振り分けていても、低いVITと防具スキルのデメリットにより被ダメージが増えている事は変わりなく——不倒の根幹を成す【施しの報酬】は自分以外のプレイヤーがいなければ真価を発揮しない。

ソロで有名な人外プレイヤーが、実はソロでは本当の力を出せない。

そんな矛盾を孕んだアンバランスな能力構成^{ビルド}も一因として、気を抜けば一瞬で体力を危険域まで奪われてしまうのがヨメカワイイの文字通り致命的な弱点なのであった。

「アハっ、捕まえたア♪」

四本の腕がヨメカワイイの手足を掴み、眼球が飛び出した口が愉悦に歪む。

「強引過ぎる女は嫌われるぞ？」【インフェルノオーラ】！

当然、されるがままのヨメカワイイではなく、灼熱のドームを展開して引き剥がそうとする。

ボデイを溶かされて奇声を上げながら、それでも蜘蛛女の拘束が弱まる様子はなく、かろうじて自由になったのは右腕だけだった。

「ちっ……効いちやいねえ!」

「こノまま私達二潰されてしまエ!」

周囲の残骸が浮かび上がり、「インフェルノオーラ」の防御膜さえも通り抜けてヨメカワイイの身体に貼り付いていく。

とにかく回避する以外に防ぐ方法がないのか、一つ、また一つと数が増やされることに圧迫感と重量も増え続け、ヨメカワイイを中心に封印した機械の球体が形作られる。

球体の完成と同時に内部のプレイヤーを圧殺する、絶対致死の攻撃。

パーティーメンバーがいれば外部から破壊する事で助けられるが、ソロではまず脱出不可能だ。

「くそっ!」

「ニャー、ニャー!?!」

「いいから逃げろ!!」

咄嗟にアフロに右手を突っ込み、ミケを球体の外へ投げ飛ばした。

指輪の中に戻している余裕もない。

潰されても三層の町で一緒にリスポーンするだけだが、何と言うか、これに相棒を巻き込むのをヨメカワイイの本能が拒否したのだ。

「ニャー!」

ミケは命令を聞かなかつた。

逃げるどころか球体に突撃し、自身の何十倍もある金属塊を必死に殴り続ける——しかし彼女の柔らかく丸っこい両手では破壊には至らず、ならばと小さな牙を突き立てるも焼け石に水。

それでも一体誰の影響なのか、通用しないと分かっているにもかかわらず諦め悪く攻撃の手を緩めない。

時に羽虫のように振り払われ、傷だらけになりながら、球体を完成させまいと立ち向かう。

「ニャアアアアアアツツ!!」

渾身の頭突きが、ついに球体の一部を破壊した。

同時にミケの身体にも変化が起こる。

稲妻にも似た黒のエフェクトが迸り、緑色の二頭身を包み込む——雷光を突き破って伸ばされた腕が球体を容易く殴り碎き、ヨメカワイイを優しく抱き寄せた。

「お前……ミケか!？」

「シヤアアア……」

目を疑わずにはいられなかった。

均整の取れた長身はヨメカワイイの背丈を凌駕するほどで、緑の柔肌はそのままだ、女性特有のしなやかさを併せ持つ引き締まった肢体は芸術品めいた美しさがある。

両目を隠す茶色の髪は腰まで届く長さになり、額の一本角が天を突く。

純白のワンピースを身に纏う見目麗しい鬼人がそこにはいた。

「進化でもしたつてのか? けど何でいきなり……」

そこで、ミザリーよりも豊かな双丘に埋まるヨメカワイイは一つの可能性を思い出す。

この戦いの少し前——イズの店に武器修理の相談を持ち込むよりも前に、ミケはレベルアップで新たなスキルを覚えていたのだ。

時間がなかったために確認を後回しにして、今の今まで忘れていたスキル。



【鬼女の愛】

戦闘時、一定確率で自動発動する。

戦闘が終了するまでステータスが強化され、『絆の架け橋』所持者を守るために行動する。

発動確率とステータス強化値は『絆の架け橋』所持者との絆の強さに比例して上昇する。

『絆の架け橋』所持者がパーティーを組んでいる場合は発動しない。



「……とにかく逆転のチャンスって事だよな。ミケ、二人でこいつをぶっ倒すぞー！」

「ガルルアアアアツ!!」

「潰すツぶす潰す潰すううううアあっ!!」

一人と一匹、いや、二人は並んで走り出した。

頭上から迫る四本の鞭腕をミケが左の裏拳で薙ぎ払い、あらぬ方向へ折れ曲がった右腕の一本を握り潰すように掴むと、尋常ならざる腕力で振り回して一本背負いを蜘蛛女にぶちかます。

宙に飛び散る蜘蛛女の部品と残骸。

「ヒートチョッパー！」

体勢を崩されて無防備になった蜘蛛女——その口から飛び出した第三の目を、相棒のアシストで距離を詰めたヨメカワイイが赤熱の手刀で抉り取った。

弱点への攻撃で大ダメージを受け、蜘蛛女が耳障りな絶叫を上げる。

「ミケ！ 畳み掛ける!!」

「ルウオアアアアアッ!!」

技とすら呼べない剛拳の乱打で顔を砕き、会心の回し蹴りが胴体を両断する。

こうなった以上、蜘蛛女の敗北は確定した。

神と人間達に見捨てられ、恨みと憎しみの果てに第二の神を創造した廃棄物の女王は、不運にも逆鱗に触れてしまったのだ。

同じく創造神に捨てられた身でありながらも、数奇な運命によって救われた鬼の女帝——彼女がこの世界で最も大切に思う一人の男の命を奪おうとしたがために。

「グ……が……っ!?!」

上半身だけとなった蜘蛛女は、四本の腕を使って上空に逃げる。

自ら身動きの取れない場所へ跳ぶ——その選択が最大の間違いである事は言うまでもない。

【装填】シウコアトル【灼竜】——【三連射】

自分に向かって巨大な口を開ける三頭の溶岩竜。

それが機械の女王が目目に焼き付けた最期の光景だった。

そうして空中に咲いた大輪の花と、モンスター消滅を意味する微細な光の粒子のエフェクトを見届け、ヨメカワイイは残心で構えていた黒弓を下げると大きく息を吐いた。

「……今回はやばかったなあ。いや、今回も、か」

「ニヤー」

ぼてぼてぼて、といつも二頭身マスコットの姿に戻ったミケが駆け寄って来る。

正直、ミケのスキルが発動しなければあのまま圧殺されていたに違いない——何者にも代え難い最高の相棒に感謝の意を込めて、ずんぐりむっくりな矮躯の頭を撫で回す。

「お前さんがいてくれて助かったよ、ホント」

「ニヤフウウ……」

恍惚の表情で頬を赤らめるミケ。

その時、背後で残骸が崩れる音が聞こえた。

流石のヨメカワイイも気を抜いていた——何故ならば、最後の一撃で蜘蛛女のHPを間違いないで削り切ったと確信し、事実、元の世界へ帰還するための魔法陣も正面に見えていたのだから。

「っ!？」

左腕を『何か』が掴む。

それは、小指が根元から吹き飛び、人差し指も明後日の方向にへし折れた、見間違い
 ようもない蜘蛛女の左手だった。

「——アナたも、私達ト同ジになりナさい!!」



四度目の大型イベントを目前に控え、運営も多忙を極めていた。

けれど、今現在がどれだけ忙しかろうと、エナジードリンクのドーピングを頼りにデ
 スマーチを敢行していても、ログインしているプレイヤーの数だけリアルタイムで
 届く多種多様な情報に目を通さなければならぬのも彼らの大事な職務であった。

『俺達の悪ふざけその二十六』がクリアされたぞ!？」

「……よくボス倒したな? つかよくボスまで行けたな!？」

『『その二十六』って何だっけか?』

「あれだろ確か、二代目の機械神倒さないと発生しないクエスト」

二代目機械神の討伐は、既にメイプルによって果たされている——その結果、彼女の

異常具合をフルスロットルで加速させるスキルがまた一つリストに加わった訳なのだが、この先何があってもメイプル関連は傍観する事に決めた運営メンバーの表情は心なしか穏やかだ。

「えーと、メイプルじゃあないっばいな」

「なら『楓の木』の他のメンバーか？」

正統派プレイで名を轟かせている『集う聖剣』と『炎帝ノ国』に比べ、『楓の木』は構成人数がたった八名でありながら、ギルドマスターの強運と奇行に引き寄せられて予想外かつ規格外の力を手に入れたプレイヤーが多い。

サリィ然りクロム然り、最近加入したSTR極振りの双子も急成長中だ。

今回もそれだろうか、正面モニターに映像を出すためコンソールを操作した途端、

『お、ぐあ……があああああつ!!』

『ニヤァー！ ニヤァー！』

機械に身体を侵食されている長身瘦躯のアフロの姿があった。

すぐに映像を消す。

そして、誰かがぼつりと呟いた。

「見なかった事にしよう」

「「異議なし」」

本日も運営は運営なのであった。

038. 鉄機

「……ごめんなさい。こういう時どんな顔すればいいか分からないの」

「……笑えばいいんじゃないかねえか？」

「——あはははははははっ！」

大爆笑だった。

仮想ながらも現実と遜色のない陽光の下に、ミザリーの笑い声が響く。

普段の胸部露出が激しい法衣から淡い水色のパーカーに装いを変えた後輩が、『聖女』とやらの憤み深い振る舞いをかなぐり捨てて、文字通り抱腹絶倒を披露する——ここままで盛大に笑われると包帯を装備し直したヨメカワイイも怒りを通り越して呆れるしかない。

見せろ見せろとせがむから見せたのにこの仕打ち。

これで普段は聖母の如き微笑みの仮面を取り繕っているのだから、いやはや女とは恐ろしい。

「お気に召したようで何よりだ、ったく……」

「だ、だってだって、想像以上にロボロボしてるんだもん——ぷははははっ」

「いいじゃねえか。ロボは男のロマンだろうがよお」

聞き慣れた自分の声にも電子的な響きが混じり、嘆息すれば蒸気が漏れる。

「私は女ですもん。それで、何のスキル取ったらそうなたちやっただしたっけ？」

「……」
 【フルメタル
 機械化】



【フルメタル
 機械化】

このスキルの所持者の全身が機械に変化する。

改造されたボディには状況に応じた様々な機能が搭載されている。



ミケの胸や身長が大きくなったりと色々あったが、あの廃棄場における一戦の結末はこうだ。

ボス討伐後で気を抜いたヨメカワイイは不意を突かれ、破壊されずに潜んでいた蜘蛛女の左手に寄生された——掴まれた左腕から始まった侵食は瞬く間に全身に広がり、S

F映画で地球外生命体に襲われる端役のようにパニックになってしまった。

最後の最後にボスが繰り出した底意地の悪い道連れ攻撃かと思いきや、ダメージやデバフなどのステータス異常もなく数秒で治まり、代わりに出現したのは青いパネル。

それが「機械化」^{フルメタル}と、もう一つのスキルの取得通知だった。

一方が任意発動アクティヴなのに対して「機械化」^{フルメタル}は常時発動パッシブであるため、ヨメカワイイの意思に關係なく近未来の人型兵器か超古代文明の遺産じみた外見に様変わりしと相成つたのだ。

「まあた先輩の悪名が増えそうですねー。『都市伝説』とか『UMA』とか『むつつりスケベ』とか好き放題言われてるのに」

「ちよつと待て、最後のだけは断固拒否するぞ?」

「でも事実でしょ? 『女の身体なんか興味ありません』って顔しながら私の胸をいつもじっくり眺めてたじゃないですか。何なら今も見ようとしてますよね? やーいこのおっぱい星人」

「テメエ……………その通りだよ文句あつか」

だって男の子だもの。

大小問わず、そこに母性の塊があるのなら目で追うのが男——否、雄という生物の悲しき性。

ましてやそれが、これ見よがしに誘惑してくる元カノ後輩の、甘酸っぱく発酵した汗の匂いも指が沈み込む揉み心地も隅々まで知り尽くしてしまっているお胸様ならば言うに及ばず。

しかし、だがしかしである。

今は嫁を愛しているのだから、一時の情欲に流されるなど許されるはずがない——
 【フルメタル機械化】の余計なギミックで両目から流れる血涙を拭い、理性と本能が格闘漫画の最終決戦ばりに殴る蹴るを繰り広げるのを感じながら、ヨメカワイイは鋼の意志で視線を逸らす。

「悪いが、今は嫁一筋なんでね」

「はいはい、そーゆーコトにしておきましょう。ところで先輩——」

乳繰り合いもそこそこに、ミザリーは笑みを浮かべたまま双眸をさらに鋭く細める。

「——どつちだと思えます?」

「……さあてな」

先ほどから、湖畔で戯れる二人の様子を窺う輩がいた。

気取られてこそいるが姿まで露見する稚拙な密偵ではなく、ミザリーとの後ろめたくない間柄を秘匿したいヨメカワイイが偶然【反響】を使って探らなければ気付けなかった隠密性——暗殺者か斥候か、【気配遮断】などその手のスキルに長けた相当

の実力者なのは明らかだ。

時期が時期だけに、十中八九、敵情査察が目的だろう。

「『炎帝^{うち}ノ国』目当てならミイの方に行きますよねえ」

「分からねえよ？ もしかすると巨乳の女体育教師が好きなのかも」

「だったら先輩と意気投合するんじゃないですか？」

監視者も用心深い性格なのか、「反響」のソナーがギリギリ届く距離に身を潜めている。

こちらの会話の内容まで拾われる可能性は低いが、逆を言えば、これだけ離れていても何らかの動きがあれば即応できる技術と自信の表れでもあった。

「意外と、先輩の浮気調査のために奥さんが雇ったプレイヤーだったりして」

「……………笑えねえ冗談だな」

一瞬、そうかもと身構えちまったじゃねえか。

どちらにせよ、ミイ達がいる湖の反対側まで馬鹿正直に案内する訳にもいかない。

誰か何処で何の情報を得ようが関係ないし興味もないが、自分がその一因になるのは面倒だ。

「しゃーない、ここでケリつけちまうか」

「伏兵は？」

「今のところ一人だけだな。【反響】の範囲外に隠れてるなら分らんが、たかが偵察に何十人も雁首揃えたりはしないだろ」

言つて、ヨメカワイイは背後にある森に左腕を向ける。

二人を見張る事ができる場所とは、つまりは視線を遮る物がなくこちらの攻撃も届く場所だ。

【鉄蝗団】
アバドン

音を立てて変形する左手。

逆方向に折れ曲がった指先からライフリングが施された銃口が飛び出し、手首を掘削機のように回転させて弾丸蝗の大群を放つ——空葉莖が宙を舞い、機銃掃射の唸りが湖面を波立たせる。

「うおつとと、とつ!?!」

ガトリングガンで撃たれるとは予想だにしていなかったのか、覗き行為を働いていた不屈き者が泡を食った様子で森から転がり出てきた。

森の奥に逃げ去ってくれたら楽だったのだが、わざわざこちら側に来たという事は、向こうには少なからず戦闘の意思があると受け取るべきだろう。

「ふーっ、危ねえ危ねえ。蜂の巣にされちまうとこだ」

髪を逆立てた特殊部隊風の男性プレイヤーだった。

擬態効果を上げるためなのか額にはバンダナを巻き、深緑のマントで身体を隠している——何も背負っていない事から考えて、おそらく武器はサリーと同じく短剣。小型の杖や弓を忍ばせている遠距離職なら接近せずその場から撃ち返しているはずだ。

「悪いな。デートの邪魔しちまったか？」

「いや、気にすんな。デートじゃねえし」

無粋なヨメカワイイの足を蹴り飛ばしつつ、ミザリーが敵の情報を口にする。

「……『集う聖剣』の主要メンバーの一人、通称『神速』のドレッド。第一回イベントでの順位は私よりも……ミイやあのメイプルよりも上です」

「へえ？ アンタみたいなの美人にも顔を知られてるたあ光栄だな」

ドレッドは飄々とした態度を崩さぬまま、抜き身の短剣を右手で弄ぶ。

どちらかと言えば指名手配犯など要注意人物系の覚えられ方だろうが、それを指摘してしまうと盛大なブーメランにしかならないのでヨメカワイイは言葉を腹の底に飲み込んだ。

「さて、バレちまった以上、俺はもう一つの仕事をしなきゃならねえんだが……」

「仕事？ 何のだ？」

「おいおい、んなもん決まってるだろ」

刹那、ドレッドの姿が霧散した。

「お前を殺れるかどうかだよ！」

——かと思えば、逆手に握られた短剣の先端が、ヨメカワイイの視界の端に現れた。狙われたのは首筋。

頸動脈と喉笛を掻き裂く軌道で振るわれた斬撃は、しかしヨメカワイイが長身を逸らしたために空振りに終わり、マントの陰から放たれた二本目の短剣による刺突も腕ごと弾かれて失敗となる。

身を振ったヨメカワイイはミザリーを抱き寄せて保護しつつ、右の手刀でドレットに反撃する。

「ヒートチョッパー」

今度は右前腕部が変形を開始した。

体表部分が左右にスライドし、刃渡り五十センチはある鎌刃が内部から瞬時に伸びると、空気を焦がす高熱を纏いながら切り結ぶ。

熱刃と双刃が二合、三合と連続して交わり、一際甲高い金属音を奏でてドレットが飛び退く。

バックステップで五メートルほど間合いを取ると、両腕を胸の前で交差させ、無骨なデザインの大形ナイフを構えた。

「……よく気付いたな。大抵の奴は二本目でお陀仏だつてのに」

「そんなヒラヒラ装備してたら、何か隠し持つてると疑うに決まってんだろ」

「だからって初見で簡単に防ぐか普通よお？ つーかどうなつてんだその腕？」

「るっせえ、ただの肉体改造だ」

「意味違えだろそれ……マジもんの改造じゃねえか」

互いにHPの減少はない——ヨメカワイイもドレッドも本気を出していないからだ。

暗殺者は双剣を鞘に納めると、気だるげに息を吐く。

「ハア……止めだ止めだ、面倒クセエ」

「……仕掛けてきやがったのはそっちだろうが。勝手におつ始めて勝手に賢者タイムかな？」

「確実に勝てる喧嘩しかない主義なんだよ、俺は。んな荷物抱えたまま武器も使わな
いで完璧に受け切りやがって、本当に弓使いかよ」

言つて、ドレッドはヨメカワイイとミザリーに背を向けた。

一見無防備な背中に攻撃を放つのは簡単だが、こちらに戦闘を続ける理由はなく、もし背後から襲われても対処できる自信があるからこそ、ドレッドも偽りの隙を見せているに違いない。

「ま、お前の実力を測るつー仕事はこなしだし、俺は逃げさせてもらうぜ？ じゃあな」

言うが早いか、ドレッドは「超加速」を発動させて森の中に消えた。

逃げたように見せかけて襲ってくるのではとしばらく警戒していたが、死角から短剣が飛来する気配はなく、ようやくとヨメカワイイは一息ついた。役目の終わった熱刃もガシャガシャガシャと腕の中に収納される。

「あの、先輩？ そろそろ下ろしてもらえませんか？」

「ああ悪い悪い」

抱き締めたままだったミザリーを解放すると、彼女は少しばかり頬を紅潮させながらドレッドが消えた方向を見やる。

「……追わないんですか？」

「男の尻を見続ける趣味はないわい。それに、追って仕留めたところで奴は町に戻るだけだ。口が塞げないなら適当な情報持たせてときやいいだろ」

誤解しようが深読みしようが、それは『集う聖剣』のメリットにはならない。

よしんば知られたとしてもヨメカワイイの戦闘スタイルや所持スキルの予想に留まり、何らかの対策を講じるには確定情報が少なく机上の空論の域を出ないだろう。

結局のところドレッドが持ち帰った情報には何の価値もないのであった。



また別の襲撃者が現れないとも限らないため、ヨメカワイイとミザリーはミイ達の元へ戻った。

ギルド對抗戦に向けて『炎帝ノ国』も大人数による各作戦の訓練に精を出しているのかと言えそうではなく、湖畔でのんびりまったりするメンバー達は一様に水着姿である。

英気を養う目的の集まりに、何故かヨメカワイイも誘われたのだ。

「うー……」

「あらミイ、まだそこにいたんですか？」

岩陰でミイがしゃがみ込んで途方に暮れていた。

彼女も赤色の装備からミザリーと色違いのパーカーに着替えていたが、その下に着用した水着を見せたくないのか、ヨメカワイイとミザリーが散策に出る前から岩に身を隠してばかりだった。

普段の凜とした態度とは打って変わって、雨の日の捨て猫のように弱々しい——こうして見ると普通の女の子なんだなあ、とヨメカワイイは彼女に嫁の面影を重ねた。

「私はミザリーと違ってスタイルが良くないんだ！ な、なのにこんな破廉恥な……うう……」

「そうですか？ でしたら殿方の意見も聞いてみましょうか」

ミザリーはヨメカワイイにだけ見えるようにパーカーの前を開いた。

唾然とした。唾然とするしかなかった。嫁の幻像も一気に吹っ飛んでしまった。

最低限の女性的な部分だけを小さな布で隠し、肌色の圧倒的暴力で男の理性をぶん殴るV字型の過激極まりないデザイン——スタイルに自信があるか肝が据わっていないければ、一度手に取つてもすぐハンガーラックに戻してしまう、俗に言うスリングショット水着である。

「あらあら、見惚れてしまいましたか？」

何を考えている。何を考えているのだからこの後輩は。

それ以前に、全年齢対象のゲームにどうしてこんな際どい代物が存在するのか。

言葉も出ないヨメカワイイの耳元に、ミザリーはそつと顔を近付けると、

「先輩にだけ……先輩だから、特別に見せてあげるんですからね？」

悪戯が成功した小悪魔の笑顔を浮かべた。

そしてすぐさまステータス画面を操作してモノキニと呼ばれる水着に着替え直し、

「さあミイ、あまり皆を待たせてはいけませんよ？ ギルドマスターなら覚悟を決めましょう」

「ま、待つてくれミザリー！ まだ心の準備が、ああああああ……」

パーカーさえも剥ぎ取られたミイは岩陰から軽く押し出され、赤を基調としたオフシオルダーのビキニを陽光の下でギルドメンバーに披露する羽目になった。

肌に映えて、ミイのイメージにも合っているので恥ずかしがる必要もない気がするが——最初にこっそり見せられた時に美辞麗句を並び立てて過度に褒めたのが逆効果だったかも知れない。

と言うか、どうしてミイも痴女後輩もまず自分にだけ水着姿を見せてくるのか。

男女の区別なく上がる歓声を聞きながら、ミザリーはヨメカワイイにも水着を差し出す。

「はーい、ちゃんと先輩のもありますからねー♪」

「おい……これに着替えろつてのか？」

「そーですよ？」

ブーメランパンツである。

もう一度言う、ブーメランパンツである。

これまたウケ狙いのお調子者か豪胆な者でもなければ手に取らない一品だ。

「今の先輩なら恥ずかしくないし平気ですよ？」

言われてみれば確かにそうだ。

この包帯装備の下には、肌と言えるものがないのだから。

「……今回だけだからな」

ヨメカワイイはロングレザーコートとレザーパンツ、包帯をインベントリに移して、用意された水着に着替える——先ほどミザリーに見せて大笑いされたその風貌は、完全に人間を辞めていた。

筋肉の代替となる何本もの油圧シリンダーと歯車が躍る、特殊合金製の骨格。

胸の中心で青い光を放つコアと、血管や神経さながらに張り巡らされた無数のケーブル。

顔面は着脱不可能な黒鉄のペストマスクに覆われ、帯電したアフロに時折スパークが生じる。

これこそが三層で廃棄物の女王を倒して得た新たな力。

ただし現在はブーメラパンツ着用中のため変態アンドロイドにしか見えず台無しだった。

「何度見ても笑えるんですけど、感覚とか変になってたりしないんですか？」

「体重は知らんが、身長とか体格は生身と同じだし、特に違和感はないな。皮膚もないの触った感覚があるってのはちよつと変な感じだけだな」

全身が金属に変質したものの、各動作に遅延や不調などは感じられない。でなければ

ドレツドの素早い連続攻撃にも身体がついていかず敗北していた可能性が高い。

元々がVRなのだから、「暴虐」状態のメイプルのように巨大化でもして本来の肉体とあまりにかけ離れたシルエットにならない限りシステムの融通が利くのだろう——まず巨大なモンスターに変身するというのが一般プレイヤーからすればおかしい話なのだ。

まあ何にせよ、思い通りに動けるのならヨメカワイイに不満はない。

とりあえず今は束の間のバカンスを満喫するべく、ミザリーに手を引かれてロボな身体を周りに見せ付ける事にした。

錆びたり漏電したりしないかだけが心配である。



その日の晩。

風呂に入っていると、何故か水着の嫁に乱入された。

グラビア雑誌でも参考にしたのか、ボディソープを塗りたくって扇情的なポーズを取り、何かを期待する視線でヨメカワイイに感想を求めてくる。

「……………」

嫁は終始無言。しかし無言であるが故に静かな圧力。

これはあれか、ミザリーに対抗しての正妻アピールなのか。

夫として嫁の頑張りに親指と息子を起立させたいところなのだが——彼女が勝負服に選んだのがよりもよって学校指定の紺色の水着だったために、教師の立場上『うんっ、エロいね!!』とはとても言えず、さりとして否定的な言葉は嫁の気持ちを無下にしてしまうので選択肢から除外。

「……………えーと」

「……………」

嫁が恥ずかしさでぶるぶる震え始めた。

コメントに困ったヨメカワイイは長湯以外の理由で茹った頭で考えて、最終的にスクール水着を桃の皮のように丁寧に剥き、生まれたままの姿になった嫁をギブアップするまで存分に愛でる事で夫と教師両方の矜持を守った。

要するに、嫁のスク水ではなく、嫁自身の魅力に興奮すれば万事解決なのだ。
やはりうちの嫁が世界で一番可愛い。



次の日。

ヨメカワイイは『楓の木』のギルドホーム——イズの工房を訪れていた。

爆弾の定期購入ではなく、依頼していた新装備が完成したとの連絡を受けての来店だ。

「最初に言っておくけど、クレームは一切受け付けないわよお?」

「言わねーよ。こっちは承知の上で製作を頼んでたんだから」

二人で話していると扉が開く音が聞こえ、メイプルが工房までやって来た。

見間違いないような長い長身アフロの背中を視認すると、はしゃぐ子犬の幻影を背負ったアホ毛娘はいつものように元氣な挨拶で駆け寄る。

「カワイさん! ……こんにち……」

しかし振り返ったヨメカワイイのベストマスクを目の当たりにして、闇色の脚部鎧で包んだ足をぴたりと止め、慌てた様子で後ろに向かって声を投げた。

「……サリーサリーサリー! カワイさんがロボットになっちゃってるよ!?!」

「こちら、人を指差すんじゃないやありません。」

「なーに言ってるのメイプル。そんな訳………うわ、ホントだ」

湖で戯れていた時とは違いレザーコートも包帯も装備済みだが、フルメタル「機械化」の外見変化の仕様が優先的に反映されているのか、青く輝く胸部のコアとケーブル、歯車などの金

属部品が狩人装備をあちこち突き破って存在を主張する——遅れて現れたサリーがそれを見て、何とも言えない表情で半目になるのも仕方がなかった。

「メイプルで慣れてたつもりだったけど、何をどうしたらそうなっちゃうんですか？」

「機械の悪霊っぽい隠しボス倒したらこうなった。……お前こそ何してんだ？」

「いや、余計な情報を漏らす前にメイプルの口を塞いでおこうかなーと。ほら、一応カワイさんは部外者で、敵になるかもだし」

「もげもがー」

確かにメイプルはヨメカワイイに対して口が軽くなる事が多い。

ただでさえ大きな戦いを控えているのだから、情報の流出を可能な限り避けようとするサリーの行動は正しく、むしろこの場合、秘匿の意識が低いメイプルの方に問題がある。

ギルドマスターであり最大の切り札、そして注目の的である彼女の情報を一端でも欲しがる輩は数え切れない。

事実、ヨメカワイイが蹴った依頼には、メイプルの所持スキルの調査も多数存在したのだから。

「安心しろよ、誰かに言い触らすようなつまらん真似はしない」

「そこは信用してるんですけど、正直、プレイヤー五十人を一度に相手するよりカワイさ

ん一人と戦う方が難易度高い気がするんですけどよ。ただでさえ強いのにこっちの手の内知られてるし」

「だったら私達もこの人の手の内を知っちゃいましょう。よいしょ、っと！」

イズがカウンターに何かを置く。

「鉄パイプ？」

「……に見えるわよね、やっぱり」

横棒部分が極端に短い変形コの字型とでも言うべきか。

短辺は親指ほど、長辺はヨメカワイイの二メートル超えの背丈とほぼ同じ長さ。

内部を通ってパイプの両端を結ぶ輪状のワイヤーが、射撃の際には弓弦の役目を担うのだろう。

「イズさん、これは？」

「彼の新しい武器……なんだけど、こんなデザインになるとは私も予想外だったわ」

「使えるならどんな見てくれでも俺は構わんがね」

そう、重要なのは見た目よりも中身。

交際相手を選ぶ基準における綺麗事のようなだが、武器に関してはこの一言に尽きる――ましてや目の前で手に取られるのを待っている鉄管弓には、今後二度と手に入らないであろう希少な素材が成功率を上げるために使用されている。

その素材とは、錨弓の残骸、機械の女王討伐で得たパーツ、さらに黒弓『罪悪滔天』の三つ。

ドレッド戦にてヨメカワイイが武器を出さなかったのは余裕の表れなどではなく、使える武器がそもそも手元になかったのだ。

イズの腕もあつて無事に完成しただけでも僥倖。

残る懸念は実用に足り得る性能かどうか。



『愚連』

【STR+100】【破壊再生】

スキル【身削る一矢】



「おつ、STRがプラスになつてる」

「逆に今までプラスじゃなかったのにあの強さなのが不思議なんだけど」

「メイプルだって『STR 0』だろ。それより試し撃ちに行きたいんだが」

「だったら隣に『訓練場』に行ける魔法陣があるわ。構わないわよね、メイプルちゃん？」

「大丈夫ですよ！ サリーもいいよね？」

「まあ、うん、カワイさんの武器がどんなのか見られるなら……」

そういう流れになり、四人は魔法陣に乗って『訓練場』に転移した。

スキルの検証や戦闘スタイルを練習する場所だけあって空間はだだっ広く、モンスター用の代用で小型のドローンや案山子が配置されていて、新たな武器の調子確かめるには申し分ない。

メイプルとサリー、イズが見守る中、ヨメカワイイは構える。

鉄だけあって黒弓よりも重いが、その重さが心強くもある。

「まずは一当て」

ワイヤーを引き絞り、直線だった鉄管弓が弾性を備えながら曲線に変わる。

放った矢はHPが設定された案山子の眉間を正確に撃ち抜いた。

続けざまにワイヤーを引き、今度はたっぷり二十秒は溜めてから弾く。

第二の矢は案山子のHPを削り取って綺麗に頭部を貫通し、後ろに並んでいた二体目の案山子の胴体を破碎した——速度と威力、飛距離も、第一の矢など足元に及ばないほど強化されている。

「おおー！ カワイさん凄い！」

「何、今の……」



【身削る一矢】

射撃体勢にある間、HPが減少し続ける。

矢の威力、速度、飛距離はその間減少したHPに比例して上昇する。



「弦を引いて溜めた分だけ矢が強くなるんだと。代わりにHPが減少するがな」
「それってつまり、カワイさんのためにあるようなスキルって事ですよね」

矢を番える度にHPが減少するなど通常なら呪いの武器であり、防御力に乏しい遠距離職ならば避けるべきデメリットだが、HPとMPにばかりポイントを振り続けているヨメカワイイからすれば取るに足らない代償だ。

加えて、この鉄管弓はただ矢を放つだけの凡庸な武器ではない。

「よ……つとー！」

ヨメカワイイは案山子の隊列に突っ込み、鉄管弓を横薙ぎに振るって首から上を弾き飛ばす。

バトンのように回転させながら頭上のドローンを撃墜し、そこから派生する大上段の叩き込みで最後に残った案山子を脳天から両断した。

錨弓のスキルと比べればSTRは低くなつたが、それも連続攻撃と技量で補える。

「ん。これなら接近戦も大丈夫だな。ありがとなイズ」

「ご満足いただけただけのなら何よりだわ」

素晴らしい武器を作ってくれた礼に、少しばかりの情報を提供する。

「昨日な、『集う聖剣』のドレッドって奴に勝負挑まれたぞ」

「カワイイさんですか？」

「サリーもこの前、フレデリカって人と決闘したんですよ！」

「ふーん？ まあ敵情視察だわな」

「でしようね。フレデリカは私達を同い年くらいの金髪で、MPの高そうな魔法使いでした」

「ドレッドはお前さんと同じ短剣の二刀流で、ぶかぶかのマントで身体隠してる。あの動き方から考えて【超加速】と、それ以外にも隠し玉がいくつもあるだろうな」

向こうも手の内を全てバラすような間抜けの集まりではあるまい。

「最強ギルドの噂は伊達じゃないって事ですか……」

「それは俺もお前さん達も同じだろ。祭りじゃ精々暴れるとしようぜ」

ギルドホームに戻ると、ヨメカワイイに触発されたらしいサリーとメイプルはイベントに向けて万全を期すべくフィールドへ飛び出し、イズも工房で大量のアイテムを作り始めた。

邪魔しては悪いと考えたヨメカワイイはそつと『楓の木』を後にする。

途中、彼女達に伝えなければならぬ事がもう一つあったと思い出したのだが、
「……あ、俺もギルド作ったって教えるの忘れてた」

火急の用件でもないしこの次でいいか、と鉄管弓を肩に担ぎながら狩りに向かうのだった。

039. 第四回イベント・開戦の血煙

運営より通達された第四回イベントの概要は以下の通り。

各ギルドは所属人数によって大規模、中規模、小規模に分類される。

ギルドごとに配備されたオーブを六時間自衛、または他軍から奪取したオーブを自軍に持ち帰り三時間防衛する事でポイントが増え、奪われたギルドはポイントが減る——防衛中、三時間以内に奪還された場合ポイントの増減はなく、オーブはポイント処理後に元の位置に戻される。

「ただオーブを奪いに行くだけじゃないんだよね」

「三時間防衛して初めてポイントが増えたり減ったりするから、奪った後の方が大変だと思う」

「だろうな。自軍オーブの位置はマップに表示されるから、敵のを持ち帰ると俺達の拠点の場所も知られちゃう。奪ったオーブの数だけ他ギルドに攻め込まれるぞ？」

「小規模ギルドの私達には防衛しやすい地形が選ばれるらしいが……」

イベント開始を前に、見落しがないか最終確認をする『楓の木』のメンバー。

カナデの魔導書、マイとユイのレベル上げと戦闘技術、イズのゴールド——メイプル

とサリーは言わずもがな、クロムとカスミもそれぞれが必要だと考えた強さを手に入れて、可能な限り万全の準備を整えた。

けれど、潰した端から芽を出すのが不安要素というもの。

「5デスでリタイア……戦闘可能な限界ラインは3デスつてところかしら」

「四回死んじゃうとステータス半減つてのが痛いよねー。人数多いギルドなら自爆覚悟で力押しもできるだろうけど、僕達は八人しかいないし」

「攻撃役と防衛役をどう分担するかも重要だけど、五日間休みなしなんて事になったら最悪だよ」

「うー……起きてられるか不安です……」

「私も……」

群雄割拠の戦国乱世と言える内容とルールに加え、第一回イベントで猛威を振るつたメイプルの勇姿とトラウマはまだ記憶に新しい。

裏で結託でもない限り、そのメイプルが君臨する『楓の木』を全てのギルドが同時に狙うとは思えないので、八人揃って五日間完徹するような事態にはならないだろうが——何にせよ、疲労をなるべく蓄積させず、スキルの回数制限も考慮した立ち回りが要求される。

特にメイプルは貴重なMP回復手段である【悪食】をどう使うかが重要となってくる。

「有名なギルドが要注意なのは当然として、気になるのは……」

「……カワイだよなあ」

「師匠もこれに出るんですよね？」

「うん、そう言つてたのは間違いないよ」

よりもよつてこのタイミングで自分のギルドを作つたあのスチールウール頭。

フリーのプレイヤーが今回のイベントに参加申請した場合、運営側が複数作成した臨時ギルドにランダムに配属される形になり、当然ヨメカワイイもそうするだろうと誰もが思い——あわよくば同じギルドになつて勝ち馬に乗ろうと目論んで参加する未所属プレイヤーが大勢いた。

しかし期待と迷惑は裏切られ、掲示板では優勝予想の下馬評が荒れに荒れた。

ギルドの名は『閻鍋』——所属人数、一名。

「何が入つてるか分からない……彼らしさを表して言い得て妙ではあるな」

「ま、中身が未知数なのは俺達のマスターも同じだけだな」

たった一人しかないのに果たしてギルドと呼べるのかどうかはさておき、ダークホースとして注目されているのは『楓の木』も同じ。

向こうも争う意志があつて参加しているのだから、親しい仲でも出会つたのなら戦うのが礼儀。

「メイプル、分かってるだろうけど、相手がカワイさんだとしても手加減しちや駄目だからね？」

「大丈夫！ カワイさんもお友達だけど、それとこれとは話が別だもん！」

「私達もどれくらい強くなつたか師匠に見せようと思います！ ね、お姉ちゃん！」

「うん、頑張ろうね、ユイ！」

そうこうしている間に、いよいよ開始の時刻となる。

第二回と第三回の時のような探索型やモンスター相手のアイテム収集ではなく、本格的なPVPを目的とした大規模戦闘イベント——『楓の木』のメンバー八人での初めての団体戦。

期待と興奮で胸が膨らまないはずがない。

「目指すは上位で！」

「異議なし！」

ギルドを立ち上げたメイプルとサリーの掛け声と共に、一同は光に包まれた。

時間が加速する世界の中、五日間も戦い抜かなければならないバトルフィールドへ転送されると光は弱まり、白く塗り潰されていた視界も元に戻る。

そこは洞窟の中だった。

正面には緑色のオーブが乗せられた台座があり、誰かが言葉にするまでもなく、それ

が自分達の守るべき宝であると瞬時に理解する。

「通路は三本か。ちよつと奥見てくるね」

「ではもう片方は私が行こう」

言うが早い、メンバーの中で機動力に長けたサリーとカスミが台座の後ろにある二本の通路にそれぞれ走っていき、すぐに戻ってくる。

サリーの方はただの水場、カスミの方は行き止まり——必然的に、残された最後の一本が外へと繋がる唯一の通路であり、なるほど確かに、この通路からの侵入だけを阻止、もしくは撃退すればいいのだから少数人数でも防衛しやすい地形ではあった。

極論、この最深部からメイプルが「毒竜」ヒドドラか「機械神」の砲撃を通路に撃ち込めば事足りる。

「それじゃあ打ち合わせ通りにね」

「私とマイとユイ、イズさんが防衛組だね！」

「俺とサリーとカスミが攻撃組で」

「僕は状況に応じてどっちかのサポートに回るって事で」

重要となるのは、近隣のギルドを如何にして弱体化させるか。

攻めるにしろ守るにしろ、『メイプルが近くにいる』というだけで警戒されてしまつては色々支障をきたす——何度も拠点に攻め込んで倒される前に撤退し、メイプル達

を休ませず精神的に疲労させる事も不可能ではないのだ。

だが『楓の木』の人員不足は、弱みであると同時に格好の撒き餌にもなる。

ギルド名が記された大きな立て看板がある訳でなし、正体さえ露見しなければ、小規模ギルドと侮った愚かなプレイヤー達を猛毒と超火力で返り討ちにして死亡回数を稼げる。

行つて戻つてこななければならないサリー達にとって、敵の弱体化はそれだけでありがたい。

「じゃあ、留守番は任せたよー」

「サリーこそ気を付けてね！ カスミとクロムさんも！」

「ああ、無論だ」

「死に戻らないよう努力するさ」

顔を隠すためにローブを被った五人を残し、一分でも時間が惜しい攻撃組は洞窟の外に出た。

そして、鬱蒼と生い茂る深い森の上空で何かが弾けるのを目撃した。



最初にそれに気付いたのは、とある中規模ギルドに所属する槍使いだった。

場所は『楓の木』の拠点から西へ五キロほど進んだ山の麓。

「何だ、ありや?」

屋根を失った廃屋にて、オーブが乗った台座を守る彼がふと見上げた空を、光の筋が駆ける。

十や二十どころか軽く見積もっても百に届きそうな数のエフェクトが、流星群のように大気中で燃え尽きたりはせず、形を留め続けながら地上との距離を縮めていく。

まだ『NWO』歴の浅い槍使いはイベントスタートの花火と勘違いしていた。だが、彼の眩きを聞いて遅れて空を確認した魔法使いは——第一回イベントで一人の弓使いに辛酸を舐めさせられたプレイヤーは、その光条が自分達にとっての凶兆だとすぐに悟った。

「全員ここから離れろ!」

「はあつ!? オーブほつとくのか!?!」

「いいから、とにかく絶対にあの矢の着弾範囲に入るなあつ!!」

顔色を変えて叫ぶも時すでに遅く、瞬く間にバトルフィールドへと降り注ぐ。

攻撃力を有してはいなかったのか、慌てて逃げ惑うプレイヤー達の背中や頭部に矢が当たってもダメージを受ける事はなく——しかしそれが彼らに良い結果をもたらす未

来などありはしない。

通り雨が過ぎ去った後も顔色は晴れず、むしろここからが災厄の始まりだった。

「やばい、やばいやばいやばい！ これバレた！ 俺達の拠点がバレたぞ！」

「アイツが来る！ 迎撃準備、迎撃準備イ！」

蜂の巣を突いたような騒ぎ。

急ぎ襲撃に備える者と事情が分からず困惑する者に二分化される中、後者である槍使いは愛用の武器こそ構えたものの、古参のメンバー達が何故ここまで取り乱しているのか状況が飲み込めずに狼狽えるばかりだ。

皆が一樣に怯えるとは、一体誰が——何が来るというのか。

【鉄蝗団】

その答えは、弾丸を模した黒蝗の群れによって否応なく思い知らされる事となる。

防御貫通効果を持つ飢えた軍勢に、頭上に掲げた盾すら障子紙の如く食い破られ、御のために足を止めてしまった者達から順番に餌食となっていく。

弾雨が止み、一瞬で惨劇を作り上げた人物が悪魔の翼を収納して地に降り立つ。

「来やがった……やっぱりカワイイだぞ畜生！」

「よりによって初日、しかも開始直後かよ！」

「あれが……」

革製の黒衣と血の染みが目立つ包帯から金属部品が飛び出した長軀。

胸の青白いコア、両眼の中で赤い光が明滅するペストマスクに、スパークするアフロ。夜に口笛を吹くと現れる、出会ったら親指を隠せ、声を聞いたらヘソを守れ——揭示板の噂話やギルドの仲間から嫌と言うほど見聞きした特徴と合致する。

「用件は……言わなくても分かるよな？」

鉄パイプ型の武器を肩に担ぎ、淡々と言う。

逸話には事欠かない異常枠プレイヤーの一人、『怪人』のヨメカワイイ。

「ビビるな、相手はたった一人だ！ 残りの人数で取り囲んでぶっ倒すぞ！」

「【パワーブレイド】！」

「【重突進】！」

まだHPに余裕のあるパワーファイターの二人が、スキルを発動させて左右から大剣を振るう。

ヨメカワイイは右手に握る鉄管弓で一方をあっさり受け止めると、

「【ヒートチョッパー】」

左腕から生やした赤熱の鎌刃で逆側から迫る大剣使いの胸を刺し貫き、返す刀で残るもう一人をいとも容易く斬り伏せる。

大剣に限らず片手剣に短剣、大盾、槍に大槌、メイス——仲間の仇を討たんと心を奮

い立たせたあらゆる近距離職が報復に走るが、怪人の鉄管弓と両腕の熱刃を用いた変則三刀流で次々にHPを狩り尽くされ、倒れた味方が人魂のように光のエフェクトを散らす。

たまらず味方の一人が怒鳴る。

「だから！ どうして！ 弓使いが近接戦闘に強いんだよ!? つーか弓で殴るな！」

「知らねえのか、最近じゃ弓を使うアーチャーの方が珍しいらしいぞ？ それに……文句なら俺に勝ってから言え」

ゆつくりと上げた怪人の右足の裏が変形する。

踵の部分より地面に向かって上下逆さの火山を思わせる円錐型の突起が伸び、物々しい音と共に回転を始めた。

もう悪い予感しかない。

「奴を止めろおおっ!!」

オーブを奪われたのなら取り返せばいい。

だが、今ここであの怪人にかけていかれたが最後、恐ろしい事になってしまうと、この場にいる誰もが——動けず、ただ目の前の悪夢を傍観するしかない槍使いさえもがそう直感した。

「……【マグマゲイザー】」

怪人の右足が地面を踏み締め、めり込んだ回転突起を中心点に噴出する大量のマグマ。

それが、槍使いが怪人との戦いで最期に見た光景だった。

粘性の高い波濤が存命者を飲み込み、焼き溶かし、何の変哲もない廃墟だったはずの他軍拠点や岩石が煮え崩れる焦熱地獄へと変えた。

「さて、ぞろぞろリスポンしてくる前に取るもん取って逃げるか」

「ニヤー」

周囲に息のある者はなく、返事はアフロの中で昼寝をしていた小動物らしき鳴き声だけ。

ざぶざぶと、マグマを足湯か何かのようにダメージも負わないまま浸って進み、無防備になった台座からオーブを回収してイベントリ内を確認する。

「まずは一つ目」

領き、「跳躍」で消えたヨメカワイイ——そして誰もいなくなった拠点には、冷めやらぬ熱気と静寂だけが残った。

時間にして三分にも満たない殲滅劇。

第一回イベントのメイプルのデビュー戦という名の蹂躪無双。

第二回イベントでサリーが演じた『六日目の悪夢』に続いて。

後に『第四回の蹂躪劇』と呼ばれて恐れられ、運営の黒歴史に新たな一ページを加える事となる怪人の略奪は、まだ始まったばかりだ。

040. 一日目：昼 怪人の進路

「ここも先越されちゃつてたか……」

草木も家屋も岩土も命さえも、分け隔てなく根こそぎ舐め取るように。

バケツではなく火山を引っくり返したとでも表現すべき、マグマによる破壊の限りを尽くされた敵ギルドの拠点——その凄惨たる有様を枝の上から見下ろして、サリーはぼそりと呟く。

「メイプルだったらこれが猛毒の海とかになってるんだろうなあ」

一応、奮闘むなしくリスポーンの順番待ちをしているであろう連中を気の毒には思うが、勝負の世界なのだから仕方がないと、多くの勝利と敗北を経験した熟練のゲーマーらしくドライに思考を切り替え、状況をつぶさに観察する。

きつと、元々は花畑だったのだろう。

四方から攻め込まれる恐れのある立地から考えて、屠られたのは大規模ギルド。

当然、台座にはオーブの影も形もない。

「赤一つ追加つと」

開いたマップに哀れなギルドの位置を記憶させ、襲撃済みを示す赤で着色。

サリーは現在、奪ったオーブを拠点に戻るクロムとカスミに預けて単独行動に精を出していた。

偵察の甲斐あってマップにはすでに十以上のギルドの所在地が記されている。しかし残念ながらそのおよそ半分がヨメカワイイに襲撃された後であり、オーブ奪還のために慌てて部隊を編成するプレイヤー達を眺めるだけで、それなりの時間をかけた成果としてはあまり芳しくない。

「逆に言えば、半数は無事なのが意外なんだよね……」

蝗害かグンタイアリよろしく手当たり次第に食い散らかしていると思いきや、明らかに進路上の獲物を無視して、その先に位置する別のギルドを標的に選んでいる節がある。

単純に、攻めるのが楽かどうかで決定しているのだとすると、人数差で圧倒的に分が悪いはずの大規模ギルドを襲っている事実はどう説明すればいいのか。

「私みたいにオーブを掠め取って逃げるだけならともかく、きつちり全員倒してるっばいっ」

サリーも回避力ならば誰にも負けない自信があるが、戦闘時以外も含めた機動力という意味ではヨメカワイイに軍配が上がる。

だからこそ、なおさら疑問と気味の悪さが残る。

オーブを奪ってから駆逐したのか、駆逐してから奪ったのか——どちらが先かはさておき、空を飛んでいくだけでも逃げられるはずなのに。

「……いけないいけない、今はこっちに専念しなきゃ」

頬を軽く叩き、袋小路に迷い込んでいた自分の脳に気合注入。

メイプルの毒同様、時間経過でマグマが消滅した地面に飛び降りる。

ああでもないこうでもないと考えるのは、無事に戻ってから仲間達と一緒にすればいい。

とにかく今は体力と集中力の許す限りフィールドを駆け回り、一つでも多く敵ギルドを見つけてマツピングしなければ。

「俺らの拠点に誰かいるぞー」

「カワイの奴か!？」

「……うわっっちゃー……」

意気込んだ矢先に発見されてしまった。

敵の数は前衛職二人に後衛職一人。

最初にリスボンしておつとり刀で戻ってきたという事は、この三人がヨメカワイイに真つ先に仕留められた犠牲者達に違いない。それ自体は取るに足らないイベントの仕様なのだが、ここまで接近されても気付けなかったとは——らしくない、本当にらし

くない凡ミスだ。

「うーん、カワイさんにいいように乱されてるなあ」

そのぼやきで仲間だと判断されたのか、盾持ちの剣士が片手剣で切り掛かる。

「オーブ返しやがれ！」

「問答無用だね。ま、当たり前だけど」

自分達の陣地に見知らぬプレイヤーの姿があれば、とりあえず攻撃するだろう。サリーも彼らと同じ立場だったならそうする。

ましてや向こうはヨメカワイイの仲間だと勘違い中——目の前の少女がオーブを持っていようと持ってなからうと関係なく、鬱憤を晴らすための八つ当たりの意味合いも強いのかも知れない。

たった一人にオーブを奪われて壊滅させられた現実を認めたくないのは分かるが、見た目だけはか弱い女性プレイヤーに対して三人がかりなのは如何なものか。

「よっ、ほいつ、と」

「くそっ、なんで当たらねえ!?!」

「馬鹿! 俺の射線に立つな!」

振り回される刃や魔法を躲しつつ、「剣ノ舞」でSTRを上昇させていく。

ギルドの規模こそ大型だがメンバーの練度自体はそこまで高くはないようで、この三

人にしても前衛と後衛の連携がまだまだ甘い。ついでに言えば、相手の危険度を見極める観察眼も。

「ダブルスラッシュ！」

連続回避と「追刃」の効果によって威力が増大した二刀流が、火力の低い短剣使いと油断する剣士のHPを消し飛ばす。

仲間を一瞬でリスポーン地点に叩き還され、残る二人の顔が驚愕の色に染まる——しかし呆然と立ち尽くす暇さえ今の彼らには存在しない。

「さよなら」

双刃が不気味に閃いたかと思えば、胸と首に無数の裂傷が走る。

二度目の死を与えられ仲間の後を追う羽目になったプレイヤー達の光の残滓を見送り、サリーは周囲を警戒しつつ軽く息を吐いて短剣を鞘に納める。

三人相手に快勝したとは言え、ここは敵軍拠点のど真ん中。何時また新手が現れるかわからないこの状況では、あまり悠長に構えてもいられない。

「オーブがないんじゃないし、ギルドの場所と規模が分かっただけでも収穫かな……」

少し考えて、サリーはこれまでに集めた情報とオーブを持って拠点に帰還する事を決めた。

もちろん、帰りの道中にある、まだオーブが無事なギルドを可能な限り狙いながらだ
が。

不運な三人組が同じくリスポーンした仲間を大勢引き連れて舞い戻った時には、ポ
ニーテールの少女に化けた悪魔の姿などあるはずもなかった。



「来た！ 来た来た来たあ!!」

「前衛は正面に並べ！ 後衛は援護射撃を止めるなよ！」

「距離があるからって油断するな！ 奴の射程はこつちも何倍もあるぞ！」

廃墟の石畳を擦って奏でる鉄パイプの音色は、襲われる側にとって死神の足音と同義
だった。

空を飛ばず、陸路を徒歩で現れたペストマスクの怪人。

一人に向けるには明らかに過剰な量の攻撃魔法と矢が降りしきる中を、時には打ち弾
き、時にはその長軀にあり余るHPで受け止めながら、ヨメカワイイはオーブ目指して
侵攻する。

「とにかくカワイイを消耗させるんだ！」

「HPでもMPでもアイテムでも、何でもいいから奴の力を削ぐ事に集中しろ！」
襲われるプレイヤー達もただ無策に攻撃を行っているのではない。

各地で激しい戦闘が起きているこのイベント専用フィールドには、回復系アイテムやその素材が全くとっていいほど配置されていない。

例えばミイの【炎帝】など指折りの上級魔法は威力に比例して消費MPも高く、回復するためのMPポジションも大量に必要となる——物資に乏しい現状に限っては、そういった強力なスキルを有するプレイヤーほどMP管理がシビアなものになり、むしろ大多数のプレイヤーが持つ一般的な攻撃スキルの方が威力と燃費効率のバランスが取れているのだ。

そしてそれはHPも同じ。

文字通り体力馬鹿のヨメカワイイも例外ではなく、削られたのならポジションなり回復魔法なり使わなければならない。

「撃て撃て撃てー!!」

「ああもう！ 少しは足を止めるくらいしなさいよ！」

この戦いは団体戦であると同時に、五日間の持久戦と消耗戦でもあった。

運営の意図であろうその仕組みに気付いているからこそ、中規模ギルドの彼らは最終的な勝利を得るため果敢に攻撃し続ける。

「……【装填】【ヒール】
だが。」

その戦法が有効なのは、ヨメカワイイに通常の回復手段しかない場合に限られる。

「【スプレッドショット】」

鉄管弓の弦が弾かれ、前方に拡散する矢がプレイヤー達を射抜く。

ダメージが発生しない不可思議な射撃は、むしろ逆に彼らに癒しをもたらしたが——
それ以上の回復量で怪人のHPが増えたのを見て、慈悲や情けなどという勘違いは吹き飛んだ。

傷を負っていない、しかも敵のプレイヤーにわざと回復魔法を使って自分を癒し、さらにHPの上限値が増加するスキルなど誰が予測できるのか。

考察を重ね、どれだけの対抗策を立てても、いざ実際に敵対すればそんなものは所詮空論に過ぎないのだと現実を突きつけられる。

ついに集中豪雨地帯を潜り抜けたヨメカワイイと前衛部隊が交戦する。

先陣を切るのは、部隊を率いる幹部の大槌使いだ。

「俺らのオーブに近づくんじゃねえよ！」

空気を裂いて吠える縦振りの大槌に対し、ヨメカワイイは半身をずらして掌底突きを放つ。

「ファイアボール」

それはただのカウンターではない。

前腕部に「ファイアボール」の発動と合わせて杭型炸裂弾を形成させたパイルバンカー。

怪人の魔手を顎に叩き込まれ、頭部が炎に包まれた大槌使いが膝から崩れ落ちる。

「い、一撃……」

「嘘だろ!？」

光の粒に変わる雑魚など見向きもせず、乱戦の中、ペストマスクの視線が獲物達を刺す。

「サイクロンカッター」

呼び掛けに応じて出現する、荒ぶり唸る緑のエフェクト。

通常の「サイクロンカッター」とは異なり実体を手に入れた疾風の高速回転刃——怪人の左右の守りを固める一メートル超えの円型盾か、あるいは本来の役目に従って敵を両断する殺戮兵器か。

「丸鋸おっ!？」

叫んだ誰かが次の瞬間には右半身と左半身に分離させられ、すんでのところまで飛び退いた近くの仲間も、一拍遅れて飛来した二枚目の回転刃に背後から引き裂かれた。

数では圧倒的に有利であるはずのギルドが、たった一人の迫力に気圧されている。さらに呼び出される数枚の緑の回転刃。

鉄管弓で前衛を次々に殴殺し、後衛を射抜いていくアフロの怪人。人間の形をした白昼の暴風雨は依然収まる気配を見せなかった。



優勝候補と目される『集う聖剣』の主要メンバーにも、怪人台風の進路状況は逐一届いていた。

ドレッドと二手に分かれてオーブ回収を行っていたペインはメッセージを確認し、それに対する指示を簡条書きで返信した。

「今のところ直接の戦闘はなしか」

安堵とも拍子抜けとも取れる小声が漏れる。

聖騎士然とした白の全身鎧を身に纏うペインは敵の動向に常に目を光らせ、フィールドの方々に散らばる偵察部隊からの情報を元に今後の戦略を組み立てる——特に今回のイベントでは、三つのギルドがどう動くのか正確に見極める必要があった。

ミイが統率する『炎帝ノ国』はこちらに負けず劣らずの人員的戦力が。

メイプルを頭目に置く『楓の木』は情報不足による得体の知れなさが。

そして、設立からの経過日数では新参のヨメカワイイしかない『闇鍋』に至っては、情報こそ手に入るものの、そのどれもが荒唐無稽とすら言える内容で何をどう参考にすればいいのやら。

「カワイイに関しては……考えれば考えるほど迷宮に落ちていく感じだな……」

ギルドマスターであると同時に頭脳労働担当でもあるからこそ、奇しくもサリーと同様に思考の底なし沼へ嵌まり込んでしまう。

ミイはともかく、定石など意味を成さない警戒すべき規格外が二人もいるのだ。

どれだけ念入りに作戦を立てても予想外の方向から切り崩されるのではと、幹部の中で紅一点のフレデリカから『心配性』と呼ばれる用心深さの警報が鳴り続ける。

ドレッドもフレデリカもドラグも決して浅慮愚直が目立つプレイヤーではないが、強者が集まるギルド故の楽観視と油断が言動の端々に見えるのも事実。

しかしペインには最高レベルのプレイヤーの、一団を束ねる長の意地がある。

不甲斐ない戦いでは、集まってくれた仲間達に面目が立たない。

「……個人として負けても構わない。『集う聖剣』が勝利を掴みさえすればそれでいい」

そうしてペインは歩みを止め、敵ギルドの真正面に堂々と姿を見せた。

陽光を反射する白鎧に気付いた敵軍が慌ただしく迎撃に飛び出してくる。

いずれは刃を交えなければならぬ強敵達の事を考えれば、目の前の中級プレイヤーの集団など取るに足らない有象無象も同然。

白銀の剣を抜き、高らかに言い放つ。

「【断罪ノ聖剣】！」

光り輝く奔流が敵を切り裂く。

ここにはいないライバルの幻影を断ち切るかのように。

041. 一日目：夜 狙われる理由

帳が下り、夜が世界を支配する。

ある者は獲物を狙う目を爛々と輝かせ、ある者は暗がりには怯え松明の下で戦々恐々。訪れた闇を味方にするべく、フィールドに響く剣戟や魔法の爆発音は一層激しさを増していく。

「ただいまー」

「おかえりサリーー！ 大丈夫だった!？」

「何とかねー。はいこれ、追加のオーブ」

「二人で三つも……流石だな」

「サリーーさんすごいです!」

殺伐とした弱肉強食の舞台から戦利品を持ち帰ったサリーーに、メイプル達が称賛を送る。

同じく攻撃組であったクロムとカスミは定期的な補給と、時には必要性が薄いながらも防衛組の援護を務める事もあってあまり遠出ができなかったため、『楓の木』がこの半日で得たポイントは全てサリーーがフィールドを走り回って稼いだものだ——初日はま

だ半分残っているが、本日一番の功労者なのは言うまでもない。

もちろん、防衛組もきつちりと役目を果たしていた。

「こつちもね、マイとユイがすごかったんだよー！ もうドカンズドンって！」

拠点に押し寄せた哀れな侵入者達が、双子の固定砲台のような【投擲】によつて蹴散らされたとメイプルが興奮混じりに説明する。

「お疲れ様、サリーちゃん。はい、MPポーション」

「まだ外に出るつもりなら強化魔法とか掛けてあげるよ？」

「ありがとうイズさん、カナデ」

ゴールドさえあれば何時でも何処でもアイテムを無制限に生産可能なイズは、魔法支援タイプのカナデと共に『楓の木』の根幹を支えるサポート役としてなくてはならない存在だ。

手渡された謹製のポーションでMPを回復し、サリーは万全の状態に戻す。

しかし、それはあくまでステータス画面での話であり、偵察を長時間続けた疲労はそう簡単には取れやしない。まして常に会敵する恐れがある緊張感の中、持ち前の高い集中力で発揮する回避と両立させているのだから、その精神的負担はどれほどになるのか。

そんな様子はおくびにも出さず、平時の口調でサリーが言う。

「にしても、やっぱり優勝候補に名前が挙がるギルドは手強そうなプレイヤーばかりだね。絶対に勝てないって訳じゃないけど、どっちも一筋縄じゃないかな感じだった」

「……その相手とやらは、それ以上の危険を感じていたと思うがな」

第二回イベントでのサリーとの戦闘を思い出したのか、カスミが苦笑いを浮かべた。攻撃をことごとく躲される悪夢を味わった仲間のトラウマはさておき、そのサリーをして厄介と言わしめる実力を持つプレイヤーの情報を皆で共有する。

一人は『炎帝ノ国』のミイ。

もう一人は『集う聖剣』のドレッド。

どちらも界限では有名なプレイヤーであり、プレイ時間だけで言えば初心者にも生えた程度のマイとユイ以外は、メイプルでさえ掲示板で何度も目にした覚えがある名前だ。

「ドレッドさんって、カワイさんが前に戦ったって言ってた人だよな？」

「うん。私と違うタイプの回避の使い手だから色々勉強になったよ」

オーブの横取りこそできなかったものの、サリーにとってはそれ以上の収穫があった。

同じ回避特化の短剣使いと相対した経験は、今後の戦闘で大きな力となってくれらるろう。

「ミイの方は、聞いた限りじや相変わらず火力でゴリ押しか。後ろで守られてるはずの魔法使いが先陣突っ切つて暴れてるつてのがまずおかしいんだよなあ。燃費だつて悪いだろうに」

あらゆる常識を覆し、あらゆる攻撃が当たらず、あらゆるダメージから蘇り、あらゆる大魔法を使いこなし、あらゆるアイテムを作り上げ、あらゆる防壁を破砕する——メンバー以外の第三者が聞いたなら『いやお前らの方こそおかしいから』と反射的に入れるであろうツツコミも、この場は感覚が麻痺しつつある人外魔境（仮）の仲間だけなので言葉として放たれる事はなかった。

強いて言えば、特筆すべき持ち味がないカスミが小さな疎外感を覚えたくらいか。

「やはり、まだまだ私は力不足のようだな……」

「カスミだつて十分強いつてば。私もマイもユイも攻撃を食らつたら一発アウトだし、メイプルは移動がシロップ任せになって目立つから偵察には向かないし」

「俺やイズ、それにカナデのA G Iじや、偵察はできても撤退しなきゃならん時にどうしても不安が残るしな。うちで一番バランス取れてる万能型はお前だけなんだから自信持つてつて」

サリーとクロムに励まされてカスミが立ち直つたところで本題に戻る。

と言つてもミイの——『炎帝ノ国』の主要メンバーについての情報は、サリーがフレ

デリカから仕入れたものと大差ない復習のような内容で、ドレッドの方もどうやら姿を見えなくするスキルを持つているらしいと推測できた程度だ。

「逆にこっちは『流水』も『攻撃誘導』もすっかり見せといたから、少しは油断を誘えると思う」

「ありもしないスキルを誤認させる、か。そんな戦略は考えた事もなかったな」

「そうなるよ、他に気にしなきゃならないのは……」

「……カワイさんがどう動くか」

イズの言葉を引き継いだサリーが、皆に見えるようにマップを表示する。

偵察組の努力の結晶には敵軍の所在地がいくつも記されているが、決して少なくない数の拠点がヨメカワイイの襲撃済みを示す赤色で染まり、自軍オーブすら見捨てたとか思えない侵攻範囲と速度にメイプル達は目を剥く。

その数は『楓の木』がこれまでに手に入れたオーブを倍にしてもまだ届かない。

「おいおい、一人でどうこうってレベルじゃないだろこれ」

「しかもここに書いてあるのは私が見つけたギルドだけだから、実際はもっと多いと思う」

「でも三時間経ってポイントが入ればオーブは元の場所に戻されるんですよ？ だつたら師匠と戦わないようにすればいいだけなんじゃ……？」

おずおずと手を挙げたユイの意見も一理ある。

ヨメカワイイには「悪食」の回数制限などの急所を知られている——裏を返せば、『楓の木』の危険度を敵としての立場で誰よりも把握しているのだから、ただでさえ孤軍奮闘中の怪人も無用な戦闘を避けるのではなからうか。

「ところが、どうもそう単純な話じゃなさそうなの。ここに戻ってくる途中、他のギルドの様子を窺ってみただけど……カワイさんつてば、ずっとオーブを持ったまま動き回ってるみたいでさ」

「……？　だつてそういうイベントでしょ？」

メイプルが首を傾げ、アホ毛を揺らす。

「よく考えてみてよ。今回のルールだと、奪われたオーブは取り返すかポイント処理されないかと絶対に手元に戻ってこないんだよ？　つまりカワイさんを倒すか、それが無理なら三時間守らせてさっさとポイントに変えてもらわない限り、赤く染めたギルドのオーブは一つ残らずカワイさんが独占し続ける形になる」

「えっと、カワイさんがオーブをたくさん持つてると……どうなるんですか？」

いまいち状況が飲み込めていないマイ。

昼間の頑張りで精神が眠気に抗えないのか、彼女の目は妹と同じくとろけそうになっている。

話し合いが終わったら先に休ませようと考えながら、サリーは簡潔に述べる。

「私達を含めたどのギルドも、ポイントをほとんど稼げないって事だよ。だってオーブを時間まで防衛して初めてポイントに計上されるのに、周りの敵軍に攻め込んでも肝心のオーブがなかったら意味がないでしょ」

「あ……」

意図的かどうかなど、この際関係ない。

第四回イベントを根底から崩壊させるほどの、ルールの抜け穴を突く悪魔の戦略だった。

「だったら、カワイが襲ったギルドの法則性や共通点を急いで見つけないとな。俺達まであいつのターゲットになってるんだとしたら今にも攻めに来るかも知れん」

「だが見た感じ、何らかの線で繋がっているようにには思えないぞ？」

「少なくとも規模や立地条件ではないみたいだね。PKを推奨してるギルドもそうじゃないギルドも被害に遭ってるから善悪での区別も違うかな。他に考えられそうな要素は……」

「過去に雇われた事があるギルドだけ、っていう線はどうかしら？」

「いやいや、それこそ完全にとぼちりだろ」

クロムが、カスミが、カナデが、イズが。

様々な観点から意見を出すものの、これだ、と強く納得できるものはない。しかし何かを見落としているはず。

その糸口を照らし出したのは、我らがギルドマスターのメイプルだった。

「はい、サリー先生！ 私はこの人達がカワイイさんを怒らせちゃったんだと思います！」
「うーん……メイプルの着眼点も中々だと思うけど、これだけの数のギルドが一斉にカワイイさんの怒りを買うほどの出来事って一体どんな……」

そこまで言って、思い至る。

あつたのだ。メイプルの説を裏付け、それが正解だと断言できるだけの要素が。

「ええ……？ ちよつと待って、そんな単純な理由？」

慌ててマップの隣に一つのメモを表示させるサリー。

いきなり何事か他のメンバーが怪訝な表情で見守る中、目を回しそうな勢いでマップとメモを何度も見比べ、合点がいったとばかりに力強く頷いた。

そして謎解きに最大の貢献を果たした親友の両肩を叩く。

「メイプル」

「ほえ？」

「天才！」

「それほどもお」

えへへへえ、と照れ臭そうに後頭部を搔くメイプルからクロム達に向き直ると、名探偵サリーは自分の推理を披露し始めた。

「皆、まずはこちらをご覧あれ」

先ほど表示させたメモのパネルを反転させ、メンバーに見せる。

そこにはギルドの名前が大量に羅列されていた。

代表してカスミが尋ねる。

「これは、名簿か何かか？」

「ある意味ではそうだよ。ここに名前があるのは、イベント前に掲示板でカワイさんを雇ったとか手を組んだって内容の書き込みをしたギルドばかりなの。それも、真つ赤な嘘の書き込みをね」

「嘘？　嘘なんて書いて平気なんですか？」

「あー……まあ、情報戦の一種と考えりや有効っちゃ有効な手だな」

純粋なユイの疑問を肯定するクロム。

「別に珍しい話じゃない。強いギルドと協力関係にあるとか誤解させれば、それだけで周りの敵を牽制できるしな。今回みたいな団体戦だと多かれ少なかれそんな奴らも出てくるだろうさ」

「私もそう思って念のためリストアップしたんだけど、まさかこんな形で役立つなんて」

「つて事は、サリーちゃんが赤い印を付けたギルドと、リストにある名前は……」

「うん、ぴったり一致でした。九分九厘間違はなく、カワイさんは嘘を書き込んだギルドに狙いを定めて攻撃してる。ご丁寧に標的の方から名乗ってくれてる訳だしね」

ヨメカワイイの不可解な選別の謎は解けた。

まるでシリアルキラーのプロファイリングでも行つたような心持ちだが——『楓の木』が怪人と敵対する可能性は限りなく低くなつたのは喜ばしい。

「何だかなあ。襲われてるこいつらも、名前を借りただけつて言えばその通りなんだが……」

「虎の威を借りようとした狐が、虎に絡繰りを見破られて喰われたか。因果応報だな」

「じゃあ、私達はそのリスト以外のギルドを狙えばカワイさんと戦わなくて済むの？」

「理屈ではね。ただ、結構大きな問題も残ってる」

サリーが危惧しているのは、リストにあるギルドの数だ。

怪人のネームバリューもあつてか、自分の首を絞める羽目になつた嘘吐き達はかなり多い。

中には無関係のプレイヤーによる賑やかしの書き込みもあるだろうが——仮にイベント参加中のギルドの過半数がヨメカワイイの攻撃対象だとして、それら全てを掌握された場合、『楓の木』もその他も、残る半分のオーブでの争奪戦を余儀なくされる。

「オーブの絶対数が少なくなれば、その分ポイント稼ぎもキツくなつて順位争いも激しくなる」

「GPS付きの宝の山を持ち歩いてるカワイを倒せば丸儲けも可能だろうが、そうなりや次に飢えたハイエナの大群に襲われるのは自分達だつて目に見えてるもんなあ」

「カワイさんをどうにかするか、手遅れになる前にポイントをガンガン貯め込んでおかないとつて僕ら以外にも勘の鋭い人なら気付く頃だよな」

誰が予測できようか。

何百というプレイヤー同士の集団戦に単騎で挑む無謀者がいるなどと。

誰が想像できようか。

そのたった一人の無謀者の行動によつて戦場が見事に掻き乱されるなどと。

「とにかく、私はまた単独ソロで出るよ。オーブを取り返しに敵が来るだろうからメイプル達は交代で休みながら防衛をお願い。特にマイとユイは最初に休ませてあげて」

「うん、分かった!」

「サリーも気を付けろよ!」

仲間達の声援を背中に浴びながら、サリーは再び夜の狩り場へ音もなく身を躍らせた。

042. 一日目：深夜 丑三つ時の百鬼夜行

人間である以上、睡眠は必要だ。

何が何でも勝利のために執念を燃やしているなら話は別だろうが、少なくとも、ヨメカワイイは眠気を押し殺してまで無理をするつもりなど毛頭なかった——社会人の経験上、徹夜したところで得られる成果は微々たるものであり、結局は集中力の欠如で非効率になると知っているからだ。

なのでヨメカワイイは三大欲求の一つに素直に従う。

無論、他プレイヤーが何処から現れるか分からないこの状況で、昨今の女子キャンパーよろしくテントでドキドキワクワク眠りこける訳にはいかないが、昼休憩じみた短時間でも、『目を閉じて気を休める』という行為は確実にストレスを軽減させていた。

「……………」

そんな彼の様子を——いや、隙を窺う輩がいる。

月明かりに照らされた荒野に、まるで高層ビル群のようにそびえる無数の巨大蟻塚。

その中の一棟に背中を預け、コシユコシユと機械的な寝息を立てるヨメカワイイを、周囲に乱立する別の蟻塚の陰から狙うプレイヤー達。

武器を握る人数は百を下らない。

オーブを奪われた被害者の会一同、あるいは烏合の衆と言える彼らは、ひとまず共通の敵である怪人を討ち取るために協力関係を結んだのだ。

「……右から回り込め。後ろにもな」

「それと、飛ばれた時のために弓部隊も配置しときなさい」

「あいよ。徹底的に囲い込んで一気にケリつけようぜ」

最低限の会話と手振りで人員を動かし、陣形を盤石なものにしていく。

大量のオーブを保有し続けたまま拠点に持ち帰ろうとしない今のヨメカワイイは、言い換えれば倒すと宝の山を確定ドロップするレアモンスター。

上位に食い込めるだけのポイントを獲得できる一攫千金のチャンスとあって、討伐戦に参加する誰もが緊張と興奮の面持ちで合図を待つ。

包囲網が狭まる中、敵意を察知したのか、胡坐をかき腕を組む怪人にも変化が生まれる。

「何だ、ありゃ？」

「アフロが勝手に動いて……」

ぼよん、ぼよん、と。

それはあたかも孵化寸前の卵を思わせる暴れっぷりで、あまりの怪奇現象に誰もが動

きを止めて視線を注いでいると、スチールウールのような卵鞘を掻き分けて中身が顔を出す。

「——ニャアアア……」

鳴き声は寝起きの猫そのもの。

外見は目元が隠れた茶色のおかっぱ頭に緑の肌、シンプルなデザインの白い貫頭衣を身に纏ったずんぐりむっくりの二頭身——クレイジーゲームの景品で並んでいれば人気を博しそうな愛くるしいモンスターだった。

どうにかして地面に降り立とうと、丸っこい足先でおっかなびっくり確かめながら怪人の身体で逆ボルダリングに挑む小さなマスケットに、大多数の女性プレイヤーと何人かの男性プレイヤーが戦闘を忘れてほっこりと和む。

だが、怪人が何時目覚めるとも分からない一分一秒を争うこの状況、どれだけ微笑ましかろうと射抜かれたハートを鬼にして、合図と同時に攻撃を仕掛けた。

「撃てええええっ!!」

まずは手始め。

隊列を組んだ後衛職チームによる魔法と矢がヨメカワイイの蟻塚に着弾し、目くらましも兼ねた大量の煙を巻き上げる。

寝込みへの急襲に加え、視界を遮られ前後不覚に陥っているだろう怪人に、本命であ

る前衛職の一団が身体から強化魔法やスキルのエフェクトを放ちながら迫る。

「ツシヤオラアツ！ 一番乗りもらった！」

「させるかよアホが！」

寄せ集めだらけの即席同盟にしては、それなりに連携が取れているものの、その実、心の内ではどうやって他のギルドを出し抜こうかと考えているプレイヤーがほとんどだ。

一斉攻撃が始まれば、あとは早い者勝ちの獲物の貪り合いとなる。

オーブの奪還という目的で団結したが故に、結束は薄氷のように脆い——次の瞬間には隣にいる何処かの誰かに斬られるかも知れないと、気が付けば右も左も疑心暗鬼の眼差し。

そんな連中に主人との憩いの一時を邪魔されて、彼女が怒りを覚えないはずがない。

「……グルルルル」

「ふげっ!？」

横薙ぎに振るわれる鉄拳が、先頭にいた不運なプレイヤー達を殴り飛ばす。

立ち込める煙幕も打撃の余波で散り、今しがたまで小さな二頭身だったはずの鬼女の仁王立ちを襲撃者達は目の当たりにして——直後、自分達が狩る側から、昼と同じく再び狩られる側の立場に迫いやられてしまった事を思い知る羽目となる。

二メートル半近い長身、しかし均整の取れた美しい肢体を持つ一本角の鬼女。

その背後に、それをさらに超える巨体の影が、月を背にのそりと浮かぶ。

「【ゴブリンチャンピオン】!？」

「レイド用のボス級モンスターじゃねえか！」

筋骨隆々とした体躯を獣の骨や毛皮で作られた鎧で覆い、腰には人間のものと思われる頭蓋骨を数珠つなぎにした悪趣味なアクセサリー。

見てくれを刃の形に最低限整えただけの、太い柱のような石剣を右手に携え、おびただしい数の獲物を前にして空よ割れよとばかりに雄叫びを上げ、

「フシヤアツ！」

「グガツ!？」

そして鬼女に向こう脛を蹴られ、低くうめいて悶絶する巨漢。

まるで『起きちやうでしよ!!』とでも言いたげに口元で人差し指を立てる鬼女に対し、涙目のゴブリンチャンピオンは太い両眉を下げ、フガウガと新入社員のように平謝りする。

どうやら背丈に関係なくヒエラルキーは鬼女の方が上らしい。

「一体何がどうなってるんだ!？」

「知らねえよ! とにかくカワイごとぶつ潰せ！」

数の上では勝っている。

その頼りない一文だけが、襲撃者達の砂の城同然の戦意をどうか支えている要素。だが、そんな淡い希望を抱く事さえ鬼女は——ミケは許さない。

この騒乱でも一向に目を覚ます様子がないヨメカワイイの周囲、溶岩魔法とは異なる紋様を描くいくつもの魔法陣が、見る者の不安を掻き立てる輝きを放つ。

中心から生えるのは紛れもなくゴブリンの腕。

人間のそれと変わらないサイズや、丸太並みの剛腕が、何本も何本も。

「……………冗談だろ?」

誰かの口から、疑問や驚愕を超えて諦めに近い苦笑が漏れる。

確かに数の上では勝っていた。ただし、つい数秒前までは。

襲撃者達の眼前に広がる光景——ミケ自身の一時的な強化に伴い、アイテム生成ではなく本物の召喚術に昇華した「眷属召喚」が、乾いた大地を醜悪な緑の絨毯で覆い尽くす。

骨の棍棒に打製石器、鏑の浮いたナイフ。

最弱のゴ布林らしく武器も防具も大半が粗末の一言だが、それを補うには十分な威圧感を持つ大軍勢であり、儀仗を携えた呪術師や神官などの魔法職、良質な装備で固めた上位個体ホブゴ布林、さらには二体目、三体目のゴ布林チャンピオンに、オーガらしき双角の影まで見える。

「……………」

先頭に立ち、軍勢を率いるミケ。

後ずさる邪魔者の群れを一瞥した鬼女は、一体目のゴブリンチャンピオンから恭しく献上された特大の石剣を受け取ると、

「ガルアツ!!」

軽々と片手で掲げ、全眷属に女帝として勅命を下す。

つまりは『一人残らず狩り滅ぼせ』と。

ゴブリン達は愚直なまでに忠実だった。

「おい、これ流石にヤバいんじゃないか!?!」

「たかがゴブリンだろうが! ビビッてんじゃないやねえよ!」

そう、たかがゴブリンだ。

冒険の序盤も序盤、剣チュートリアルの振り方の練習相手にしかならない、矮小で非力で低能な亜人種。

だが、その下等種族が死すら恐れぬ群れを形成し、しかも自分達の五倍に迫ろうかという規模に膨れ上がっているとしたら——果たしてそれは、取るに足らない雑魚と呼べるだろうか。

答えは否だ。

刃を交えた襲撃者達は食物連鎖の逆転を身をもって知る事となる。

「ちよつと何よこいつら……普通のゴブリンよりやたらタフなだけど!？」

「魔法で強化されてんだよ！ 後ろにいるバツファーをまず狙え!!」

呪術師が惜しみなく振る舞う強化魔法に、邪神に祈りを捧げる神官プリーストの治癒。

一匹ならば経験値にもならない。

三匹ならば手頃な武器慣らしに。

十匹でようやく『敵』となる。

そんな最下級だったはずのモンスターが数えるのも億劫になる隊列で、バフにより一撃でHPを削り切れないだけの耐久力を持ってしまったのだ。

単純な『敵』ではない——この場において、明確な『脅威』と化していた。

「このつ、離れろー!」

剣を受けても怯まないゴブリンに腕の動きを封じられた剣士が、次の瞬間にはそのゴブリンごとチャンピオンの石剣に殴り飛ばされ光となる。

複数のギルドが入り混じった同盟の場合、乱戦になるとフレンドリーファイアを恐れて大規模な攻撃魔法は控えなければならぬが、ゴブリン達は女帝の命令ならば——敵を仕留めるためならば同胞の命も自分の命さえも天秤に掛けようとしぬい。

生還など度外視の一匹一殺。

狩れと命じられたなら狩り、死ねと命じられたなら死ぬ。

徹底的な滅私もさる事ながら、もっと根本的な問題がプレイヤー達を苦しめていた。

「ああもうクソツタレ！ 斬つても斬つても数が減るどころか増えてく一方じゃねえか！」

「言われなくても見りゃ分かるわ！ 喚いてる暇あつたらテメエがあのにリーダー潰して！」

最前線で長髪と石剣を振り回して舞い踊るミケ。

一歩踏み出すごとに足元に魔法陣が広がり、彼女が自ら切り開いた道は次から次へと湧き続ける新たな眷属達で緑色に塗り替えられる。

「兜割り！！」

「【ブラストボム】！」

「【連続突き】！」

負けじとスキルや魔法で応戦するが焼け石に水。

大河の流れを素手で堰き止めようとする愚行に等しく、ゴブリンの数は確実に増え、味方の数は確実に減らされていく——多少の犠牲は致し方ないとしても、苦戦や敗北など想像だにしなければならなかった勝ち戦が、何時の間にか自分達以上の物量で覆され撤退すままならない状況に陥るとは。

「あ……ああ……」

気付けば、襲撃者達の数は十分の一にまで落ち、死ぬ必要もなくなったゴブリン軍は反比例して今もなお規模が広がり続けている。

踵を返して逃げようにも、後方もすでに不気味に波打つ緑で囲まれてしまった。

こうなつてしまえば、もうメイプルでもなければ生還は不可能。

もはやミケは直接手を下そうともしない。

つまらなさそうに鼻を鳴らして、しぶとく生き残っていたプレイヤー達から視線を外した鬼女は石剣を適当に投げ捨てると、今か今かと下知を待つ眷属達に向け、

「ニャ」

最後の命令を下した。

緑の奔流に飲み込まれる邪魔者共の末路など見向きもせず、取り戻した平穩を手土産に、ミケは静かに寝息を立てる己の主人の元へ弾む足取りで戻っていった。

長い前髪から垣間見える整った顔で、満面の笑みを形作りながら。



鋼鉄ペストマスクのレンズに、赤い光が灯る。

体感で二時間くらいだろうか。

両腕を突き上げて背筋を伸ばす。

「んいー……つと。おや、おはようさん」

「ニャー」

ミケが珍しくアフロの外に出て、棒切れで地面に絵を描いていた。

四足歩行の動物のような、何かの家具のような。

それはともかく、時刻はまだ深夜で頭上には星の海——軽い仮眠ですつきりしたヨメカワイイは立ち上がると、身体を左右に数回捻る。金属の軋む音やネジが数本落ちたのはご愛嬌。

「俺が寝てる間何かあった？」

「ンニャー」

柔らかい頬をぶるぶる振動させつつ首を横に振るミケ。

オーブの位置は常にマップに表示されているのだから、てつきり夜襲でも仕掛けてくるだろうと心構えくらいはしていたと言うのに。良い子は皆寝ている時間だからだろうか。

自軍オーブも拠点で絶賛放置プレイ中。

まあ平穩無事に過ごせたのなら御の字。しかし正直拍子抜け感は否めない。

掲示板を元にして襲撃予定のギルドはリストアップ済みだが、とある理由から半数は残しておく必要があるため、初日が順調過ぎた今、少なくとも陽が高くなるまで狩りは小休止の状況だ。

「……………」

このまま、のんびり星でも眺めて時間を潰そうかと天を仰いだところ、宝石を散りばめた夜空を駆け抜ける一条の光を見つけた。

流れ星、にしては描く軌道が不自然。

よく見ようと目を凝らすと、ベストマスクのレンズ部分が望遠鏡のように変形、伸長し、視界が一気に拡大される——「フルメタル機械化」の元々のギミックなのか、それとも「鋭敏化」と組み合わさった結果なのか、どちらにせよ、また人外扱いの噂が立ちそうな機能を作動させてしまったらしい。

ともあれせっかくの望遠機能、別に女露天風呂を覗こうとしている訳でもないのだから、これ幸いと光の筋の先端に視線を向ける。

「俺も他人の事は言えないが……一人だけ世界観おかしくないか？」

赤い尾を引く未確認飛行物体の正体は、全身を明らかな近未来兵器で武装したメイプルだった。

予想通りと言えば予想通り。

まさか、単なる夜の遊覧飛行ではあるまい——メイプルの場合、絶対にないと断言できないのが恐ろしいところだが、であれば巨大化したシロップに乗っていないのは何故なのか。

何より、彼女の険しい表情が、一刻を争う緊急事態にあると物語っている。

「…………ふむ？」

カタツムリ状態の両目を元に戻したヨメカワイイは「跳躍」を発動させて一番高い蟻塚の頂点に移動し、再び望遠機能で、ひたすら直進するメイプルが目指しているであろう方角に目をやる。

「ふむ…………」

メイプルが急ぐ理由を遠方に確認したヨメカワイイは、おもむろに武器を構えた。

鉄管弓『愚連』のスキル、「身削る一矢」でHPが減少していく——代償を払って得られるのは放たれる矢の威力、飛距離、弾速の強化。

流石に今回のイベントフィールド全土が射程範囲内とはいかないが、並大抵の弓使用と比較して文字通り桁違いの射撃能力なのは間違いない。

「——」

アイテムを「装填」した矢を一射、続けざまに別のアイテムを「装填」してもう一射。そして真逆の方向に向き直り、今度はスキルとアイテムをそれぞれ「装填」して同じ

く二射。

夜空を新たな流星が飛ぶ。

「……こんなもんかね。ま、時間稼ぎにはなるだろ」

たった四射でHPの大半を使い果たしたヨメカワイイ。

一見無意味に思える奇行に満足した怪人は蟻塚から飛び降り、下で待っていたミケをアフロ内に回収すると、鉄管弓を枕代わりに夜明けまで二度寝を決め込むのだった。



フレデリカは安堵していた。

一対百という戦力差、しかも周りを取り囲まれた絶望の中、予想外の連続と驚異的な戦闘技術で三十人以上を討ち取ったサリーに、ようやく体力の限界が見えたのだ。

未来を予知しているのではと背筋が冷たくなる回避能力も、足に力が入らず地面に転がっている今となっては牙と爪を失った虎を狩るようなもの。

「……次は負けないから」

眼光鋭く言うサリーに、できれば戦いたくないなあとフレデリカは冷や汗混じりに思う。

このイベント中に因縁の再戦となれば、ステータス減少のペナルティなどもとせず、むしろ腕にさらなる磨きをかけた彼女と戦う羽目になるだろう。

念のため自身や他のメンバー全員に魔法の障壁を張りながら、「攻撃誘導」というありもしない偽の情報を掴ませてくれた強敵に対し、フレデリカは杖を向けてとどめの一撃を放とうとする。

「多重炎——びゃっ!？」

だが、言い切る前に、突如炸裂した強烈な閃光がその場にいた者達の目を焼いた。

「うおっ!? 何だあ!？」

「くそっ、目が……!？」

フレデリカが施した障壁はメイプルの鉄壁の防御とは比ぶべくもないが、それでも大概の攻撃を無効とまではいかなくとも大幅にカットする性能がある——だからこそデメリットとして、直接のダメージが目的ではない閃光弾による【ブライント盲目】の状態異常は防げなかった。

閃光弾。

戦闘中に使用する事で、モンスターや他プレイヤーの視覚を一定時間遮断するアイテム。

「これって……」

サリーにだけは『集う聖剣』のプレイヤー達が慌てふためく光景が見えていた。

その理由は単純であり、第一の矢の閃光がサリーの目を眩ませた直後に、第二の矢で届けられた状態異常回復のポジションを浴びて【ブラインド盲目】が解除されたからだ。

あの人が？

何のために？

そんな疑問が浮かぶ前に、本命の救いの女神が、爆音と共にサリーの正面に着弾した。閃光は時間稼ぎ。

魔法や手持ちのポジションで【ブラインド盲目】から回復したフレデリカ達が最初に目にしたのは、息も絶え絶えな親友を守るため降臨した、純白の翼を持つ天使のような魔王メイプルの姿。

「サリーはやらせないよ。絶対に！」



メイプルがサリーの救援に現れたのと、ほぼ同時刻。

どうにかなりそうもない番狂わせに本気で総員撤退を考え始めたフレデリカと同じく、彼女からメッセージを受けてメイプル不在の『楓の木』を急襲しようとしていたドレッドもまた、想定外の事態に小さく舌打ちをしていた。

「つたく、面倒くせえ！」

彼の前に立ちはだかるのは、全身鎧を着て円盾と長剣を携えた五匹のゴ布林種。

一般的に「ゴ布林ナイト」と呼ばれる中堅プレイヤー向けのモンスターは、迂闊にドレッドに攻め込む真似はせず、『楓の木』の拠点がある洞窟の前で陣形を組み待ち構える。

「どうしてモンスターが『楓の木』の味方してんだ？ おまけにこの魚も鬱陶しいったらねえ！」

ゴ布林ナイトもさる事ながら、空中を回遊する魚群が一带に吐き散らしている液体が厄介だ。

触れるとAGIが10%減少してしまう、それこそドレッドのような回避特化型プレイヤーにとつて相性最悪なトラップ——【古代ノ海】の効果で召喚された頭上の魚群に注意しながら、専守防衛を崩さないゴ布林ナイト達を相手にするのは、不可能ではないにしても骨が折れる仕事だった。

洞窟の入口の上に刺さった二本の矢がこちらを嘲笑っている気さえする。

「だからって無視して洞窟に入っちゃまえば挟み撃ちだろうしな」

ゴ布林達と液体の範囲から距離を取り、ドレッドは独りごちる。

メイプルが出ているのは確かだろうが、逃げ場が限られた狭い洞窟内で何人待ち構え

ているかも知れない曲者揃いの『楓の木』のメンバーと、確実に後を追ってくるであろうゴブリンと魚群を同時に相手取るなど、ペインじやあるまいし御免こうむりたい。しかし、だからとおめおめ引き下がってしまつてはフレデリカに何を言われる事やら。

「ハア……、やるだけやるしかねえか」

愛用の短剣を握り、ドレットは覚悟を決めた。

ここで一つ、『楓の木』の拠点を襲うにあたり、フレデリカもドレットも計算に入れるどころか想像だにしなかつた要素がある。

それは、メイプルの移動速度だ。

防御極振りである素の移動力は言うに及ばず、多くのプレイヤーが目を疑つた巨大亀での飛行もそこまで速くはない。

その前情報があつたからこそ、メイプルと遭遇したフレデリカは拠点に戻るまで時間が掛かると判断してドレットにメッセージを飛ばした。

しかし。

「……おい、おいおいおい！ 恨むぞフレデリカ！」

二人は知らなかつた。

メイプルが全身に生み出した大口径の砲身をブースター代わりにして、自爆も同然の

高速飛行を可能にしたなど——親友の破天荒具合を間近で見てきたサリーですら、そんな方法で移動するとは思わなかったのだから無理もない。

「何とか……間に合ったね！」

フレデリカが相手にしているはずの。

到着するまでまだ時間が必要なはずの。

ペインと並んで戦いたくないプレイヤーとして名前が挙がるメイプルが、サリーを伴って見事に大返しを成功させたのだ。

これで、ドレットが『集う聖剣』の幹部で初の死亡者になるのは確定となった。

043. 二日目：昼 かいじゅうたちのいるところ

「俺達が休んでる間にそんな事になってたのか」

「メイプルが助けに来てくれて何とか耐えましたけど、流星にこれは死ぬって思いましてよ……」

どうにか誰も死亡せずに二日目を迎える事ができた『楓の木』の愉快的仲間達は、情報の整理と意見交換を兼ねて一日目の深夜に起きた出来事を話し合っていた。

やはり皆が重要視するのは、死の淵に立たされたサリーを救った何者かの思惑について。

「何者かつーか……間違いなくカワイだよな、んな芸当ができそうなのは」

「きつと何処かから見てたんだろうね」

「背中から狙撃されなくてよかったわね、サリーちゃん？」

「縁起でもない事言わないでくださいよイズさん……」

無事に拜めた朝日もすでに天上高く昇り、時刻は昼過ぎ。

一日目の徹底的な撃退劇が功を奏したのか、自軍オーブしかない『楓の木』を襲撃しようとする命知らずはなく、防衛組には冗談交じりに談笑するだけの余裕が生まれてい

た。

「サリーちゃんも大ピンチだったみたいだけど、マイちゃんとユイちゃんだけで守ってたこつちも攻撃を受ける寸前とか、何気に私達かなり危なかったのねえ」

「ああ。二人じゃまだランカーのドレッドには敵わなかっただろうしな」

メイプル主催の毒竜討伐タイムアタックでレベルを上げ、サリーからもスパルタな教えを受けて立派に戦えるだけの強さを得たと言つても、双子はまだまだ発展途上。

技量と戦闘数の差でドレッドに軍配が上がるため、同じくランカーの一人であるクロムの言葉に異論を挟む者はない。何かと面倒見のいい彼だからこそその台詞だとメンバーも分かっている。

「サリーとメイプルが戻ってきた時、ドレッドつて人はゴブリンと戦つてたんだよね？」

こつちもやつぱりカワイさんが足止めしてくれたって考えていいのかな？」

カナデの疑問にサリーが頷く。

「そうだと思うよ。ゴブリンの他に空中を泳いでる魚の群れもいたから。あれは第二回イベントの海中に出るボス——カナデも覚えてるよね？ あのおつきなイカ。あれを倒さないと手に入らないスキルだし、使えるのは私とカワイさんくらいのはず」

「なるほど、じゃあ確定だねー」

ちなみにメイプルとマイとユイはこの場にいない。

他ギルドにとって最悪極まりない事に、全プレイヤー中最高防御と最高火力を誇る極振り三名が揃って新たなオーブ回収に動き始めたのだ——午前中にメイプルが単独で動いただけで十を超えるギルドが壊滅したのだから、そこに双子の破壊力が加算された今、彼女達と真正面からぶつかって立っていられる相手など一部の限られたプレイヤーだけだろう。

「結局、サリーを助けた理由は分からずじまいか」

メイプルを防衛に専念させるのがプランAだとするなら、現在行っているのはプランB。

隠し通していたスキルを解放しての侵攻は、さながら居城から直々に出陣する大魔王に近い。

当然ながら全てのスキルを大盤振る舞いするのではなく、「毒耐性」を所持したプレイヤーへの対策として「捕食者」を、マイとユイを守るために「身捧ぐ慈愛」を、攻防合わせて一種類ずつの限定公開に踏み切っただけだ。

孤軍奮闘したサリーの働きによって、他ギルドの拠点はマップに記入済み。

メイプル達はスタンプラリーのように順繰りに潰していけばいい。

「となると、カワイの動向が気になるところではあるな」

自分の世界から戻ってきたカスミが言う。

シヨウウインドウのトランプペットに心を奪われた少年よろしく、新しい刀をこれでもかと存分に矯めつ眇めつしていた彼女もまた、『炎帝ノ国』に所属するランキング第七位、『崩剣』のシンを討ち取ってギルドに貢献している。

その際に使用せざるを得なかったスキルの代償で、愛刀を含む装備一式が耐久値の限界を迎えて碎け散ってしまったが——それらを軽く上回る性能の刀と防具をイズがあつさり拵えてくれたので女剣士はすこぶる上機嫌だ。

「だよね。カワイさんとうっかり戦うような事になっちゃったら、メイプルもスキルの温存なんて考えてる余裕はないだろうし」

「マイちゃんもユイちゃんも一緒だし、メイプルちゃんが負けるとは思えないけど、簡単に勝てる相手でもないものねえ」

情報秘匿の意味でも必要以上の戦闘は避けるようにとメイプル達には釘を刺したが、もし四人がかち合つて怪獣大戦争に発展しようものなら、どのような形であれ、お互いに手の内を隠したまま終了する可能性は限りなく低い。

「……メイプルだしなあ」

ちよつとフィールドに出ただけで、見た事も聞いた事もない変身形態やオプシオンを手に入れて帰ってくる予想外と奇運の申し子——そんなメイプルが戦場を闊歩する。

主力としてはこの上なく信頼できるものの、反面、自由行動させるとなると、初めて

のお使いの途中で豆柴に気を取られて道を間違う幼児レベルで信用できない。

「メイプルだものなあ」

カスミもサリーの言葉をオウム返しに呟く。

激突し降り注ぐ猛毒と溶岩、絶え間なく荒れ狂う砲撃と爆撃、「大自然」の猛威を【鉄蝗団】^{アバドゥン}が食い破る中、一撃必殺の大槌の四重奏が小鬼の群れを相手に大立ち回り。

何の地獄だそれはと叫びたい光景しか浮かばず、サリー達の顔に縦線が入り陰鬱に沈み込む。

「最悪、本当に背中から射抜かれるかも知れないぞ」

「イズの冗談が笑い話じゃなくなってきたな……」

劣勢さえ容易く覆すほどの破壊力を秘めた【暴虐】と【機械神】——人数の乏しい『楓の木』が勝利を掴むため、ギリギリまでひた隠しにしたい二枚の切り札。

その最終兵器を知るプレイヤーに敵視され対策を講じられてしまえば、上位入賞までの道のりは確実に遠く険しくなってしまう。

「カワイさんが狙ってるギルドと極力被らないルートにしたし、むしろカワイさんがメイプルとの戦闘を避けてくれるのを期待した方がいいかも」

しかしこちらも目的やターゲットが分かっている

触らぬ神に祟りなし、君子危うきに近寄らず。

終盤まで戦わずに済む相手なら、それに越した事はない。

「期待するより、まず今のうちに念押ししとけばいいんじゃないか？」

「……そうですね」

クロムに促され、サリーはメイプルに宛ててメッセージを飛ばす。

一分と経たずに届いた返信には、こう記されていた。

『大丈夫！ カワイさんと一緒にシロップに乗って移動してるから！』

………。

何がどう大丈夫なのだろうか。

とりあえず、さん、はい。

「「………どうしてそうなった!?!」」



「浦島太郎にでもなった気分だな」

助けた亀に連れられて。

ではなく、懐かれたメイプルと双子に連れられて、巨大なシロップに乗ってのんびり

遊覧飛行。

三層の町で見た乗り物でもない限り攻撃も届かない不可侵の領域——【念力】サイコキネシス本来の用途が移動用ではないため【滑空】に比べると速度はかなり緩やかだが、甲羅というしっかりした足場は安心感が高くグライダーでの飛行よりも楽だ。

「師匠、師匠！ 下にプレイヤーさんがいっぱいいます！」

「おー、そうだな……みーんな一目散に逃げてるけどな」

ゆつくりと、防ぐ手立てもなく迫る空飛ぶ亀。

見上げる者達からすれば、地球侵略に大挙して押し寄せた宇宙艦隊と変わらないのだろう。

実際、道中でメイプル達に襲われたギルドはなす術もなく一様に猛毒の紫海に沈み、状態異常に耐性があつたプレイヤーはメイプルの【身捧ぐ慈愛】に守護されたマイとユイの一撃で、いち早く逃げ出したAGIが高いプレイヤーは矢で頭部を射抜かれて光になった。

ちなみにヨメカワイイが狙うギルドではなかったので、オーブはメイプルの手にある。

「でも、本当にいいんですか？ カワイさんにも予定とか計画とかあるんじゃない？」

「あるっちゃあるが、計画と呼べるほど大層なものでもないさ」

そもそもマイが申し訳なさそうに気にする事でもない。

ありもしない竜宮城に向かってるのはメイプルとユイが原因なのだ。

フィールドで偶然出くわしたヨメカワイイに対し、一緒に行きませんか、と周りのおよそ全てが敵である戦争イベントでまさかのお誘い。

裏があるのではと警戒したが、勝負事にシビアなサリーならまだしも、この天真爛漫アホ毛娘は策略を張り巡らせるには向かないと思ひ直した。戦うと決めたなら素直にそう告げるタイプだ。

なので、都合が悪くなるまでは同行すると決めた。

さて、先ほどから静かなメイプルが何をしているのかと言えば。

「ひーんっ」

泣く子も黙る鉄壁要塞少女は、大量に届くメッセージに叱られて半泣きになっていた。

送り主はサリー他、ギルドメンバー達。

青いパネルに指を走らせて謝罪を返し続けるが、アホ毛もへんにやり垂れて元気がない。

「メイプルさん、まだサリーさん達に怒られてるんでしょうか」

「フレンド登録してるからって、味方でもない奴と一緒にいたらそりゃ怒るだろ。知らない人間についていけないのは当たり前だが、知ってる人間についていくのだから最近

「は危ないんだぞ?」

「ついていつてるんじゃないよ!」

異議ありとばかりにメイプルが振り返り、言う。

「私達の後ろを、カワイさんについてきてもらってるんだよ! ふんすつ!」

「その言い方だと完全に俺が不審者だよな?」

そんな『一本取った!』みたいな顔をされても。

追跡者ならともかく、つきまとう者扱いはヨメカワイイも遠慮したい。

「それで、皆からのお小言は終わったのか?」

「えへへ……絶対に油断しないようにって言われちゃいました……」

「だから俺に教えちゃ駄目だろつての」

まるで緊張感のない会話。

しかししいざ戦闘になれば、あらゆる攻撃も防御も意味を成さず、逃亡さえも許さない凶悪無比な少女三人組（と保護者役の怪人一名）へと変貌するのだから、『楓の木』の脅威を身をもって知るプレイヤー達から人外魔境と恐れられるのも無理らしからぬ事だった。

「メイプルさん、次のギルドが見えました!」

「よーし! サリーの分までどんどん頑張ろー!」

「おー！」

「ほら、カワイさんも頑張ろー！」

「……おー」

意気揚々と声を張り上げるメイプルと双子。

裏腹に、ヨメカワイイは気乗りしない表情をベストマスクで隠している。

さもありません、三匹の小怪獣が標的と見定めて進む先にあるのは——『炎帝ノ国』なのだから。

都合が悪くなるまでと言うなら、今まさに都合が悪い状況だ。

嫁がいるなら顔でも見せたいが、さて、どうしよう。



「来ちゃったかあ……来ちゃったよお……」

空飛ぶ亀の接近報告を受け、マルクスが目深に被ったフードの奥で泣き言を漏らす。

第一回イベントのランキングではクロムよりも上の第八位。

変幻自在の罨魔法を駆使用する事から『トラップパー』の二つ名を持つ彼は、天性の才能とも言える罨設置能力とは不釣り合いなほどに、自身に対してネガティブな思考が目立

つ。

罨は事前に設置しなければ意味がないため、直接の戦闘に自信が持てないのも分かる——しかしミイがオフエンスに出て不在の中、これまでの襲撃者をさしたる被害もなく返り討ちにできたのは紛れもなくマルクスの功績であり、防衛の要なのはメンバーの誰もが認めているところだ。

「ほらマルクス、しっかりとしてください。ミイとシンの留守中は私達が頑張らないと」とある先輩から痴女扱いされているものの、ミザリーとてリアルでは現役体育教師。前時代的な熱血でもなければ、どちらかと言えば得意なのは保健の実践の方だけでも、自分を過小評価している人間を見過ごせないのは一種の職業病に近い。

何より、今からあのメイプルと戦わなければならないのに、幹部がこれでは士気が下がる。

「……ミイは何だつて？」

報告が上がった時点でミイにはメッセージを送っている。

「すぐに戻るそうです。なので私達の役目は——」

「——時間稼ぎかあ」

別に、あれを倒してしまっても構わんのだろう、と言いたいところだが、無理なものは無理。

メイプルが一躍有名になって以来、半ば常識と化した貫通スキルと【毒耐性】持ちのメンバーを背後に大勢引き連れて、ミザリーとマルクスはだんだんと大きくなる巨影を待ち構える。

ウミガメならまだしも、明らかかなリクガメ体型なのにどうして飛べるのか。

そんな疑問はさておき、とにかくマルクス謹製の罠に嵌まってもらうため、まずは撃墜しようとする魔法を準備させたのだが——敵にも遠距離戦に強いプレイヤーがいるのか、こちらの射程圏に入る寸前で、巨大亀が忽然と姿を消した。

地面に降り立つ二つの、いや、四つの人影。

「……マジかよ」

後ろで誰かが言った。

メイプルが相手なのは覚悟していた。

髪を金色に染め、天使の翼を生やし、おぞましい化け物まで両脇に従えているが、この際それは甘んじて受け入れよう。

問題なのは、

(なあんで一緒にいるのよお、先輩いい)

鋼鉄のペストマスクに長身アフロとレザーファッション。

他人と見間違はずもない。

「嘘だろ、どうしてカワイさんまで……」

『楓の木』と手を組んだのか!」

その強さを知るメンバー達の間で動揺が走る。

しかしミザリー個人としては、それよりもっと注目しなければならぬ点があった。落下時に庇ったのか、右腕に白髪の少女、左腕に黒髪の少女をそれぞれ抱きかかえているのだ。

メイプルよりも年が若く、一目で双子と分かる程度に瓜二つ。黒髪の方はともかく、白髪の方は彼を『師匠』などと呼んであからさまに嬉しそうだぞ。

(……ふうん? ふうふうん???)

聖女の仮面の下で、嫉妬の炎がめらめらと。

なるほど、なるほど。

まだ半信半疑だがお嫁さんかなり年下らしいし? 実はロリコンだったかあの野

郎めが。

「……マルクス。彼は私が引き受けましょう」

「ええ……? 大丈夫なの?」

「どういう経緯や思惑があつてメイプルに同行しているのか分かりませんが、このままあの四人に連携を取られるくらいなら、あちらの戦力を一人でも分断すべきです」

どちらかと言えば、先輩もやる気がなさそうに見える。

とすれば、メイプルと双子の三人の動きさえどうにかして封じ込めばいい。

「そうだね……ミイが間に合えば僕らの勝ちだもんね……」

「足止めは任せましたよ」

「うん……十分は頑張ってみるよ。そつちも気を付けて」

自分には劣るが回復に長けたメンバー達にマルクスの援護を指示し、じつとヨメカワ
イイだけを見つめながら、ミザリーは一人隊列を離れた。

こちらの意図を汲んでくれたらしい彼もまた、双子を下ろして単独行動に出る。

(私をあんなに好き放題したくせにい……そんなに若いのがいいのかコラー！)

色々と、そりやもう色々と言いたい事はひとまず喉奥に押し留めて、彼がメイプル達
のところへ戻ったりしないよう、フレンドリストから挑発のメッセージを飛ばす。

意外に子どもっぽい部分がある先輩が、しばらく自分だけを相手にしてくれるであろ
う一言を。

『やーい、このロリコンおっぱい怪人 m9 (ハハ) プギャー』

即座に矢が飛んできた。

044. 二日目：昼 炎帝、頑張る

メイプル襲来。

最悪極まりない知らせを受けたミイは、すぐさま方々に散らばる各部隊に一時撤退と拠点防衛を指示し、「フレアアクセル」を発動させてフィールドを疾駆していた。

木々の間をすり抜け、川を飛び越え、大岩を砕く。

よりにもよって、とは思わない。

偵察部隊の尽力によって拠点の所在地こそ把握していたものの、幹部メンバーの戦闘スタイルとリスクの高さから『炎帝ノ国』は『楓の木』に攻め込むつもりなどなかった。だが、メイプルがオーブの前で不動を貫くとは考えられず、万一に備えて迎撃に参加する人員や陣形など段取りは決めておいたのだ。

今回はそれが活かされた形になった。

(ああもう、どうして来ちゃうのお……?)

台風への備えが万全だからと言って、家に台風が直撃して喜ぶ人間などいるだろうか。

できるなら最終日まで拠点で冬眠しててほしかった、とミイは焦燥と共に帰路を急

ぐ。

湧き上がるのは不安ばかり。

これまで直接対峙した事がなく、映像と伝聞でしかメイプルの強度を知らない。

レベルもスキルもメンバーも、ミイが目を通した情報など当てにできないほど強化されていると推測すべきであり、満を持して腰を上げたという事はつまり、ミイがいたとしても『炎帝ノ国』に勝てるかと踏んだからだだと判断する。

(嫌だよお、怖いよお、行きたくなーいー)

夫に布団ごと縛られて歯医者に連行された時のように駄々をこねるも、ミイが間に合わなければオーブは奪われ、ミザリーもマルクスも、大勢のメンバーがデスペナルティを受けてしまう。

イベント終了まで残り三日以上。

半分も過ぎていないのに流石と言うか、一日一日が色々と濃過ぎる。

初日はオーブをゲットしたと思ったら得体の知れないローブのプレイヤーに横取りされ、今日は今日とて魔王の抜き打ち家庭訪問。

(ふえーんっ!!)

泣きたい。と言うかももう泣いている。

こちらの攻撃は一切通用せず、なのに敵は一撃必殺の大技をぶちかましてくる——ま

るでRPGでありがちな負けイベントではないか。

それでも行かねば。

何故なら自分はギルドマスターだから。

「すんどうぶー!」

見落とした木の根に足を取られ、びたんつ、と顔面から盛大にすつ転ぶ。

ああ、せつかくシリアスに決めようとしたのにこの始末。

「……痛^{いら}あいいい」

ゴア表現は抑えてあるため出血こそないが、いよいよもってみつともない。

やはり自分にはリーダーなど向いていないのだ。

(誰かもう代わってええ……)

ぶつけて真っ赤になった鼻をすんすん鳴らす。ついでに両足もじたばたじたばた。

許されるのなら、もう何もかも投げ出してダンゴムシになりたい。丸まって、そのま

ま旦那様にごろごろと遊ばれて幸せを貪りたい。

けれど拠点でミイを待ち望む仲間達がいる以上、彼らの期待を裏切るのも罪悪感が辛

い。

顔に土を付けながら仕方なく身体を起こした、その時。

「——旦那様の匂い!」

思わず口走る。

言わずもがな、運営が用意した環境や飲食物ならともかく、いくら何でも個人の体臭まで忠実に再現できるほどVR技術は発達していない——だが、かれこれ二十四時間以上も生命維持に必要な快樂物質的旦那様成分、通称ダンナスキー粒子を摂取できていない今のミイにとって、重要なのはこの近辺に愛する夫がいる(らしい)という事実のみ。警察犬でもあるまいし、草木と大地、そこかしこで昇る戦いの煙に攪拌された空気の中で人間の匂いを識別するなどまず不可能なのに。

仕事から帰宅した旦那様のシャツをくんかくんかと満喫、もとい、他の女の気配がなにか調べる習慣があるミイだからこそその幻聴ならぬ幻嗅。

(どっどっ何処どっ?! 旦那様どっ?! こっち?!)

髪色と同じ犬耳が生え、尻尾は空を飛べるのではと思えるほど回転し、飼い主と再会を果たした忠犬ハチ公でもこうはならない興奮具合のまま、嗅覚だけを頼りに突き進む。

犬獣人に転職したミイの進路は、当然ながら拠点へと戻る道。

幸か不幸か、ヨメカワイイがメイプルと共に『炎帝ノ国』に現れた事が、動機はともあれミイにやる気を起こさせる切っ掛けとなったのは間違いない。

あとはもう一目散。

「おいあれ！」

「げえつ、『炎帝』!？」

「こつちに來るぞ！ 構えろ！」

「……邪魔をするなあつ!!」

偶然出会った不運な敵プレイヤーを「噴火」で一蹴し、新たな燃料を得て炎の矢と化したミイはついに拠点へと舞い戻った。

「キヤーー！」

そこで見たのは、旦那様が放つ矢に追われるミザリーの姿。

うーむ、まるでアスリートのような見事なランニングフォーム……じゃなくて。

爆発したり燃え上がったリマグマを噴いたり斬り裂いたり、千変万化の矢の暴風雨から逃げ惑う我らが『聖女』——その天然素材がぎつしり詰まった全プレイヤーの中でも屈指の双丘も、動きに合わせて上下左右に暴れ回る。

まだ大きな手で育成途中な自分のものと比べて破壊力抜群の、男を狂わす魔性と母性の塊。

普段ならば、旦那様が毎週買っている青年誌のグラビアページさえ見られる前に破り捨てるほど嫉妬深いミイだが、今の彼女はさしずめ愛の肉食獣。

縦横無尽なおっぱいよりも、とにもかくにもマイダーリンである。

(うわーん旦那様旦那様旦那様あああっ!!)

加速の勢いそのままに、夫の左脇腹にバーニング低空タックル。

「いっふっ!!」

再会に泣く嫁型砲弾を受けて引き締まった長身が『』の形に歪み、鋼鉄ペストマスクからは苦悶の機械音声吹き出す。

「ミイ様……? ミイ様だ!」

「ミイ様がカワイイさんに突撃してミザリーさんを助けたぞ!!」

少々バイオレンスな夫婦のスキンシップは、他者の目には違う風に映ったらしい。

敗色濃厚で表情が冴えなかったメンバー達の活力が一気に蘇る。

「俺達も戦うぞ! 半数はミイ様とミザリーさんを、残りはマルクスさんを援護!!
メ
イプルが何だっつてんだ!! ミイ様に情けない姿を見せるな!!」

「「おおおおおっ!!」」

名前を連呼され、ようやく冷静さを取り戻すミイ。

もう少しダンナススキー粒子を摂取したいが——そうだ、メイプルを忘れてた。あれ、でもなんで旦那様までここにいるの?

「ミイ! 早くこちらへ!」

「……あ、ああ」

ミザリーに促され、後ろ髪を引かれる思いで彼女の隣まで移動する。

旦那様も本気で当てるつもりはなかったようで、自分の代わりに奮闘していた金髪のお姉さんにダメージらしいダメージは見受けられない。

強いて言えばハアフウと呼吸が荒く、頬はほんのり朱に染まり、肌も何故だかツヤツヤしていて妙に大人の色気を感じる。

ずっと走り回っていたせいだろう——よもや『聖女』ともあろう女性が、旦那様に撃たれ続けるアブノーマルな喜びで興奮したという訳ではあるまい。

「どうして旦那……カワイがいる？」

ミザリーに問う。

「メッセージを読んでないんですか？」

「……メイプルに襲われていると知って飛んできたからな」

嘘です。どうせ悪い報告ばかりだと思つて怖くて読めなかっただけです。ごめんなさい。

しかし結果的に、それが『炎帝ノ国』には良い方向に働いた。

メイプルだけでも挫折そうで半分投げ出していたのに、旦那様まで拠点を襲つているなどというメッセージをもし開封していたら、仰向けにされた亀よろしく、先ほどの両足じたばた状態のまま何時までも起き上がれずにいたに違いない。夫に会いたい一心

やはり犬化した可能性もあるが。

「改めて、戦況を聞かせてくれ」

「あんまりよろしくはないですね。メイプルが大槌使いの女の子を二人、そして彼を連れてここへ現れました。私が一人で彼の相手を引き受けて、マルクスと他のメンバーがメイプル達をどうにか食い止めてくれます」

「なるほど。のんびりはしてられないな」

鉄管弓を杖代わりに、長身がゆっくりと立ち上がる。

「ならばカワイには悪いが、さっさと終わらせるとしよう！ 【爆炎】!!」

ミイが覚えているスキルの中で威力が比較的低く、それでいながら着弾時のエフェクトが派手に見える【爆炎】を、ミザリー達に気付かれないよう微調整して旦那様の足元ギリギリに放つ。

第一回イベントでの初戦闘、ヨメカワイイの正体を知らずにいたあの時とは状況が異なる。

大事な人とギルドの両方を取るには、この方法しか咄嗟に思い浮かばなかった。

「皆さん、ミイに続いてください！ 【ホーリージャベリン】！」

「ふえっ!?! ちよっ!?!」

号令に従って【爆炎】の着弾地点に魔法が殺到し、さらなる爆発を引き起こす。

（あわわわつ、旦那様ごめんなさあい!!）

自分が炎と黒煙の目くらましを発生させて皆の視界を一時的に遮り、その隙に旦那様にか離脱してもらうつもりの「爆炎」だったのだが、ここでミザリーがまさかの追撃指示。

ギルドの事を考えての正しい判断だとしても、ミイは心の中でムンクの叫び。

煙幕が晴れた時、幸いにも愛する夫の姿はなかった。

独占しているというオーブも地面に散らばっておらず、死に戻っていないのは明らか。

「……逃げましたか」

「その、ようですね」

二重の意味で、ほつと安堵の息を吐く。

（あはああん、これ心臓に悪いよお……!）

肉親相手にナイフ投げのマジックをしている気分だ——いや、そっちの方が精神的に楽か。

きつとナイフが手からすつぽ抜けて、的とは逆の方向に飛んでいくだろうから。

スライムのようにドロドロに溶けたくなるのを堪え、ギルドマスターの顔でミザリーを見る。

「彼は、本気だったと思うか？」

「それはないかと。本当にそのつもりなら、今頃私は死に戻ってオーブも奪われた後ですよ」

「だろうな。我々の名は彼の掲示板絡みの襲撃リストにはないはずだ」

「その辺は全員に釘を刺しておきましたからね。情報戦も結構ですが、不用意な書き込みのせいであの『怪人』に焼き尽くされるなんて笑い話にもなりませんし」

「だとすると、ここに来た理由はメイプルへの義理立てか」

旦那様はメイプルとフレンド登録している。

ログインして最初に知り合ったのがメイプルだったそうだ。

人見知りの激しい自分など、「炎帝」を使えるようになって注目されるまでずっとソロで狩り続けていたのに、初日に他の女の子と友達になるだなんて。

若くて美人で聡明で完璧な自慢の奥さんへの配慮がほんの少しばかり足りないんじゃないかなとプンスカするものの、そもそもこのゲームを勧めたのはミイなので自業自得でもあった。

「カワイにメイプルと敵対する意思はなく、かと言って、我々の拠点への襲撃を制止できるだけの理由もない。私も彼とはフレンドになっただけはいるが、別にメイプルのフレンドではないからな」

あえてミザリーの一对一の誘いに乗り、適当にあしらって時間を潰す。要するに、何もしない。

それが旦那様を選んだ最善策。

「ともかくこれでメイプルとの戦いに専念できる！」

「マルクスが危険です、急ぎましょう！」

再編成した部隊を引き連れ、魔王相手に奮闘しているであろう同志の元に向かう。

さほど離れてない場所で、黒白のフードを被る仲間が地面に片膝をついているのが見えた。

「マルクス！」

「ミイ……ちよつと遅いよお……」

「すまない！ 皆よく耐えてくれた！」

謝罪と労いの言葉を投げ、彼らを背に庇うように真紅のマントを翻してメイプルと対峙する。

黒き鎧の魔王には、天使の光輪と純白の翼があった。

二匹の化け物を使役する彼女を中心に光り輝く円形の領域が展開され、ミザリーから聞いていた大槌使いの少女二人もその中にいる。

「メイプルの見た目もそうだが、大槌の二刀流とはな。『楓の木』のデタラメ具合には恐

れ入る」

「用心した方がいいよ……あの子達のおかげでメイプル用の罠も一発で破壊されちゃうから……」

「足の遅さから考えて、STRに極振りしたプレイヤーでしょうね」

「最強の盾と最強の矛、と言う訳か。相手にとつて不足なしだな」

メイプルが前進すれば防御結界も前進する。双子も後に続く。

あの凶悪な双子が範囲内から頑なに外に出ようとしないのは、破壊力が強力な反面、HPもVITも並のプレイヤー以下だからだ、とマルクスはこれまでの戦闘から自身の見解を述べる。

「それと、足元で光ってるあれ……攻撃無効じゃなくてダメージの肩代わりみたい。白い髪の子が罠を踏んだ時も、ノックバック効果とかメイプルに適応されてたみたいだし」

「その情報だけでも値千金だな」

決して無敵の存在ではないと分かっただけでもありがたい。

つまり、メイプルをどうにか移動させて防御結界の位置をずらせば双子への攻撃は通る。そして双子さえ拠点に叩き返せば、マルクスの罠でメイプルの動きも止まる。

「……方針は決まったな」

ミイはメイプルから視線を外し、後ろに居並ぶプレイヤー達に向き直ると、こう言った。

「この場合は私とミザリー、マルクスで対処する！ 他の者は拠点を一時放棄！ 戦いが終わるまで身を隠し、生き残る事にのみ注力せよ!!」

「そんな、ミイ様!?!」

「俺達だつて戦います!」

団員達は受け入れるはずもなく、手に手に武器を構え残留の意志を示す。

対してミイは首を横に振り、論ずように続ける。

「仮に諸君と共に戦い、多大な犠牲を払ってメイプルを撃退できたとしよう。だが、その見返りに我々は何を得る？ メイプルが持つオーブか？ 強大な敵を屠ったという達成感か？ 積み上がる同胞の屍に背を向けて私にそれを喜べと言うのか!?!」

一度の死が即リタイアに繋がりに、なおかつ『炎帝ノ国』と『楓の木』の戦闘の勝敗次第で全てが決まると言うのなら、ここでメイプルを排除するのも戦略の一つかも知れない。今回のイベントが多数のギルドが入り乱れる大戦でさえなければ。

しかも、どうにか倒せたところで、メイプルも自分達と同じ数だけ拠点で復活する。

VIT極振りであるが故に一回目のデスペナルティ——たかが常時ステータス5%減少の制約など痛くも痒くもないだろう。

「私達三人の命とオーブだけで彼女が満足すると言うのなら、いつそくれてやろうではないか」

「しかし……！」

今後『楓の木』以外のギルドとも戦う未来を思えば、貴重な回復アイテムを浪費し、メンバーを無駄に死亡させてギルド全体が弱体化する事だけは避けなければならない。

（つて言うか無理！ 死んでもオーブ守れとか命令するの無理い！）

そんな指令ならぬ死令を下すくらいなら、自分も含めた幹部級だけで戦うだけ戦って、さっさとメイプルにオーブを持って帰ってもらおう方がよっぽど心に優しい。

どうせ三時間経てばオーブは定位置に戻るし、減らされるポイントも今まで稼いだ分から見れば微々たるものだ。

「一時の激情に駆られて大義を忘れるな！ 我々の目指す夢、それは誇り高き『炎帝ノ国』の名をこの世界の頂に冠する事である!!」

誰かが録画してませんようにと心から祈るミイ。

もう完全に勢い任せで、自分でも何を口走っているのか分からなくなってきた。悪戯を叱られる子供が口八丁で乗り切ろうとしているのに近い。

「民なき国に意味などない！ だから生き延びろ！ 私と共に勝利を掴むその日まで

!!」

言葉のレパトリーが尽きたので誤魔化すようにメンバーに背を向け、恐る恐る反応を窺う。

一人、また一人と装備を鳴らして隊列を離れる気配。

やがてそれは大勢の足音に変わり、一分と経たず背後はしんと静まり返った。残されたのはミイと、苦笑を浮かべるミザリーとマルクスだけ。

「二人には、貧乏くじを引かせてしまったな」

「まだ負けると決まってませんよ。勝てばいいのです、勝てば」

「正直すつごく逃げたいけどさ……僕らがやらなきゃ誰がやるって事で……」

「……そうだな。これ以上ない大物、全力で当たらねば礼を失する」

二人の頼もしい言葉にミイは力強く頷き、杖の先端をメイプルに向ける。

「待たせてしまって申し訳ない！ 奇しくも三対三だ、いざ尋常に勝負といこうではないか!!」

メイプルも大盾と短刀を構え、応じる。

「どうぞ何処からでも！ マイ、ユイ、いくよ!」

「はい、メイプルさん!」

六つの影が、同時に動いた。

(どうかお手柔らかにいいつつ!!)



はい、負けました。そりやあもうズタボロのコテンパンに。

「ずるいつてえ！ あんなんずるいつてばあ！」

高いノックバック性能の「爆炎」と、ミザリーの貫通効果がある「光魔法」、メイブルの手足を束縛するマルクスの罠。

三人のコンビネーション自体は上手くいつていたと思う。

現にメイプルは防御結界で双子を守るのが難しいと判断したのか、彼女達を呼び出した巨大亀に乗せて上空高くに避難させた。

ならば、と効果の薄い直接攻撃から切り替え、隠していた奥の手、一日一回限定の「火炎牢」でじわじわと継続ダメージを与え続けたのだが——どうやらそれが禁断のスイッチを押したらしい。

現れたのは、剣と魔法のファンタジーどころか近未来SFから迷い込んだような重火器の塊。

「確かに天使みたいな翼は綺麗だったし羨ましかったけど！ 普通に銃弾とかレーザービームとかじゃんじゃか撃って、もうほとんどロボットだよね!? 世界観壊さないでよ

もうー！」

ではサイボーグになって攻撃の時に腕や足が変形するお宅の亭主は世界観を壊していないのかと問われると、うん、それはそれ、これはこれ。メカっぽい旦那様も超素敵。今重要なのは、メイプルがどれだけ滅茶苦茶であるかという事だ。

ミザリーもマルクスもやられ、ミイもMPが尽きた。

あの重武装は防御力を攻撃力に転換した苦肉の策だと思い、道連れ用の【自壊】まで使った。

なのに、それなのに。

「ピンピンしてるってどーゆーコトだよお!？」

拠点近くで生き返り、ふと見上げた空。

双子と一緒に亀を乗り回すメイプルを見た時は、開いた口が塞がらなかつた。

「ううううううううううくっ!」

オーブを奪われた悔しさも相まって、地面をぼかぼかと殴る。

しかし、何時までもこのままではいられない。

この素の自分を誰かに見られる前に、カリスマに満ちた仮面を被り直さなければ。

「ヒッヒッファー、ヒッヒッファー……」

深呼吸して気を落ち着かせ、軽く両頬を叩く。

私はミイ。私はギルドマスター。私は熱くてクールな女。旦那様超大好き。

「いよしー！」

「——おい」

「わひゃあつ!?!」

不意打ちとは卑怯なり!!

慌てて振り返ると旦那様が立っていた——って旦那様!?!

「おおお驚かせるな! 口から口が飛び出るかと思つたぞ!」

「それを言うなら心臓だろうが。エイリアンかお前は」

「あ……ううるさい! ちよつと言い間違えただけではないか! それで一体何の用だ

! 先刻の報復にでも来たか!?!」

「そこまで陰湿じゃねえよ。忘れ物を届けてやろうと思つただけだ」

「忘れ物だと?」

訝しげなミイに旦那様が投げて寄越したのは、紛れもなく『炎帝ノ国』のオーブ。

メイプル襲撃の直前まで自分達が保有していた他のギルドのオーブもある。

「……………は? え?」

「確かに渡したからな。もう置き忘れんなよ」

呆気に取られるミイを残し、ぶらぶらと右手を振って旦那様は立ち去った。

大量の疑問符で頭がいっぱい。余剰分が耳から噴き出して両目まで『?』になりそう
だ。

メイプルの手元にあるとばかり思っていた自軍オーブが、何故かミイの手の中にある
——これは旦那様が『炎帝ノ国』の、引いては自分の味方をしてくれたと考えて良いの
だろうか。

良いのだろう。良いに違いない。

「……………うへ」

どうしよう。

さつきまで心境は大嵐だったのに、今はまるで春の花畑だ。

オーブを両手で大事に包みながら、俯けた顔が無邪気な笑みで満たす。

「うへへへへへえ……………♪」

「ミイー！」

「わひゃあつ!？」

今度はちゃんと心臓が飛び出した。

045. 二日目：夕 怪人、死す

「パワーアックス!!」

「げはっ!」

両刃の大斧が唸りを上げ、周りの空気を巻き込みながらプレイヤーの身体を上下に両断する。

「うーしっ、一丁上がりだ」

最後の一人が光の粒子となって死に戻るのを見届けて、斧使いの男——『集う聖剣』のドラグは一仕事終えたとばかりに得物を肩に担いだ。

武器をツルハシに、鎧を作業着に置き換えても違和感のない、見るからにガテン系な風貌。

その恵まれた体軀にはまだまだ力があり余っているのか、戦いの直後でも息一つ切れ
ていない。

「あーあー……ったく、張り合いがねえ。また楽しむ前に終わっちゃった」

「なあに言ってるのさ馬鹿ドラグ。私のサポートがあるから好き勝手に暴れられるんで
しょうが」

幹部の紅一点、金髪をサイドテールにしたフレデリカが呆れたように言う。

岩に腰掛けて可愛らしく頬杖を突く少女は、半目でじつとりとドラグを睨む。

「そーれーにー、猪みたいに突っ込むなって何度も言ってるでしょー？ うっかり当てるようにタイミング計るの結構面倒なんだかんねー？」

「わーったわーった、次から気い付けるって」

「その台詞は聞き飽きましたあー」

口を尖らせてぶーぶーと不満を垂れるフレデリカと、頭を掻いて謝罪するドラグ。

そんな二人を羨望と尊敬と少しばかりの嫉妬混じりの目で見つめるギルドメンバー達。

「にしても、襲撃の回数もかなり減ってきたな。いよいよ暇になってきたぜ」

「みいーんな私達で返り討ちにしちゃってるからにえ。無茶してデス数増やすより、別のギルドを狙った方がいいって考えたんじゃないの？」

ドラグの言う通り、攻め込まれる頻度自体は減少傾向にある。

それ自体はランキング上位で強豪と目されるどのギルドにも当てはまる事だが、『炎帝ノ国』がメイプルに狙われた具体例からも分かるように、回数が減ったという事はつまり、襲ってくるのは玉碎覚悟の無謀者か、『集う聖剣』の戦力を知りながらあえて挑む百戦錬磨の実力者ばかりになる現実を意味していた。

「ペインも明日にでも幹部全員で攻め込むつもりだとか言ってたし、それまでは我慢か。頼まれた仕事はきっちりこなさねえとな」

「どんなのが相手でも、ペイン一人で十分な気がするんだけどねー」

今回侵攻してきた三十人は、ドラグにとつて残念な事に前者だった。

初日には六十人以上の大所帯が押し寄せた時もあったので、その半数では少ないように思える。

けれど、普通のプレイヤーがそれだけの人数を同時に相手取るのは不可能に近い。

その不可能をドラグとフレデリカは部隊の手も借りずに容易くやってのけてみせる。

適材適所——ギルドマスターのペインから防衛を一手に任された二人は、魔法で刺し、力で殺す見事なコンビネーションを発揮して今日までオーブを守り抜いてきたのだ。

「にしても、ドレッドが死に戻った時は驚いたぜ。お前も危うく死にかけてんだっけか？」

「うぐ……………蒸し返す？ その話蒸し返しちゃう!？」

フレデリカは辛酸を舐めさせられた記憶が蘇ったのか、苦々しい表情になる。

サリーをあと一步のところまで追い詰めたのに、突然の閃光で混乱した隙にメイプルの助太刀を許してしまい、同行させた部隊のほとんどを毒と砲撃の犠牲にして。

さらにはメイプル不在の『楓の木』急襲を託して送ったメッセージ——あの時は最良の判断だと思ったそれが、直接的ではないにしろドレッド敗北の原因となってしまうた。

ドレッドを倒したのはメイプルだが、数体のゴブリンナイトと宙を泳ぐ魚群に邪魔されなければ彼は門前払いを食らわず、『楓の木』のオーブを持ち帰る事もできたはずだ。閃光弾もゴブリンも、誰が放ったのかは話し合うまでもなく結論が出た。

あのペインをして厄介と言わしめる、メイプルと同列のアフロ怪人。

「うー……思い出したら腹立ってきた！ ドラグ、〔多重炎弾〕撃つからちよつと的になつてー！」

「なる訳ねえだろ!?!」

まあ、的になれ云々は冗談だとしても。

ドレッドの死亡の一件で、ヨメカワイイの危険性を再確認させられたのは事実。

加えて、『集う聖剣』には怪人と戦わなければならない理由が、トツプクラスのギルドだろうとお構いなしに狙われてしまう動機がある。

「例の書き込み……そんなんで本当に奴が来ると思うか?」

「心配性のリーダーはそう確信してるみたいだけど? 現にあちこちで暴れてるみたいだし」

ペインほどのプレイヤーが事前に情報を集めていないはずがなく、これまで怪人の獲物となったギルドの共通点もその慧眼で早々に看破していた。

同時にギルドメンバーの書き込みが数件あった事も彼の口から明かされたが、無用な仲間割れや混乱を防ぐため、それを知るのは幹部クラスの限られたプレイヤーだけだ。

ドラグにしてもフレデリカにしても犯人捜しや責任追及など性に合わず、怪人が来たなら来たで倒してしまえば何も問題ないのだと単純簡潔に考える。

「——敵襲！ 敵襲！」

そんな二人に、監視部隊から新たな敵出現の報告が入った。

「おっと、今日は千客万来だな」

「いつそがしいなあー。今度はどんな人達ー？」

期待に目を輝かせて獐猛に笑うドラグと、億劫そうに腰を上げるフレデリカ。

強者にのみ許された慢心とも言える自然体の振る舞い。

しかしその余裕も、次の瞬間には綺麗に消え去る事になる。

「ゴ……ゴブリン、ゴブリンの大群です！ 二百、いや三百はいる！ きつとカワイだ畜生！」

二人は顔を見合わせた。

そしてすぐさま最前線に走ると、報告通り、平地の先から土煙を上げて迫るモンズ

ターの軍勢が確認できた——地面を舐めるように進む光景は、さながら水面を波立たせて這い寄る緑の沼か。

「噂をすりやあ影だな」

「そだね。はいはい落ち着いてー。群れにホブやシャーマン、チャンピオンはいるー？」
「えっ……あ！ いや、いません！ ただのゴブリンだけです！」

魔法で強化するでも上位種を混成するでもなく、最下級で揃えて闇雲に進軍させている。

向こうも物量だけで押し切れるなどと思つてはいないだろう。とするなら、ああも悪目立ちする小鬼の大群を真正面から使い捨てにする意味とは。

「ペインの想定通りってどこか。おうお前ら、ありやただの囷だ！ カワイを見つけろ！」

「けど、あの中にいるようには……！」

「陸したじゃねえ、空うへだ！ あの野郎は飛べるって知ってんだろが！」

そう叫ぶドラグを、頭上から落ちる影が包んだ。

はっ、と上に向けた瞳に映り込む鉄パイプの振り下ろし。

「うおっ!!？」

「ドラグ!？」

甲高い金属音。

咄嗟に掲げた大斧で防ぎ、ドラグはコートのカギをはためかせる侵入者を歯を食い縛って睨む。

スチールウール製の鳥の巣のような髪型をした怪人もまた、ペストマスクのレンズに鈍い赤光を湛えながら、完全に虚を突いたはずの一撃を受け止めた斧使いを見つめ返していた。

機械仕掛けの両眼が、カメラの絞りのように鋭く細まる。

「オ——オオラー！」

STRで勝るドラグが徐々に押し返し、大斧と鉄管弓、二つの長軀が鏝迫り合いとなる。

「テメエ……人様のギルドに殴り込んでいて挨拶もなしかコラー！」

「おや、ちゃんと殴打したつもりだが？」

慌てふためいたのは他のメンバー達だ。

「ドラグさん、俺達も加勢します!!」

「馬鹿、こつち来んじゃねえ!!」

駆け寄ろうとした仲間を、ドラグは大声で押し留める。

この怪人相手に多人数で挑んではいけない。

戦う人数を増やせばその分だけの増える事になり、他人に「ヒール」や回復アイテムを使って自身のHPとMPを増大させる化け物を助長する結果になってしまう。

とにかく少数精鋭で、取り返しがつかなくなる前に体力を削り切らなければ。

「こいつは俺とフレデリカだけでやる！ お前らはとにかくゴブリン共を片付けろ！」
そうしている間に岩場に囲まれた拠点までゴブリンの沼が到達し、あちこちで戦闘が始まった。

AGIが高い者は大半が偵察と攻撃部隊に割り振られて不在だが、その反面、この拠点は耐久力や回復スキルに長けた人員で防衛網が構築されている。数の上では劣つても、今さらゴブリン相手に苦戦するプレイヤーは『集う聖剣』にはいない。

そう、ゴブリンが相手であれば。

この場で最も命の危機に瀕しているのは、他ならぬドラグとフレデリカなのだ。

「バーンアックス！」

炎を纏わせた大斧を振るう。

対して、鏡写しの軌道で鉄管弓が迎え撃つ。

パワーファイターの補正付きの一撃と、スキルに頼らない弓使いのフルスイング——
威力の差は歴然であり、ドラグの持つ「ノックバック付与」の効果で怪人は派手に弾き飛ばされる。

それでも片手で軽やかに受け身を取り、すぐに体勢を立て直したのは流石と言ったところか。

「インフェルノオーラ」

怪人の胸部が左右に開き、青く輝くコアから超高温エネルギーのドームが広がる。

「多重水壁！」

的確、そして迅速なフレデリカの援護。

周囲の景色を歪曲させる熱波と無数に張り巡らせた水流の障壁が衝突し、焼き尽くされる寸前のドラグがフレデリカの隣まで後退できるだけの時間をどうにか稼ぐ。言い換えれば、ドラグでさえ素直に距離を取るしかないほど間一髪の状態だった。

「わかりい、助かった！」

「お礼は後で！ 【多重水弾】！」

「【鉄蝗団】」

牽制のために水弾を放つも、鋼鉄の肉体を持つ弾丸蝗バレットホッパーで瞬く間に食い荒らされる。

先立って敵情視察時に戦ったドレッドから話は聞いていたが、腕が機関銃に変形するなどという荒唐無稽な情報は到底信じられなかった。実際に見てもまだ自分の目を疑わずにはいられない。

ペインと言いいいメイプルと言いいいヨメカワイイと言いいい、一体どんなスキルを取ればああも

人外じみた異常な戦闘力を得られるのだろうか。

「一気に畳み掛けるよ！」

「おうよ！ 【地割れ】！」

「【多重炎弾】！」

ドラグが大地に生み出した亀裂に足を取られ、怪人が一瞬バランスを崩す。

その隙を逃さず、フレデリカが杖を回転させて魔法陣から大量の炎弾を撃ち放ち、黒衣の長身に次々に浴びせていく。

この程度では、また足りない。

通常の魔法使い十数人分に匹敵する火力でも、怪人を倒すにはまだ足りない。

煙の中に見え隠れする影と赤い眼光がそれを物語っている。

「……チツ、タフな野郎だぜ」

「でも見て、HPは減ってる。攻撃が効いてない訳じゃない」

炎弾を完璧に避ける事はできず、当たれば相応にダメージも入る。

メイプルのような防御特化でもサリーのような回避特化でもない怪人は、桁外れな数値のHPでお茶を濁し、あたかも不死身であるかの如く偽装しているだけだ。

どんなスキルを持っていても、不死など実現不可能。

あの男として自分達と同じ条件の、少しばかり運に恵まれている一人のプレイヤーに過

ぎない事をドラグとフレデリカは再認識した。

「攻撃ぶち込み続けりや倒せる。それだけ分かりや十分だ！　【バーサーク】【重突進】！」

「だあから猪みたいに突っ込まないでつてば！　【多重障壁】！」

全身をエフェクトで輝かせ、大斧を振り被つて猛進するドラグ。

「【マグメイザー】」

怪人が右足を力強く踏み締め、地中深くのマグマを間欠泉のように呼び起こす。

橙より黄金に近い色彩の溶融物が大小の飛沫となつて降り注ぎ、【地割れ】のお返しとばかりに正面の地表を塗り替えてドラグの進路を塞ぐ。

「ハッ！　んなもんで止まるかよお！」

だがドラグには、今ここで刺し違えてでも怪人を倒すという覚悟があつた。

フレデリカが張つた【多重障壁】の恩恵で溶岩の雨を防ぎつつ、両足から伝わる地形ダメージを無視して煮え滾る大地を駆け抜け、一度は後退させられた雪辱を果たすために標的へと肉薄する。

「【多重光砲】！」

これ以上ないベストなタイミングで噛み合つた二人の攻撃が怪人を狙う。

「……………【サイクロンカッター】！」

一瞬の逡巡の後、怪人はレーザーの処理を優先した。

生み出したのは真円を描く緑の光——【風魔法】のエフェクトが渦を巻く巨大な丸鋸を、自分の両腕と連動させた遠隔操作で投擲。四枚の凶器が【多重光砲】を切り裂き相殺するが、そのために割かなければならなかった数秒間が致命的となる。

「もらったあつ!!」

怪人は危険地帯を踏破したドラグの間合いの中にあつた。

振り抜いた斧刃が、長身の左腰から右肩へダメージエフェクトを刻み込む。

「ぐっ……!!」

斬撃を受けて機械の身体が仰け反り、この戦闘で初めて怪人の口から苦悶の音が零れる。

その事を喜んでばかりもいられない。

溶岩に膝上まで浸かり続けるドラグのHPも限界に近い。彼が倒れて鉄壁のコンビネーションが崩壊すれば、形勢逆転を許し、奮闘の全てが水泡に帰してしまう。

ここからは時間との戦いでもあつた。

「フレデリカ! このまま削り切るぞ!」

「分かつてる! 【多重石弾】!」

「【グランドランス】!」

先ほどの【鉄蝗団】への意趣返しでもある石の弾丸の集中砲火と、【バーサーク】の効力により大技発動後の硬直を打ち消したドラグの石槍が全身を穿つ。

エフェクトと共に部品らしき金属が飛び散り、怪人のHPが残り一割を切った。

肉の盾を呼ぼうにもゴブリンの群れは既に全滅し、戦意を失ったのか、黒衣の影法師は反撃する素振りも見せず棒立ちで攻撃を受け続ける。

「諦めたってか!? 正直がっかりだぜオイ!!」

「やっちゃえドラグー!!」

相棒や、戦いを固唾を飲んで見守っていた他のメンバー達からの大声援を背に浴びて、ドラグは大斧を握る両手に渾身の力を送る。

「【パワーアックス】!!」

横薙ぎの一撃が怪人の胸を切り裂き、ついにその膨大なHPを削り尽くした。

怪人は伐採された樹木のように前方に倒れ、自らが生み出した溶岩の中に沈んでいく。

ドラグが大斧を高々と掲げると、次の瞬間、割れんばかりの喝采が拠点に轟いた。

「つしやあつ! ドラグさんが勝ったあ!」

「当たり前だろ! ドラグさんがカワイに負けるはずねえって!」

「ちよつとそこー! 私も頑張ってたでしょうがー!」

おまけ扱いされたフレデリカの抗議も、喜びの声に負けて消し飛ばされて届かない。ドラグが笑う。

「美味しいトコ奪っちゃったか？」

「べつにいいー？ いいですけどねえー？」

フレデリカはサイドテールをぴこぴこ上下させて不満を露わにする。

彼女の支援なくして今回の勝利はなく、ドラグ自身そう思っている——もし誰かが心ない言葉を口にしようものなら、それがギルドメンバーだろうと大斧で殴り飛ばす程度にはフレデリカの力を認めているのだ。

「どーでもいいからさっさとこっち来れば？ そこにいたら本気で死ぬよー？」

「おっと、そうだったそうだった！」

溶岩による「炎上」の継続ダメージはまだ続いている。

慌てて無事な地面まで走り、HPの減少が止まった事を確認してドラグは大きく息を吐く。

ようやく人心地ついた。あと十秒長くあの局所的な地獄に留まっていたら、怪人が倒れた直後に自分も力尽きていただろう。

「あ、やべえ。カワイが持ってたオーブ回収すんの忘れてた」

「急がなくても平気じゃないの？ 溶岩の中じゃ他の誰も横取りはできないだろうし、

時間経過で消えるまで、待って……」

そこでフレデリカの口が、いや、全身が固まった。

驚愕に目を見開き、視線を動かさそうとしない。

ドラグも、絶句するフレデリカの様子から、自分が背を向けた先で何が起きているのか——何が起き上がってしまったのか薄々感付いていた。

ドレッドほどではないにしても、こうも絶え間なく直感が警告を発していれば嫌でも察する。

誰もが押し黙り、重苦しい静寂に包まれる中、振り返る。

「なるほど、こーういう風になるのか。何事も試してみるもんだな」

HPが0になったはずの怪人が。

戦いに敗れ、己の拠点に還されたはずのヨメカワイイが。

幽然と立ち、コートから垂れる溶岩をまるで雨滴か何かのように手で払っていた。

「……本当に、不死身かよ」

「それでもないさ。ちゃんと種も仕掛けもある。教えてやるほど俺も親切じゃないがな」

状況は限りなく最悪に近い。

後方で援護していたフレデリカはともかく、ドラグは満身創痍でありMPも尽きる寸

前だ。

だからと言ってドラグが再び戦える状態になるまで時を稼ぐにしても、気圧されてしまっている防衛部隊では得体の知れないスキルで蘇った怪人の相手は難しい。

【灼竜】
シウコートル

アフロが赤熱化し、噴火を思わせる勢いで単眼双角の魔竜が放たれる。

「やばっ!?!」【多重障壁】! 【多重水壁】!」

二段構えの防壁で【灼竜】シウコートルを食い止めた。だがそれも一時的なものにしかならず、巨大な顎にぞろりと生え揃った牙で餡細工のように噛み砕かれてしまう。

「嘘でしょー!?!」

威力が衰えたようには見えない規格外の溶岩魔法が迫る。

得意の防御手段が破られた以上、フレデリカにはもう【灼竜】シウコートルを打ち消す術はなく、ドラグの大きな身体の陰に隠れてきやあきやあ泣き喚くしかない。

【退魔ノ聖剣】!!」

そんな万事休すの二人を救ったのは、神々しい光を伴う一筋の斬撃だった。

金の装飾が映える純白の鎧と青のマント、【灼竜】シウコートルを両断した白銀の長剣に荘厳な盾。

名実共に最強プレイヤーと謳われる金髪碧眼の聖騎士——『集う聖剣』が誇るギルド

マスターが仲間を救うべく帰還したのだ。



「ペインー!」

「遅かったじゃねえか、大将」

「それでも急いで戻ってきたつもりだよ」

拠点を守り抜いた仲間達に労いの微笑みを投げるペイン。

悪運に恵まれてるだけに過ぎない自分とは異なり、正統派と呼ぶべきプレイングで最強の座に君臨する敵を前にして、HPが一度0になったヨメカワイイの思考は妙に冷めていた。

「三対一って事か?」

「いや、四対一だけ」

声はヨメカワイイのさらに後方から聞こえた。

影の如く気配を消し、刃が届く至近距離まで潜り込んでいたドレッド——両手に抜き身の短剣を握り締め、ヨメカワイイが指一本でも動かせば即座に首を掻き切るつもりだろう。

背後を取った時点でそうしなかったのは、彼に気付いたペインが視線で制止したから

だ。

そのまま戦闘に発展するかと思いきや、何故かペインは剣を一振りして鞘に納めると、斧使いと魔法使いのコンビに向き直る。

「それで、ドラグ、フレデリカ。彼は合格と判断して問題はないかな？」

「ああ、俺に異論はねえ」

「うー……私も文句ない。でも私はまだ本気じゃなかったんだからね!!? 半分くらいだしー」

「いやそこは本気出せよ」

「うっさいドラグ！」

話が見えない。

掲示板の書き込みで売られた喧嘩を安価で買い、ついでに発動する機会がなかった【修羅道】の実験も兼ねて『集う聖剣』に攻め込んでみただけなのに合格だの何だのと。フレデリカが全力ではなかった云々は……まあ、油断してくれていると言い換えればその分だけ戦いが楽になって好都合なので、侮られたという怒りはない。

「試すような真似をした事を許してくれ。二人が君の力を見たいと言って聞かなくてね」

「だってだって、私達と同じくらい強くなきゃ意味ないでしょー!？」

「だからよお、実力は俺が保証するって何度も言ったろうが」
「ドレッドもうつさい！」

ぎゃんぎゃん噛み付くフレデリカと、面倒そうに片手であしらうドレッド。

ドラグも呆れ顔になりながら、しかし止めようともせずポジションで回復している。
「騒がしい連中だなあ」

「ははは、確かに。けど、自慢の仲間だ」

喧嘩するほど仲が良い、とはこの事か。

牧歌的で和気藹々としたメイプル達とは違う、これも一つのギルドの形なのだろう。

「……で、剣を引いたって事は、戦う意思はないと受け取っていいんだな？」

「構わない。少なくとも、今この場で一戦交えるつもりはないよ」

「そうかい。ならこつちも隠し事はなしにしなきゃフェアじゃないな」

ヨメカワイイが右手を上げると、周囲の地面や岩場の一部が本来の形を取り戻す。

尖った耳に、子供ほどの体躯と、それに見合った長さの手足。

緑色だった表皮に【擬態】の効果で砂粒や小石を貼り付かせて保護色とし、主人の命令に従ってじつと息を殺して溶け込んでいた小鬼達。

「ゴブリン……!?!」

「まだこんなにいやがったのか」

「大軍は囷にこそ使うべし、だろ？」

ヨメカワイイにとつて最重要だったのは、【修羅道】の発動に必要な数のゴブリンを如何にして敵拠点の中に配置するかであり、そのために自分自身さえ囷にした。

それはともかく、「そろそろ本題に入ってくれ」とペインを促すと、彼は眉目秀麗な面持ちから笑みを消し、気迫と風格漂う剣士の顔で口を開いた。

「まずは君の名前を騙った事、ギルドマスターとして改めて謝罪する——そして、どうかその力を貸してほしい。あの『楓の木』に、いやメイプルに勝利するために!!」



その数時間後。

怪人に強奪された全てのオーブが一斉に元の場所へと戻され、大量のポイントを得た『闇鍋』が暫定ランキングに台頭する事となった。

046. 二日目：深夜 怪物達の宴

朧月の光が複数の人影を頼りなく照らす。

ペイン、ドレット、ドラグ、フレデリカ——戦の準備を万端に整えた『集う聖剣』の主力四人に加えて、暗闇を切り抜いたように月下に佇むヨメカワイイの計五名。

遊撃隊と呼ぶには過剰で敵対者が震え上がりそうな戦力も、これから攻め入るギルドの危険度を考えれば、ようやく互角以上に戦えるという最低条件を満たしただけに過ぎない。

それほど『楓の木』の強さは侮れず、未知数なのだ。

「助力感謝する。実のところ、受けてもらえるかどうか半分賭けのつもりだったんだ」「賭けに勝ったかどうかは、まだ分からないけどな」

戦う相手が『楓の木』だとペインから聞かされた時、ヨメカワイイは驚かず、むしろ納得した。

抜きん出た実力者揃いの『集う聖剣』が苦戦を想定し、部外者である自分に助太刀を頼むようなラスボス級の相手など、それこそメイプル達か『炎帝ノ国』のどちらかだろう。

無論、ペイン達がもし『炎帝ノ国』をターゲットにしようものなら、今度こそ嫁の敵となる前に刺し違えてでもきっちり五回死亡させるつもりでいた。

可愛い嫁とかお馬鹿な嫁とか頑張る嫁とか怖がる嫁とか、何もないところで転ぶ嫁とか間違えて冷水のシャワーを被って叫ぶ嫁とか、あとは気が向いたら元カノとか——何にせよヨメカワイイの優先順位は愛妻に準拠しており、メイプルやサリーには悪いが、嫁のギルドに予先が向かないよう見張る意味でもペイン達に同行する必要があった。

(勝敗に関係なくこいつらが戦いに満足すればそれで良し。でなけりや……)

勝てた勢い任せにしろ、勝てなかつた腹いせにしろ、『炎帝ノ国』とも一戦交える決定がされた瞬間にヨメカワイイの裏切りも確定する。

「けどよカワイ、メイプルとも知り合いなんだろ？俺らと一緒に来て平気なのかよ？」
「……別に？戦う理由がないのと同じくらい、戦わない理由もないってだけだ」

それを聞いてドラグとドレッドが笑う。

「薄情な野郎だな」

「うるせえ、ほつとけ。情がどうこうって話なら、か弱い女の子が作ったギルドをこれから本気で襲おうとしてるお前らだつて非情だろうが」

「ハッ、違えねえや」

女の子、という単語に敏感に反応したのは紅一点のフレデリカだ。

彼女は片手を挙げ、小柄な身体をぴよんぴよん弾ませながら自身の存在をアピールする。

「ちよいとお兄さん方、ここにもか弱い女の子が一人いるんですけどー?」

「か弱い? あんだけバカスカ魔法ぶつ放すお前がか?」

「何だとコラー!」

現在地は敵拠点の真正面。

せっかく雇われ者のヨメカワイイと面倒を嫌うドレッドが余計な騒ぎを起こすまいとコメントを控えたのに、フレデリカとコンビを組む事が多いドラグがやはり空気を読まなかった。

あるいは彼なりのユーモアで緊張を解こうとしたのだろうが、案の定フレデリカが嘯み付かれて大型犬と子猫のようなじゃれ合いに発展する。

「そんな事より、そろそろ時間だ。皆、覚悟はいいかい?」

「そんな事より!?!」

仲裁するのも諦めたのか、ペインのあしらい方も何気に酷い。

ともあれ、リーダーが言うように襲撃予定の時刻——日付が変わるまで残り十分となった。

「行こう」

ペインを先頭に、五人は洞窟に足を踏み入れる。

ぼつかりと口を開けた穴はさながら狡猾な食虫植物に近い。甘い餌目^{オーブ}当ての強欲で哀れな羽虫がどれだけこの地獄に誘い込まれたのやら。

「できれば、万全の状態のメイプルと戦いたかったが……」

「しつかたねえだろ？ それじゃうちの連中が納得しなかつたんだからよお」

正直、ペイン達が『楓の木』と戦って得られるメリットはない。

メイプル達が集めたオーブの横取りという表面上の理由こそあるが、これまでの獲得ポイントが明らかに『集う聖剣』の方が勝る。ただでさえヨメカワイイが手放したオーブが戻って獲物となる各ギルドが息を吹き返した現状で、死のリスクを負う必要があるのかと言われたら論破は難しい。

それでも強敵に挑む道を選ぶのは、彼らが生粋の戦闘職プレイヤーだからだ。

スライムばかりではなくりゅーおうやゾーと戦いたいという気持ちは共感できる。

「ちよい待ち」

通路を進む一行を、ヨメカワイイが機械音声で止めた。

【反響】

超音波が洞窟内を透過して、侵入者用の物騒な仕掛けをあぶり出す。

イズが設置したらしい地雷原と、壁にはカナデのものと思しき魔法陣。

流石にどんなタイプなのかまでは判別できないが、知らずに通ろうとすれば、家主と出会う前に自軍拠点に叩き返されるだろう。

「罨か？」

「そのようだな。さて、どうする？」

ペインは顎に手をやって数秒考えた後、悪戯小僧のような笑みを浮かべた。

「呼び鈴があるのなら、まずは鳴らすのがマナーだろうね」

「了解。【装填】【火山弾】——【スプレッドショット】」

溶岩の熱を纏う拡散矢が洞窟内を蹂躪し、罨を次々に誘爆させていく。

煙が充満する坑内を駆け抜けて、五人は奥の広間へと到達した。

侵入者の一党の中にヨメカワイイの姿を認めたメイプルと双子が驚愕で目を見張り、その一方である程度予想していたらしいサリーやクロムなどは油断なく武器を構えてこちらの動きを待つ。

「気を抜かないでメイプル。今のカワイさんは敵だよ！」

「……うん、分かってる！」

親友の一言で戦う者の顔になるメイプル。

性格も戦法もカパーし合う、本当に良いコンビだと思う。

そんな二人には申し訳ないが、残念ながら今回自分は雇われ者の端役であり、主役は

剣を抜いて一步前に出た勇者のような色男の方だ。

「初めましてかな、メイプル。勝てるかと判断して……倒しに来たよ」

「私、負けませんから！」

宣戦布告と返答の一声が、開戦の合図となった。

散開する両陣営。

「【身捧ぐ慈愛】！ 【捕食者】！」

まずはメイプルが天使の翼を生やして仲間を守り、二匹の化け物を召喚する。

しかし一見無敵に思えるその防御領域の弱点も、昼間に繰り広げられた『炎帝ノ国』との一戦を陰から観察していた『集う聖剣』の偵察部隊によって看破されていた。

「【土波】！」

ドラグが地面を抉り返して土石の散弾を放つ。

標的はマイとユイ。

双子への攻撃は【身捧ぐ慈愛】の効果によって自動的にメイプルが引き受ける事となり、同時にドラグの【ノックバック付与】をも肩代わりして後ろへと押し飛ばされてしまう。

メイプルを基点にする防御領域の範囲も目論み通りに後退し、最前線で防御手段を失った双子へ間髪入れず迫るドラグとドレッドの追撃。

「カバームーブ！」 「カバー！」

骸骨が彫り込まれた大盾が、二人の攻撃を受け止める。

「クロムさん！」

「すまん、もう一人は頼む！」

「はい、分かりました！」

ドラグの大斧とクロムの大盾が火花を散らし、マイとユイの前には鈍重な超攻撃力の封殺を担うドレッドが立つ。後衛のフレデリカ、そしてカナデとイズは、得意の魔法とアイテムで敵の妨害を互いに相殺しながら仲間のサポートに全力を注ぐ。

これで『楓の木』で自由に動けるのは三人となった。

ペインは言うまでもなくメイプルの大將首狙いだが、その進路にサリーとカスミが立ち塞がる。

——となれば。

「カワイ、任せた！」

「はいよ。まあ頑張りな」

白刃を鉄管弓で受け止めてペインを先に行かせるヨメカワイイ。

メイプルもサリーも、レベルは自分と同じく30から高くして40そこそこのはず——

二人が手強く底知れないと言っても、倍近いレベルがあり基本ステータスでも勝ってい

るペインならば、同時に相手取ってもすぐにやられたりはしないだろう。

改めて、カスミを見据える。

「第二回イベント以来か？」

「そうだな。あの時のようにはいかんぞ！」

ではお手並み拝見。

カスミは堅実な太刀筋で愛刀を振るう——「刀術」に内包された剣技を乱発しないのは、動作が決まっついていて避けられた時に隙が生じやすいからか。

一撃一撃がサリより重く、そのくせマイやユイより素早い。

周りのメンバーが強烈過ぎて印象が薄くなりがちだが、『楓の木』の中で一番バランスが取れたステータスとランカーとしての実力は侮っていいものではない。

右手に握った鉄管弓で刀を捌きつつ、左腕で顔を隠す。

カスミには頭部をガードしたように見えるだろうが、それは違う。

「【ヒートチョップ】」

ヨメカワイイが【機械化^{フルメタル}】を手に入れたのはイベントが始まる直前。

故にカスミはこの身体に仕込まれたギミックの数々を知らないのだ。

「——っ!?! 【六ノ太刀・焔】！」

赤熱化した鎌刃と炎を纏う刀身が交差する。

腕から伸びた凶器を弾いたカスミの反射神経は見事の一言。けれど、焦りと呆れが入り混じった彼女の表情からして、どうやらサプライズには成功したらしい。

「話には聞いていたが、いよいよ人間を辞めたか……」

「そいつは、メイプルにも言つてやるべきだろ。【ヒール】！」

斬り合いの片手間に、ダメージを受けているドラグを癒す。

「本当に芸達者な奴だな！」

「ついでに歌つて踊ろうか？」

「見てみたい気もするが今は遠慮しよう！」

「【パラライズレーザー】！」

「おっと！」

カナデの魔法が直撃する。しかしヨメカワイイの歯車の動きは止まらない。

まだ初心者だった時分にメイプルのうっかりで手に入れた【麻痺耐性小】があり、さらに生身を捨てた金属製のボディに単純な毒や麻痺など効くものか。

カナデの周囲をふわふわと浮かぶ、本が入った無数の箱を観察する。

「……魔法を本の形でストックしてるのか。便利なスキルだな」

けれどストックしているのなら、使えば使うほど残数が少なくなるのは自明の理。

今使った麻痺魔法の本が消えて一冊分の空気が生まれたのがその証拠だ。

「カナデ、イズ、こっちは平気だ！　メイプル達の援護を！」

「分かったわ！」

「了解だよ！」

本気で勝ちに来ている『集う聖剣』のメンバー達に比べ、足止め要員に過ぎないヨメカワイイとカスミの戦闘は、むしろ相手の一挙手一投足を窺う武士のように静かなものであった。

本命同士の戦闘は激化の一途を辿っていく。

「【飛撃】！」

「食らわねーよ」

「メイプルのところには行かせない！」

「押し通る！」

マイとユイの大槌から飛ぶ一撃必殺の衝撃波を苦もなく躲すドレット。

ペインを先に行かせまいと、ヒットアンドアウェイで斬撃を浴びせるサリー。

「【多重炎弾】！」

「【パワーアックス】！」

「させるか！　【カバー】！」

現在最も忙しく、八面六臂の活躍しているのはクロムだろう。

人並み外れた回復力と打たれ強さでもって、大斧を振り回すドラグの相手をしつつフレデリカの魔法やドレッドの双剣からも双子を守る立ち回りで鈍と大盾を操っているのだから。

「よそ見とは余裕じゃないか！」

ヨメカワイイが駆使する左右の熱刃と鉄管弓を、カスミは一振りの刀で捌き続け、間隙を縫って斬撃や刺突を返してくる——以前戦った時より鋭さは格段に増しており、**【機械化^{フルメタル}】**の隠し補正でステータスが向上していなければヨメカワイイも防戦一方になっていたところだ。

「ぬー……私だって！ 【全武装展開】！」

メイプルも仲間達の奮闘を黙って傍観し続けているはずがなかった。

無用の長物となった**【身捧ぐ慈愛】**を解除して、ヨメカワイイのそれより数段凶悪な近代武装をハリネズミのように全身に生成。大小合わせて数十を超える砲口を前面に集中させる。

飛び散って地面に溜まった毒液など、副次的な現象でなければパーティーメンバー同士の攻撃でダメージは発生しない。

つまるところ、サリー達はメイプルの砲撃に巻き込まれても傷一つ負う事はなく、壊滅するのはペイン達とヨメカワイイだけとなる。

「やばっ!?」【多重障——】

「させないわよ!」

「うきやあっ!?!」

「フレデリカ!?!」

その危険性を知るフレデリカが慌てて防御魔法を発動しようとするも、イズが【投擲】で放った爆弾がクリーンヒットして中断させられてしまう。

後衛の支援が間に合わない以上、雇い主を守る役目はヨメカワイイに引き継がれる。

「やれやれ……ペイン、下がれ!」

「どうするつもりだ!?!」

「【攻撃開始】!」

可憐な少女を包む幾多の砲口に光が集まり、レーザーだか荷電粒子砲だかが発射された。

ペインの盾となるべく彼とサリーの間に長身をぬるりと滑り込ませたヨメカワイイは、殺到する熱光線の奔流に——メイプルに向かって左腕を向ける。

「【屍機神】!」

それは【機械化】フルメタルと同時に手に入れたスキルだった。

メイプルが戦って継承した【機械神】と因縁がある廃棄物達。その恨みと嘆きが左手

首の包帯を突き破り、球体関節を無数に持つ第三の腕を作り出す。

ネジに釘、ブリキの切片など、残虐極まる鉤爪を五指に備えた機械腕が伸びてメイプルの右足を掴むのとほぼ同時に、無慈悲な砲撃がヨメカワイイを飲み込んだ。

轟音が洞窟全体を揺らす。

「……………ふうっ!!」

ひとしきり撃ち込んだメイプルは、ガシヤン、と武装を鳴らして息を吐いた。

「メイプル油断するな！ カワイもペインもまだ生きてる！」

カスミが叫ぶ。

「……………なるほど、V-I-T極振りつてのはこんな感じなのか。そりゃ無敵にもなるわな」

黒煙の中、ヨメカワイイは健在だった。

第三の腕はメイプルの右足を掴んだままであり、「機械神」の圧倒的火力を正面から受けたにも関わらず、桁外れのHPバーに減少はない。

メイプルに近い位置で、さらに「羊喰らい^{シープイーター}」で体積を増やしたアフロの壁で拡散する前に砲撃を防いだため、後方のドラグ達も無事だ。

「おいおい、あれをまともに食らって無傷って、丸つきりメイプルじゃねーか……………」

「メイプル、その腕を切り落として！ 多分それが原因！」

「うん！」

サリーの指示に従い、メイプルが剣と化した左腕で【屍機神】^{シキガミ}を両断する。あくまでスキルの産物であるため、これもヨメカワイイはノーダメージだ。「これでも奥の手だったんだがなあ。あつきりバレちまったか」頭の羊毛を燃やして片付け、ヨメカワイイは言う。



【屍機神】^{シキガミ}

左手首から機械仕掛けの第三の腕を出現させる。腕は自在に操作可能。

第三の腕が他のプレイヤーに触れている間、そのプレイヤーのHP、MP以外のステータスの中で一番数値が高いものと同じステータスを得る。

対象プレイヤーに他のスキルやアイテム効果、ダメージが発生した場合、その効果とダメージは自分にも適用される。



メイプルのVITを、サリーのAGIを、マイとユイのSTRを。

対象プレイヤーに触れ続けるという条件を満たしている間に限り、自分のステータスに反映して活用できる。しかもヨメカワイイ本来のHPとMPも維持された状態で。

格下では意味のない、同等以上のプレイヤーに使ってこそ真価を発揮するスキル。

相手からすれば、懸命にレベルを上げてポイントをつぎ込んだ能力をコピーされた挙句、数倍の体力を蓄えたドツベルゲンガーが突如現れたようなものだから悪夢ではない。

信じられない光景を見せられて、『楓の木』全員の動きが一瞬止まる。

その千載一遇のチャンスをペインは見逃さなかった。

「ドラグ、ドレットド！」

「バーサーク！」

「【神速】！」

呼び掛けに応じて二人が切り札を出す。

爆弾のダメージから立ち直ったフレデリカも同じだった。

「【多重全転移】！」

「【超加速】！」

仲間の全ての支援効果を託されたペインの姿が消え、跳ね上がった速度のままサリ―を振り切りメイプルへと肉薄する。

これこそが打倒メイプルのために考え出された、四人の力を結集した勝利の鍵。

「【断罪ノ聖剣】！」

岡目八目、ではないが——『集う聖剣』のメンバーとは違い、心の何処かで他人事と考えていたヨメカワイイの目には、白銀の直剣を振り抜かんとするペインと、大盾を構えるメイプルの動きがゆっくりと緩慢なものに見えた。

攻撃前に溜めの動作を必要とする反面、その威力は折り紙付き。

黒鎧と大盾が真つ二つに叩き割られ、メイプルは壁まで飛ばされる。

「あつ……………う……………」

一撃死を耐えるスキルがあるのか、HPで呻く満身創痍のメイプル。

それも予想済みだったペインは「バーサーク」で大技発動の硬直を打ち消し、とどめを刺すべく大地を蹴る。

「メイプル！」

「メイプルちゃん！」

サリーが、カスミが、イズが、カナデが。

メイプルを救わんと四人も同時に動くが、生憎と、彼女達を阻むのも仕事に含まれている。

「【装填】【ファイアウォール】——【フレッシュトスコール】」

矢の着弾地点から炎の壁が一斉に燃え上がり、サリー達の道を塞ぐ。

「……カワイさんっ！」

「悪いな。文句なら終わってから聞く」

NPCの店で売ってさえいるポピュラーな防御魔法も、使い方次第で敵を妨害する簡易的な迷宮を建造可能となる——「インフェルノオーラ」と違って攻撃力はないが、曲がりなりにも障壁なので真つ向から突き破るには相応の力と時間が必要だ。

少なくとも、ペインの剣はその前にメイプルの首に届く。

「壊壁ノ聖剣！」

ペインが防御貫通スキルを発動させ、剣を振り被る。

対してメイプルが取った最後の行動は、再生したばかりの大盾を自ら手放す事だった。

ただし、自由になった左手を砲身に変えた状態で。

「【カウンター】！」

最強の盾を砕くほどの斬撃は、メイプルに一度限りの最強の矛を授けてしまった。

刻まれた痛みをそのまま上乗せした報復の砲撃が、今度こそ白き鎧に叩き込まれる——他ならぬメイプルさえ防ぎ切れなかった一撃など、一体誰が止められると言うのか。

因果応報の致命傷を受け、それでも宿敵同様にHPが1だけ残ったペインは剣を握

り、走る。

「まだ……まだだっ!!」

最早どちらが倒れてもおかしくないこの状況。

個人的にはメイプルに勝ってほしいところだが、どのような結果になるにせよ、せめて報酬分は働かなければヨメカワイイの気が済まない。

「【跳躍】！ 【屍機神】！」

サリー達の頭上を一息に跳び越え、メイプル目掛けて投げ縄のように第三の腕を飛ばす。

事前に装備やアイテムで耐性を上げている『集う聖剣』メンバーに毒は効かず、極振りのVITを再度コピーして純粋な物理ダメージのみを食らう肉壁になればいい。

「【暴虐】！」

メイプルの身体を黒い靄が包み込む。

二層ボス討伐の際に一度見た事があるので、ペイン達と違ってヨメカワイイは驚かない。

だが変身シーンが始まると同時に、メイプルに触れていた【屍機神】の腕を導火線代わりにして靄が自分の全身まで覆い隠すとは、流石に予想できなかった。

靄が確かな輪郭を作り、衆目の前に巨体をまざまざと見せつける怪物。

サリー達も驚きと困惑で固まったのは、現れた怪物が二匹だったからだ。

「……………ほえ？」

「……………えーと……………」

一匹は漆黒の怪物。

見慣れた……………と言うのも変な話だが、とにかく禍々しい凶体にはつかわしくないノイズ混じりの少女の声で、腹の中身がメイプルだと分かる。

問題はもう一匹。

双角単眼、流動するマグマの身体は灼^{シウコアドル}竜に相違ない。しかし首を傾げるメイプルの怪物形態と同じく、獣にあるまじき数の手足が生えていた。

正体は「屍機神^{シキガミ}」の効果で「暴虐」まで適用されてしまったヨメカワイイである。

「か……………怪獣大戦争？」

かろうじて出たフレデリカの言葉が、目撃者達の総意だった。

その場にいる誰も彼もが——イベントフィールド外のエリアで観戦している大勢のプレイヤーも運営すらもあんぐりと口を開けて啞然とする中、破天荒な親友を一番間近で見続けてきたサリーが真っ先に我を取り戻す。

「メイプル！ そのままカワイイさんを押し倒して！」

あらやだ大胆。

「ええーい!!」

全幅の信頼を寄せる相方の指示を聞き、漆黒の大魔獣がマグマの化身に飛び掛かる。人間の姿ならともかく、今のメイプルとヨメカワイイの体格はほぼ同じであり、馬乗りになった元少女に互角の膂力と体重で動きを封じられてしまう。

両者の決定的な違いは、メイプルは特大サイズの着ぐるみの操作に慣れていて、ヨメカワイイは慣れていなかった事だ。いきなり増えた手足が腐るほどあるのに手も足も出せないとは。

縦に割れた瞳孔でペインを見やる。

「……悪いな色男。しくじった」

地鳴りのような声で自分の判断ミスを詫びる。

一度や二度のヒールでは間に合わない。まずはペインを全快させるべきだったのだ。

「いや、十分働いてくれた……次は勝つさ」

敗北を認めた直後、メイプルが吐いた炎によって最強の男は焼き尽くされた。

火炎ブレスは洞窟内を薙ぎ払い、まずは足の遅いドラグが飲み込まれ、続いてあまりに広範囲な攻撃を避け切れなかったドレッドが命を散らす。

「ああもう、こうなったら私だけでも逃げてやるんだから!」
【多重加速】!

「えい!」

唯一生き残ったフレデリカもその足が出口に向かうより早く、マイとユイが【投擲】した揃いのクリスタルハンマーを背中と後頭部に受けて、「ふびやっ!？」と吹き飛びながら光となる。

ヨメカワイイはそれを天地逆転した視界で見届けて。

ここに『集う聖剣』と『楓の木』の闘争は完全決着がついたのだった。

047. 三日目：夜 終結

人の口に戸は立てられぬもの。

何処をどう經由して伝わったのか不明だが、『集う聖剣』と『楓の木』の激突は他のギルドにも知られるところとなり、どちらが勝つても間違いないく疲弊しているだろうと踏んだ者達が、漁夫の利を狙って闇夜を動いていた。

ざっと五十人は超える大所帯が『楓の木』の拠点がある洞窟を進み、そんな彼らを広間で台座に安置されたオーブが出迎える。

メイプル達は出払っているのか、人の気配はない。

「……畏でもあるのかしら」

「だったら通路にも仕掛けるんじゃないかね？」

あまりに無防備な光景は、さながら映画で見る古代遺跡の宝物庫だ。

オーブに近づいた瞬間、床から槍が生えて全身穴だらけ——宝を掠め取ろうとする不届き者への制裁として定番だが、恐る恐る足先で確認しつつ接近してもギミックが発動する様子はなかった。

「絶好のチャンス、でいいよな？ いいんだよな!？」

火事場泥棒同然でも、あの難攻不落を誇る『楓の木』からオーブを奪いポイントを得たとなればギルドの名にも箔が付く。

家主が帰ってくる前に、と喜び勇んで宝に駆け寄るプレイヤー達。

けれど洞窟内の温度が急上昇した事に気付き、伸ばしかけた手が止まってしまおう——その時点で尻尾を巻いて逃げ出していれば死なずに済んだと言うのに。

そして彼らは見た。

奥の部屋から巨体を引きずるようにして現れた、体表を煮え滾らせる単眼双角の怪物の姿を。

『訪問セールスお断り』って玄関に書いてなかったか？』

声を知らなかった者はただ異形に恐怖し、不運にも声を知っていた者はそれ以上の困惑でもって平常心と希望を失う。

どうしてこんな奴がここにいます？

心中の問いに返ってくる答えはなく、代わりに別の謎が氷解した。

メイプル達は罠を仕掛けてなどいなかった——どんなアイテムやスキルより強力で凶悪な番人がオーブを守っており、余計な策を弄する必要などないのだから。

陽炎を背に負った怪物の超体温は、広間を満たしていた熱気を【炎上】の継続ダメージに変えて侵入者達のHPを削っていく。

「まあ来ちまったからには……その首置いてっもらうぞ」
「うわあああああつ?!」

そしてじわじわ力尽きる時間も与えられず、人間の胴回りほどもあるマグマの尾の一撃でもって薙ぎ払われ、あるいは叩き潰され命を落とす。

映画と言うなら彼らこそ、怪物映画の序盤で殺されてしまう犠牲者の端役そのものだった。



「カワイさん、ただいまー!」

「おー、おかえりー」

ズシン、ズシンと足音を立てて怪物姿のメイプルが戻ってくる。

大きな背中に乗っている彼女の愉快な仲間達の表情から察するに、どうやら全員での侵攻作戦は上々の結果だったようだ。

「いやー、まだまだ冷えますなー」

仲間を降ろしたメイプルがわざとらしく言ったかと思えば、洞窟の前で寝そべるヨメカワイイの巨体に手足をめいっぱい広げて覆い被さる——怪物が二匹も重なる光景を

事情を知らない第三者が目の当たりにすれば、覚悟など簡単に消え失せ踵を返して逃げ出すだろう。

もつとも当の本人達はのんびりと我関せずで、緊張感のなさにサリーが呆れ顔になる程度だ。

「はふう……：やつぱりカワイイさんぽつかぽかであつたかいよお」

「師匠師匠！ 私もぽつかぽかしたいですー！」

「お、お邪魔しますー」

マイとユイも特大の丸太のような腕にそれぞれ抱き着いて暖を取る。

極寒の雪原地帯や熱波渦巻く火山など、フィールドを探索中のプレイヤーが不快に感じるほどの温度の仕様はなくとも、適温の範囲内であればその限りではないらしい。

触れるどころか場に存在するだけで「炎上」の強烈な継続ダメージを与える今のヨメカワイイの身体も、四次元工房を持つイズえもんの耐火ポーションとカナデの補助魔法の合わせ技に掛かればぬくぬくの湯たんぽも同然——『集う聖剣』に手を貸して攻め込んだ負い目があるヨメカワイイは少女達のされるがままとなつている。

「そうしてると完全に怪獣の親子だな」

「せめて兄妹と言つてくれ」

苦笑気味のクロムに、ヨメカワイイは単眼を細めて言う。

確かに、年齢が近い同僚の仕事机には幼い子供の写真が飾っており、迂闊に話を振ろうものなら小一時間はその可愛さを熱弁し洗脳しようとしてくるが、メイプルくらいの年齢ならまだ妹の方が合っている気がする。

「ところでカワイさん、どうして外で寝転がってるの？」

「あー……実は何度か襲撃があつたんだが、意外と逃げ回る奴に攻撃当てるの難しくてな」

あまりに鬱陶しいなら範囲攻撃で焼き尽くせば済む話ではある。

しかし、それはそれで味気がなさ過ぎるし、メイプル達が何らかの理由で急いで戻ってきた時に拠点が焦熱地獄になっていては休息も取れず籠城もできない。

オーブさえ取られなければいいのだから、だつたらいつそ入口を身体で塞いでしまおうと考えて今に至る。実際、外に陣取つてから攻撃される回数は明らかに減り、鼓動に合わせて赤く明滅するヨメカワイイを視認した途端逃げ帰る輩が大半だった。

「まあ、守つてくれてたなら何でもいいですけど」

サリーは続ける。

「それで周りの様子だけど、やっぱりあつちこつちで潰し合いが激化してるみたい。今日だけでも結構な数がリタイアしちやってるし、夜明けにはほとんどのギルドがボロボロになつてるかも」

カスミとイズも頷く。

「逃げ切りが勝利条件の私達にとっては好都合と言えるな」

「敵が勝手に減ってくれるなら大助かりだものねー」

それはヨメカワイイも同じだ。

手持ちのオーブを全て解放し、メイプル達の拠点に逗留している以上、現在得られるポイントは自軍オーブの時間経過で発生する分のみ。

暇潰しに流し見ていたランキングの変動の様子から考えるに、上位のギルドが順位を確立すべく他の有象無象を食い散らかしているのだとすれば、名前の位置がたちこつこのように上へ下へと入れ替わるだけで『閻鍋』や『楓の木』を含めた十位までの顔ぶれに劇的な変化が起こる可能性は極めて低い。

「つて事で、帰ってきたばかりですが、そろそろ最終段階に移行しようと思います」
斥候にして参謀も兼任するポニーテールの少女は、一度大きく手を打って本題を切り出す。

最終段階。

その言葉が意味するのは、この三日目まで生き残っている邪魔者の殲滅。

「カワイさんがあちこちで暴れ回ってくれたおかげで、どのギルドも想定していたよりポイントを取れてないようなの。だから連戦になるけど、ランキングの固定に動くなら

今しかないと思う」

この姿の動かし方もようやく慣れてきた。

既に『集う聖剣』や『炎帝ノ国』は自分達の順位を脅かされないようポイント度外視でギルドを潰して回っている——頑張っている嫁のために、ヨメカワイイも再び動く時が来たようだ。

怪物の身体を持ち上げ、名残惜しそうなメイプルと双子を指先で優しく剥がす。

「なら、まずは俺が行こう。リハビリも飽きたところだしな」

「はい！ 師匠が行くなら私も行きたいです！」

若さ故か、元気があり余っているらしく挙手して同行を希望するユイ。

「うん、駄目」

「ええー!?!」

ぴよこぴよここと白兔のように飛び跳ねて不服をアピールする少女だが、しかし、ヨメカワイイは長く伸びた竜の首を横に振るう——これから向かう場所へは、ヨメカワイイが単身で乗り込む方が何かと都合がいいのだ。

嫁を見つける意味でも、全力で戦う意味でも。

「ん？ ……あーそうか、今【跳躍】使えないのか」

ついでに【跳躍】から派生する【滑空】も使えない。

怪物形態——【暴虐】発動中は装備に付与されたスキルが使用不可能となり、【毒竜】ヒドラを筆頭にはぼ全ての攻撃スキルの封印されたメイプルなどは爪や牙、口から吐く炎といった野生的な方法で敵を屠るしかないが、幸いな事にヨメカワイイの【灼竜】シウコートルはその制限を受けずに済んでいた。

食い下がろうとする双子の片割れがこれ以上何か言う前に、生物の範疇を逸脱した本数の手足で大地を弾き、夜空の中に巨体を翻す。

十八番の【跳躍】が制約で使えずとも、その膂力による飛び上がりは、他者から見れば十二分に身の危険を直感するものだった。

「そんじゃあまあ、お互い最後まで生き残ろうなー」

「うん、カワイさんも気を付けてねー!」

言葉を交わして、各々の目的のために再び動き始める黒と紅の怪物達。

二匹が一匹ずつに別れても、脅威が半減するとは限らない。

「……俺らが言えた事じゃないが、あれにいきなり襲われるとか悪夢でしかないよな」
「ああ。協力関係を結べて良かったとつくづく思う」

これもメイプルが持つ強運の賜物なんだろうなあ、とまだかろうじて常識人圏内に留まっているクロムとカスミは、今宵新たに積み上げられるであろう敗者達の骸の山を想像して、少しばかりの同情と冥福を祈った。



一方、ミイはいつものように内心半泣きだった。

(ほあああああつ！ こつち来んなよあああああつ!!)

夜に部屋の窓をうっかり開けていたら大きめのカナブンが勇猛果敢に飛び込んでき、旦那様が帰宅するまで洗面器をヘルメット代わりに侵入者（体長三センチ）から逃げ惑った時のように。

半分どころか、七分を超えてもうすぐ八分泣き、大輪の泣き顔が咲くまであと少し。

「くっ……【爆炎】！ 【炎槍】！ 【爆炎】!!」

「ミイ様！ 右方向からも来ます！ 数およそ三十！」

「ええい羽虫風情が次から次へと！ ここは私一人で請け負う！ お前達は新手を仕留めろ！」

「分かりました！ おい、向こう行くぞ！」

とつとと帰れコンニャロー、という念を込めて、なけなしのMPを消費して炎を飛ばす。

他のギルドの動向を気にしている暇など、ましてや攻め込むための人員を割く余裕な

どないほど彼女の『炎帝ノ国』は消耗し切っていた。

いよいよ周囲のギルドにも焦りが生じ始めたのか、終わりなきタワーディフェンスゲームの如く敵が押し寄せ、その対応に追われ続けて今に至る。

メイプルの襲撃によるデスペナルティが響き、最初にシンがりタイアし、続いて防衛の要であるマルクスが、そして回復のエキスパートのミザリーまでもが五回目の死亡で戦場から消えた。

ミイ自身も既に死亡は許されず、HPが尽きたら『炎帝ノ国』は完全に崩壊する。

現在の順位とポイントから考えて、そう簡単にランク外に落ちる事はないとは言え、どうせなら最終日までしっかり生き残って喜びたいし、何よりこれまでの戦いで尊い命を散らし、別の場所で固唾を飲んで見守っているであろう仲間達に申し訳が立たない。

「クツソ、ミイ一人だけでも十分ヤベエな！ 分かっちゃいたが！」

「とにかく消耗させろ！ ミザリーがいらないならすぐ燃料切れだ!!」

けれどミイの殲滅力をもってしても、無限に続く数の暴力が相手では分が悪い。

MPポジションは枯渇寸前、敵が今言ったようにミザリー不在のこの状況ではMP回復の手立てが失われ、スキルを使えば使うだけミイが無力になるまでの猶予が消えていく。

いざとなれば【自壊】を発動させて敵を道連れにするつもりの炎の女帝。

そんな彼女の覚悟に同調するかのように、あるいは無用だと嘲笑うかのように。

「おい……おいおいおい、何だあ、ありやあ?！」

誰かが叫ぶ。そして叫んだ誰かが最初に塵となる。

ミイにとつて救いとなる天災は、その名の通り空から降り落ちてきた。

隕石の如く轟音と震動を伴って大戦場に着弾したそれは、四方八方に広げた手足で落下の衝撃を吸収し、ミイの背後から伸ばした竜の首、その中心に輝く単眼で小さき者達を睥睨する。

貧乏くじを引いたプレイヤー達は、つい数時間前に暴威を振るった真・メイプルとでも呼ぶべきモンスターを思い出す暇もなく、吐かれたマグマで消し炭と化す——結局、焼き尽くされるといふ彼らの命運は変わらなかつたのだ。

あまりに唐突な出来事に、敵が消え去つた焦土を前に立ち尽くすミイだったが、

「……ほれ、ぼけつとしてないで、さっさと他の奴らも片付けるぞ」

「うひゃつ!」

マントを指先で摘まれて宙吊りになつたかと思えば、双角が生えた大きな頭部にライドオン。

そこからはもう戦鬪ですらない蹂躪だ。

竜尾を振るえば敵群が弾け飛び、咆哮すれば大気が灼熱の振動を帯びて蝕み殺す。鋭

い牙や爪は言わずもがな。

縦横無尽に跳ね回る様子はさながら暴れ馬——ミイは目を白黒させつつ、振り落とされないよう情けない形相で巨体にしがみつくなかない。

それでも疑問に思わずにはいられなかった。

(どうして助けてくれたんだろ……)

少々、いやかなり外見は様変わりして人の形すら失っているものの、ある意味見慣れたその姿は紛れもなく灼^{シワコアル}竜のそれであり、ノイズ混じりだとしても愛する夫の声を聞き間違うはずがない。

嬉しいと言えば記念日にしたいくらいには嬉しいが。

しかし、まだ正体には気付かれてはいないはず——『炎帝ノ国』を襲うプレイヤー目当てだったメイプルだけならともかく、バーニングドラゴンな旦那様までが救援に来るとは、あまりに状況が出来過ぎてはいないだろうか。

それを見透かしたように、視認できる範囲の敵を殲滅した夫が、牙だらけの大きな口を開く。

「……指輪が教えてくれた」

「ふえ？」

指輪とな？

言われて思わず自分の左手を見る。

今は手甲に覆われていて見えないが、以前、別のアカウントで作成したキャラでデートした時にプレゼントされた指輪が薬指で輝いているはず。

まずはあつちでログインして譲渡、今度はこつちでログインして受け取り——と面倒臭い方法を駆使してアイテムを移動させ、メインである『ミイ』の装飾品として身に着けていたのに、誰にも見せた事がないそれを何故旦那様が知っているのか。

なるほど、つまり妻へのラヴだな。

「実はお前の指輪な、俺の指輪と対になってマップに居場所を表示してくれるんだよ」
「……………うーん、と?」

ラヴじゃなかった、残念。

いやそれよりも、今とんでもない事を言わなかったかこのマイダーリンは。

ミイが指輪を嵌め直したのはイベントが始まるよりも前——そうなると、自分の行動は旦那様にぬるつとお見通しだった訳で、メイプルや白黒双子と一緒に巨大亀に乗って来た時点で既に正体がバレていたという事に他ならず。

「……………」

つまり、つまりだ。

今までの痛々しい台詞も振る舞いも、ガウスさん(?)の手掛けたサグラダ・ファミ

リアが如く建築真つ最中の黒歴史として夫婦の心のアルバムに刻まれてしまいましたとさ。

「あびやうはにやああ……」

せめて若奥様らしく『いやーん！（≡≡≡）』と可愛く恥らえたら良かったのだが、半開きの口からコールタールのように流れ出たのはよく分からない奇声。

正直、中学二年生の時に書き溜めていた愛の詩歌——その頃にはもう大好きになっていた親戚のお兄ちゃん（現ダーリン）への想いを綴ったもの——を朗読されるより恥ずかしい。

燃え盛る夫に負けじと、ミイも顔から炎が噴き出そう。

誰が聞いているとも知れない状況で、かろうじて音量を抑えた自分を褒めたいくらいだ。

せめて居場所が分かると教えてほしかった。

「……すまん。説明するほどでもないと思って」

謝罪が逆に辛い。

まあ指輪のサプライズプレゼントは嬉しかったし、現実でもスマホのGPS機能でお互いの行動を確認し合ったりしているので、それ自体は別に構わないし文句もない。

ない……のだけでも、心の準備が、心の準備が！

「ぶにゆううううっ」

カリスマ溢れる女帝の仮面などとつくに外れてしまい、竜の頭の上で手足をジタバタジタバタ。

この細身の内で一心不乱に暴れ狂う、今にも具現化を果たしそうな野性の猛り（ハムスター）はどうやって静めてくれようか。

そうこうしている間に、自滅覚悟か、あるいはドラゴンスレイヤーを夢見るプレイヤーの団体が性懲りもなく『炎帝ノ国』の縄張りに押し寄せる。

ああもう、脳の処理が限界間近なこんな時に。

「……………薙ぎ払え！」

ミイはすつくと立ち上がり、右手を横に振るつて高らかにそう叫ぶ。

「ク○ヤナ殿下ごっこか？」

「いいから！ もう存分にぶっ飛ばしちやっつけてくださいな！」

「へいへい、了解了解」

八つ当たり、鬱憤晴らしと言えばその通り。

それでもミイのお願いを聞き入れた優しい旦那様は、口から高圧水流プレスならぬ高圧マグマの極太レーザーを放ち、大地を扇状に焼き尽くしていく。王蟲ではないプレイヤー集団はその一撃で瞬く間に壊滅した。

しかしミイの中にいるジャンガリアンハムスターの破壊衝動はまだ治まらない。ひまわりの種を口いっぱい頬張って今にも連射しそうな面構えだ。

「こうなったら邪魔なギルドずえーんぶ絶滅させてやるう！ 手伝ってよね!」
「アイアイサー。何処でも一緒に行つてやるよ」

旦那様がいれば百人力、いや千人力。

大規模ギルドだろうが何だろうが、ラブのパワーの前には障害にもならない。

「ふはははははっ、平伏すがいい弱者達よ！ この私が！ 我らが！ 真の強者とはどういうものかその眼と脳髓にしかと刻み込んでくれよう！ ふあははははははっ!!」
「キャラおかしくなつてないか？」

違います、開き直っちゃただけです。

こうしてミイと旦那様は最後の殲滅に乗り出した。

その光景は、幸運にも夫婦の会話が耳に届かなかった『炎帝ノ国』のメンバーや信奉者によって尾鰭付きで広められてしまい、仮初のカリスマが四足歩行から二足歩行レベルまで進化してミイが頭を悩ませる羽目になるのはまた別の話。



「……とうとう終わったな」

「ああ、終わっちゃまったな……」

どうにかその言葉だけ捻り出して、運営チームはモニターの前でぐったりと脱力した。

あー、うあー、と単語にならない声を吐く様子は生きる屍が如く——イベント期間はまだ丸二日残っているが、ランキング一位から十位まで同じ内容の報酬を得られる仕様上、生存中のギルドが六つしかない現況では削り合いを続ける意味はなく、どのギルドも各自の拠点で籠城を決め込んで沈黙を貫いている。

「まさか、三日目終了時点で順位が確定しちゃうとは思わなかったぜ」

「そもそも初っ端から予想外の連続だからな。たった一つのギルドっつか一人がオーブを半分近く独占して、なのに全然ポイントに換えようとしないとか想像できるか！」

全員の心を代弁した悲痛な叫びがルーム内に木霊する。

「いやまあ、あれも戦略の一つと言えるっちゃあ言える……のか？」

「賛否は分かれるだろうが、実際それでカワイの奴はきっちり入賞しちまつてるからなあ。簡単に真似できるもんでもないし、オーブの所持数や時間に制限を設定しなかつた俺らも俺らだろ」

ペイン然り、メイプル然り、ミイ然り、ヨメカワイイ然り。

上位のプレイヤーはどいつもこいつも人外じみた『何か』を振りかざしているが、それらは全て持ち前の技術や経験、幸運によるもので、当人達は至って真面目にゲームを楽しんでくれている。

チートツールを使った不正行為やイベントのルールに抵触した訳はないので、どれだけ叫んでも結果は覆らず、自分達の見通しの甘さが際立つばかり。

「もうあれだ、次のイベントで考慮すべき問題がこれだけ見つかったって前向きに考えようぜ」

「だな。そう考えなきややってらんねえよ、流石に……」

幸か不幸か、残りの二日間で大きな動きが起きない事はほぼ確定している。

イベントの終了と同時にプレイヤー達は自由になっても、運営側は報酬の配布やら事後処理やら寄せられた意見の精査と返信やらでまだまだ多忙だ。

なので、三日間で記録した映像のダイジェストを編集する作業時間に、時間加速があるとは言え二日分の猶予が生まれた事はありがたくもあった——もつとも、これは使えらるとピックアップした映像の大半に、イベントを早期終了させてくれやがった張本人達の顔があるので、やる気が失せて効率は落ち気味だったが。

「うっし、こんなのとかどうよ!?!」

そんなアンニュイな空気にもめげず、一足早く編集作業に勤しんでいた一人が、出来

たばかりの動画を流し始めた。

どれどれ、と他の面々も気分転換がてら注視する。

メインのモニターには、『楓の木』と『集う聖剣』の激突時のワンシーンだろうか、メイプルとヨメカワイイが映っており、次の瞬間に二人は【暴虐】で怪物に変貌、そこから外のフィールドへ光景が切り替わると、二分割されたそれぞれの画面の中で二匹の巨獣が所狭しと暴れ回る。

「……………」

無傷とはいかず、全身に斬撃や魔法を受けて悶える二大怪物だったが、けれどHPが0になったと思つた直後に、腹部を突き破つてまだまだ力が有り余っているメイプルとヨメカワイイが再登場。

姿形などは関係ないのだと言わんばかりに猛毒と溶岩が荒れ狂い、【装填】された【火山弾】の爆撃と【機械神】の砲撃が天地を彩り、左画面のメイプルがまた【暴虐】状態になれば、右画面のヨメカワイイはゴブリンの大軍勢を召喚して侵攻する。

そして哀れなプレイヤー達が光と化したところで、無慈悲な動画は終了した。

「……………新しいレイドボスの告知PVか何かか？」

最後まで見た一人がぼつりと言った。

誰からも否定の声は上がらなかつた。